福島県文化財調査報告書第438集

会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告６

荒　屋　敷　遺　跡（５次）
高堂太遺跡（下高額館跡を含む）

2006年

福　島　県　教　育　委　員　会
財団法人 福　島　県　文　化　振　興　事　業　団
国土交通省東北地方整備局郡山国道事務所

会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告６

荒屋敷遺跡（５次）
高堂太遺跡（下高額館跡を含む）

口絵　荒屋敷遺跡　　（空中写真合成）

序　　文

「会津縦貫北道路」は，喜多方市と会津若松市を結ぶ延長約13.1kmの地域高規格道路です。平成８年度に都市計画道路として決定され，平成９年度からは建設省（現国土交通省）直轄事業として建設工事が進められています。

この計画路線内には，先人が残した貴重な埋蔵文化財が所在しております。この埋蔵文化財は，各地域の長い歴史の中で育まれ，今日まで大切に受け継がれてきたものであり，我が国の歴史や文化等の正しい理解と，将来の文化の向上発展の基礎をなすものであります。

そこで，福島県教育委員会では，国土交通省東北地方整備局郡山国道事務所と埋蔵文化財の保護・保存について協議を重ね，現状保存が困難な埋蔵文化財については，記録として保存することとし，平成13年度から発掘調査を実施してまいりました。

本報告書は，喜多方市に所在する荒屋敷遺跡と高堂太遺跡（下高額館跡を含む）の発掘調査の成果をまとめたものですが，県民の皆様の文化財に対する理解を深めるとともに，地域の歴史を解明するための基礎資料として，さらには生涯学習等の資料として広く活用していただければ幸いに存じます。

終わりに，この発掘調査の実施にあたり，御協力いただいた国土交通省東北地方整備局郡山国道事務所，財団法人福島県文化振興事業団等の関係機関並びに関係各位に対し，感謝の意を表するものであります。

平成18年10月

福島県教育委員会

教育長　　富　田　孝　志

あ　い　さ　つ

財団法人福島県文化振興事業団では，福島県教育委員会からの委託により，県内の大規模な開発に伴う埋蔵文化財の調査業務を行っております。会津縦貫北道路に関連する埋蔵文化財の調査もそのひとつであり，平成13年度より本格的に事業を開始いたしました。

平成17年度は，予定路線上で工事が優先される喜多方市所在の荒屋敷遺跡と高堂太遺跡（下高額館跡を含む）について発掘調査を実施いたしました。本報告書は，この成果をまとめたものであります。

荒屋敷遺跡は日橋川右岸の河岸段丘に立地する遺跡で，これまでの発掘調査により，平安時代及び中世を主体とする複合遺跡であることがわかってまいりました。今回の５次調査は最終年度にあたり，中近世の遺構・遺物が発見されております。高堂太遺跡（下高額館跡を含む）は初年度の発掘調査となり，中世平地城館跡の一画が検出されました。地元の伝承や関連する文献史料もあり，次年度以降のさらなる成果が期待されます。

今後，これらの調査成果を考古学や歴史学など研究の基礎資料として，さらに，地域社会の理解や生涯学習の場で幅広く活用していただければ幸いに存じます。

終わりに，発掘調査当初から報告書刊行に至るまで，御指導・御協力いただきました関係諸機関並びに関係各位に対し，深く感謝申し上げますとともに，埋蔵文化財の保護に対し，今後とも一層の御理解と御協力をお願い申し上げます。

平成18年10月

財団法人　福島県文化振興事業団

理事長　　髙　城　俊　春

緒　　言

1．本書は平成17年度に実施した会津縦貫北道路（会津若松～喜多方間）遺跡発掘調査の報告書である。

荒屋敷遺跡：喜多方市塩川町遠田字荒屋敷　他　　埋蔵文化財包蔵地番号：403－00073

高堂太遺跡：喜多方市豊川町高堂太字高里　他　　埋蔵文化財包蔵地番号：208－00140

下高額館跡：喜多方市豊川町高堂太字千刈　他　　埋蔵文化包蔵地財番号：208－00099

2．塩川町は，平成18年１月３日の合併により喜多方市となった。このため，本書では現在の名称で記述する。ただし，遺物整理は調査当時の略記号（ＣＫ）で行っている。

3．当遺跡調査事業は，福島県教育委員会が国土交通省の委託を受けて実施し，調査に係る費用は国土交通省が負担した。

4．福島県教育委員会は，発掘調査を財団法人福島県文化振興事業団に委託して実施した。

5．財団法人福島県文化振興事業団遺跡調査部では，下記の職員を配して調査にあたった。

文化財主査　菅原　祥夫　　文化財副主査　福田　秀生

6．本書の執筆は，担当職員が分担して行い，各文末に文責を明記した。

7．本書に使用した地図は，国土交通省国土地理院長の承認を得て，同院発行の５万分の１地形図・２万５千分の１地形図を複製したものである（承認番号　国地東複第87号）。

8．本書に収録した遺跡の調査記録および出土資料は，福島県教育委員会が保管している。

9．発掘調査から本報告書を作成するまでに，次の機関および個人の方々から指導・助言・協力をいただいた。（順位不同・敬称略）

喜多方市教育委員会・塩川町教育委員会（当時）・坂内三彦

用　　例

1．本文中および遺物整理に使用した略記号は次の通りである。

喜多方市…ＫＫ	塩川町…ＣＫ	荒屋敷遺跡…ＡＹＳ	高堂太遺跡…ＴＤＴ
下高額館跡…ＳＴＨ	土　坑…ＳＫ	掘立柱建物跡…ＳＢ	柱列跡…ＳＡ
溝　跡…ＳＤ	小穴・ピット…Ｐ	グリッド…Ｇ	トレンチ…Ｔ
遺構外堆積土…Ｌ	遺構内堆積土…ℓ	沼沢パミス…ＮＰ	

2．本書における遺構実測図の用例は，以下の通りである。

（1）方位記号の表記がないものは，全て本書の天を北とする。

（2）荒屋敷遺跡の遺構番号は基本的に４次調査までの連続番号である。

（3）遺構図の縮尺率は，各挿図版に示した。

（4）遺構内の傾斜面は⊤⊤で表示したが，相対的に緩傾斜の部分は⍑⍑で表している。
また，後世の削平や人為的な削平部分は⊤⊤の記号で表記した。

（5）挿図中の網点は，図版ごとに凡例を示した。

（6）断面図および地形図における標高は海抜標高を示す。

（7）遺構外の自然堆積土はローマ数字，遺構内堆積土は算用数字で表記した。
［例］遺構外自然堆積土：ＬⅠ・ＬⅡ…，遺構内堆積土：ℓ１・ℓ２…

（8）各小穴の深さは，平面図に示したピット番号の側に(　)で数値を明記している。単位は㎝である。

3．本書における遺物実測図の用例は，以下の通りである。

（1）縮尺率は各挿図版に示した。

（2）土器断面は，縄文土器・土師器・陶磁器を白ヌキ，須恵器・珠洲系中世陶器はベタ黒とした。

（3）遺物番号は挿図版ごととし，文中では下記のように省略している。また，掲載遺物の出土位置・層位は，右下に示している。
［例］図28の10番の遺物…図28－10

4．本書における遺物写真の中で個々に付した番号は，挿図番号と一致する。

5．引用・参考文献は，執筆者の敬称を省略した。

目　　次

序　章　遺跡の環境と調査経過

第１節　調査に至る経緯 …… 1

第２節　調査経過 …… 1

１．平成16年度までの経過（１）

２．平成17年度の調査経過（３）

第３節　遺跡の位置と自然環境 …… 3

第４節　周辺の遺跡と歴史的環境 …… 4

第１編　荒屋敷遺跡（５次）

第１章　遺跡の位置と調査経過 …… 11

第１節　遺跡の位置 …… 11

第２節　調査経過 …… 11

第３節　調査方法 …… 14

第２章　遺構と遺物 …… 15

第１節　遺跡の概要と基本土層 …… 15

１．遺構の分布と出土遺物（15）

２．基本土層（15）

第２節　掘立柱建物跡 …… 17

第３節　柱列跡 …… 21

第４節　土　坑 …… 21

第５節　溝　跡 …… 35

第６節　その他の遺構と遺物 …… 45

１．ピット群（45）

２．遺構外出土遺物（45）

第３章　ま　と　め …… 47

１．荒屋敷遺跡の概要（47）

２．３～５次調査区の遺構（48）

３．１・２次調査区の遺構（50）

４．荒屋敷遺跡の建物群の性格（51）

５．まとめ－歴史にみる荒屋敷遺跡について（52）

第２編　高堂太遺跡（下高額館跡を含む）

第１章　遺跡の位置と調査経過 …… 73
第１節　遺跡の位置 …… 73
第２節　調査経過 …… 73
第３節　調査方法 …… 76
第２章　遺構と遺物 …… 77
第１節　遺跡の概要と基本土層 …… 77
１．遺構の分布と出土遺物（77）
２．基本土層（77）
第２節　掘立柱建物跡 …… 79
第３節　土　坑 …… 88
第４節　溝　跡 …… 92
第５節　その他の遺構と遺物 …… 99
１．柱穴群（99）
２．遺構外出土遺物（101）
第３章　ま　と　め …… 103
第１節　会津地方の平地城館跡 …… 103
第２節　下高額館跡の関連文献史料 …… 103
１．『新編会津風土記』（103）
２．『貞山公治家記録』（106）
第３節　２つの城館跡推定地 …… 107
１．南推定地（108）
２．北推定地（108）
３．両者の関係（108）
第４節　今回の調査成果 …… 111
１．占地・現況（111）
２．堀・土塁（111）
３．建物配置（111）
４．城館規模・範囲（112）
５．存続期間と廃絶後の状況（112）
第５節　次年度以降の課題 …… 113

挿図・写真目次

序　章

［挿　図］

図１　会津縦貫北道路位置図 …… 1
図２　周辺の遺跡位置図・一覧表（１）…… 5
図３　周辺の遺跡位置図・一覧表（２）…… 6

第１編　荒屋敷遺跡

［挿　図］

図１　調査範囲とグリッド配置図 …… 13
図２　遺構分布図・基本土層 …… 16
図３　13号掘立柱建物跡 …… 18
図４　14号掘立柱建物跡 …… 19
図５　15号掘立柱建物跡・３号柱列跡 …… 20
図６　99～105・108号土坑 …… 25
図７　106・107・109～112号土坑 …… 30
図８　113～119・121号土坑 …… 31
図９　120・122～124号土坑・80号溝跡 … 33
図10　125・126号土坑 …… 34
図11　土坑出土遺物 …… 35
図12　66・73号溝跡 …… 39
図13　67～71号溝跡 …… 40
図14　72・74～79号溝跡 …… 43
図15　溝跡出土遺物 …… 44
図16　遺構外出土遺物 …… 45
図17　中世期の主要遺構 …… 49
図18　周辺の館跡分布図 …… 53

［写真目次］

1　５次調査区遠景 …… 57
2　５次調査区全景 …… 57
3　13号掘立柱建物跡周辺全景 …… 58
4　14号掘立柱建物跡周辺全景 …… 58
5　５号掘立柱建物跡周辺全景 …… 59
6　基本土層 …… 59
7　13号掘立柱建物跡全景 …… 60
8　13号掘立柱建物跡細部 …… 60
9　14号掘立柱建物跡全景 …… 61
10　14号掘立柱建物跡細部 …… 61
11　15号掘立柱建物跡全景 …… 62
12　３号柱列跡 …… 62
13　99～106号土坑 …… 63
14　107～114号土坑 …… 64
15　115～122号土坑 …… 65
16　123～126号土坑 …… 66
17　66～71・80・81号溝跡全景 …… 67
18　66～68号溝跡細部 …… 67
19　72～76号溝跡全景 …… 68
20　72・73号溝跡細部 …… 68
21　74・75号溝跡 …… 69
22　75～79号溝跡 …… 69
23　出土遺物 …… 70

第２編　高堂太遺跡（下高額館跡を含む）

［挿　図］

図１　調査範囲とグリッド配置図 …… 74
図２　遺構分布図・基本土層 …… 78
図３　１号掘立柱建物跡・出土遺物 …… 80
図４　２号掘立柱建物跡 …… 82
図５　３号掘立柱建物跡 …… 83
図６　４号掘立柱建物跡 …… 84
図７　５・６号掘立柱建物跡 …… 85
図８　７号掘立柱建物跡 …… 87
図９　１～６号土坑 …… 91
図10　１～３号溝跡 …… 94
図11　１・２号溝跡出土遺物 …… 95
図12　３・４号溝跡出土遺物 …… 96
図13　４・５号溝跡 …… 97
図14　６号溝跡 …… 99
図15　柱穴群　D10グリッド周辺 …… 100
図16　柱穴群出土遺物 …… 101
図17　遺構外出土遺物 …… 102
図18　北推定地 …… 104
図19　城館跡分布図 …… 105
図20　下高額館跡全体図 …… 107
図21　明治15年地籍図 …… 109
図22　平地城館跡の類例 …… 110
図23　肥前碗とその類例 …… 112

［写真図版］

1　高堂太遺跡(下高額館跡を含む)
航空写真 …… 117
2　調査区遠景１ …… 118
3　調査区遠景２ …… 118
4　調査区南部全景 …… 119
5　２号掘立柱建物跡 …… 119
6　１号掘立柱建物跡全景 …… 120
7　１号掘立柱建物跡細部 …… 120
8　２号掘立柱建物跡全景 …… 121
9　２号掘立柱建物跡細部 …… 121
10　３号掘立柱建物跡全景 …… 122
11　４号掘立柱建物跡全景 …… 122
12　５・６号掘立柱建物跡全景 …… 123
13　７号掘立柱建物跡全景 …… 123
14　１～６号土坑 …… 124
15　１号溝跡完掘 …… 125
16　１～３号溝跡細部 …… 125
17　２・３号溝跡 …… 126
18　２・３号溝跡土層断面 …… 126
19　４・５号溝跡 …… 127
20　４～６号溝跡 …… 127
21　出土遺物 …… 128

序　章　遺跡の環境と調査経過

第１節　調査に至る経緯

会津縦貫北道路（地域高規格道路）は，喜多方市関柴町大字西勝から河沼郡湯川村を経て会津若松市高野町大字木流に至る延長13.1㎞の４車線自動車専用道路である。平成８年度に都市計画道路の決定が行われ，平成９年度から建設省（現国土交通省）直轄事業として進められている。

この事業は，会津北部地域の縦軸を強化し，また，「会津地方拠点都市地域」・「会津リフレッシュ構想」・「会津西北地域活性化対策事業」等の広域的な地域開発プロジェクトを支援することで，会津地方の定住化と活性化を図ることを目的としている。この事業の完成により，会津北部地域は東北地方の高速交通体系に組み入れられ，産業・経済の発展が期待される。将来的に，北へ向かっては，東北中央道路の米沢ＩＣ（仮称）と，また南へ向かっては，会津縦貫南道路（会津若松～田島：約50㎞）を経て，栃木西部・会津南道路（田島～栃木県今市市：約60㎞）と結ばれる計画である。

第２節　調　査　経　過

１．平成16年度までの調査経過

会津縦貫北道路路線内に所在する埋蔵文化財の保護にかかわる調査については，福島県教育委員会が平成９年度から財団法人福島県文化振興事業団に委託している。

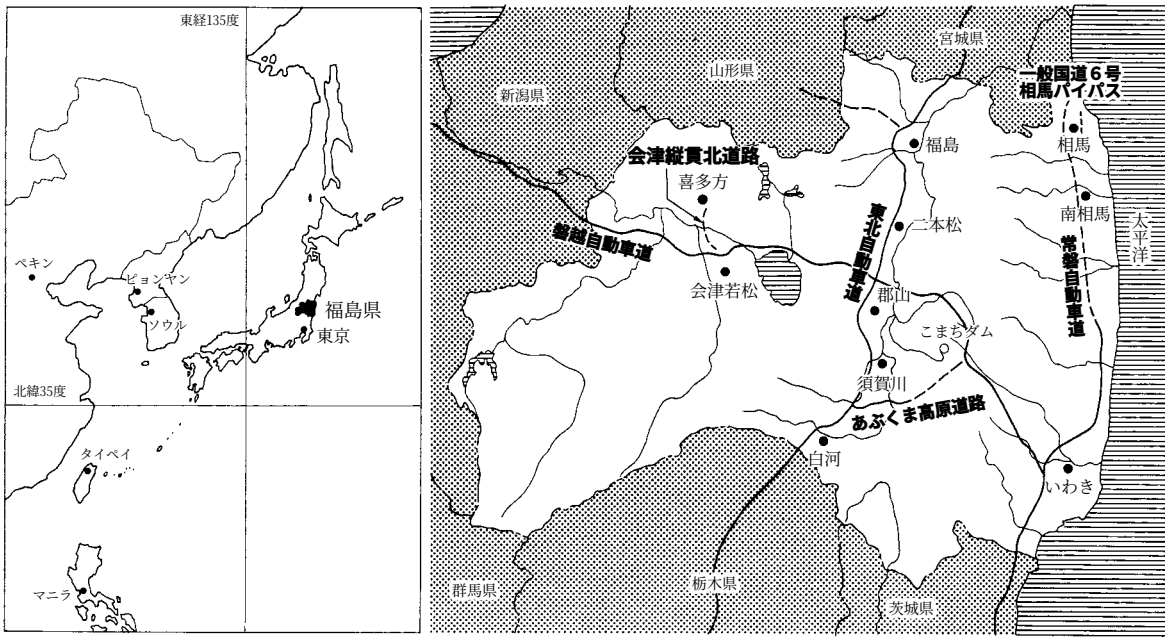


図１　会津縦貫北道路位置図

［分布調査］埋蔵文化財の調査は，平成９年度県内遺跡分布調査の表面調査から始まっている。表面調査は計画路線図を基に，喜多方市から会津若松市までの延長約12.3㎞・幅150mを対象として平成９年11月12日～26日まで実施され，新発見遺跡の他に周知の遺跡についても，遺跡範囲の再確認が行われた。なお，表面調査は当初，道路予定全区間を対象に計画されたが，会津若松市中沼地区12haについては諸事情から除外された。調査の結果，２市１町１村（当時）で21遺跡と遺跡推定地３箇所が確認され，その詳細は『福島県内遺跡分布報告４』に報告された。

表面調査の結果を基に，当事業では平成12年度から試掘調査が実施される。初めに建設工事の優先箇所と塩川町（現喜多方市）遠田地区の麻生館跡・荒屋敷遺跡の計39,100㎡を対象に実施された。この調査結果は，『福島県内遺跡分布報告７』に所収され，麻生館跡は館跡関連の遺構と奈良･平安時代の集落跡，荒屋敷遺跡は平安時代を中心とした遺構・遺物が検出され，両遺跡とも現状保存面積が確認されている。なお，同年には当事業に伴う付帯工事のため塩川町教育委員会（現喜多方市）でも試掘調査が実施されている。

その後，荒屋敷遺跡については，平成13・14・16年に工事計画と土地買収の進捗にあわせて試掘調査が実施され，各年度の対象面積は7,500㎡・5,900㎡・1,000㎡となっている。調査成果は，『福島県内遺跡分布報告８・９・11』に所収された。各年度において平安時代から中世にかけての遺構･遺物が検出され，現状保存面積が確認されている。

［発掘調査］発掘調査は平成13年度から開始された。13年度は麻生館遺跡6,200㎡と荒屋敷遺跡9,700㎡を対象に調査が実施された。麻生館遺跡では平安時代の集落跡と中世の屋敷跡が確認され，その成果は『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告１』として報告された。荒屋敷遺跡では竪穴状遺構・掘立柱建物跡・溝跡などの遺構と，かわらけ・白磁・青磁・中世陶器など12～13世紀の遺物が出土し，その成果は『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告２』として報告された。

平成14年度は荒屋敷遺跡2,100㎡を対象に調査が実施された。調査区は13年度調査区の東側にあたり，13年度調査と同様に平安時代から鎌倉時代にかけての遺構・遺物が多く検出された。中でも12世紀代を中心とする貿易陶磁器や在地系土器は，質・量共に県内でも良好な資料であり，遺跡の性格としては日橋川沿いの自然堤防上に立地する「川湊」と判断されている（『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告３』）。

平成15年度も引き続き荒屋敷遺跡の調査が行われた。対象面積は2,600㎡である。調査では中世と考えられる屋敷跡の一部が確認され，その成果は『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告４』として報告された。

平成16年度は荒屋敷遺跡1,700㎡に加えて，新たに桜町遺跡4,300㎡が調査された。その成果は『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告５』に報告された。

以上のほかに，荒屋敷遺跡については，３次の発掘調査が塩川町教育委員会（現喜多方市）によって実施されており，事業団調査箇所と連続する遺構等が確認されている。相互の位置関係は，第１編図１に示したので，参照されたい。

２．平成17年度の調査経過

本年度の調査は，荒屋敷遺跡と高堂太遺跡（下高額館跡を含む）が対象となった。前者は最終年度にあたり，後者は初年度である。なお，作業員の採用に際しては，塩川町教育委員会（現喜多方市）と喜多方市教育委員会から全面的な協力を得た。

荒屋敷遺跡は，今回が５次調査となる。４月５日付けで発掘指示が出され，平成16年度に確定した現状保存面積の最終的な残2,100㎡が調査された。過去の調査区との位置関係は，３次調査区の南側，４次調査区の北側となる。成果の詳細は第１編に譲るが，３次調査区で想定された屋敷地の連続が捉えられ，掘立柱建物跡・柱列跡などが検出された。

初年度の高堂太遺跡（下高額館跡を含む）は，まず５月31日付けで試掘調査が実施された。19,200㎡が対象となり，14,600㎡が現状保存面積となった。発掘調査は，この成果を受けて７月26日付けで指示が出され，3,900㎡を対象に実施された。その結果，中世城館跡の北西部分，さらにその北側に広がる遺構群が検出された。中世城館跡の検出は，麻生館遺跡に次いで，本事業では２例めである。保存状態が良く，次年度以降の調査成果に大きな期待がもたれる。

第３節　遺跡の位置と自然環境

福島県は，東北地方の最南端に位置し，県としては岩手県に次いで全国２番目となる13,782㎢の面積を持つ。県土のおよそ８割は山地で占められ，東は太平洋に面し，中央やや西寄りには国内有数の大湖である猪苗代湖がある。また，阿武隈川・久慈川・阿賀川など大河川も流れている。東部には，太平洋岸に沿って阿武隈高地，中央部には，那須火山帯に属する奥羽山脈が南北に連なり，西に越後山脈が迫っている。これらの高地・山脈により，県全体は３つに区分される。太平洋に面した浜通り地方，阿武隈高地と奥羽山脈に挟まれ，阿武隈川流域に沿って広がる中通り地方，越後山脈と奥羽山脈間の高原・盆地を含めた会津地方である。

県内３地方の気候は，それぞれに大きな違いがみられる。浜通り地方は海洋性気候，会津地方は内陸性気候であり，中通り地方は両者の中間的様相を示す。会津地方の冬は，寒冷で積雪が多く，山間部では数mに及ぶことも少なくない。春は，雪解け水により河川が増水するが，梅雨時は中・浜通り地方に比較すると，好天の日が多く，降水量はあまり多くない。夏は高温多湿であり，雷雲の発生が多い。秋は盆地で霧が多く発生し，時として交通事故等の原因にもなる。

荒屋敷遺跡・高堂太遺跡（下高額館跡を含む）が所在する喜多方市は，会津盆地のほぼ中心から北部にかけての一帯である。盆地の地表部は，北から濁川，東から猪苗代湖水源の日橋川，南から阿賀川とその支流が，葉脈状に西進している。これらの河川により，盆地内は周辺の山地から運ばれた堆積物に広く厚く覆われ，なだらかな沖積平野および扇状地を形成している。これらの堆積物は，年代的には第四紀完新世に属する。堆積物を運んだ河川は，喜多方市慶徳町付近で一つに合流し，阿賀川となって越後山地の地峡をさらに西進し，新潟県に入り阿賀野川と名を変えて新潟市か

ら日本海に注ぐ。

会津盆地の地質をみると，奥羽山脈側は新第三紀層を基岩とし，会津若松市南東域では背炙山安山岩，喜多方市北部・東部では，猫魔ヶ岳火山噴出物に上部が覆われている。また，越後山地側は新第三紀鮮新世および第四紀更新世層を基岩とし，只見川流域では，沼沢火山噴出物（約5,000年前）に上部が覆われている。また，盆地平坦部は，地質調査によると地下15mまで埋もれ木の存在が認められ，沖積層の深さは約150m，その下には七折坂層の凝灰岩層が確認されている。

この他，盆地の南東部および北西部には，それぞれ南北に断層が走り，有史以来しばしば活動している。特に，慶長16（1611）年の大地震では，慶徳町付近の地峡で崩落および断層隆起があり，阿賀川が堰き止められた。それにより，「山崎新湖」が形成され，標高175m以下の付近の集落（12村ほど）が水没して多大な被害を生じ，復旧まで約40年もの年月を要したことが記録として残っている。

第４節　周辺の遺跡と歴史的環境

対象遺跡周辺の歴史的環境について，『福島県埋蔵文化財地図及び一覧表』（1984・10刊行）・『福島県遺跡地図』（1996・３刊行）・最近の文化財調査報告書・市町村史を参考に概観していく。旧石器時代の遺跡は，今のところ確認数が少ない。喜多方市内では，塩坪遺跡があげられるだけである。会津地方全体でも，会津若松市笹山原遺跡・西会津町山本遺跡・高郷村塩坪遺跡などが確認されている程度に過ぎない。

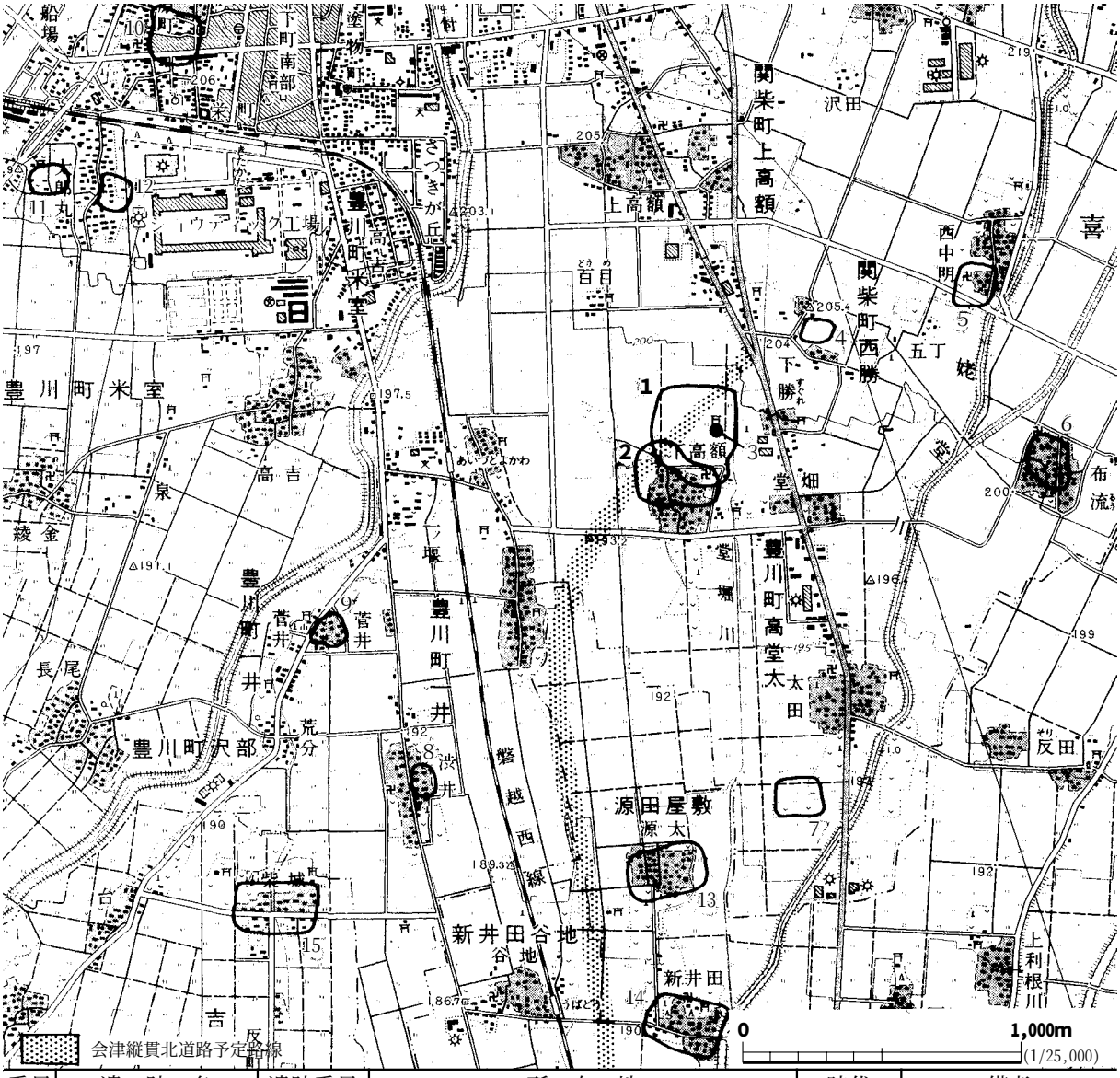
縄文時代の遺跡は，喜多方市東部の雄国山（標高1271.2m）西側山麓に，数多く発見されている。地形的には，扇状地の中央から端部に分布する傾向にあり，遺跡地図に10数ヵ所が登録確認されている。これらの遺跡の中で，常世原田遺跡は，縄文時代早期中葉の「常世式」標識遺跡である。常世式土器は，貝殻腹縁文・平行沈線文・各種刺突文・波状文と，底部が乳房状の尖底を呈する等の特徴を持ち，その分布は広く東北地方一円に及んでいる。この他に，上ノ台・南原・堀込・大原・森台・鶴塚遺跡などがある。

弥生時代の遺跡は，喜多方市北部の沖積地に立地する舘ノ内・堂後・村南・長内・高畑遺跡から土器片が出土している。しかし，まだ本格的な調査は実施されておらず，遺跡の性格や時期等は不明な点が多い。本事業では，荒屋敷遺跡（４次調査）から，終末期の土器片が出土している。

古墳時代に入ると，会津盆地は東北地方の中で，いち早く大型の前方後円墳が築造される地域となる。喜多方市内でも，前期古墳として，深沢・田中舟森山・観音森（竹屋古墳群）・高森山古墳・十九壇古墳群などが確認される。しかし，続く中～後期の衰退傾向は明らかで，明蓮寺・深沢前山古墳群のような，小型・平均化した群集墳が一般化する。この点は集落跡も同様であり，とくに存続期間が短いことは，1世紀以上に及ぶことが一般的な中通り・浜通り地方との明らかな違いである。なお，喜多方市西部の山崎横穴群は，会津盆地では代表的な後期末の墳墓の１つに数えられ

	番号	遺跡名	遺跡番号	所在地	時代	備考
喜多方市	1	麻生館遺跡	4030049	喜多方市　塩川町遠田字麻生館	平安・中世	H13発掘調査
	2	荒屋敷遺跡	4030073	塩川町遠田字荒屋敷・灰塚他	縄文～古墳 平安・中近世	H13～17発掘調査
	3	下遠田館跡	4030050	塩川町遠田字荒屋敷・館ノ腰	中世	
湯川村	4	浜崎城跡	4220001	湯川村　浜崎字北殿町	中近世	
	5	沼ノ上遺跡	4220020	湊字沼ノ上	奈良・平安	
	6	浜崎館跡	4220029	浜崎字宮前	中世	
	7	北田城跡	4220002	三川字大館	中世	
	8	上田谷地遺跡	4220021	湊字上田谷地	奈良・平安	
	9	下川原遺跡	4220022	笈川字下川原	奈良・平安	
	10	西川原北遺跡	4220023	笈川字西川原	奈良・平安	

図２　周辺の遺跡位置図・一覧表（１）



番号	遺　跡　名	遺跡番号	所　在　地	時代	備考
1	高堂太遺跡	20800140	喜多方市豊川町高堂太字高里	中世	
2	下高額館跡	20800099	喜多方市豊川町高堂太字千刈・村東	中世	
3	水谷地古墳	20800036	喜多方市豊川町高堂太字水谷地	古墳	
4	下勝館跡	20800089	喜多方市関柴町西勝字館ノ内	中世	
5	中明館跡	20800130	喜多方市関柴町西勝字館ノ内	中世	堀・土塁
6	布流館跡	20800134	喜多方市関柴町豊芦字布流	中世	堀・土塁
7	太田館跡	20800100	喜多方市豊川町高堂太字館ノ内	中世	主郭の地割
8	渋井館跡	20800137	喜多方市豊川町一井	中世	
9	菅井館跡	20800135	喜多方市豊川町一井	中世	
10	塚原館跡	20800076	喜多方市天満前	中世	
11	太郎丸西館跡	20800098	喜多方市豊川町米室字館跡	中世	
12	太郎丸東館跡	20800129	喜多方市豊川町米室字太郎丸	中世	堀・土塁
13	鏡ヶ城跡	40300005	喜多方市塩川町源太屋敷字前畑･館ノ腰	中世	堀・土塁・五輪塔
14	新井田・田辺館跡	40300007	喜多方市塩川町新江木字新井田	中世	土塁・水堀・虎口
15	柴城跡	40300054	喜多方市塩川町吉沖字柴城	中世	

図3　周辺の遺跡位置図・一覧表（2）

る。

引き続く奈良・平安時代の様相も，当初は低調である。８世紀前半まで遡る遺跡は，会津郡衙推定地（郡山遺跡）周辺など，ごく限られた範囲にとどまっている。盆地全体に安定して集落が営まれるようになるのは，８世紀後半～９世紀前半からである。この頃は，大戸窯跡群の成立・発展や，慧日寺の建立といった時期とも重なり，会津地方はめざましい復興をとげる。喜多方市周辺は，当初の会津郡から耶麻郡に再編入され，沖積地に遺跡数が激増する。例えば，田付川沿いに位置する鏡ノ町遺跡Ａを中心に，舘ノ内遺跡をはじめとして，古屋敷・鶴塚・墓ノ前・鏡ノ町Ｂ・妙見・内屋敷・沼ノ上遺跡などが確認される。鏡ノ町遺跡Ａからは，計画的配置の建物群や船着き場，そして奈良三彩小壺・瓦塔片等の遺物が発見されており，在庁官人の居宅跡と推定されている。類例は，阿賀川沿岸の内屋敷遺跡でも確認され，律令期社会の成熟ぶりが窺える。また，手工業生産分野では，大戸窯跡群の成立と前後して，小田高原窯跡が営まれている。

武家社会が成立した中世には，新たな支配者が台頭する。鎌倉時代後半以降の会津地方では，三浦蘆名氏の勢力が伸び，その一族が各地を領していったと考えられている。喜多方市内でも，盆地平坦部と山間部に，数多くの中世城館跡が確認され，今回報告する２遺跡は，前者の成果を含んでいる。とくに，高堂太遺跡（下高額館跡を含む）に関しては，保存状態の良い平地城館跡であることが新たに判明した。それら盆地平坦部の城館跡は，現在の集落位置とほぼ合致する半径１～２㎞の近距離間で分布する傾向を示している。図２・３に示したように，荒屋敷遺跡の近隣には，下遠田館跡・麻生館遺跡・浜崎城跡，高堂太遺跡（下高額館跡を含む）の近隣には，下勝館跡・布流館跡・太田館跡などが所在する。なお，城主は不明なものが多いが，下遠田館跡は三橋備前定重と二男の刑部重治，下高額館跡は渡部左京進長勝であったという伝承記録が残されている（『会津鑑』他）。

戦国時代に入ると，会津地方でも戦乱が相次いだ。その多くは，戦国大名化する蘆名氏と中小在地領主との戦いである。文亀２（1502）年には，常世・三橋など盆地北東部の在地領主らが追い払われ，天文年間（1532～1554年）には，会津地方の領主達のほとんどが蘆名氏に服属した。これにより，蘆名氏は盛氏の時代に全盛期を迎える。しかし，その後，内部で支配体制の矛盾が顕在化したり，家督相続や重臣間の対立が深まって，蘆名氏の家勢は次第に衰えていった。天正17（1589）年６月には，蘆名義広が伊達政宗との戦いに破れ，中世から続いた蘆名氏はついに滅亡する。蘆名氏を滅ぼして会津へ入った伊達政宗は，金川・三橋・塩川などを片倉景綱へ安堵させている。その後，豊臣秀吉による奥州仕置き以後の会津地方は，蒲生氏郷・秀行から上杉景勝へと支配者が変遷し，関ヶ原の戦いを迎える。

近世（江戸時代）に入り，幕府と藩で全国の土地や人民を支配する幕藩体制が確立し，会津藩でも上杉景勝から蒲生秀行（再蒲生）・忠郷，加藤嘉明・明成氏の支配を経て保科（松平）氏の治世を迎え，明治時代に至る。　（菅　原）

引　用　・　参　考　文　献

塩川町史編纂委員会　1966『塩川町史』 塩川町

雄山閣　1970『新編会津風土記第三巻』

鈴木　敬治　他　1973『喜多方地域の地質』 福島県

新人物往来社　1981『日本城郭大系　第３巻山形・宮城・福島』

新人物往来社　1981『日本城郭大系　別巻Ⅱ城郭研究入門』

会津史料大系刊行会　1982『会津鑑四』吉川弘文館

福島県教育委員会　1988『福島県の中世城館跡』

喜多方市史編纂委員会　1995『喜多方市史第四巻　資料編Ⅰ』

福島県教育委員会　1996『福島県遺跡地図　会津地方』 福島県

小山正忠・竹原秀雄　他　1997『新版　標準土色帖』

(財)福島県文化振興事業団　1998『福島県内遺跡分布調査報告４』

福島県立博物館　1999『常世原田遺跡－吉田格氏昭和23年調査資料－』

(財)福島県文化振興事業団　2001『福島県内遺跡分布調査報告７』

(財)福島県文化振興事業団　2002『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告１』

塩川町教育委員会　2002「荒屋敷遺跡」『塩川西部地区遺跡発掘調査報告書10』

(財)福島県文化振興事業団　2003『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告２』

(財)福島県文化振興事業団　2004『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告３』

(財)福島県文化振興事業団　2004『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告４』

(財)福島県文化振興事業団　2004『福島県内遺跡分布調査報告10』

塩川町教育委員会　2004「内屋敷遺跡」『塩川西部地区遺跡発掘調査報告書12』

(財)福島県文化振興事業団　2005『福島県内遺跡分布調査報告11』

喜多方市史編纂委員会　2005『図説喜多方の歴史　喜多方市史別巻Ⅰ』

いにしえ会津ロマン紀行
実行委員会　2005『第３回いにしえ会津ロマン紀行　豪族と仏教文化』

石田明夫　2005「中世の城と館」
『会津葦名氏の時代　会津若松市史３歴史編③中世２』

第１編　荒 屋 敷 遺 跡（５次）

第１章　遺跡の位置と調査経過

第１節　遺跡の位置

荒屋敷遺跡は，喜多方市塩川町遠田字荒屋敷他に所在する。世界測地系の位置は，北緯37度35分22秒，東経139度52分50秒である。遺跡の所在する喜多方市は，中央部の低地（会津盆地），北・東部の奥羽山脈，西部の越後山地に区分され，扇状地性の低地と山麓地・火山麓地が卓越する。このうち本遺跡が立地するのは，中央部の低地で，大部分が，濁川・田付川・大塩川などで形成された緩勾配の複合扇状地からなっている。この一帯は，第四紀完新世（沖積世）の礫・砂・泥など未固結堆積物が分布しており，扇状地の端部や段丘の崖下にみられる湧水，それに，自然堤防や段丘面などの微高地は，集落の立地に適し，埋蔵文化財も数多く分布している。

本遺跡は，湯川村境の喜多方市南端に立地し，内水面交通の要衝地として好条件を備えている。周辺の地形は，西流する日橋川に北から大塩川・姥堂川が，南から溷川が合流しており，この日橋川も，本遺跡の西2.5㎞で，会津盆地最大の大河である阿賀川に合流する。そして，この阿賀川はさらに喜多方市内で濁川・田村川，会津坂下町では鶴沼川・只見川などと合流し，新潟県に入ると阿賀野川と名称を変え，日本海に注いでいる。このように荒屋敷遺跡周辺の地形は，大小の河川が一つに合流する箇所である。本遺跡は，中世に阿賀川水系の「川湊」であったと推測されているが，珠洲系陶器や貿易陶磁の出土から，遺物の面でも，このことが裏付けられている。

遺跡周辺の地質は，完新世の堆積物からなり，氾濫原堆積物と段丘・扇状地堆積物が接する部分にあたる。そのため，遺跡の南東部は旧河川の流路，北西部は自然堤防上の微高地となり，全体的には南へ緩やかに傾斜した地形となっている。標高は175～178mで，遺跡内には３m前後の比高差が認められる。

平成17年度の調査範囲（５次調査）は，遺跡全体からみると北寄りの箇所にあたり，遺跡を東西に横断する県道会津坂下塩川線のすぐ北側に接している。過去の調査区との位置関係は，３次調査区（平成15年度）の南端と接しており，県道会津坂下塩川線を挟んで，４次調査区（平成16年度）とも近接している。

第２節　調　査　経　過

平成17年度は，荒屋敷遺跡を対象とした発掘調査の最終年度にあたる。本遺跡は，平成13年度から１～４次調査が継続的に実施されており，今回は５次調査となる。

まず，これまでの概要をまとめておく。

・平成13年度（１次調査）9,700㎡　竪穴状遺構１　柱列跡１　掘立柱建物跡１　土坑60　溝跡33他

・平成14年度（２次調査）2,100㎡　竪穴状遺構２　柱列跡１　掘立柱建物跡７　土坑18　溝跡24他
・平成15年度（３次調査）2,600㎡　掘立柱建物跡５　土坑６　溝跡６他
・平成16年度（４次調査）1,700㎡　土坑14　溝跡５他

本年度の調査対象は，県道会津坂下塩川線より北側の2,100㎡の範囲である。現況は，西半分が宅地・東半分が畑地であった。このうち西半分は，遺構検出面の破壊が著しく，男性作業員の労力は，この撹乱の掘りあげに大半が費やされてしまった。

５次調査は，平成17年４月13日～７月６日の，延べ45日間にわたって実施している。日程を追っていくと，発掘調査の指示は，福島県教育委員会教育長から財団法人福島県文化振興事業団理事長に対して，平成17年４月５日付けで交付がなされた。その後，4月８日に福島県教育庁文化財グループ，国土交通省東北地方整備局郡山国道事務所，財団法人福島県文化振興事業団の３者で現地協議が行われ，廃土置き場や駐車場の確保など調査実施に関わる詳細が取り決められた。調査員が現地入りしたのは，調査開始前日の４月12日である。

４月下旬～５月上旬は，重機による表土除去が中心となる。併せて，調査事務所・仮設トイレを設置し，４月18日からは作業員を投入して，周辺の環境整備を行うなど準備作業を実施する。とくに，県道会津坂下塩川線に面した調査区南辺は，遺構検出面との比高差が大きく，縄張りを厳重に行った。また，県道は交通量が多いため，やむを得ず作業員が横断する場合には，必ず調査員が誘導するように気を配った。

連休明けの５月中旬からは，本格的な調査に移行する。調査区南側を中心に，ピット群や土坑・溝跡を確認した。遺構の重複する状況も確認できたが，全体的には密度が極めて低く，残存状態も芳しくないことが明らかとなる。しかし，掘立柱建物跡と認定できる柱穴（ピット）の組み合わせが徐々に確認されはじめ，13～15号掘立柱建物跡，３号柱列跡と命名する。この頃の天候は，例年に無い強風が吹き荒れ，発掘器材類やビニールシートが吹き飛ばされてしまうことも，しばしばであった。

今回の調査成果の概要が判明しつつあった，５月31日は，塩川町文化財保護審議会一行が来跡，また，６月８日には会津坂下町教育委員会一行が来跡する。さらに，６月10・11日には，県主催事業による遺跡の案内人の現地公開が，本遺跡で実施された。参加人数は少数であったが，広く県民に発掘現場を周知できた点は，意義深いものであったと考えられる。

現地公開終了後の６月14日からは，下層遺構の有無の確認と，器材撤収に着手する。翌６月15日には，ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施し，上空から調査区全景並びに細部の写真記録を作成した。

６月20日には，すべての調査を終え，福島県教育庁文化財グループ，国土交通省東北地方整備局郡山国道事務所，財団法人福島県文化振興事業団の３者で，調査終了の確認が行われた。その後，６月27日から調査範囲の埋め戻しを開始し，７月６日に郡山国道事務所喜多方出張所の確認を得て，最終的な現地作業を完了した。　（菅　原）

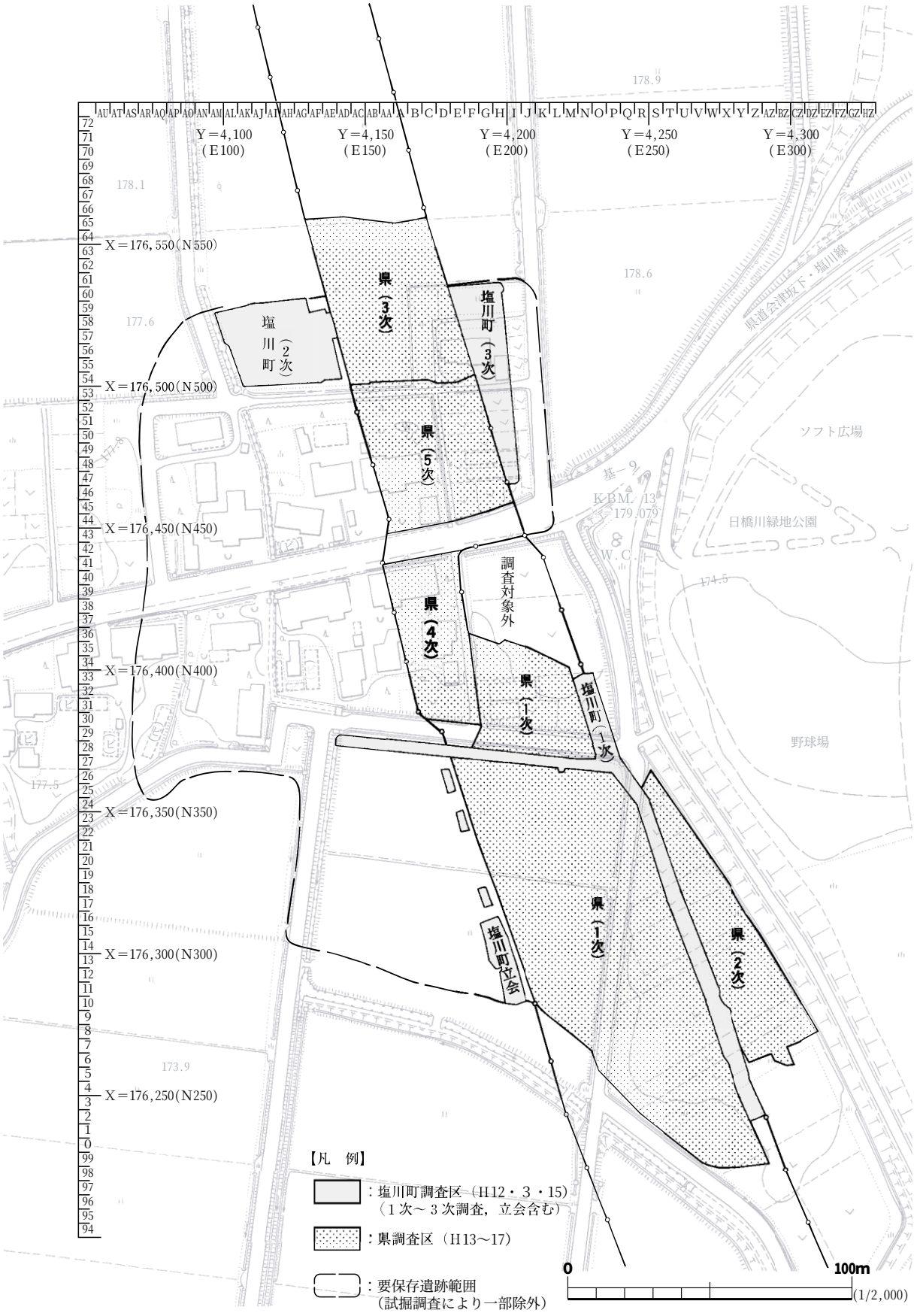


図1　調査範囲とグリッド配置図

第３節　調　査　方　法

平成17年度の荒屋敷遺跡の発掘調査は，平成13年から継続する第５次調査となる。遺構や遺物の出土位置などの記録についても，１次調査で設定されている国土座標Ⅸ系のグリッド網を基準としている。グリッド原点はＸ：176,230.00，Ｙ：4,160.00で，これを基準点として５ｍ四方のグリッドを遺跡全体に設定した。グリッドの名称は原点を基準に南から北に向かって算用数字を付し，西から東に向かってはアルファベットを用い，それらを組み合わせて表記している。

記録については，５ｍグリッドを基に１ｍ方眼に細分し，その交点を測点とした。地点の表記は国土座標のＸ・Ｙ座標をそれぞれＮ（北）・Ｅ（東）に置換し，下３桁を表記した。グリッド原点はN230，E160となる。また荒屋敷遺跡は会津縦貫北道路建設事業に伴う発掘調査の他に，塩川町教育委員会（当時）による県営ほ場整備事業に伴う発掘調査が３次に渡って実施されている。この塩川町教育委員会の調査は，グリッドの設定基準が異なるが，国土座標Ⅸ系を基準としている点では同様である。これらのグリッド設定方法の違いについては，『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告４』に図示している。

調査区の表土除去は重機を用いて，基盤層となるＬⅤ上面まで掘り下げた。遺構の精査では，その特徴や出土遺物の状態にあわせて土層観察用の畦を設け精査・記録をした。なお堆積土の観察には『新版標準土色帖』(1997年版）を用いた。遺構外の堆積土はアルファベットＬとローマ数字を組み合わせＬⅠ…，遺構内の堆積土はℓとアラビア数字を組み合わせℓ１…と表記した。

図面記録については，各遺構の図化は平面図・断面図ともに１／20の縮尺で記録したが，遺構の性格や規模などから，溝跡の平面図などは１／40で記録している。

写真記録は調査の進捗状況に合わせ，調査過程に応じて随時撮影している。カメラは35㎜判のモノクロ・カラーリバーサルフィルムを使用し，両者同一カットで撮影した。

発掘調査で得られた出土遺物および諸記録は，財団法人福島県文化振興事業団遺跡調査部において整理作業を行った。報告書刊行後は出土遺物・記録などの各種台帳を作成し，閲覧可能な状態で，財団法人福島県文化財センター白河館に収蔵・保管する予定である。　（福　田）

引　用　・　参　考　文　献

和田　聡　2002「荒屋敷遺跡」『塩川町文化財調査報告第10集』塩川町教育委員会

和田　聡・植村泰徳　2004「荒屋敷遺跡（３次調査）」塩川西部地区遺跡発掘調査報告８『塩川町文化財調査報告第13集』塩川町教育委員会

井　憲治　他　2003「荒屋敷遺跡」『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告２』福島県教育委員会

井　憲治　他　2004「荒屋敷遺跡（２次）」『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告３』福島県教育委員会

井　憲治・福田秀生　2005「荒屋敷遺跡（３次）」『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告４』福島県教育委員会

安田　稔・福田秀生　2005「荒屋敷遺跡（４次）」『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告５』福島県教育委員会

第２章　遺構と遺物

第１節　遺跡の概要と基本土層

１．遺構の分布と出土遺物（図２，写真２）

５次調査区は，遺構検出面の破壊が著しかった。とくに，宅地であった西半分は，無傷の面積が撹乱の面積より少なかったほどで，完全に消滅してしまった遺構もあったと推測される。また，検出された遺構も，部分的な確認にとどまったものが多く，以下の報告内容は，こうした制約下の記述であることを，予め断っておく。

確認された遺構は，掘立柱建物跡３棟，柱列跡１列，土坑28基，溝跡16条と，ピット群である。その結果，これまでの調査成果（県１～４次・旧塩川町１～３次）と合わせた遺構総数は，竪穴状遺構３基，掘立柱建物跡17棟，柱列跡３列，土坑144基，溝跡104条，性格不明遺構４基，ピット（柱穴）となった。出土遺物は，些少である。中世以前の資料は，縄文土器片１点・土師器片84点・須恵器片31点，珠洲系中世陶器片２点，かわらけ片６点を数えるに過ぎない。このため，第２～４節の報告では，重複状況・堆積土の特徴・周辺遺構との位置関係を，過去の調査所見と勘案し，遺構の時期推定を行った。

ところで，本調査区は，周知の下遠田館跡の東に接して，もう１つ別の館跡が想定された範囲の一画である（(財)福島県文化振興事業団2005）。３次調査区では，屋敷地の北東部分が検出され，本調査区ではそこから南側に展開する遺構群が捉えられると推測された。詳細については後述するが，ここで概要を述べておく。まず，予想に反して，区画溝（54号溝跡）の東延長は，検出されなかった。しかし，想定位置には，現況の地境溝が走っており，（図２中央に撹乱で表示），今日まで形を変えて地割りが残っていた可能性がある。そう仮定すると，14・15号掘立柱建物跡は屋敷地内部の建物跡であり，前者は，３次調査区の８号建物跡と東柱筋が一致することから，計画的配置であったともみられる。

また，それとは別の遺構分布のまとまりも捉えられている。調査区北部では，幅10m前後の遺構空白帯が，この屋敷地境を越えて東西に横断している（ＡＣ～Ｆ，51・52グリッド）。このように，決して単純な様相ではないことが，判明した。

２．基本土層（図２，写真６）

基本土層の認定は，１～４次調査の成果に準拠しているが，今回の調査区では，ＬⅡ～Ⅳがほとんど欠損していた。以下，基本土層について述べる。

ＬＩｂ…炭化物の混入する黒褐色土。平安時代～近・現代までの幅広い遺物を含む。調査区南壁と西壁周辺に局所的な分布が認められた。

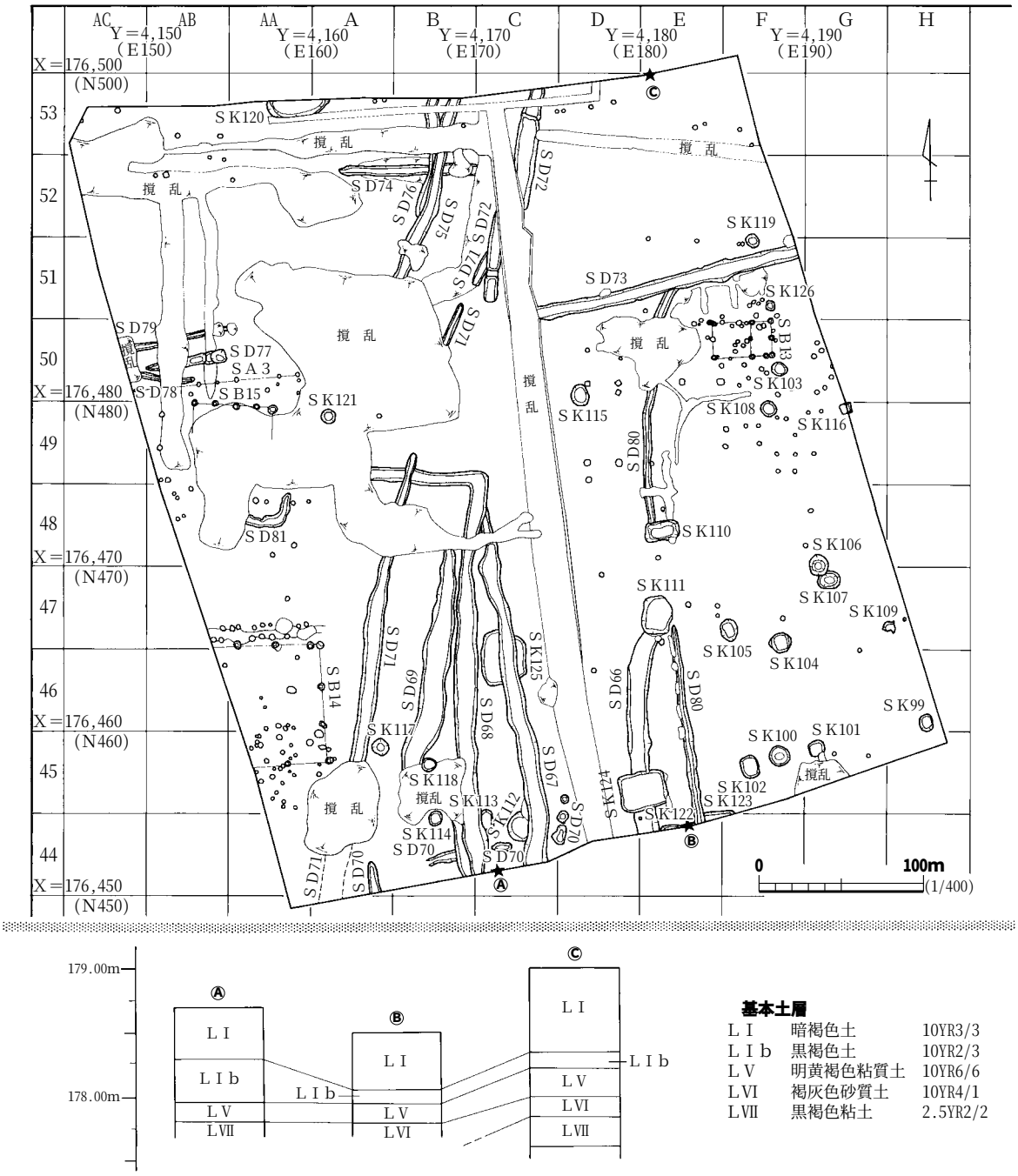


図２　遺構分布図・基本土層

ＬＶ…明黄褐色粘質土である。調査区東半分の遺構は，この上面で検出した。

ＬⅥ…沼沢パミスの混入する褐灰色砂質土である。調査区西半の遺構は，この上面で検出したものもある。

ＬⅦ…酸化鉄の混入する黒褐色粘質土である。　（菅　原）

第２節　掘立柱建物跡

検出された掘立柱建物跡は，３棟である。平面分布のまとまりは，調査区東側の13号掘立柱建物跡と，西側の14・15号掘立柱建物跡に区別される。後者は，柱穴規模が大きく，根固石の使用が認められるのが特徴である。しかし，主軸方位では違った共通性がみられ，13・14号掘立柱建物跡が北で西に振れるのに対し,15号建物跡は東に振れている。

13号掘立柱建物跡　ＳＢ13（図３，写真７・８）

遺　構　本建物跡は，調査区東部のＥ50・Ｆ50グリッドに位置する。周囲は標高178.20m程の平坦面である。遺構検出面はＬⅤとした明黄褐色土の上面である。周辺には103・126号土坑，73・80号溝跡，柱穴群が所在している。本建物跡のＰ８は柱穴群と重複し，そのいずれよりも新しいことを確認している。

本建物跡は南北２間（206～238㎝）×東西３間（354～360㎝）の小型建物跡で，平面形は長方形をなす。主軸方位は北に対して３°西に傾く。本建物跡の構造は東側１間分を間仕切る柱穴Ｐ11が認められ，大きく２つの空間に分けられる。Ｐ１－Ｐ10・Ｐ３－Ｐ４は120㎝と狭く，Ｐ４－Ｐ６・Ｐ８－Ｐ10は220～235㎝を測る。柱間距離はいずれも100～120㎝と短く，特にＰ５・９が対称となる位置にないため，その柱間距離は一定していない。

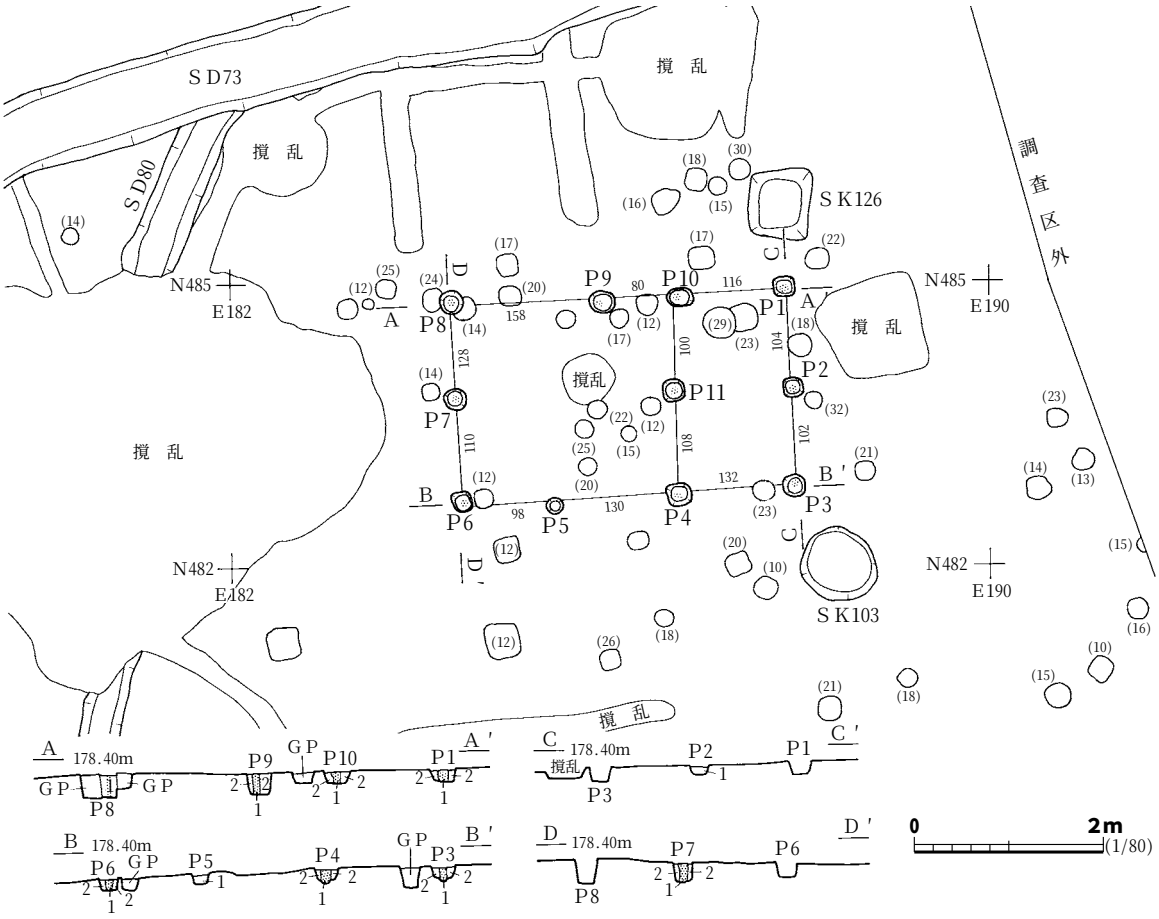
柱穴の平面形はいずれも円形を基調とするが，Ｐ１・４は隅丸方形を呈する柱穴である。規模は直径20～25㎝と小型である。深さは10～25㎝とばらつきがあるが，底面の標高は178.0m前後になる。掘形内堆積土は柱痕跡と掘形埋土に大別できる。掘形埋土は黄褐色土と黒色土が混ざり硬くしまる。柱痕跡は黒褐色土を基調とし，Ｐ１・３・４・６・７・９・10で確認できた。柱痕跡の土層観察により，建物跡の柱材には直径10㎝前後の細い丸太材が用いられていたと推定している。

13号掘立柱建物跡のＰ２から土師器片が１点出土したが，摩滅した小破片のため図示していない。

まとめ　13号掘立柱建物跡は小型建物跡で，柱間距離も一定しない簡素な造りであることから，居住施設とは考えにくい。近接する14号掘立柱建物跡と主軸方向が一致する点を評価すれば，本建物跡の用途は不明であるが，それらに付属する建物跡と推定できる。　（福　田）

14号掘立柱建物跡　ＳＢ14（図４，写真９・10）

遺　構　本遺構は，調査区南西部で検出された掘立柱建物跡である。AA45～47，Ａ45～47グリッドにまたがっている。今回検出の建物跡の中では，最大規模を有し，柱間寸法も他の２棟より長く設計されている。主軸方位はＮ４°Ｗで，13号掘立柱建物跡，３号柱列跡，77・79号溝跡と概ね一致する。また，東柱筋が３次調査区の８号掘立柱建物跡と概ね一致することから，両者は計画的に



Ｐ１堆積土
1　黒褐色土　10YR2/2（黄褐色土粒を極少量含む）
2　暗褐色土　10YR3/3（黄褐色土塊と黒色土の混土）

Ｐ２堆積土
1　黒褐色土　10YR2/2（黄褐色土粒を含む）

Ｐ３堆積土
1　黒褐色土　10YR2/2（黄褐色土粒を少量含む）
2　暗褐色土　10YR3/3（黄褐色土塊を極少量含む）

Ｐ４堆積土
1　黒褐色土　10YR2/2（黄褐色土粒を少量含む）
2　暗褐色土　10YR3/3（黄褐色土・黒色土の混土）

Ｐ５堆積土
1　黒褐色土　10YR2/2（黄褐色土粒を少量含む）

Ｐ６堆積土
1　黒褐色土　10YR2/2（黄褐色土粒を少量含む）
2　暗褐色土　10YR3/3（黄褐色土粒を含む）

Ｐ７堆積土
1　黒褐色土　10YR2/2（黄褐色土粒を極少量含む）
2　暗褐色土　10YR3/3（黒色土・黄褐色土の混土）

Ｐ８堆積土
1　黒褐色土　10YR3/2（黄褐色土粒を少量含む）

Ｐ９堆積土
1　黒色土　10YR2/1（黄褐色土粒を極少量含む）
2　褐色土　10YR4/4（黒色土を少量含む）

Ｐ10堆積土
1　黒褐色土　10YR2/2（黄褐色土粒を極少量含む）
2　暗褐色土　10YR3/3（黄褐色土塊を含む）

図３　13号掘立柱建物跡

配置された可能性が高いと思われる。検出面はＬⅤないしＬⅥ上面で，範囲は調査区外へさらに広がっている。他の遺構との重複関係は認められない。

本建物跡は，側柱建物跡として確認した。しかし，検出範囲には大きな撹乱穴がいくつもあり，そこに，根固石であったとみられる自然石が複数落ち込んでいた。このことから，すべての柱穴を拾い切れたかどうかは不安であり，側柱内部に間仕切り柱穴が存在した可能性も捨てきれない。柱配置の基本形は，南北３間（711㎝）×東西３間以上（682㎝以上）で，隅柱に近接して補助的な柱を置く特徴が認められる。また，北側柱列に併走して，溝跡とピット状の窪みが検出された。堆積土が柔らかい点で問題はあるが，付帯施設の可能性もあるので，一応図示しておく。

柱間寸法は，北側柱列がＰ１－Ｐ２間231㎝，Ｐ２－Ｐ３間210㎝，Ｐ３－Ｐ４間71㎝，東側柱列がＰ４－Ｐ５間250㎝，Ｐ５－Ｐ６間258㎝，Ｐ６－Ｐ７間133㎝，Ｐ７－Ｐ８間70㎝，南側柱列がＰ

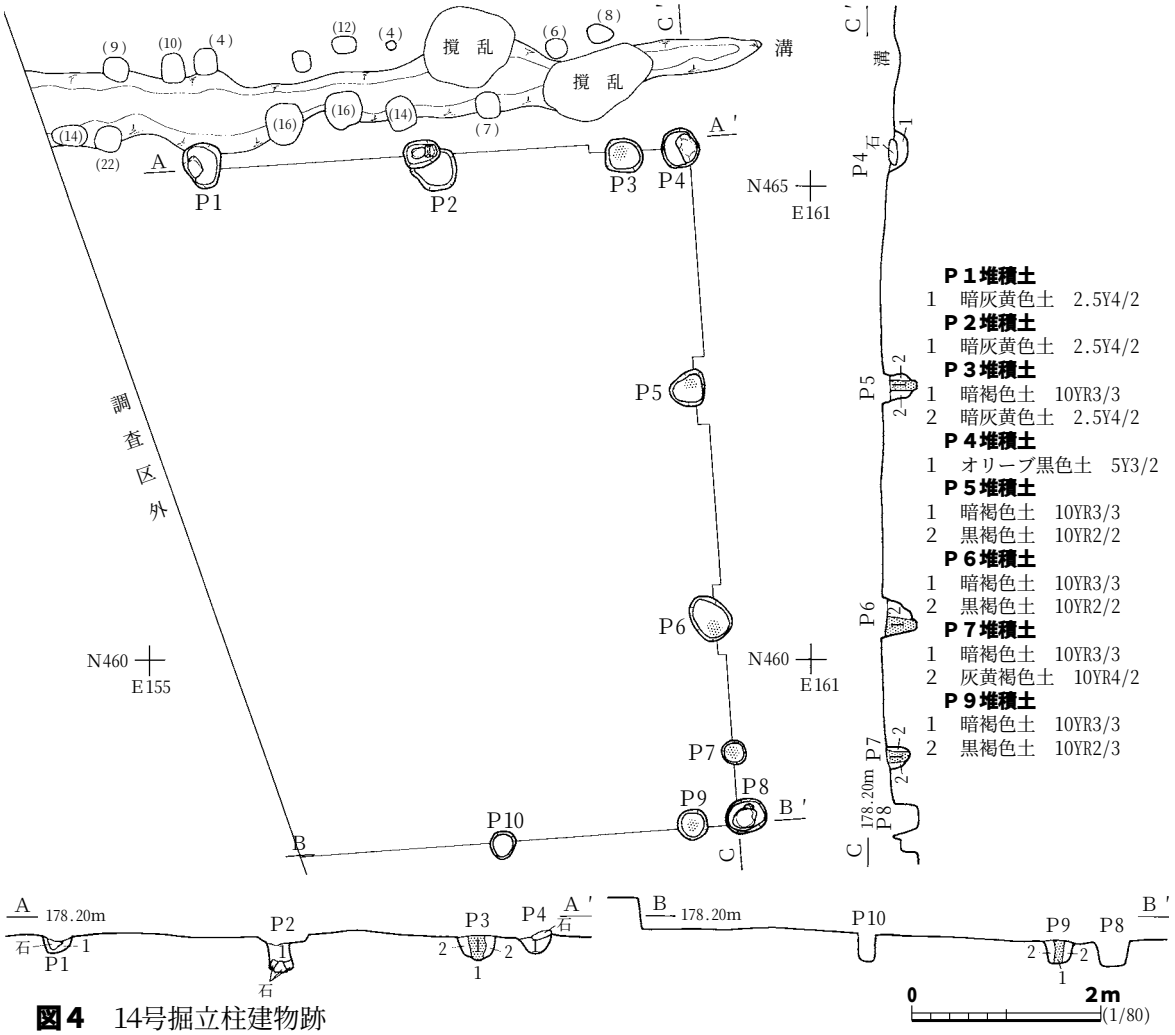


図４　14号掘立柱建物跡

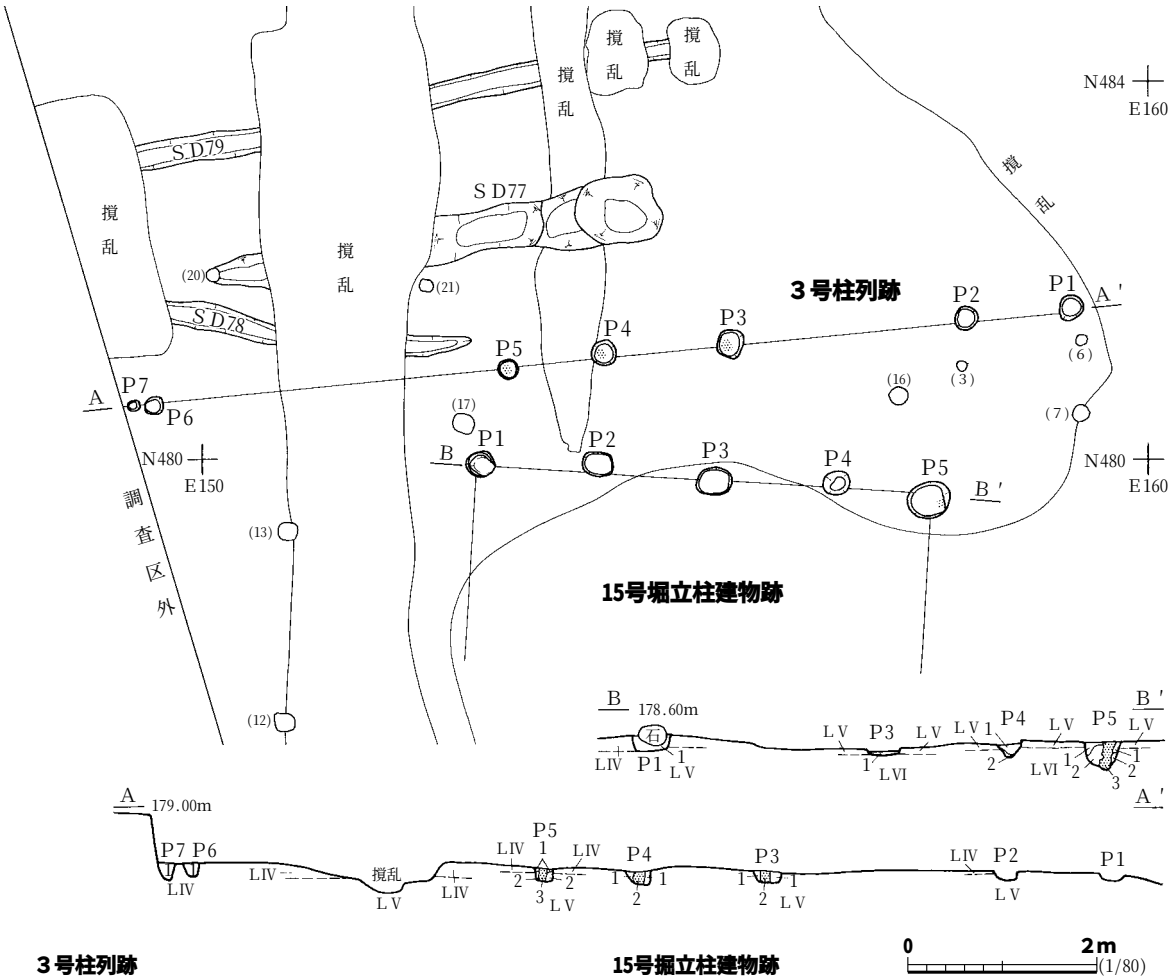
８－Ｐ９間55㎝，Ｐ９－Ｐ10間204㎝を測る。柱穴は，径30～36㎝の不整円形を呈し，検出面からの深さは19～41㎝である。柱痕跡はＰ３・５・６・７・９の５基で，また，根固石とみられる自然石が，Ｐ１・２・４・８の４基で確認された。

本建物跡からは，遺物は出土していない。

まとめ　本遺構は，５次調査区で最大規模の掘立柱建物跡である。主軸方位は，13号掘立柱建物跡，３号柱列跡，77・79号溝跡と概ね一致する。また，３次調査区の８号掘立柱建物跡と東柱筋が揃うことから，両者は計画的配置であったことが窺える。時期は，8号掘立柱建物跡で推定された年代観を根拠に，大枠で中世と捉えておきたい。　（菅　原）

15号掘立柱建物跡　ＳＢ11（図５，写真11）

遺　構　本遺構は，調査区西部のAB49・AA49グリッドに所在している。検出されたのは，北側柱列だけである。南側の広がりは，撹乱のため追跡することができなかった。検出面は，ＬⅤないしＬⅥ上面で，主軸方位は，北側柱列でみるとＥ６°Ｓを指し，近接の78号溝跡と概ね平行する。後述のように，同溝跡は中世の所産とみられ，両者は一体的に機能したと推定される。また，類似方



３号柱列跡

Ｐ３堆積土
1　にぶい黄橙色土　10YR6/4
2　黒褐色土　10YR3/2（柱痕）

Ｐ５堆積土
1　灰黄褐色土　10YR5/2
2　黒褐色土　10YR3/2
3　黒褐色土　10YR3/2（褐色土が混ざる。柱痕）

Ｐ４堆積土
1　にぶい黄橙色土　10YR6/4
2　黒褐色土　10YR3/2（柱痕）

Ｐ６堆積土
1　黒褐色土　10YR3/2

Ｐ７堆積土
1　黒褐色土　10YR3/2

15号掘立柱建物跡

Ｐ１堆積土
1　灰黄褐色土　10YR5/2

Ｐ３堆積土
1　灰黄褐色土　10YR5/2

Ｐ４堆積土
1　灰黄褐色土　10YR5/2
2　にぶい黄橙色土　10YR7/2

Ｐ５堆積土
1　灰黄褐色土　10YR5/2
2　灰白色土　10YR8/2
3　黒褐色土　10YR3/2（柱痕。炭化物を少量含む）

図５　15号掘立柱建物跡・３号柱列跡

位の建物跡は，１・２次調査区にまとまっており，本遺構は平面分布の北限となる。他の遺構との重複関係は認められなかった。

本建物跡は，東西４間の規模を有している。南北規模は，不明である。柱間寸法は，Ｐ１－Ｐ２間122㎝，Ｐ２－Ｐ３間122㎝，Ｐ３－Ｐ４間129㎝，Ｐ４－Ｐ５間109㎝を計測する。このうちＰ２は，底面が浅いため，痕跡的な輪郭の確認にとどまった。柱穴の平面形は，径35～40㎝の不整円形を呈しており，検出面からの深さは，８～42㎝を測る。東隅のＰ５で柱痕跡，西隅のＰ１で根固石が確認された。

本建物跡から，遺物は出土していない。

まとめ　本建物跡は，他の２棟と主軸方位が異なり，類例の分布は１・２次調査区に集中する。営まれた時期は，中世と考えておきたい。　（菅　原）

第３節　柱 列 跡

５次調査で確認された柱列跡は，１列である。近接の77・79号溝跡と，主軸が揃い，区画施設として機能したと考えられる。

３号柱列跡　ＳＡ03（図５，写真12）

遺　構　本遺構は，調査区西部で検出された東西方向の柱列跡である。AB50・AA50グリッドにまたがり，７基の柱穴が確認された。しかし，全長は不明である。西側は調査区外に延びる可能性があり，東側は，Ｐ１から先が撹乱のため追跡できなかった。また，Ｐ５－Ｐ６の中間に，もう１基の柱穴が存在した可能性があると思われる。周辺には，主軸の揃う２条の溝跡があり，1.3m北側に77号溝跡，2.9m北側に79号溝跡が併走している。これらとは，同時もしくは近接時期に機能したと推測される。

本遺構の主軸方位は，Ｅ７°Ｎである。柱間寸法は，Ｐ１－Ｐ２間111㎝，Ｐ２－Ｐ３間252㎝，Ｐ３－Ｐ４間134㎝，Ｐ４－Ｐ５間100㎝，Ｐ５－Ｐ６間372㎝，Ｐ６－Ｐ７間26㎝を測る。柱穴は径25～30㎝の円形基調を呈し，南側に展開する14・15号掘立柱建物跡に比べると小型である。検出面からの深さは16～20㎝を測る。Ｐ３～５では，柱痕跡が確認された。

遺物は，出土していない。

まとめ　本遺構は，区画施設として機能したと考えられる柱列跡である。主軸方位でみれば，近接の77・79号溝跡の他，73号溝跡，13・14号掘立柱建物跡とも一致している。　（菅　原）

第４節　土　　坑

今回の５次調査で確認した土坑は99～126号土坑の計28基である。塩川町調査分の18基を加えると，荒屋敷遺跡では144基の土坑を確認した。これら土坑は遺跡全体に散在するが，３～５次調査区を含む遺跡北半部において，その分布が希薄になる傾向が見られる。そのうち本遺跡で特徴的な土坑は，円筒形をなす形状で，特に掘立柱建物跡の周辺に分布し，それらに関連する「井戸状遺構」，「ゴミ捨て穴」などの機能が推定されている。円筒形土坑の年代は，中世に属する可能性が高い。

５次調査で検出した土坑についても，出土遺物が貧弱で，性格や年代を特定できたものは少ない。中でも124・125号土坑はいわゆる方形竪穴状遺構に類似する特徴が見られる。

99号土坑　ＳＫ99（図６，写真13）

本土坑は調査区の南東隅，H46グリッドに位置し，標高178.0m程の平坦面に立地している。重複する遺構はないが，周囲には101・109号土坑が分布する。遺構検出面はＬＶ上面である。

本土坑の平面形は隅丸長方形をなし，規模は長辺が0.88m，短辺が0.77m，検出面からの深さが0.08mと極めて浅い。周壁の遺存状態が悪いが，東側が比較的急峻に立ち上がる。遺構内堆積土は暗褐色土の単層で，堆積土の性状から自然堆積と判断した。

本土坑からは遺物が出土していないため，その性格や年代を特定できない。　（福　田）

100号土坑　ＳＫ100（図６，写真13）

本土坑は調査区南東側，Ｆ45グリッドに位置する。重複する遺構はないが，周囲に101・102号土坑が近接する。遺構検出面はＬⅤとした明黄褐色土の上面で確認した。

本土坑の平面形は整った円形をなす。規模は直径1.12m，深さは0.18mを測る。周壁から底面にかけての断面形は浅い鍋底状をなし，周壁と底面の境は不明瞭である。遺構内堆積土は炭化物と黄褐色土粒を含む黒褐色土の単層で，その性状から自然堆積と判断した。

本土坑からは遺物が出土していないため，性格や年代は不明である。　（福　田）

101号土坑　ＳＫ101（図６，写真13）

本遺構はG45グリッドに位置する土坑である。周囲の地形は，近年の畑作による撹乱が著しいが，標高178.0m程の平坦面となる。本土坑と重複する遺構はないが，周囲に100・102号土坑が近接する。遺構検出面はＬⅤ上面である。

本遺構は隅丸方形を呈する。規模は長辺が0.88m，短辺が0.82mを測り，検出面からの深さは最大で0.14mと極めて浅い。周壁の遺存状態が悪いが，いずれも急峻に立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが，中央部が部分的に深くなる。遺構内堆積土は黄褐色土塊を含む黒褐色土で，その堆積土が均質になることから自然堆積と考えている。

本土坑は出土遺物がなく，性格や年代は特定できない。　（福　田）

102号土坑　ＳＫ102（図６，写真13）

本土坑は調査区南東部，Ｆ45グリッドに位置する。重複する遺構はないが，周囲には100・101・123号土坑などが分布している。遺構検出面はＬⅤ上面である。

本土坑の南側上端部は，近年の耕作により削平を受けているが，その平面形は南半部幅がやや狭くなる隅丸長方形となる。規模は長辺が1.27m，短辺が1.0m，検出面からの深さが0.2mを測る。周壁は上端部が撹乱により緩やかになるが，各壁ともに中位から下半部にかけては急峻に立ち上がる。底面は微細な凹凸があるものの，ほぼ平坦になる。遺構内堆積土は黄褐色土塊を多量に含む黒褐色土で，含有物と土質などから，廃絶時に人為的に埋め戻されたと考えている。

本土坑は遺物が出土していないため，その性格や年代については不明である。　（福　田）

103号土坑　ＳＫ103（図６，写真13）

本土坑は調査区の東部，Ｆ50グリッドに位置する。本土坑と重複する遺構はないが，北側には13号掘立柱建物跡が近接し，周囲には柱穴群が点在する。遺構検出面はＬⅤ上面である。

本土坑は円筒状に掘り込まれた土坑である。規模は長径が0.80m，短径が0.77mを測り，深さは0.28mである。遺構内堆積土は３層に分けた。１・２層は焼土や炭化物を含む黒褐色を基調とし，３層はＬⅤの崩落土である。堆積土の含有物やその性状などから自然堆積と判断した。

本土坑は遺物が出土していないため，性格や年代は特定できない。（福　田）

104号土坑　ＳＫ104（図６，写真13）

本土坑は調査区の南東側，Ｆ46・47グリッドに位置する。重複する遺構はないが北西側に105号土坑が近接して分布する。遺構検出面はＬⅤとした明黄褐色土の上面である。

本土坑は近年の耕作による撹乱が著しい範囲に分布するため，遺存状態が悪く，土坑の上端部が失われている部分が多い。平面形は若干の乱れがあるものの，底面の形状から隅丸方形になると復元できる。規模は長辺が1.20m，短辺が1.0mを測る。検出面からの深さは0.27mである。周壁は中位から下半部は急峻に立ち上がる。底面は微細な凹凸があるが，ほぼ平坦になる。遺構内堆積土は黒褐色土の単層であるが，含有物などの土質が均質になることから，自然堆積と考えている。

本土坑から遺物が出土していないことから，その性格や年代は不明である。（福　田）

105号土坑　ＳＫ105（図６，写真13）

本土坑はＦ47グリッドに位置する。周囲は近年の耕作による撹乱が著しい範囲に分布する。重複する遺構はないが，南東側に104号土坑が近接する。遺構検出面はＬⅤ上面である。

平面形は楕円形を基調とし，その規模は長径1.27m，短径0.93mを測る。検出面からの深さは最大でも0.1mと極めて浅い。周壁から底面にかけての断面形は浅い皿状をなす。遺構内堆積土は黒褐色土の単層で，含有物やその性状から自然堆積と判断した。

本土坑から遺物が出土していないため，性格や年代は不明である。（福　田）

106号土坑　ＳＫ106（図７，写真13）

本土坑は調査区の南東部，G47・48グリッドに位置する。周囲は標高178.0mの平坦な地形である。107号土坑と重複し，本土坑のほうが新しい。遺構検出面はＬⅤとした明黄褐色土の上面である。

本土坑は近年の耕作による撹乱が著しい区域に分布し，遺構の上端部は壊されている部分も多い。平面形は，比較的整った円形を呈する。規模は上端部では長径が1.14m，短径が1.10mを測り，底面では直径が0.65mを測る。検出面から底面までの深さは1.08mと深い。周壁の立ち上がりは，上

半部が緩やかな傾斜で開き気味になるが，中位から下半部は垂直気味になる。底面はわずかな凹凸が認められるがほぼ平坦になる。遺構内堆積土は５層に分けた。１～３層は遺構の上層部を覆う堆積土で，黄褐色土と黒色土が混在する。４・５層は黒褐色を基調とする粘質土で，黄褐色土塊を含んでいる。含有物や堆積状況などから，人為的に埋め戻されたものと判断した。

本土坑は出土遺物がなく，明確な性格や所属時期は不明である。しかし，規模や形状，堆積土などの特徴は，これまでの調査によって確認された円筒形の土坑と類似していることから，中世に属する井戸跡または当時の生活ゴミを投棄した穴と考えている。（福　田）

107号土坑　ＳＫ107（図７・11，写真14・23）

本土坑は調査区の南東部，G47グリッドに位置する。周囲は近年の耕作による撹乱が著しい区域であるが，標高178.0m付近のほぼ平坦な地形である。106号土坑と重複し，本土坑のほうが古い。遺構検出面はＬＶ上面である。

平面形は東西方向に長い，やや歪んだ楕円形を呈する。規模は長径が1.33m，短径1.0m，検出面からの深さは0.62mである。遺構内堆積土は７層に分けた。１～３層はいずれも黄褐色土粒を含む黒褐色土で，遺構上層部を覆う自然流入土である。４層は壁際にのみ確認された褐色土で，ＬＶを中心とした壁面の崩落土である。５～７層は底面付近をそれぞれ薄く覆う堆積土で，上層部に比べやや明るい色調の堆積土である。含有物などの特徴から自然流入土と判断した。周壁は上端部が崩落により開き気味に緩やかな傾斜になるが，中位から底面にかけては急峻な立ち上がりとなる。底面は平坦でなく，北側に向かって緩やかな傾斜をもって低くなる。

本土坑からは土師器片７点，須恵器片１点，かわらけ片１点が出土している。出土遺物は，すべて１層とした自然流入土から出土したもので，遺構の年代を特定できるような出土状況ではない。図11－１はロクロ成形による土師器甕で，口縁部の小破片である。

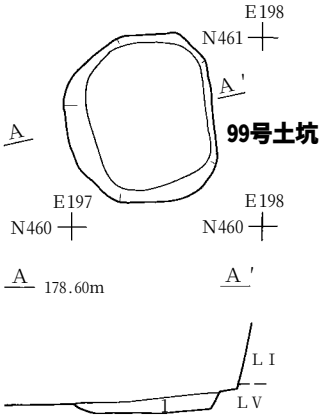
本土坑は周辺に所在する円筒形の土坑と形態や規模などが類似することから，年代は中世に属し，その性格についても，井戸跡や生活ゴミを投棄した穴と考えている。（福　田）

108号土坑　ＳＫ108（図６・11，写真14・23）

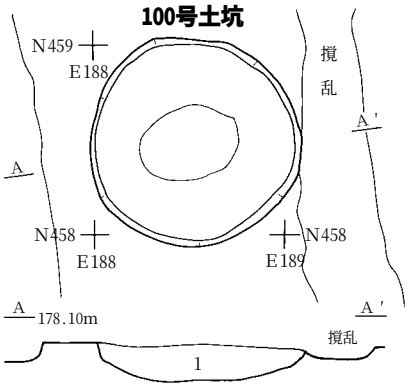
本土坑は調査区の東端，Ｆ49グリッドに位置する。本土坑と直接的に重複する遺構はないが，北側に13号掘立柱建物跡，103号土坑が分布し，周囲には柱穴群が点在する。遺構検出面はＬＶ上面である。

本遺構は円筒形に掘り込まれた土坑で，平面形はやや歪んだ楕円形をなす。規模は長径が0.85m，短径が0.75m，深さは0.37mを測る。周壁は垂直気味に立ち上がり，底面はほぼ平坦になる。遺構内堆積土は３層に分けた。いずれも黒褐色土と黄灰色粘質土が互層をなして堆積することから，人為的に埋め戻されたと判断した。

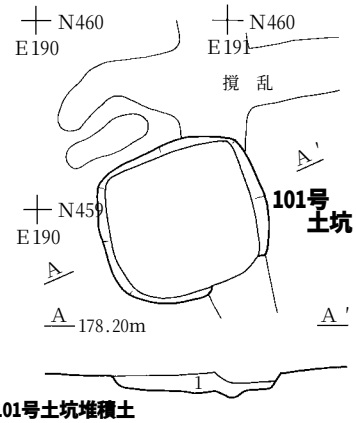
本土坑からは土師器１点，須恵器３点，かわらけ１点が出土した。いずれも１層とした人為堆積



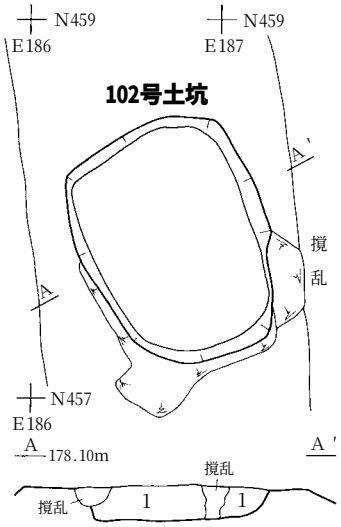
99号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/3（炭化物を極少量，黄褐色土粒を含む）



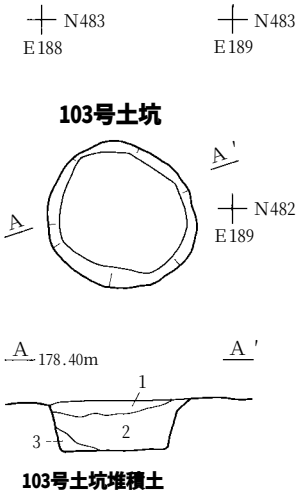
100号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR2/2（炭化物を少量，黄褐色土粒を含む）



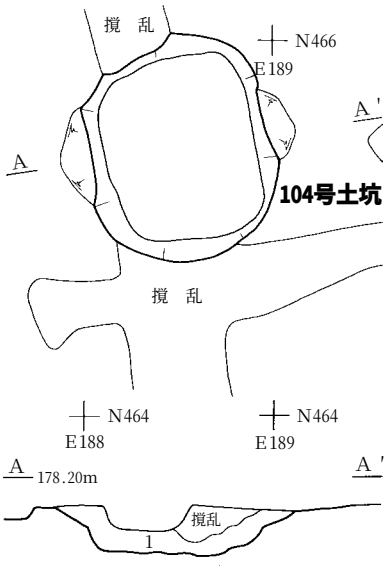
101号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR2/2（炭化物を極少量，黄褐色土塊を含む）



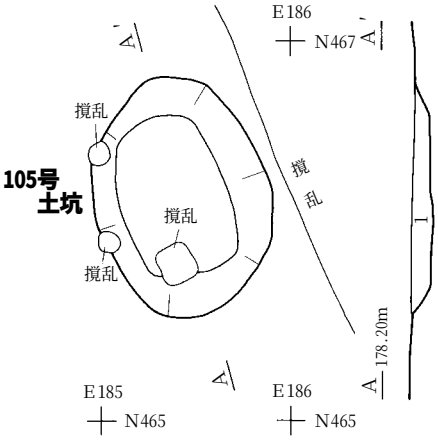
102号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR2/3（炭化物を極少量，黒色土を少量，黄褐色粘土塊を多量に含む）



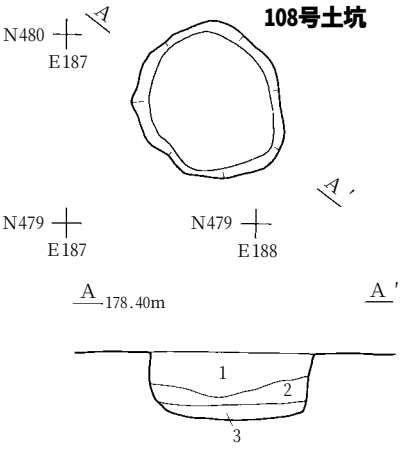
103号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/3（焼土・炭化物を極少量含む）
2　黒褐色粘質土　10YR2/3（黄褐色土粒を少量含む）
3　褐色土　10YR4/4（ＬＶ崩落土）



104号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR2/2（炭化物を極少量，黄褐色土粒を含む）



105号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR3/2（焼土・炭化物を極少量，黄褐色土塊を含む）



108号土坑堆積土
1　黒褐色土　2.5Y3/2（焼土・炭化物を極少量，黄褐色粘土粒，黒色土粒，灰白色土粒多量に含む）
2　黄灰色粘質土　2.5Y4/1（焼土・炭化物を極少量，灰白色土粒，黄色土粒を含む）
3　黒褐色土　2.5Y3/1（黒色土粒・黄褐色土粒を極少量含む）

0　1m
(1/40)

図６　99～105・108号土坑

土中から出土した。そのうち遺物の形状が把握できるものを図11に示した。図11－２は須恵器の長頸瓶で，頸部下半の破片である。頸部はやや開き気味に立ち上がり，その下端にリング状の突帯がめぐる。３はロクロ成形によるかわらけである。底部破片であるため全体的な器形は不明だが，小皿になると推定される。

本土坑は小型円形坑で，廃絶時に人為的に埋め戻されたと考えられる。出土遺物から性格や所属時期を特定できる所見は得られず不明である。（福　田）

109号土坑　ＳＫ109（図７，写真14）

本土坑は調査区の南東隅，G47・H47グリッドに位置する。本土坑と重複する遺構はない。遺構検出面はＬⅤ上面である。本土坑は撹乱を受ける部分が多く，周壁や底面の状態などの詳細は不明な部分が多いが，平面形は隅丸方形をなすと推定される。規模は長辺が0.68m，短辺0.6mを測る。深さは0.1mと極めて浅い。遺構内堆積土は黄褐色土塊を含む黒褐色土の単層である。遺構自体が浅く，遺存状態も悪いことから堆積状況は不明である。

本土坑からは遺物が出土していないため，その性格や年代は不明である。（福　田）

110号土坑　ＳＫ110（図７，写真14）

本遺構はE48グリッドに位置する土坑である。81号溝跡よりも古く，南側には111号土坑が近接する。遺構検出面はＬⅤ上面である。

平面形は長方形を呈する。規模は長辺が2.0m，短辺が1.25m，深さは0.28mを測る。遺構内堆積土は２層に分けた。１層は黄褐色粘土塊を含み，人為堆積と判断した。２層は灰色粘土を含む褐灰色粘質土で，その上面に灰色細粒が薄く混入する。周壁の下半部に傾斜変換点があり，上半部の立ち上がりが緩やかになる。底面はほぼ平坦であるが，中央部にわずかなくぼみが認められる。

本土坑からは遺物が出土していないため，性格や年代は不明である。（福　田）

111号土坑　ＳＫ111（図７，写真14）

本土坑は調査区の南東側，E47グリッドに位置する。66号溝跡と重複し，本土坑の方が古い。周囲には105・110号土坑が近接する。遺構検出面はＬⅤとした明黄褐色土の上面で確認した。

平面形は隅丸長方形をなすと推定される。規模は長辺が2.37m，短辺が1.68mを測り，深さは最大でも0.2mと浅い。遺構内堆積土は暗褐色粘質土の単層で，堆積土の含有物やその性状から人為的堆積と考えている。周壁は近年の耕作により失われ，北東隅では明瞭な立ち上がりを確認できないが，比較的緩やかな傾斜で立ち上がる。底面の中央部には深さ５㎝ほどのくぼみが認められる。

本土坑から陶器片が１点出土しているが，図示していない。

本遺構は長方形を基調とする浅い土坑であるが，その性格を特定する所見は得られていない。年代は出土遺物から近世以降と考えている。（福　田）

112号土坑　ＳＫ112（図７，写真14）

本土坑は調査区の南端，Ｃ44グリッドに位置する。周囲の現況が宅地であったため，地形改変が著しく，検出時には標高177.8m程の平坦面であるが，調査区東側とは0.2～0.3mほど低くなる。本土坑は67号溝跡に東半分を壊された状態で確認した。

平面形は，遺存する西半部から円形を呈すると推定される。規模は直径が1.65mを測る。深さは0.18mと極めて浅い。遺構内堆積土は黒褐色土の単層であるが，堆積土の含有物やその性状から自然堆積と判断した。周壁は緩やかに立ち上がるが，底面との境は不明瞭になる。底面は細かい凹凸が認められ，中央部に向かってわずかに深くなる。

本土坑からは遺物が出土していないため，詳細な性格や年代は不明である。（福　田）

113号土坑　ＳＫ113（図８，写真14）

本土坑は調査区の南端，Ｃ44グリッドに位置する。68号溝跡と重複し，本土坑の方が古い。周囲は土坑や溝跡が集中している。遺構検出面はＬⅤ上面である。

本土坑は東半部を68号溝跡に壊され，その平面形は隅丸方形と推定される。規模は長辺が1.12mを測り，深さは0.1mと極めて浅い。周壁は東半部が遺存しないが，急峻に立ち上がる。周壁から底面にかけての断面形は浅い皿状をなす。遺構内堆積土は黒褐色土の単層で，自然堆積と判断した。

本土坑からは遺物が出土していないため，性格や年代は不明である。（福　田）

114号土坑　ＳＫ114（図８，写真14）

本土坑は調査区の南端，Ｂ44グリッドに位置する。重複する遺構はないが，周囲は土坑や溝跡が集中している。本土坑は宅地造成により地形が大きく削平され，その検出面はＬⅥ上面である。

平面形は南半部がやや歪むが，ほぼ円形を呈する。規模は長径が0.83m，短径が0.75m，検出面からの深さが0.35mを測る。遺構内堆積土は５層に分けた。黒褐色土と灰黄褐色土が互層をなして堆積することから，人為堆積と判断した。周壁は急峻に立ち上がるが，南東側は垂直気味となる。底面は中央部に向かってわずかに低くなる。

本土坑からは遺物が出土していないため，性格や年代は不明である。（福　田）

115号土坑　ＳＫ115（図８，写真15）

本土坑は調査区の中央，Ｄ50グリッドに位置する。周囲の地形は標高178.1m程の平坦面となる。重複する遺構はないが，東側に80号溝跡が分布する。遺構検出面はＬⅤ上面である。

平面形はやや歪んだ楕円形を呈し，その規模は長径が1.1m，短径が0.95mを測る。検出面からの深さは0.18mと浅い。周壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦でなく，特に南側に深いくぼみが認められる。遺構内堆積土は黒褐色土の単層であるが，含有物などの特徴から自然堆積と判断した。

本土坑は出土遺物もなく，性格や所属時期を特定できる所見は得られていない。　（福　田）

116号土坑　ＳＫ116（図８，写真15）

本土坑は調査区東端G49グリッドに位置する。検出時に多くを削平してしまい，調査区壁の断面観察によって確認した土坑で，調査区内では底面付近をわずかに確認した程度である。本土坑はＬＶ上面から掘り込まれている。遺存する東壁の状態などから，平面形は方形を基調とすると推定される。その規模は一辺が0.7m前後で，ＬＶ上面からの深さは0.35mである。遺構内堆積土は３層にわけ，各層が水平に堆積することから人為的に埋め戻されたと判断している。

本土坑からは遺物が出土していないため，性格や年代は不明である。　（福　田）

117号土坑　ＳＫ117（図８，写真15）

本遺構は，調査区南西部のA45グリッドで確認された。検出面はＬＶ上面である。周辺遺構との関係は，69号溝跡と71号溝跡に挟まれた位置にあり，上部は宅地撤去時の撹乱のため厚く削り取られている。

平面形は円形基調を呈し，規模は南北94㎝，検出面からの深さは20㎝を測る。底面はなだらかなU字状を呈し，周壁は直線的に外傾して立ち上がる。遺構内堆積土は３つに分層された。粘性の強い暗褐色・灰黄褐色土であり，断面の観察から自然堆積したと判断される。

本土坑から遺物は出土していない。所属時期は，不明である。　（菅　原）

118号土坑　ＳＫ118（図８，写真15）

本土坑は，調査区南西部のB45グリッドで確認された。検出面はＬⅥ上面である。重複関係は，北壁が69号溝跡と接し，これより新しい。また，南側は建物撤去時の撹乱のため，上部が厚く削り取られている。

本遺構は，地面から円筒状に掘り込まれた土坑である。平面形態は，ややゆがんだ円形を呈し，規模は南北83㎝，東西89㎝，検出面からの深さは75㎝を測る。底面は水平に整えられ，ＬⅥ－灰白色粘土層の層理面に一致していた。壁は垂直に立ち上がり，上部はやや開き気味である。遺構内堆積土は，断面観察から自然流入したと判断される。下半部は，にぶい黄褐色土の単層で占められ，上半部は，黒・黄褐色系色調の４層に分層される。

本土坑からは，土師器小片６点が出土した。どれも，遺構に伴うような出土状況は示しておらず，年代決定材料とはならない。本土坑が営まれた時期は，不明である。　（菅　原）

119号土坑　ＳＫ119（図８，写真15）

本土坑は調査区の北東側，Ｆ51グリッドに位置する。重複する遺構はないが，南側に73号溝跡が近接している。遺構検出面はＬＶ上面である。

平面形は円形を呈する。規模は長径が0.75m，短径が0.68m，深さが0.27mを測る。南半部の周壁は，急峻になるが，北側では周壁中位に傾斜変観点があり上半部は垂直気味に立ち上がり，下半部は緩やかな傾斜で底面と接する。遺構内堆積土は３層にわけた。堆積土の土質と性状から自然堆積と考えている。

本土坑からは遺物が出土していないため，性格や所属時期を特定できない。　（福　田）

120号土坑　ＳＫ120（図９，写真15）

本土坑は調査区の北端，AA53・Ａ53グリッドに位置する。周辺は標高178.1m前後の平坦面であるが，近年の宅地造成や水路開削による撹乱が著しい。遺構検出面はＬＶ上面である。

本土坑は調査区内において南半分を確認しただけである。平面形は東側がやや狭くなり，全体的には楕円形となると推定される。遺存部の規模は，長径が3.75mを測り，検出面からの深さは最大で0.25mである。遺構内堆積土は黒褐色土の単層で，堆積状況から自然堆積と判断した。周壁は比較的緩やかな立ち上がりで，中位に軽い傾斜変換線が見られる。底面は平坦で，西側がわずかに低くなる。

本土坑は調査区内で南半部を確認したのみで，その全容は不明である。所属時期は出土遺物がなく不明である。　（福　田）

121号土坑　ＳＫ121（図８，写真15）

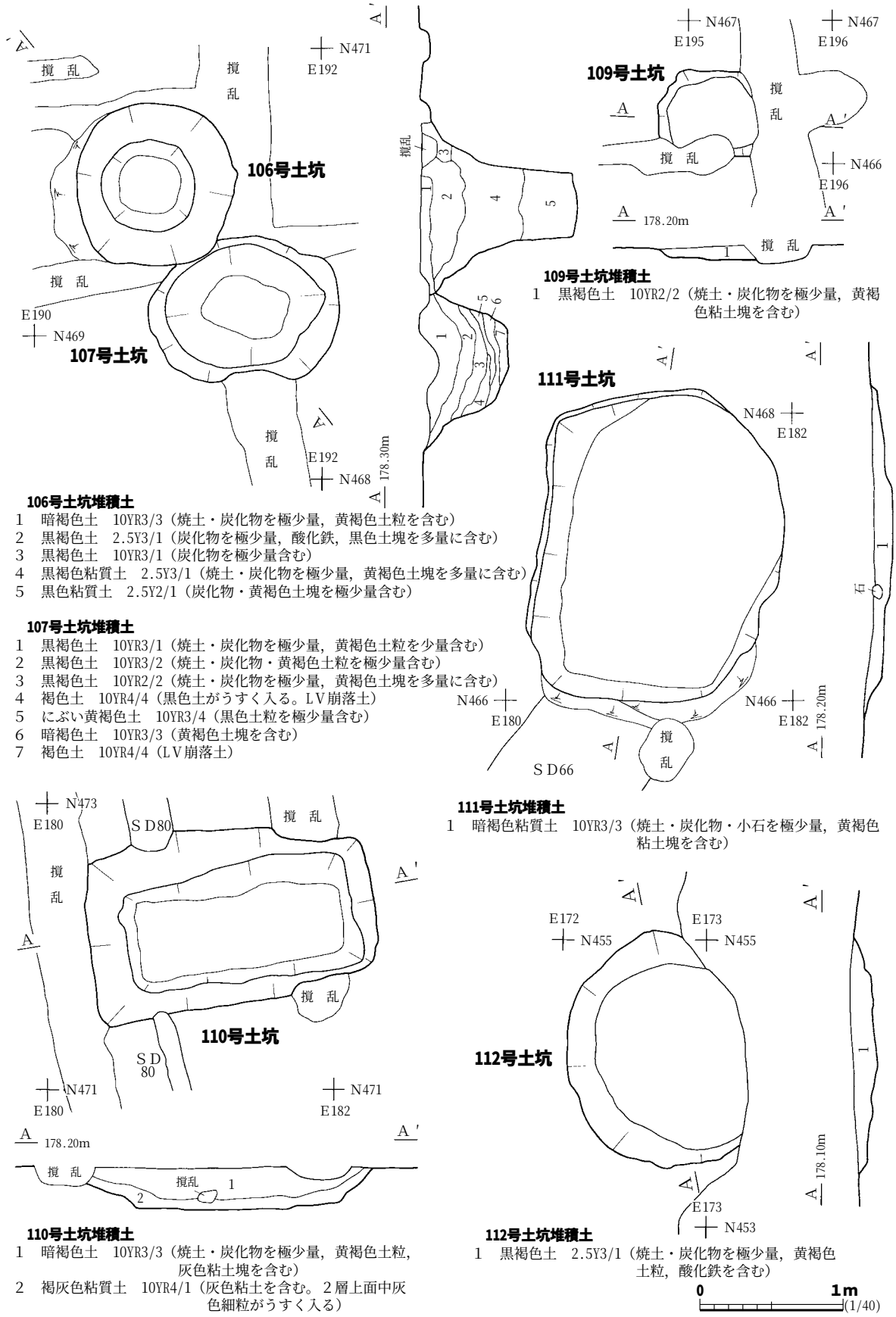
本遺構は，調査西部のＡ49グリッドで確認された。検出面はＬＶ上面である。他の遺構との重複関係は認められないが，宅地撤去時の撹乱で上部は厚く削り取られている。この点を勘案すると，本土坑は地面から円筒状に掘り込まれていたと考えられる。平面形はややゆがんだ円形を呈し，規模は南北84㎝，東西90㎝を測る。検出面からの深さは59㎝である。底面は平坦に整えられ，周壁は垂直気味に立ち上がって，上部でなだらかに変化する。遺構内堆積土は，６つに分層された。黒色土と色調の薄い土層の交互堆積であり，自然堆積したと判断される。

本土坑からは，遺物は出土していない。所属時期は，不明である。　（菅　原）

122号土坑　ＳＫ122（図９，写真15）

本遺構は調査区の南端部，Ｅ44グリッドに位置する土坑である。土坑の大半は調査区外へと続き，調査区内で北壁の一部を確認しただけである。本土坑と重複する遺構はないが，東側には123号土坑・80号溝跡，西側には124号土坑が近接している。遺構検出面はＬＶ上面である。

本土坑は全容が把握できないため，その詳細な平面形や規模などの特徴については不明である。平面形は北壁の状態から隅丸方形と推定される。北壁の全長は1.65mで，検出面からの深さは0.25mを測る。周壁は緩やかに立ち上がる。周壁から底面にかけての断面形は浅い皿状を呈する。遺構内堆積土は黒褐色土の単層で，自然堆積により埋没している。



106号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/3（焼土・炭化物を極少量，黄褐色土粒を含む）
2　黒褐色土　2.5Y3/1（炭化物を極少量，酸化鉄，黒色土塊を多量に含む）
3　黒褐色土　10YR3/1（炭化物を極少量含む）
4　黒褐色粘質土　2.5Y3/1（焼土・炭化物を極少量，黄褐色土塊を多量に含む）
5　黒色粘質土　2.5Y2/1（炭化物・黄褐色土塊を極少量含む）

107号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR3/1（焼土・炭化物を極少量，黄褐色土粒を少量含む）
2　黒褐色土　10YR3/2（焼土・炭化物・黄褐色土粒を極少量含む）
3　黒褐色土　10YR2/2（焼土・炭化物を極少量，黄褐色土塊を多量に含む）
4　褐色土　10YR4/4（黒色土がうすく入る。LV崩落土）
5　にぶい黄褐色土　10YR3/4（黒色土粒を極少量含む）
6　暗褐色土　10YR3/3（黄褐色土塊を含む）
7　褐色土　10YR4/4（LV崩落土）

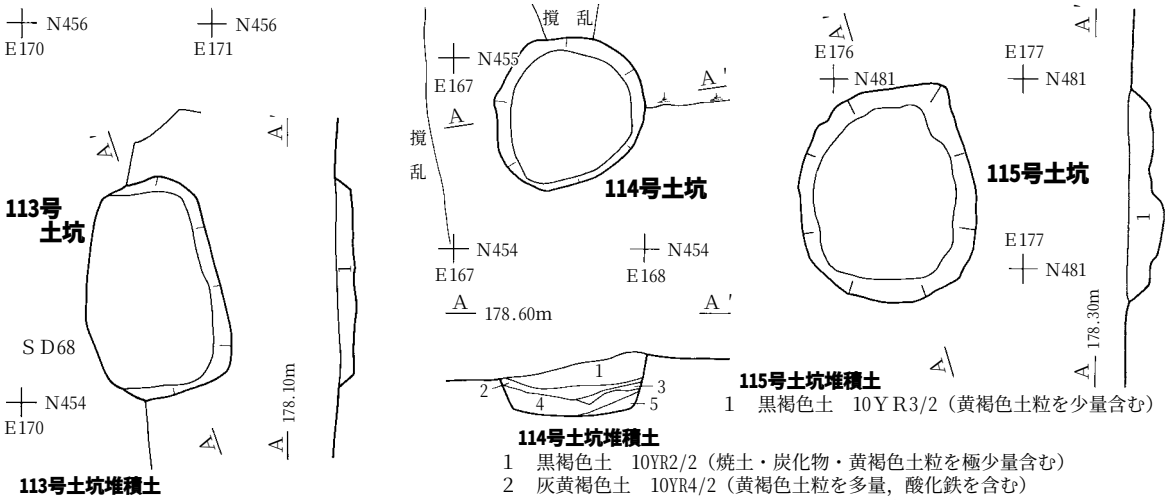
109号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR2/2（焼土・炭化物を極少量，黄褐色粘土塊を含む）

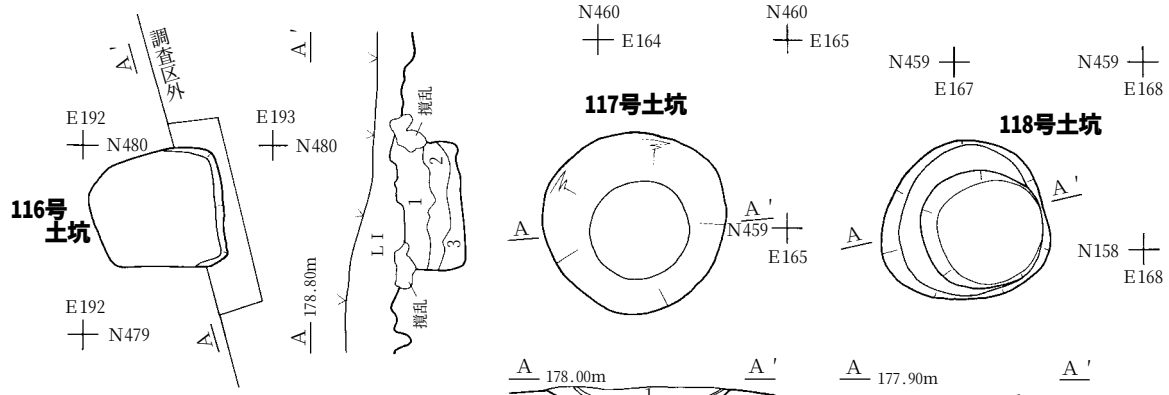
111号土坑堆積土
1　暗褐色粘質土　10YR3/3（焼土・炭化物・小石を極少量，黄褐色粘土塊を含む）

110号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/3（焼土・炭化物を極少量，黄褐色土粒，灰色粘土塊を含む）
2　褐灰色粘質土　10YR4/1（灰色粘土を含む。２層上面中灰色細粒がうすく入る）

112号土坑堆積土
1　黒褐色土　2.5Y3/1（焼土・炭化物を極少量，黄褐色土粒，酸化鉄を含む）

図７　106・107・109～112号土坑





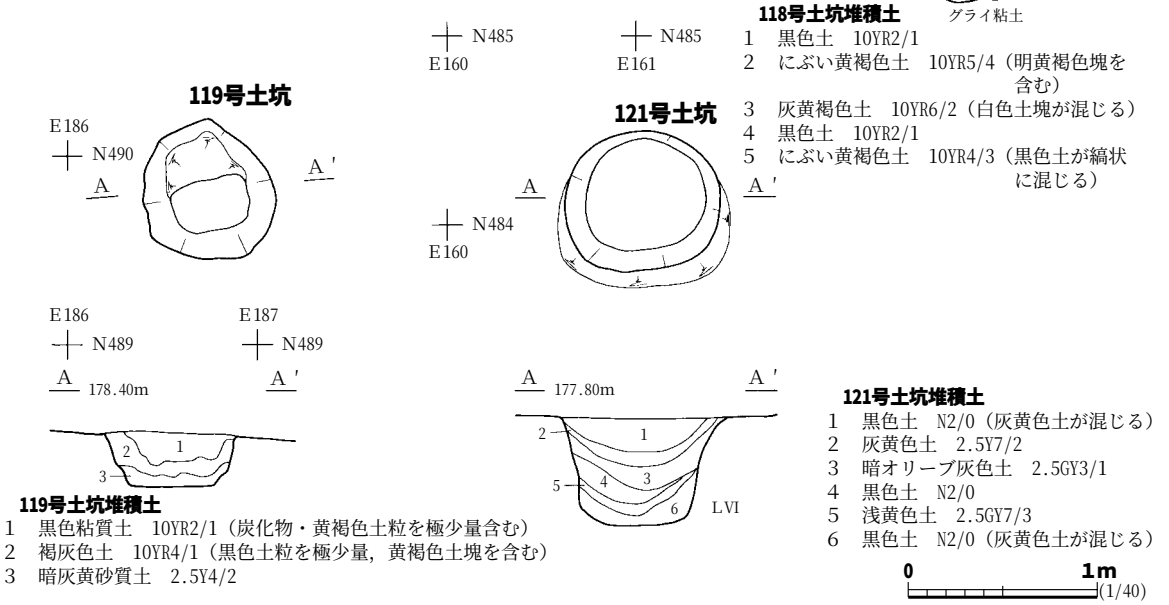


図８　113～119・121号土坑

本土坑は出土遺物もなく，その性格や年代については不明である。　（福　田）

123号土坑　ＳＫ123（図９・11，写真16・23）

本土坑は調査区の南端，Ｅ44・Ｆ44グリッドに位置する。土坑の大半が調査区外へと続き，北壁の一部を確認しただけに止まる。そのため遺構の形態などの詳細な特徴は不明である。本土坑は80号溝跡と重複し，本土坑のほうが古い。また周辺には122・124号土坑が分布している。調査区壁の断面観察からＬＶを掘り込んで造られ，その底面は一部がＬVIに達している。

本土坑の平面形は，部分的に確認した北東隅の形状から，全体的には方形を基調とするのであろう。遺構内堆積土は黒褐色を基調とする２層に分けた。いずれも堆積状況とその性状から自然堆積と判断した。遺存する周壁は垂直気味に立ち上がる。底面は平坦でなく，西側が約５㎝の段差を持って低くなる。

本土坑からは土師器片２点，須恵器片１点が出土している。そのうち形状を把握できるものを図11に示した。図11－４はロクロ成形の土師器杯で，口縁部の小破片である。全体的に摩滅するが，内面は黒色処理が施される。５は須恵器の底部破片である。低い高台が貼り付けられ，器種は瓶類であろう。

本土坑の全容を把握できないため，詳細な性格や年代は不明である。　（福　田）

124号土坑　ＳＫ124（図９・11，写真16・23）

本遺構は，いわゆる方形竪穴状の掘り込みを持つ大型土坑で，調査区の南端部，Ｄ45・Ｅ45グリッドに位置する。周囲は近年の宅地造成や水路開削による地形改変が深く及ぶ区域で，本土坑の東側は標高178.1m程のＬＶ上面が検出面になる。西側は東側に比べて0.2m程の段差を持って削平され，ＬVIが検出面となる。本土坑は66号溝跡と重複し，本土坑の方が古い。また周辺は土坑や溝跡が密集して検出された区域で，本土坑と類似する122・123号土坑が近接している。

平面形は長方形を基調とするが，南西隅はやや丸みをおびる。規模は長辺が2.85m，短辺が2.2mを測る。検出面からの深さは最大でも0.18mと浅い。周壁は遺構自体が浅く遺存状態が悪いが，比較的急峻に立ち上がる。底面は微細な凹凸が認められるものの，標高178.8mでほぼ平坦になる。遺構内堆積土は３層に分けた。２層は底面を広く覆う黒褐色土で，褐灰色粘土塊を含む。堆積状況から自然流入土と考えている。３層は北壁から西壁際に堆積する暗褐色土で，ＬＶを起源とする周壁の崩落土を含んでいる。

本土坑からは土師器片が３点出土した。そのうち形状がわかる２点を図11に示した。６は土師器坏の底部破片である。摩滅して底部切り離し痕跡は不明であるが，内面は黒色処理が施される。７は土師器甕の小破片で，外面にタタキ具痕が観察できる。

本土坑は方形竪穴状の遺構で，平面形などの形態，規模や堆積土は125号土坑と類似する特徴がある。出土遺物に乏しく詳細な年代は不明である。　（福　田）

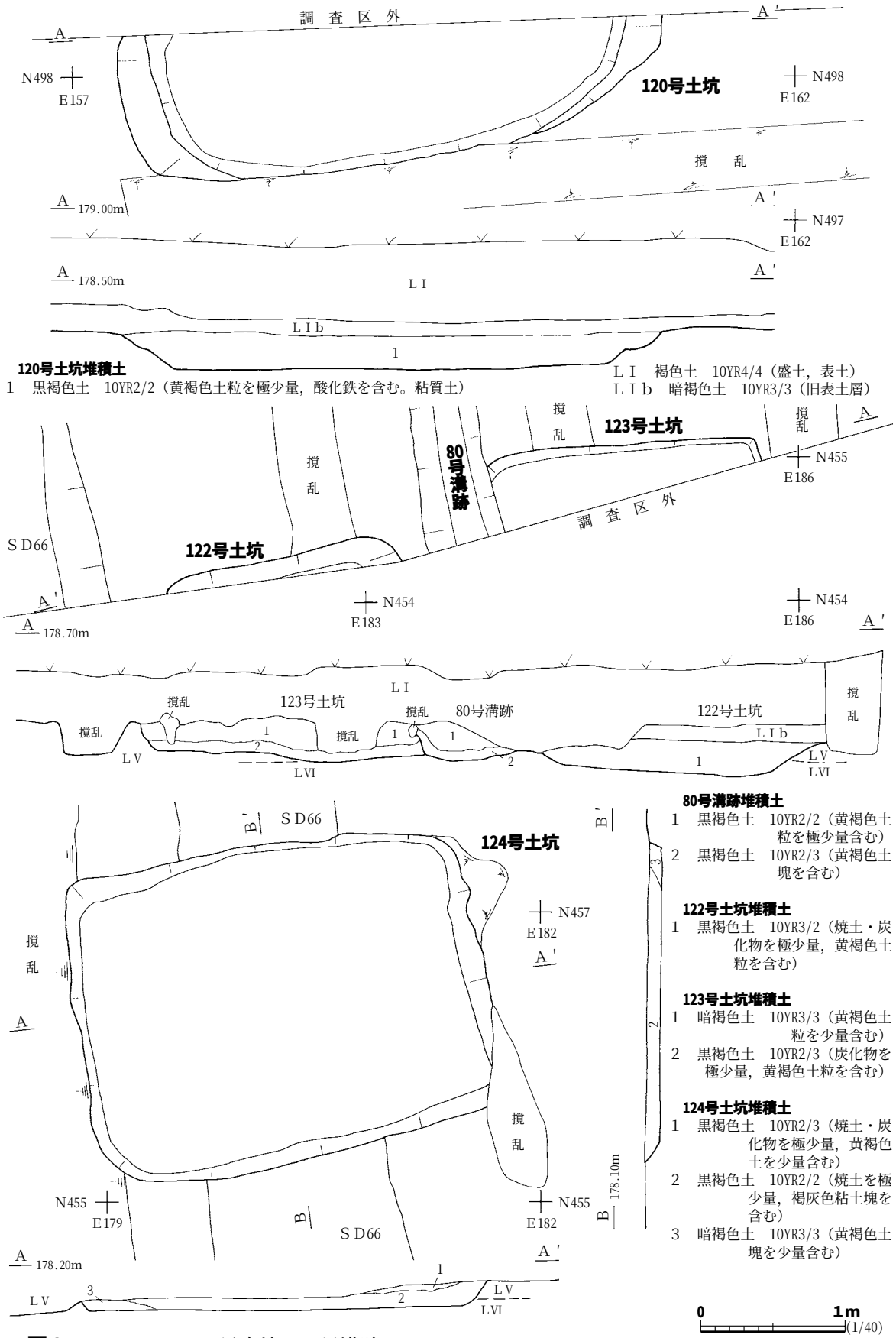


図９　120・122～124号土坑・80号溝跡

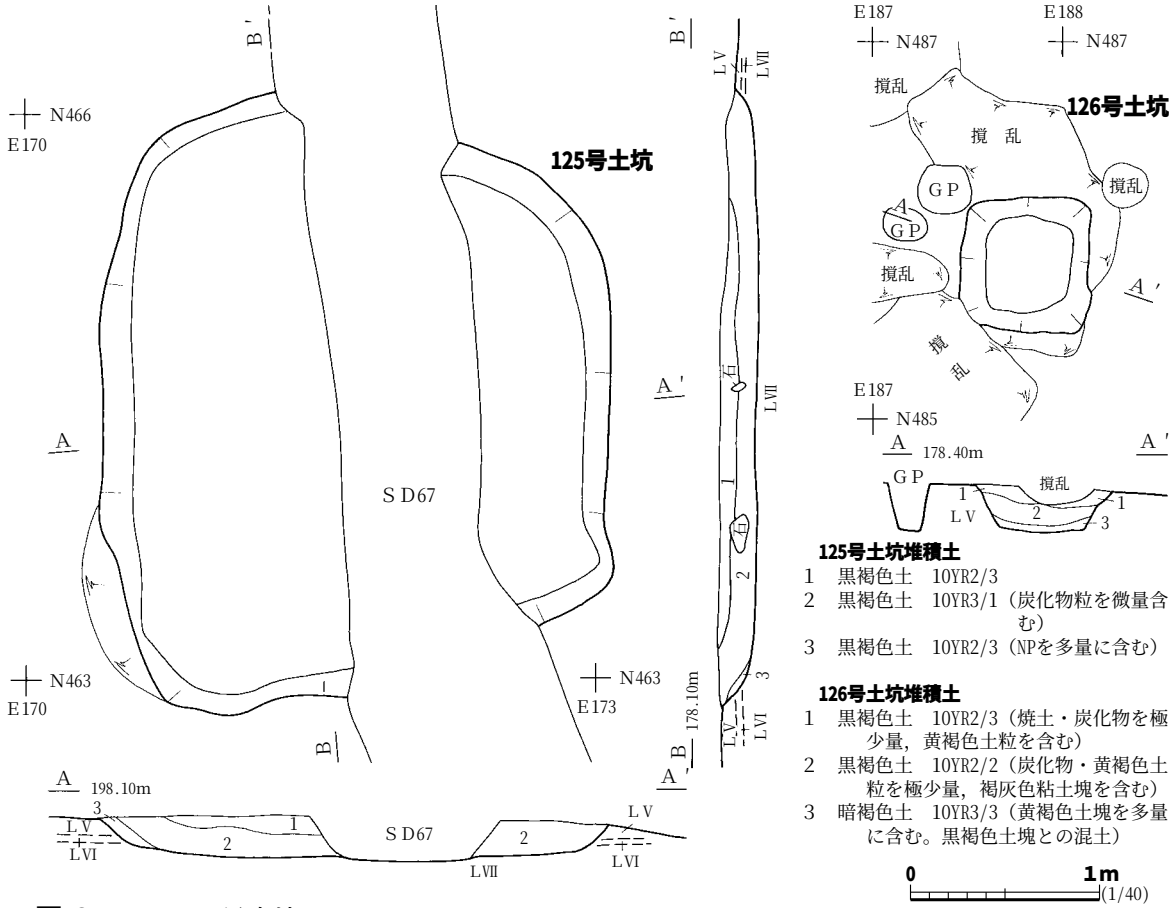


図10　125・126号土坑

125号土坑　ＳＫ125（図10・11，写真16・23）

本遺構は，方形基調を呈する大型の土坑である。一見すると，竪穴住居跡のような外観・規模を有しており，１・２次調査の報告では，竪穴状遺構と分類されたものに該当する（(財)福島県文化振興事業団2003・2004）。

本遺構は，調査区南部のＣ46グリッドで確認された。検出面はＬＶ上面である。重複関係は，中央に67号溝跡が縦断し，底面まで破壊を受けている。また，南東側に，同規模の122～124号土坑が位置しており，近接時期に営まれていた可能性も考えられる。平面形はゆがんだ方形を呈し，規模は，向かい合う辺の中央を結んだ線で計測すると，南北3.24m，東西2.68mである。底面は，床のように平坦に整えられているが，踏み締まりは観察できなかった。周壁は45～60°の角度で外傾し，やや緩やかに立ち上がる。遺構内堆積土は３つに分層された。どれも色調の近似した黒褐色土であり，周囲から自然流入した様相を示している。これも，竪穴状遺構と合致する特徴である。

本遺構からは，土師器片１点，須恵器片４点，珠洲系中世陶器１点，鉄滓１点が出土している。このうち，須恵器片３点と珠洲系中世陶器片１点を図示した。図11－８・９・11は須恵器である。８は，中型の袋物器種とみられ，外面は，右下がりの平行タタキメがロクロナデにより消されている。９・11は，甕に分類される。器面痕跡は，９の外面に右下がりの平行タタキメ，内面に当て具痕，

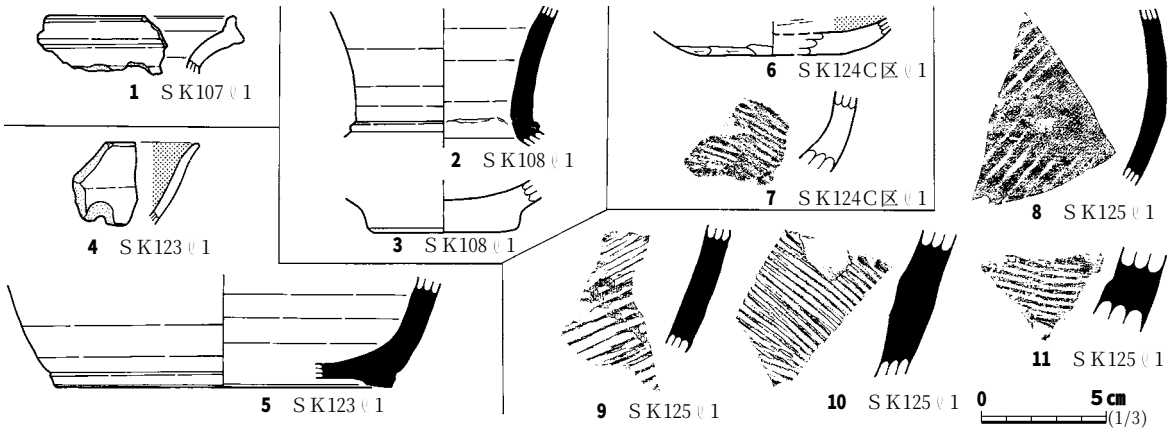


図11　土坑出土遺物

11の外面にやや左下がりの平行タタキメ，内面にナデ調整痕が観察される。10は，珠洲系中世陶器である。外面に左下がりの密な平行タタキメ，内面にナデ調整痕が観察される。

本遺構は，１・２次調査報告で竪穴状遺構とされたものである。わずか１点であるが，珠洲系中世陶器片も出土しており，所属時期は中世と考えられる。（菅　原）

126号土坑　ＳＫ126（図10，写真16）

本土坑は調査区の北東側，Ｆ51グリッドに位置する。重複する遺構はないが，周辺には柱穴群が点在し，南側には13号掘立柱建物跡，北側には73号溝跡が分布している。遺構検出面はＬⅤ上面である。

本土坑の平面形は方形を呈し，その規模は一辺が0.7mを測る。検出面からの深さは0.24mである。周壁は急峻に立ち上がる。底面はほぼ平坦で，わずかに中央部に向かって低くなる。遺構内堆積土は３層に分けた。いずれも黄褐色土塊を含む黒褐色を基調とする堆積土で，堆積状況から人為的に埋め戻されたと判断した。

本土坑からは遺物が出土していないため，性格や所属時期は不明である。（福　田）

第５節　溝　　跡

検出された溝跡は，16条である。それらは堆積土，出土遺物の特徴から，以下の２タイプに分類される。重複関係は，ⅠをⅡが切っていた。

Ⅰ…黒色系色調の堆積土，須恵器・土師器・珠洲系中世陶器・かわらけ出土

Ⅱ…黄褐色系色調の堆積土，会津本郷焼出土

このうちⅠは，過去の調査で，中世以前の溝跡に共通することが確認されている。一方，Ⅱは近世以降の溝跡に共通し，本調査区に関しては，移転した民家の旧宅に伴っていた可能性が高い。旧地主の聞き取りから，旧宅は少なくとも明治初期までは遡るという情報が得られている。該当遺構の一部は，池の跡地に接続していた（調査区北西部の大撹乱）。

66号溝跡　ＳＤ66（図12，写真17・18）

本遺構は南北方向に延びる溝跡で，調査区南端部Ｅ44～47グリッドに位置する。周囲は標高178.0m程の平坦面となるが，近年の宅地造成や耕作による削平が著しく，遺構の遺存状態も悪い。北半部はＬⅤ上面で検出できたが，南端部は周壁の明瞭な立ち上がりはわずかで，ＬⅥ上面で底面の痕跡を確認した。本溝跡は111・124号土坑と重複し，そのいずれよりも新しい。

調査区内で確認できた規模は，全長が12.2m，幅が1.2～1.4mを測り，検出面からの深さは，最大でも0.15mと浅い。底面はほぼ平坦になるが，南側に向かってわずかに低くなる。周壁はわずかに遺存する程度で，底面との境は不明瞭である。堆積土は２層に分け，いずれも自然流入土と判断した。

本溝跡からは土師器片２点，須恵器片１点が出土した。いずれも堆積土中から出土した小破片のため，図示していない。

本溝跡は南端部が調査区外へ延びるため，全容は不明である。詳細な年代は不明であるが，重複関係から近世以降に属すると考えている。（福　田）

67号溝跡　ＳＤ67（図13，写真17・18）

本遺構は，調査区南西部のＣ44～49グリッドで検出された南北方向の溝跡である。主軸方位は，Ｎ10°Ｗを指す。重複関係は，北端が68号溝跡に破壊され，そこから先は確認できなかった。また，本遺構は125号土坑の中央を南北に縦断しており，これより新しいことが判明している。検出された長さは22.0mであり，南側はさらに調査区外へ展開している。溝幅は，95～121㎝で，検出面からの深さは23～33㎝を測る。

遺構内堆積土は灰黄褐色系の色調を呈し，４層に分層された。遺物は，近世末の会津本郷焼が出土し，本溝跡の上限もこの頃に比定できる。（菅　原）

68号溝跡　ＳＤ68（図13・15，写真17・18・23）

本遺構は，調査区南西部のＡ49，Ｂ44～49，Ｃ44グリッドで検出された溝跡である。主軸方位は，ほぼ北と一致し，北端で西へＬ字状に折れ曲がって，池跡地の撹乱へ接続する。検出された長さは，31.2mであり，南側は調査区外へさらに伸びている。溝幅は，101～125㎝を測り，検出面からの深さは，22～45㎝であった。遺構内堆積土は黄褐色系の色調を呈し，６つに分層された。

遺物は，会津本郷焼３点と煙管のほか，土師器片６点，須恵器片２点が出土した。図15－１は，土師器坏の底部片である。外面に判読不明の墨書が観察される。２は，須恵器大甕の口縁部片である。頸部の境から欠損している。外面は平行沈線で区画され，波状文が巡る。

本遺構が営まれたのは，出土遺物の内容から，近世末以降と考えられる。（菅　原）

69号溝跡　ＳＤ69（図13・15，写真17・23）

本遺構は，調査区南西部のＢ45～48グリッドで検出された溝跡である。主軸方位はＮ７°Ｅを指す。他の遺構との重複関係は認められない。北端は，池跡地の撹乱に接続しており，南端は，寛永通寶の出土した撹乱と接する。調査区内で検出された長さは14.2mで，調査区南壁の断面観察から，さらに遺構は外側へ伸びることが判明している。溝幅は60～153㎝あり，北端は先細りとなっている。検出面からの深さは，28～43㎝を測る。遺構内堆積土は黄褐色系の色調を呈し，３層に分層された。

遺物は，近世末の会津本郷焼12点のほか，縄文土器片１点，須恵器片１点が出土した。図15－３は，縄文土器片である。時期は，前期中頃～後半に比定される。４は，須恵器甕の胴部片である。外面は，平行タタキメがナデ調整でほとんど消されている。

本遺構が営まれたのは，近世末以降と推定される。（菅　原）

70号溝跡　ＳＤ70（図13・15，写真17・23）

本遺構は，調査区南壁に沿って検出された溝跡である。主軸方位はＥ10°Ｎで，東端は北側へ，西端は南側へＬ字状に折れ曲がる。プランは，検出作業を繰り返すうちに部分的に途切れてしまったが，発見当初は連続していた。最終的に検出された長さは，16.2mを測り，南側はさらに調査区外へ伸びており，北側も検出状態よりもう少し長く伸びていたと推定される。溝幅は43～58㎝で，検出面からの深さは最大36㎝である。ただし，底面は凹凸が著しく，一様な状態ではない。

遺構内堆積土は，２層に分層された。どちらも色調の近似した黒色を呈する。この特徴は，走行方向と併せ，付近の67～69・71号溝跡とは明らかに違っていた。また，遺物も，近世末の陶磁器類が一切出土しなかった。図15－５は，ロクロ調整の土師器甕である。口縁部形態から，９世紀中心の年代観が与えられると思われる。

本遺構の所属時期は，出土遺物と堆積土の色調などから，中世以前と推定される。（菅　原）

71号溝跡　ＳＤ71（図13，写真17）

本遺構は，調査区南西部のＡ44～49，Ｂ50・51グリッドで検出された。確認状態は，部分的に途切れていたが，本来，一続きであったと考えられる。形状は，やや弓なりを呈し，主軸方位は南半がＮ５°Ｅ，北半がＮ10°Ｅを指す。重複関係は，72号溝跡に切られていた。

検出された長さは，40.2mを測る。溝幅は，40～93㎝で，北半は先細りとなる。検出面からの深さは，18～32㎝である。遺構内堆積土は，２層に分けられた。どちらも自然流入土と考えられる。遺物は，近世末の会津本郷焼片３点のほか，土師器片13点，須恵器片５点が出土した。

本溝跡が営まれたのは，近世末以降と推定される。（菅　原）

72号溝跡　ＳＤ72（図14・15，写真19・20・23）

本遺構は調査区の北端部，Ｃ51～53グリッドに位置する溝跡で，３次調査で確認された56号溝跡に相当する。さらに塩川町教育委員会が実施した発掘調査（第３次）でも，その延伸部が確認されている。周辺は宅地造成や水路開削により大きく削平され，南端部分は北半部に比べ約0.2mの段差を持って低くなる。遺構検出面は北半部がＬⅤ上面，南半部がＬⅥ上面である。71号溝跡と重複し，本溝跡のほうが古い。

本溝跡は塩川町調査区では東西方向に延び，３次調査区のＤ59グリッド付近でＬ字に屈曲して南流する。５次調査区内で確認された規模は，全長が13.4m，幅が0.7～1.2mを測り，深さは0.25mである。３次調査の56号溝跡，塩川町第３次調査分を含めると，総長が62m以上となる。遺構内堆積土は黒褐色土を基調とする２層に分けた。堆積土の状態や含有物から，いずれも自然流入土と判断した。周壁は急峻に立ち上がり，底面にかけての断面形は逆台形になる。底面は南に向かって低くなるが，北端部では高さ５㎝ほどの段差をもって低くなる。南端部の底面は土橋状に一段高く掘り残され，溝跡を南北に仕切っている。この仕切りの機能については，溝跡内の貯水や流水量の調節を目的とする可能性が高い。

本溝跡からは須恵器甕の胴部破片が３点出土し，図15に示した。６は外面には平行タタキ痕，内面に無文押圧具によるアテ具痕がみられる。７は外面の下半部にタタキ痕の後にケズリが施される。８は大甕の胴部片であろう。外面のタタキ痕は薄く，内面は指ナデ痕が観察できる。

本遺構は全長62m以上のＬ字型に延びる溝跡で，底面に設けられた貯水施設から用排水路と考えられる。詳細な年代は不明であるが，３次調査の成果とあわせて中世以降と考えておく。（福　田）

73号溝跡　ＳＤ73（図12，写真19・20）

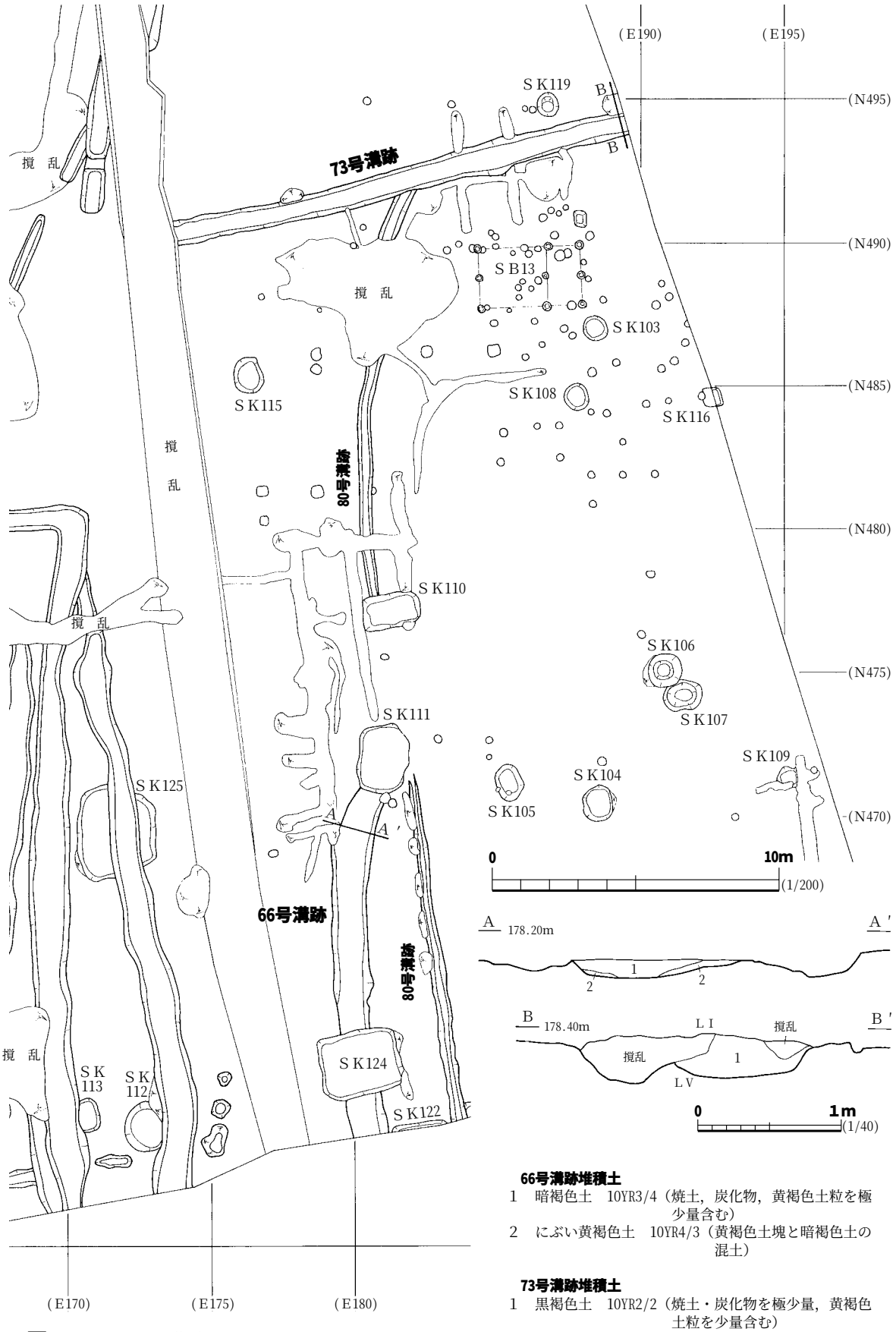
本遺構は調査区北東部Ｄ51・Ｆ51グリッドに位置する。80号溝跡と重複し，本溝跡が古い。周辺には13号掘立柱建物跡，119・126号土坑が近接する。遺構検出面はＬⅤ上面である。

本溝跡は東端が調査区外となり，西端は削平により途切れるため，その全容は把握できない。溝跡の方向は東に対して14°北に傾く。調査区内で確認できた規模は，全長が16.3m，幅が1.0～1.2m，深さは最大でも0.25mである。底面はわずかに西に向かって低く傾斜する。遺構内堆積土は黒褐色を基調とする自然流入土である。

本溝跡は遺物が出土していないため，性格や年代は不明である。（福　田）

74号溝跡　ＳＤ74（図14・15，写真21・23）

本遺構はＡ52・Ｃ52グリッドに位置し，東西方向に延びる溝跡である。周囲は近年の宅地造成や水路開削による撹乱が著しい区域に分布するため，その多くは削平されて遺存していない。75・76号溝跡と重複し，それらよりも新しい。遺構検出面はＬⅤ上面である。



66号溝跡堆積土

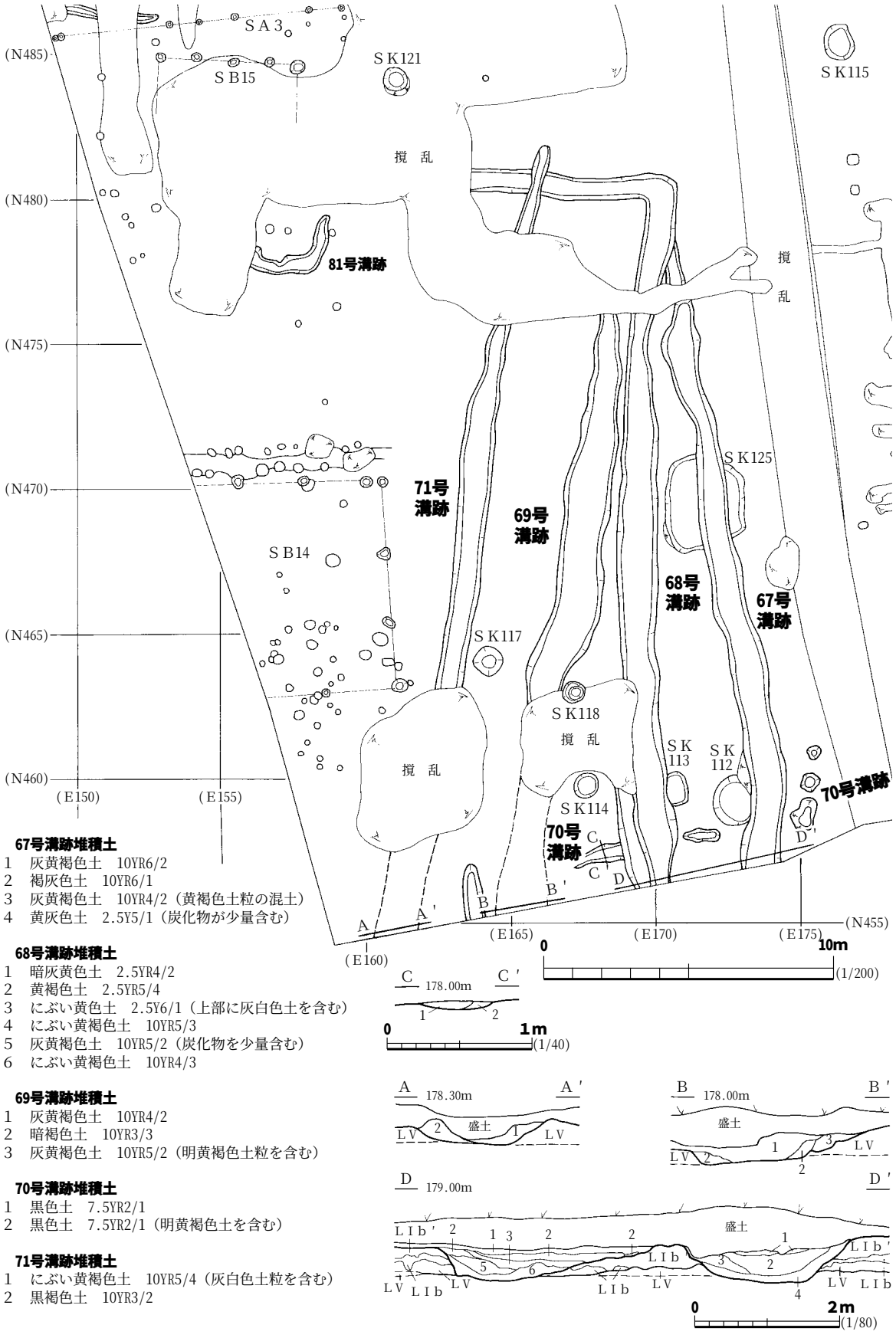
1　暗褐色土　10YR3/4（焼土，炭化物，黄褐色土粒を極少量含む）

2　にぶい黄褐色土　10YR4/3（黄褐色土塊と暗褐色土の混土）

73号溝跡堆積土

1　黒褐色土　10YR2/2（焼土・炭化物を極少量，黄褐色土粒を少量含む）

図12　66・73号溝跡



67号溝跡堆積土
1　灰黄褐色土　10YR6/2
2　褐灰色土　10YR6/1
3　灰黄褐色土　10YR4/2（黄褐色土粒の混土）
4　黄灰色土　2.5Y5/1（炭化物が少量含む）

68号溝跡堆積土
1　暗灰黄色土　2.5YR4/2
2　黄褐色土　2.5YR5/4
3　にぶい黄色土　2.5Y6/1（上部に灰白色土を含む）
4　にぶい黄褐色土　10YR5/3
5　灰黄褐色土　10YR5/2（炭化物を少量含む）
6　にぶい黄褐色土　10YR4/3

69号溝跡堆積土
1　灰黄褐色土　10YR4/2
2　暗褐色土　10YR3/3
3　灰黄褐色土　10YR5/2（明黄褐色土粒を含む）

70号溝跡堆積土
1　黒色土　7.5YR2/1
2　黒色土　7.5YR2/1（明黄褐色土を含む）

71号溝跡堆積土
1　にぶい黄褐色土　10YR5/4（灰白色土粒を含む）
2　黒褐色土　10YR3/2

図13　67～71号溝跡

規模は，全長が8.2m，最大幅が2.0m，深さは0.15mを測る。周壁は比較的緩やかな傾斜で立ち上がる。底面は中央部がわずかにくぼみ，全体的に西に向かって低くなる。遺構内堆積土は２層に分けた。いずれも黒褐色土を基調とする自然堆積土である。２層は周壁の崩落土を含んでいる。

本溝跡からは縄文土器１点，須恵器片２点，珠洲系陶器１点，かわらけ片１点，陶器片２点が出土した。そのうち形状が判別できるものを図15に示した。９は縄文土器の底部破片で，器種は小型深鉢であろう。内外面とも摩滅し，文様や調整痕は不鮮明である。胎土に小石が含まれる。10はロクロ成形によるかわらけの底部破片である。底部の切り離しは回転糸切りである。11は珠洲系陶器で，大甕の胴部破片である。12は須恵器甕の胴部破片で，外面には平行タタキ具痕が観察できる。

本溝跡の年代は重複関係などから近世以降に属すると考えている。（福　田）

75号溝跡　ＳＤ75（図14・15，写真21～23）

本遺構は調査区北端部を南西方向に延びる溝跡である。本溝跡は74・76号溝跡と重複し，74号溝跡よりは古く，76号溝跡より新しい。遺構検出面はＬⅤ上面である。

本溝跡は南北端とも撹乱により失われ，その全容は不明である。調査区内で確認された規模は，全長が11.5m，幅が0.7～1.0mを測り，深さは最大で0.3mである。周壁は急峻に立ち上がり，底面にかけての断面形は逆台形を呈する。底面はほぼ平坦で，南に向かってわずかに低くなる。遺構内堆積土は３層に分けた。１・２層は黒褐色土を基調とする自然流入土である。３層は周壁の崩落土と考えられる黄褐色土塊を多量に含んでいる。

本溝跡からは土師器片５点，須恵器片２点が出土した。そのうち形状が分かるものを図15に示した。13・14は須恵器甕の体部破片である。いずれも外面に平行タタキ具痕が見られ，内面にはナデ痕が観察される。

本溝跡は東側に近接する72号溝跡と平行して延びることから，これらと同様に用排水路としての機能が考えられる。年代は重複関係や出土遺物などから中世以降に属する可能性が高い。（福　田）

76号溝跡　ＳＤ76（図14，写真22）

本溝跡は調査区北端を南北方向に延びる溝跡で，３次調査で確認した57号溝跡に相当する。周囲は標高178.1mの平坦地であるが，撹乱による削平が著しい。そのため溝跡は本来的にはかなり深くなると考えられる。74・75号溝跡と重複し，本溝跡が最も古い。遺構検出面はＬⅤ上面である。

本溝跡は３次調査区の57号溝跡から続いて，東西に小さく蛇行しながら南流する溝跡である。その南端部は，75号溝跡と重複して遺存していない。５次調査区内で確認した規模は，全長が7.2m，幅が0.7～1.1mを測り，３次調査の57号溝跡を含めた総長は32.2mとなる。周壁の立ち上がりは，全体的には急峻になるが，南端部付近は上端部が崩落して緩やかに開き気味に立ち上がる。底面はほぼ平坦で，南に向かってわずかに低くなる。遺構内堆積土は２層に分けた。いずれも自然流入土であり，２層は周壁の崩落土である黄褐色土塊を多量に含んでいる。

本溝跡からは土師器片が１点出土したが，摩滅した小破片のため図示していない。

本溝跡は用排水路としての機能が考えられる。出土遺物が貧弱で，詳細な年代は不明であるが，重複関係や堆積土の特徴から中世以降に属する可能性が高い。　（福　田）

77号溝跡　ＳＤ77（図14，写真22）

本遺構は，調査区西部のAB50グリッドで検出された溝跡である。周囲には，本遺構を挟み込むような状態で，79号溝跡・３号柱列跡が併走し，それらとの密接な関係が想定される。また，東延長方向には，撹乱を挟んで73号溝跡が位置するが，底面の形状が違い，別遺構と判断した。

本遺構の主軸方位は，Ｅ７°Ｗを指す。規模は，長さ4.8m以上，溝幅45～79㎝を測り，検出面からの最大の深さは，38㎝である。底面は凹凸が著しく，壁の立ち上がりは，場所によって異なっている。遺構内堆積土は，黒色系の色調を呈し，78・79号溝跡と類似する。

本溝跡から，遺物は出土しなかった。しかし，堆積土の色調，周辺遺構との関係から，営まれた時期は中世と推定される。　（菅　原）

78号溝跡　ＳＤ78（図14，写真22）

本遺構は，調査区西部のAB50グリッドで検出された溝跡である。東西方向に併走する３条の溝跡（77～79号溝跡）のうち，南側に位置するものにあたる。主軸方位はＥ６°Ｓを指し，他の２条と異なっている。しかし，周囲を見渡すと，本溝跡が途切れた位置に対応して，15号掘立柱建物跡の北側柱列が始まっており，これと無関係ではないと思われる。

規模は，長さ3.2m以上，溝幅20～24㎝，検出面からの深さ８～12㎝を測る。遺構内堆積土は単層で，黒色系の色調を呈している。遺物は出土しなかった。

本遺構は，堆積土の色調，周辺遺構との関係から，中世の所産と考えられる。　（菅　原）

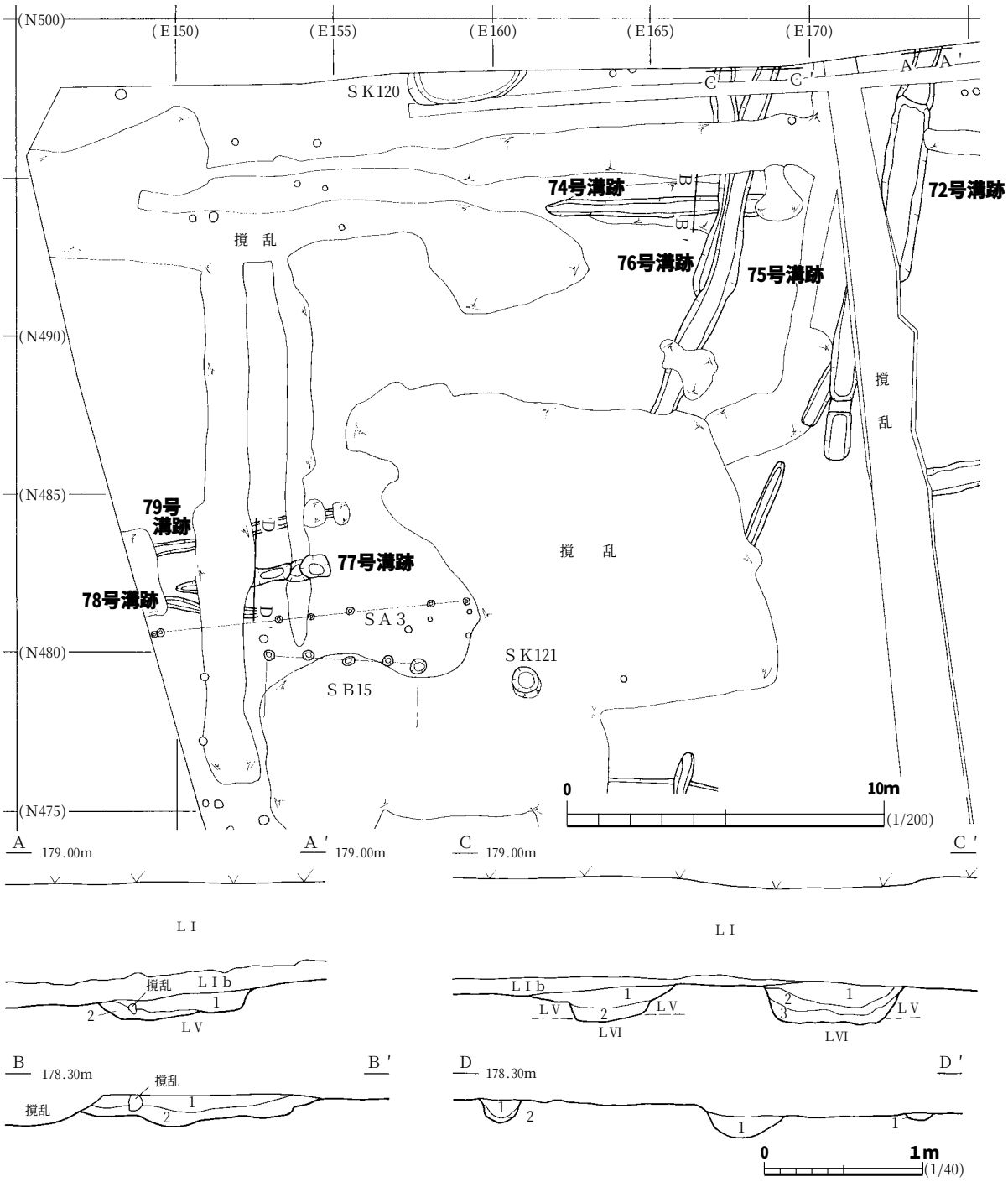
79号溝跡　ＳＤ79（図14，写真22）

本遺構は，調査区西部のAC50・AB50グリッドで検出された溝跡である。東西方向に走る３条の溝跡（77～79号溝跡）のうち，北側に位置するものにあたる。検出された長さは6.75mで，両端は撹乱で壊されていた。主軸方位はＥ７°Ｗを指し，近接の77号溝跡，３号柱列跡と概ね一致する。溝幅26～31㎝，検出面からの深さは33～37㎝を測り，断面形は逆Ｕ字形を呈する。遺構内堆積土は黒色系の色調を呈し，遺物は出土しなかった。

本遺構は，堆積土の色調，周辺遺構との関係から，中世に営まれたと推定される。　（菅　原）

80号溝跡　ＳＤ80（図９・12，写真17）

本遺構は南北方向に延びる溝跡で，Ｅ44～51グリッドに位置する。110・123号土坑，73号溝跡と重複し，そのいずれよりも新しい。遺構検出面はＬⅤ上面である。



72号溝跡堆積土
1　黒褐色土　10YR3/2（黄褐色土塊を少量含む）
2　黒褐色土　10YR2/2（黄褐色土塊を含む）

74号溝跡堆積土
1　黒褐色土　10YR2/3（炭化物・黄褐色土粒を極少量含む）
2　暗褐色土　10YR3/3（黄褐色土塊を含む）

75号溝跡堆積土
1　黒褐色土　10YR2/2（暗褐色土塊，黄褐色土塊を含む）
2　黒色土　10YR2/1（黄褐色土粒を極少量含む）
3　にぶい黄褐色土　10YR4/3（黄褐色土塊を多量に含む）

76号溝跡堆積土
1　黒褐色土　10YR2/2（黄褐色土粒を極少量含む）
2　暗褐色土　10YR3/1（黄褐色土塊を多量に含む）

77号溝跡堆積土
1　黒褐色土　10YR3/2

78号溝跡堆積土
1　黒褐色土　10YR3/2

79号溝跡堆積土
1　黒褐色土　10YR3/2
2　暗褐色土　10YR3/3（明黄褐色土粒を含む）

図14　72・74～79号溝跡

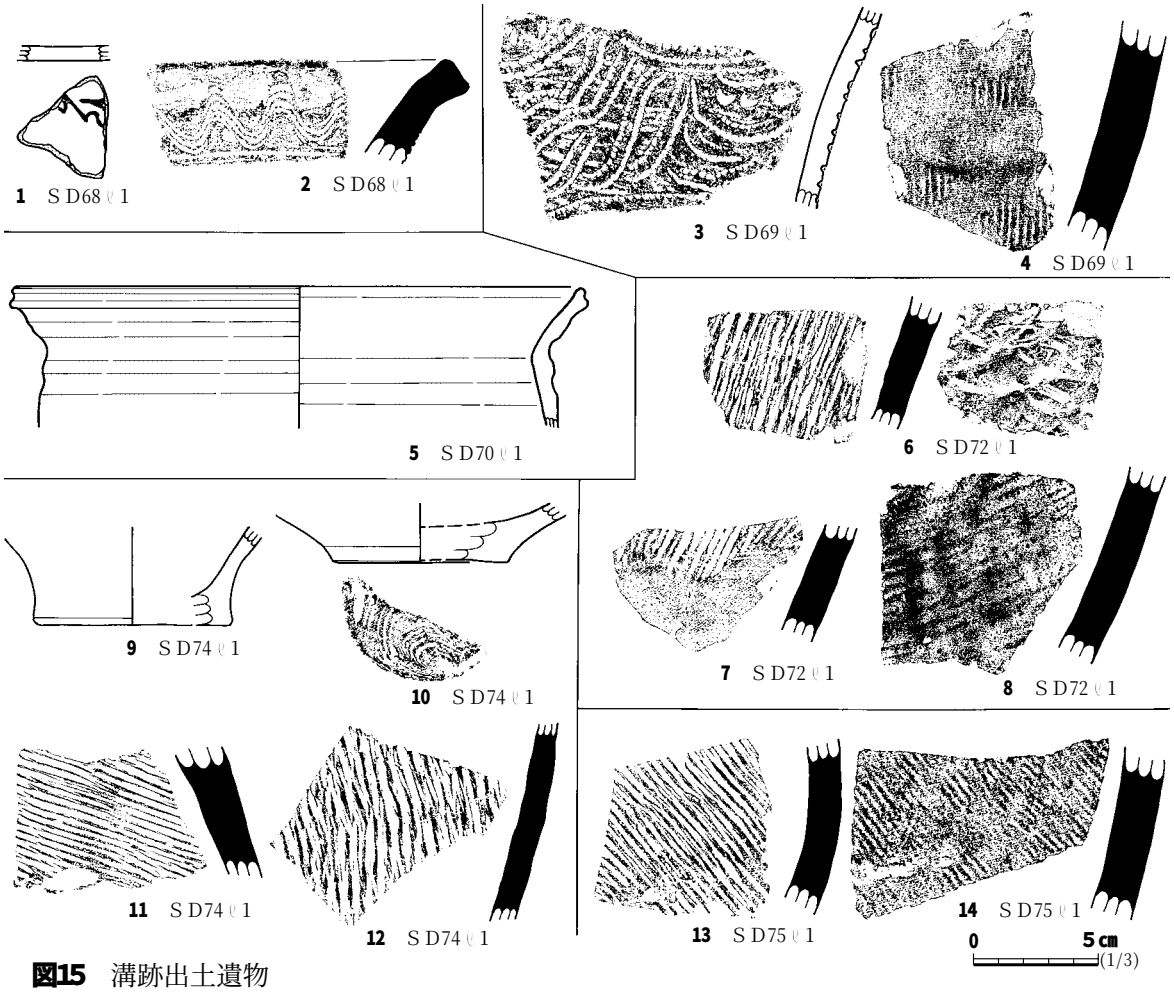


図15　溝跡出土遺物

本溝跡の北端部は73号溝跡と重複する部分で途切れ，南端部は調査区外となるため，その全容は不明である。調査区内で確認できた規模は，全長が32.7m，幅が0.4～0.6mを測り，深さは最大で0.2mと浅い。周壁は急峻な立ち上がりで，底面にかけての断面形は逆台形を呈する。底面は細かな凹凸は見られるものの平坦で，南に向かってわずかに低くなる。遺構内堆積土は黒褐色土を基調とする自然流入土である。

本溝跡からは遺物が出土していないため，性格や年代は不明である。　（福　田）

81号溝跡　ＳＤ81（図13，写真17）

本遺構は，調査区西部のAA48グリッドで検出された短い溝跡である。今回の調査区では他に類例の無い，Ｕ字状を呈し，西端は撹乱で壊されていた。規模は，長さ2.1m以上，溝幅12～28㎝を測る。遺構底面の深さは，ごく浅く，検出作業を繰り返すうちに，堆積土は消失してしまった。このため，断面図は作成していない。遺構内堆積土は単層であり，にぶい黄褐色を呈している。

本溝跡からは，遺物は出土しなかった。遺構の所属時期は不明である。　（菅　原）

第６節　その他の遺構と遺物

今回の調査では，前節までの遺構の他に，掘立柱建物跡や柱列跡と認定できなかったピット群が検出されている。ここでは，それらと遺構外出土遺物について報告する。

１．ピット群（図２）

ピットは，径約20～40㎝の円形基調をなす小穴を一括した。調査方法は，グリッド単位で検出写真を撮影した後，半裁し，深さ・柱痕跡の有無を確認した。その結果，遺構と認定したものは，１／40縮尺の遺構配置図に記録している。ここでは，全体の様子を捉えるため，さらにそれを１枚にまとめた図２で説明していきたい。

ピット群の分布は，大きくみて，４つのまとまりが抽出される。まず１つめは，調査区北壁近辺の１群である。それらは，３次調査区から続く遺構分布の南限であり，これより南側には幅約10mの遺構空白帯が認められる。なお，３次調査区との間は，農道部分が未調査であり，両調査区のピットの組み合わせは検討困難である。２つめは，13号掘立柱建物跡の周囲に群集する１群である。同建物跡の３倍以上の広さに，50基以上のピットが検出され，中には柱痕跡のあるものを多数含んでいた。したがって，調査では拾いきれなかった建物跡が，他に存在した可能性もある。３つめは，14号掘立柱建物跡の南辺周辺に広がる１群である。同建物跡は，規模の大きさからいって，側柱構造でなく，複雑な柱配置となることが想定された。そのため，繰り返し検討作業を行ったが，撹乱が至る所にあって，柱穴としての確実な組み合わせは捉えられなかった。４つめは，15号掘立柱建物跡の南側に広がる１群である。南辺柱列の検出をめざしたが，中央の池跡地が障害となって，これも組み合わせの確証が得られなかった。

２．遺構外出土遺物（図16）

遺構外出土遺物は，土師器片10点，須恵器片４点，近世陶磁器（会津本郷焼など）12点がある。平面的な分布状況に規則性は認められない。ここでは，図16に掲載した４点を解説する。

１は，有台の土師器坏である。いわゆる足高高台に分類されるもので，欠損した坏部は，椀形を呈すると推定される。９世紀末～10世紀の年代観が与えられる。２は，須恵器長頸瓶の底部片である。断面三角形の高台が特徴的で，大戸編年のＫＡ107窯式期に比定される。内面は剥離が著しい。３・４は，須恵器甕の胴部片である。どちらも，外面に平行タタキメが観察される。（菅　原）

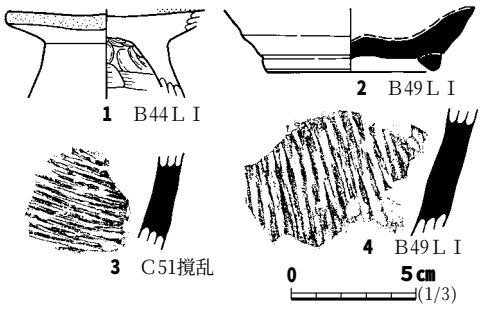


図16　遺構外出土遺物

現地公開風景

第３章　ま　と　め

荒屋敷遺跡は，今年度の５次調査によって，会津縦貫北道路にかかる工事範囲の発掘調査がすべて終了する。平成９年度の表面調査に始まり，平成12年度からは試掘調査，平成13年度からは，発掘調査が福島県教育委員会，財団法人福島県文化振興事業団および塩川町教育委員会（現 喜多方市）を調査主体として行われている。発掘調査の着手から６年，８区画に分割された調査区となっている。本章では荒屋敷遺跡の主体となる中世に属する遺構群について，掘立柱建物跡を中心として，これまでの調査成果を総括する。

１．荒屋敷遺跡の概要（図17）

荒屋敷遺跡は阿賀川（大川）の支流である日橋川右岸に位置し，日橋川が大きく流れを蛇行する部分にあたる。さらに遺跡周辺は濁川・田付川・鶴沼川が阿賀川に注ぎ，姥堂川・大塩川・溷川が日橋川に合流し，会津盆地北部を流れる中小河川が集中する地域となる。遺跡内の地形は，日橋川が蛇行と浸食を繰り返し，河川氾濫原となる低湿地と段丘平坦面に大別できる。遺跡の南半部で１・２次調査区が低湿地，北半部の３～５次調査区が段丘平坦面となる。

荒屋敷遺跡で確認された遺構は，塩川町教育委員会の発掘調査を含めると，掘立柱建物跡17軒，柱列跡３基，竪穴状遺構３基，土坑144基，溝跡113条，性格不明遺構４基，柱穴が多数である。そのうち溝跡は，調査区ごとに溝跡番号を付したものもあるため，実質的には100条前後になる。遺構の年代は，中世に属するものが主体をしめる。出土遺物は土器類を中心として，縄文時代～古墳時代，平安時代～中世，近世～近現代まで認められる。その中でも９世紀代に属する遺物の出土量が多いが，これに伴う明確な遺構群は少ない。中世では在地産のかわらけや陶器，珠洲系陶器，青白磁など貿易陶磁器が認められ，その他に銅鏡・銅鈴などの金属器や木質遺物が少量ながら出土している。

荒屋敷遺跡で確認された中世の建物群を検討するに際し，最も問題となる点は，その年代的な位置付けであろう。遺構内からの出土遺物に乏しく，明確な年代を決定できる出土状況を示していないため，多くは，詳細な年代が不明である。建物跡の年代を決定する定点となっているのが，①建物跡の柱穴内からの出土遺物，②掘立柱建物跡を区画する溝跡の出土遺物，③掘立柱建物跡の柱間距離とその方向，④周辺に点在する土坑群の出土遺物，⑤『新編会津風土記』などの文献・古記録に基づく検討などが挙げられている。次項では建物跡を中心に，それを区画する溝跡の関連をまとめ，年代的な根拠を整理する。

２．3～５次調査区の遺構

荒屋敷遺跡の北半部，段丘平坦面上で確認された遺構群である。下遠田館跡と推定される範囲の東側に接する。８・14号掘立柱建物跡を中心に，53・54号溝跡によって方形区画の館が想定される。

建物跡　遺跡の北半部で確認された建物跡は，８～15号掘立柱建物跡である。その中で建物の規模が大きく，柱間距離などの構造的な特徴から，主要な建物となるのが８・14号掘立柱建物跡と推定される。８号掘立柱建物跡は四面に庇が取り付くなど14号掘立柱建物跡とは構造的な違いがあるが，建物の方向は一致している。14号掘立柱建物跡の南に位置し，その距離は約37mを測る。柱間距離は若干のばらつきは看取できるが，2.2～2.6mの間に納まる。これら建物跡では出土遺物などの積極的根拠を欠くものの，同時期に存在した可能性は非常に高い。建物跡の配置では，８号掘立柱建物跡と主軸方向を同じくする10・11号掘立柱建物跡が付属屋と想定される。54号溝跡に造り替えられた時点では，53号溝跡の東辺推定線を越えて東側に９・12・13号掘立柱建物跡，塩川町調査の１・２号建物跡が分布するが，それに伴う区画施設は不明である。

区画施設　上記の建物を区画する施設として，53・54号溝跡が上げられる。これら溝跡を境に北側に建物跡が分布しない状況から，遺構群の北端を区画すると考えられる。この両溝跡は塩川町調査（２次調査）でも確認され，堆積状況から53号溝跡→54号溝跡の順で造り変えられて北側に幾分拡張されている。これらの溝跡は，下遠田館跡推定地の北辺区画と方向がほぼ一致する。

53・54号溝跡に相当する東辺と南辺の区画は，４・５次調査区でその延長部分は確認できない。南辺は53号溝跡と同じく東西方向に延びる64号溝跡が位置するが，２時期の変遷は認められていない。しかし64号溝跡から南側は比高差約２mの段丘崖となることからも，この周辺が南端に相当する可能性は高い。この区画の規模は，南北方向に相当する53号溝跡と64号溝跡までが約110mで，53号溝跡のコーナー部から下遠田館跡推定地の東端までの距離が約72mを測る。この区画は下遠田館跡推定地とほぼ同規模の区画となる。

年代　『会津縦貫北３』によれば，遺跡北半部の遺構群の年代は，前述した②・⑤を基に推定している。53・54号溝跡が２時期の造り替えがあり，新期には方形区画の東辺を越えた外部に建物跡が造られる。主要な建物となる８・14号掘立柱建物跡に建替えはなく，短期間な存続期間を想定している。

②では，53・54号溝跡の遺物は，堆積土中から出土したもので，時期が異なるものが混在する。54号溝跡の構築で埋められた53号溝跡の出土遺物は，９世紀代の土器が多いものの，12～13世紀頃の中世前半期より時期が下る遺物が認められない。また３・５次調査区内でも13世紀以降に属する中世の遺物は見られない。建物跡・溝跡の存続期間を勘案しても，中世前半期に限定できる。

下遠田館跡の内容が知られていない現状では，遺構・遺物を基にした新旧関係は不明であるが，荒屋敷遺跡北半部の方形館跡は，文献史料から検討された下遠田館跡の年代（14世紀以降）より古いと考えられる。

図17　中世期の主要遺構

３．１・２次調査区の遺構

次に１・２次調査区で確認された建物跡を中心として，それに対応する区画施設との関連を検討し，低湿地に分布する建物群の景観を復元する。

建物跡　遺跡南半部の低湿地では，１～７号掘立柱建物跡が確認されている。そのうち２号掘立柱建物跡は重複する遺構との関連から12～13世紀よりも新しい時期に想定され，建物跡の南辺が中世前半に属する４・９・12号溝跡と接し，これらの溝跡が開口する時期に存在していたとは考えにくい。５・７号掘立柱建物跡は３号掘立柱建物跡とその周辺に位置する土坑群との重複関係から，３号掘立柱建物跡と同時期に存在しない。これらを除いて，建物の規模や主軸方向などから中世前半に属すると推定されるものは，３号掘立柱建物跡とそれに付属する４・６号掘立柱建物跡，柱列を伴う１号掘立柱建物跡，３地点の４棟の建物跡が該当する。

３号掘立柱建物跡は大型方形建物跡で，内部が複雑な間取りになる構造で，他の建物跡と明確な違いが認められる。報告では，その性格を宗教関連施設と推定するが，それを特定する遺物はない。４号掘立柱建物跡は，３号掘立柱建物跡と主軸方向がわずかに異なるものの，その配置から付属屋としての性格が考えられる。１号掘立柱建物跡は小型建物跡で，倉庫の機能が想定される。周辺には２号溝跡に平行して柱列が存在する。明確な建物跡は検出されていないが，柱穴群や土坑群も点在することから，構築当初は柱列を伴う区画施設の内部に複数棟の倉庫群が立ち並んでいた可能性がある。６号掘立柱建物跡は東側に庇を持つ側柱建物跡と推定される。４・９・12号溝跡がＬ字に屈曲する部分に位置し，建物跡の主軸方向は溝跡の方向と一致している。

建物跡の柱間距離は，３号掘立柱建物跡を除いた建物跡では，長辺側が2.0～2.5m，短辺側が1.5～1.9mを測る。遺跡北半部の８・14号掘立柱建物跡に比べ，やや不規則な柱間となる。また低湿地に位置する建物跡の主軸方向は，北に対して東に４～９°傾く。段丘平坦面上の建物跡は北もしくは３°西に傾く建物で，主軸方向が東西に分かれ，その差は約12°である。この主軸方向の差は，日橋川の蛇行により内陸側にえぐれる地形に影響を受け，遺跡北側と異なった建物跡の方向になると推定される。特に12号溝跡と25号溝跡の間は，自然流路や溝跡が集まり湿地帯を形成する。地形は全体的に南東方向に傾斜し，その等高線に沿って東に主軸を向ける建物跡が想定される。

区画施設　建物跡の区画溝は，周辺地形の等高線に平行して延び，建物跡をＬ字型に囲むものが多い。建物跡とのセット関係は，溝跡の延伸方向と建物跡の主軸方向から，３・４号掘立柱建物跡は25号溝跡，６号掘立柱建物跡は４’・９’・12’号溝跡，１号掘立柱建物跡は２号溝跡を伴い，それぞれ小区画を形成している。

『会津縦貫北３』によれば，25号溝跡の性格について，３号掘立柱建物跡周辺を船着場とし，日橋川から舟を引き込む溝跡と想定している。溝跡の形状が「箱堀」で，周壁に木杭が遺存している点，堀底が日橋川から内陸に向かって低く，建物跡・土坑群の付近が50㎝ほど深くなる特徴を根拠としている。しかし，舟が航行可能な水量を25号溝跡が常時湛えていた場合，３号掘立柱建物跡付

近を残して，周囲の大半が水没する。また桟橋など具体的な船着場を想定する施設がない。日橋川からの距離を勘案すれば，船着場に限定する必要はなく，その機能を低湿地の排水路を兼ねた区画溝で，建物跡周辺が深くなる構造は簡易的な貯水施設とするのが妥当であろう。

6号掘立柱建物跡を区画する4’・9’・12’号溝跡は，短期間で造り替えが繰り返され，一部は共有していると推察される。1次調査区へ続く部分は確認できず，6号掘立柱建物跡周辺の北東隅から東辺を確認しただけで全体の区画範囲は不明である。12’号溝跡が25号溝跡と平行するように延び，9’号溝跡から東側の低地部分に向かって延びる。建物跡周辺の区画と排水路を兼ねた構造と考えられる。

年代　建物群の年代は，①・②・④を基に推定している。溝跡の出土遺物は時期が異なる遺物を含み明確な年代を示す出土状況にはないが，年代の下限となる遺物は，かわらけ・陶器や貿易陶磁器など，12～13世紀を主体とする。建物跡は，主軸方向や柱間距離などが共通する特徴があり，同時期に存在する可能性が高い。建物跡の建て替えや重複が少ないことからも，各建物跡が比較的近い時期に限定できるであろう。溝跡から出土した遺物の年代観を大きく逸脱しない時期の建物群と推定される。

4．荒屋敷遺跡の建物群の性格

荒屋敷遺跡で確認された遺構群の特徴をまとめると，比較的標高が高い遺跡北側に，53・54・64号溝で囲む南北110m，東西72m以上の方形区画があり，内部に8・14号掘立柱建物跡を中心とする建物群が分布する。一方，遺跡南部は低湿地となり，排水路を兼ねた区画溝によって，建物跡が数棟からなる小区画を形成する。遺跡の南北で建物跡の時期を違える出土遺物がないことから，建物跡の年代は，溝跡の下限となる時期で，両者の建物群は同時期に存在する可能性がある。

出土遺物の主体となる在地産のかわらけ・須恵器系陶器に混じり，珠洲系陶器や貿易陶磁器が出土している。これらの年代観は『会津縦貫北3』で示すとおりで，これまでの調査成果でも大きく矛盾する資料が得られていないことから，ここでは井の年代観に従っている。出土地点を概観すると，北側の方形居館内は少なく，遺跡南部では9’・12’号溝跡に集中する傾向にある。また出土遺物の組成では，鍋・釜などの煮炊き具や木製椀が見られない。それら溝跡で区画される建物跡の性格として，住居とするには，やや生活色に乏しい点も特徴的である。

荒屋敷遺跡周辺の中世期の館跡は，阿賀川に合流する中小河川に面した微高地に造られる特徴が見られ，会津盆地北部の縁辺部まで館跡が数多く分布する。荒屋敷遺跡は日橋川右岸で，会津盆地北部を縦横に流れる大塩川・姥堂川・溷川の合流地点に近接し，水運を利用する交通路の要所に立地している。このことから荒屋敷遺跡は，日橋川を行き来する舟をのぞむ高台に館，日橋川に面する低地に建物群が立ち並ぶ景観が復元できる。荒屋敷遺跡の性格については，井が指摘する「川湊」に蓋然性が高い。低地の建物跡は，一般的な集落を構成する住居ではなく，物資の荷揚げ・集積・分配の直接的な役割を担うと考えられる。方形館跡は在地有力層の居宅だけでなく，遠距離交易に

より得られた物品を周辺地域に配分する拠点,「湊」・「津」を管理する機能を持つと推定される。さらに低地の建物跡は，独立した小区画を形成し，区画溝跡からの出土遺物に生活感が乏しい空間となる。その機能として「市」の可能性も指摘しておきたい。

５．まとめ―歴史にみる荒屋敷遺跡について

文献史料から見た会津地域の歴史と荒屋敷遺跡の関連については,既に井が考察しており,５次調査までの成果を加えても，これを大きく逸脱する所見が得られていない。ここでは荒屋敷遺跡で最も特徴的な建物である３号掘立柱建物跡の性格を検討し，まとめとする。

荒屋敷遺跡の川湊　荒屋敷遺跡周辺の館跡は図18に示すとおり数多く見られるが，具体的な館跡の内容が知られ，確実に中世前半まで遡る城館は少ない。近年の調査事例では，阿賀川南岸となる会津坂下町に所在する城館跡のいくつかで，その内容が知られている。陣が峯城跡は会津地域における平安時代末期から中世前半の有力層の城館跡として知られ，特に貿易陶磁器の出土量が質・量ともに他の城館跡を凌駕する。周辺地域の館を従えた在地勢力の中心となる城館跡である。他に喜多方市新宮城跡・湯川村北田城跡なども有力層の城館跡と推定されるが，文献資料から陣が峯城跡より後出する城館跡とされる。阿賀川に面する古舘遺跡，高畑遺跡，吉原遺跡では館跡の全体像は不明であるが，方形を基調とする区画内に掘立柱建物跡・方形竪穴状遺構が確認されている。中でも古舘遺跡は荒屋敷遺跡の西約３㎞，阿賀川の南岸に位置する。方形竪穴状遺構を主体とすることから，荒屋敷遺跡より後出する特徴がある。出土遺物の年代観から13～14世紀と推定され，荒屋敷遺跡の衰退期から盛行する。古舘遺跡の性格は，館跡の外郭となる溝跡を利用して船着場を想定し,阿賀川に面する「津」の機能を指摘している。

文献資料などを参考に想像をたくましくするならば，源平争乱を経て会津地域の在地勢力が衰え,源氏の勢力によって在地の支配体制が一新される。阿賀川を利用した交易についても同様に，その拠点を荒屋敷遺跡から古舘遺跡へ移されたとも考えられる。荒屋敷遺跡の川湊を主導する人物像については，井が考察するように，佐原氏が移入する以前に会津地域に影響力を持つ有力層と考えられる。阿賀川を経由した交易拠点である点からも，文献等に散見される「越後城氏」や「慧日寺」との関連が強い人物像が浮かび上がってくる。

３号掘立柱建物跡の性格　３号掘立柱建物跡は，正方形となる身舎に北側を除く３面に庇が取り付く構造の大型建物で，外観は仏堂などをイメージさせる。さらに低地内でも小高い場所に南面するように建てられ，ちょうど日橋川を遡上する舟を迎えるような景観となる。３号掘立柱建物跡の性格について，井は「寺院跡」などの可能性を指摘し,「川湊」とする遺跡の性格から,「湊迎寺」などの交易拠点の象徴的建物と推定している。しかし井が自ら指摘するように，３号掘立柱建物跡やそれを区画する25号溝跡からは，宗教に関連する遺物などは出土していない。建物の構造は，中世寺院と比較しても，柱の配置や柱間距離など細部の特徴が異なる。一方，遺跡全体の出土遺物を見れば，内面に蓮華文が線刻され，底部外面に異字体で「岡本」と刻書される９世紀代の土師器坏

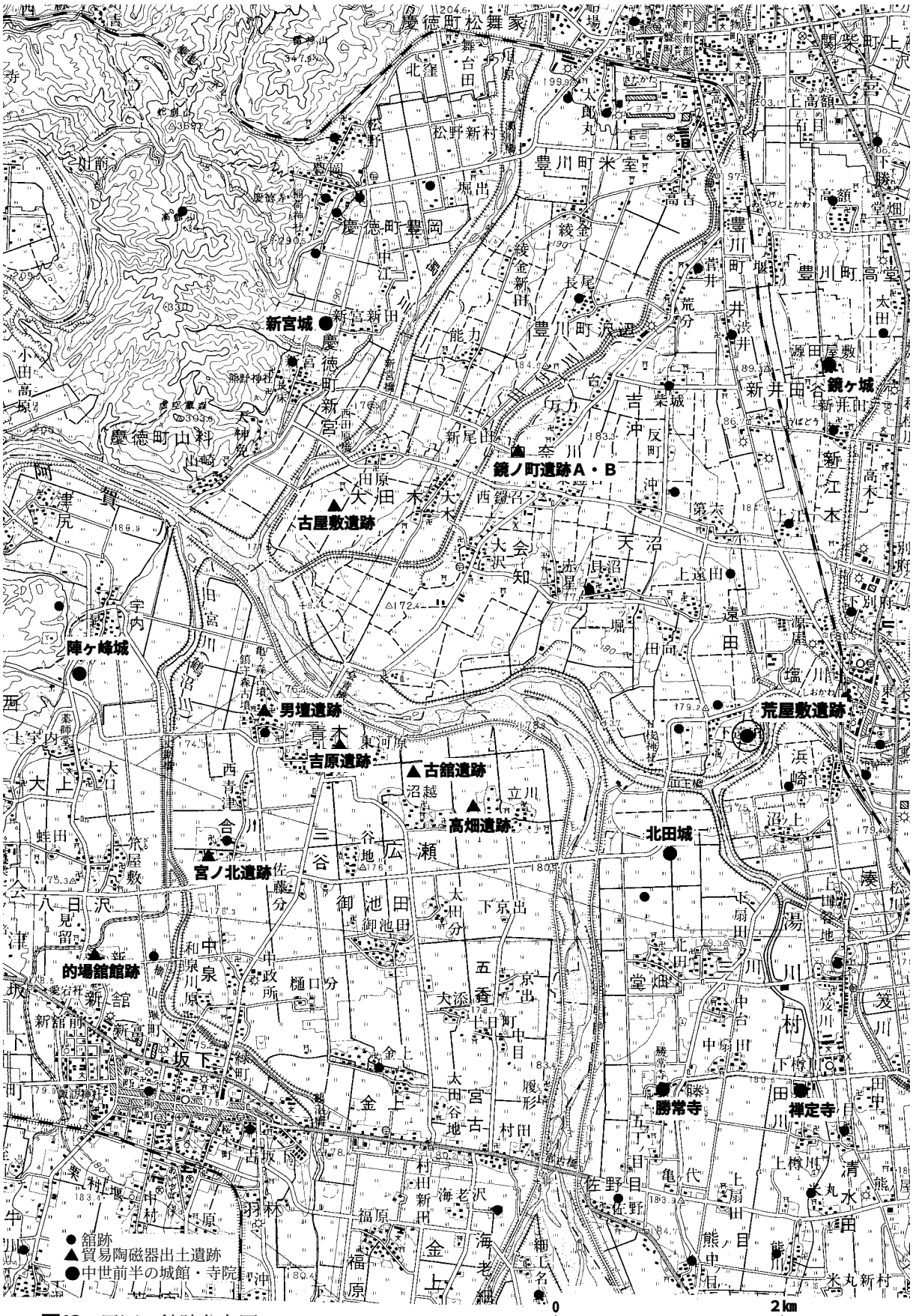


図18　周辺の館跡分布図

（『会津縦貫北２』図64－１），古代末から中世頃と推定される銅鏡（瑞花双鳥鏡）１面（『会津縦貫北５』図８－８），銅鈴１点（『会津縦貫北３』図36－８）がある。いずれも３号掘立柱建物跡に直接的に伴うような出土状況ではないが，平安時代から宗教色の強い遺物が認められる。荒屋敷遺跡は，10世紀後半から11世紀代まで遺構や遺物ともに希薄となり，遺跡の空白期がある。これら遺物が中世まで継続する宗教関連施設の存在を裏付けることはできないが，荒屋敷遺跡に集落または館が存続していた時期に，その影響力を推測できる下地は揃っている。

古代～中世の会津地域における仏教寺院は，発掘調査の成果に加え，文献的な研究成果から，徳一が平安時代に開基したとされる慧日寺（磐梯町）の存在が大きい。荒屋敷遺跡と慧日寺は，約10㎞の距離を隔てて分布している。『湯川村史』において生江は，会津盆地を経由した日本海側から太平洋側を結ぶ古道を推定している。これによれば，陣が峯城跡付近の会津坂下町勝負沢から慧日寺が所在する磐梯町大寺地区までの陸路は，塩川町金川区を経由した道筋が地形勾配ともに最も難所が少ないとしている。荒屋敷遺跡周辺の遠田地区について，生江の直接的な記述はないが，地図上では会津坂下町立川区から塩川町金川区までのルート上に位置している。さらに日橋川は慧日寺まで大きな難所がなく，舟の往来も可能である。物資の運搬は，水上交通を利用した方が陸路よりも容易であることは想像に難くない。

中世寺院の役割については，これまでの多岐にわたる論考や研究成果があり枚挙に暇がないが，その在地社会に対する影響力は，単に信仰や仏教教義に止まらず，集落内の祭礼，政治，経済や軍事など多方面に及んでいる。道や橋などの交通施設に宗教的意味合いが強いことは既に知られており，これに関わる地域経済に対する影響力の強さも明らかである。荒屋敷遺跡では，慧日寺との関連を示す直接的な資料はないが，遠隔地交易によって地域社会内に経済的権益が生じることは確かで，交通・物流の拠点となる「川湊」でその影響力を振るっていた可能性もある。また，12世紀後半には慧日寺と強い結び付きを持つ越後城氏は，日本海側に本拠を置く勢力で，阿賀川の水運を介した関連も暗示させる。

荒屋敷遺跡周辺でも図18に示すとおり，館跡に近接して社寺が分布することも注目される。これは具体的な遺物や文献等の年代的な根拠に乏しいが，館跡と社寺との関連を想起させる事象である。また荒屋敷遺跡より時期は下るが，喜多方市熊野神社に伝わる文書・古記録など文献資料の中にも，地域有力層と社寺等宗教勢力との密接な関係が散見できる。

上記したように中世の館跡と社寺等宗教勢力との密接な関連を窺うことができる。３号掘立柱建物跡の性格を考える上で，宗教勢力との関わりを想定させる要素を持つことから，井の推察する「湊迎寺など交易拠点の象徴的建物」に，ある程度の評価を与えることができよう。

最後に，荒屋敷遺跡の発掘調査の成果から，阿賀川流域を経由した交易拠点の一端を知ることができた。しかし具体的な阿賀川流域の流通体制，荒屋敷遺跡と末端地域を結ぶネットワークなどは未だ解明されていない。今後は発掘調査による考古資料の増加と伴に，文献資料や歴史地理・古環境を含めた総合的な研究による，中世社会の構造的な分析が必要であろう。　　（福　田）

写　真　図　版

第１編　荒 屋 敷 遺 跡（５次）

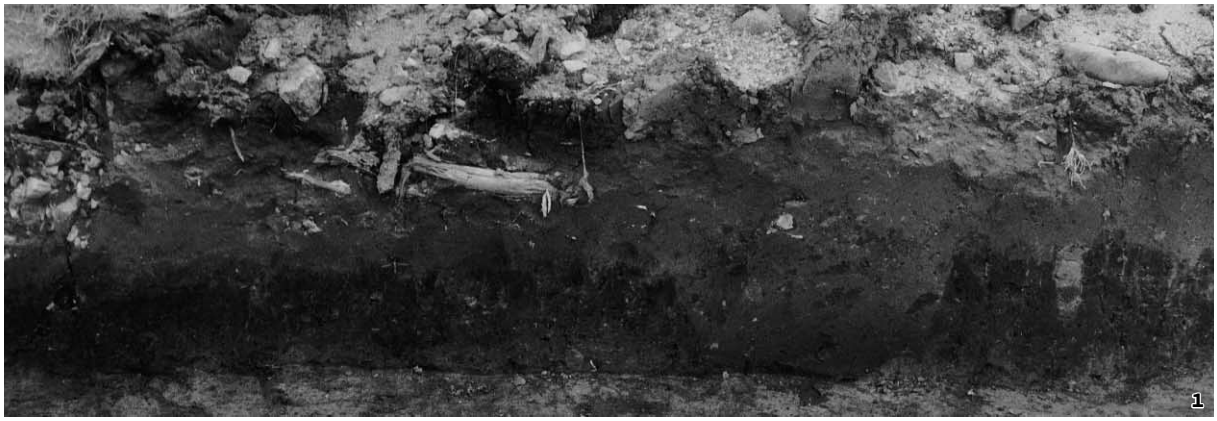
1　５次調査区遠景（北から）

2　５次調査区全景（上空から）

3　13号掘立柱建物跡周辺全景（上空から）

4　14号掘立柱建物跡周辺全景（上空から）

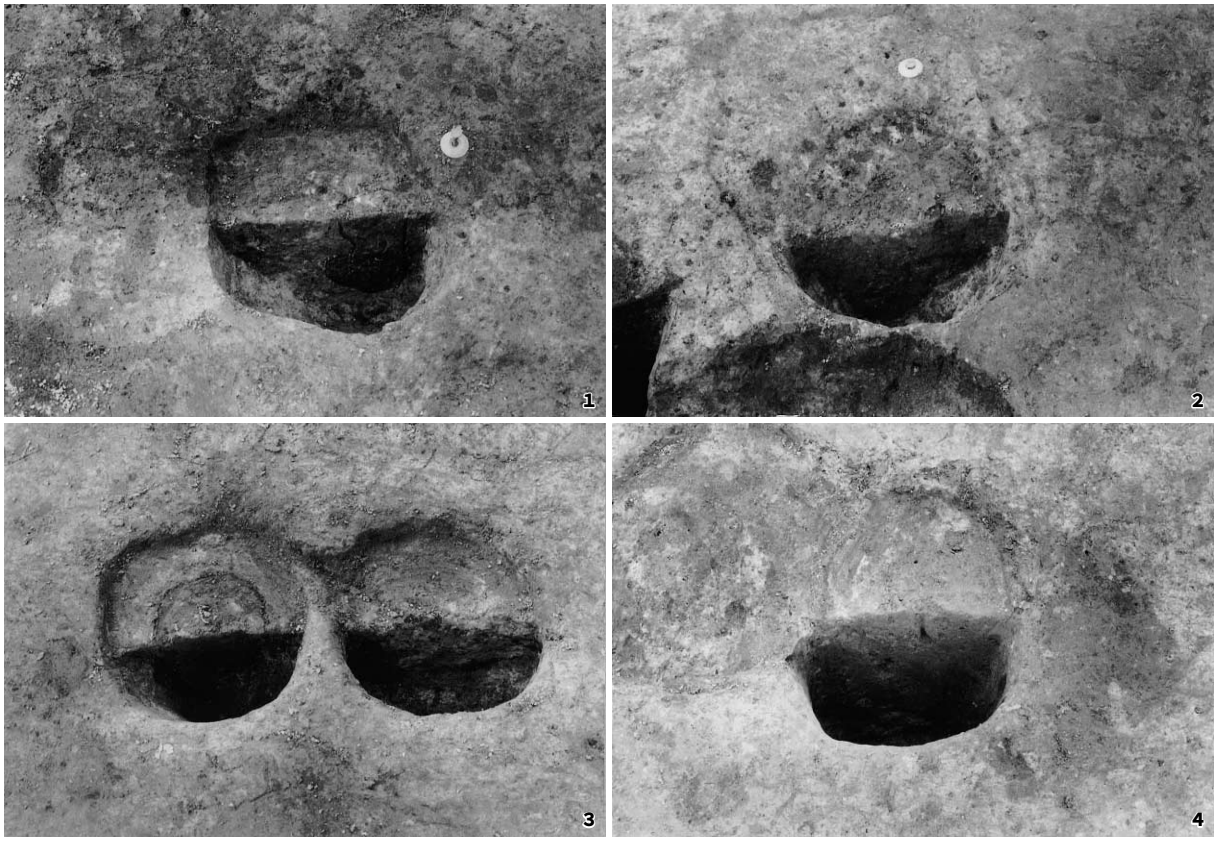
5　15号掘立柱建物跡周辺全景（上空から）



6　基本土層

1　E53グリッド周辺基本土層（南から）
2　AB52グリッド周辺基本土層（東から）

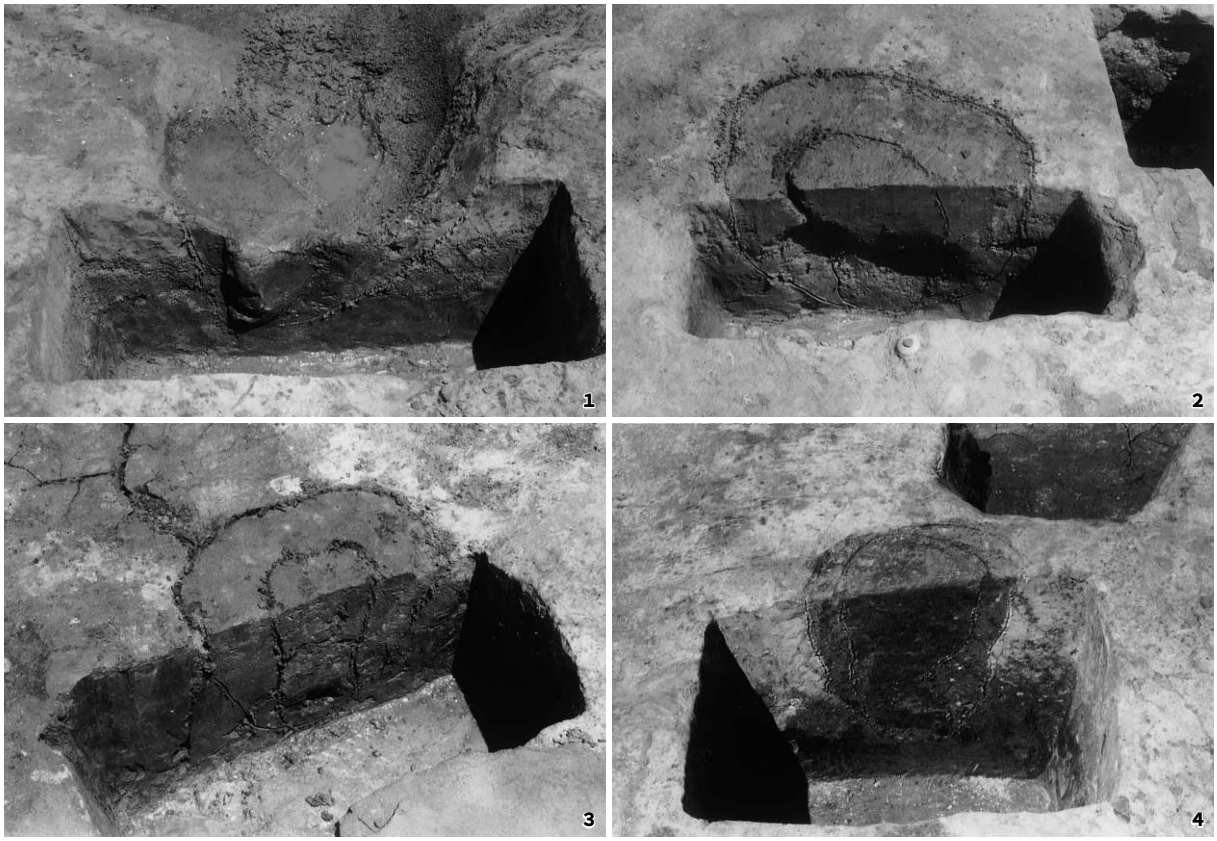
7　13号掘立柱建物跡全景（南から）



8　13号掘立柱建物跡細部

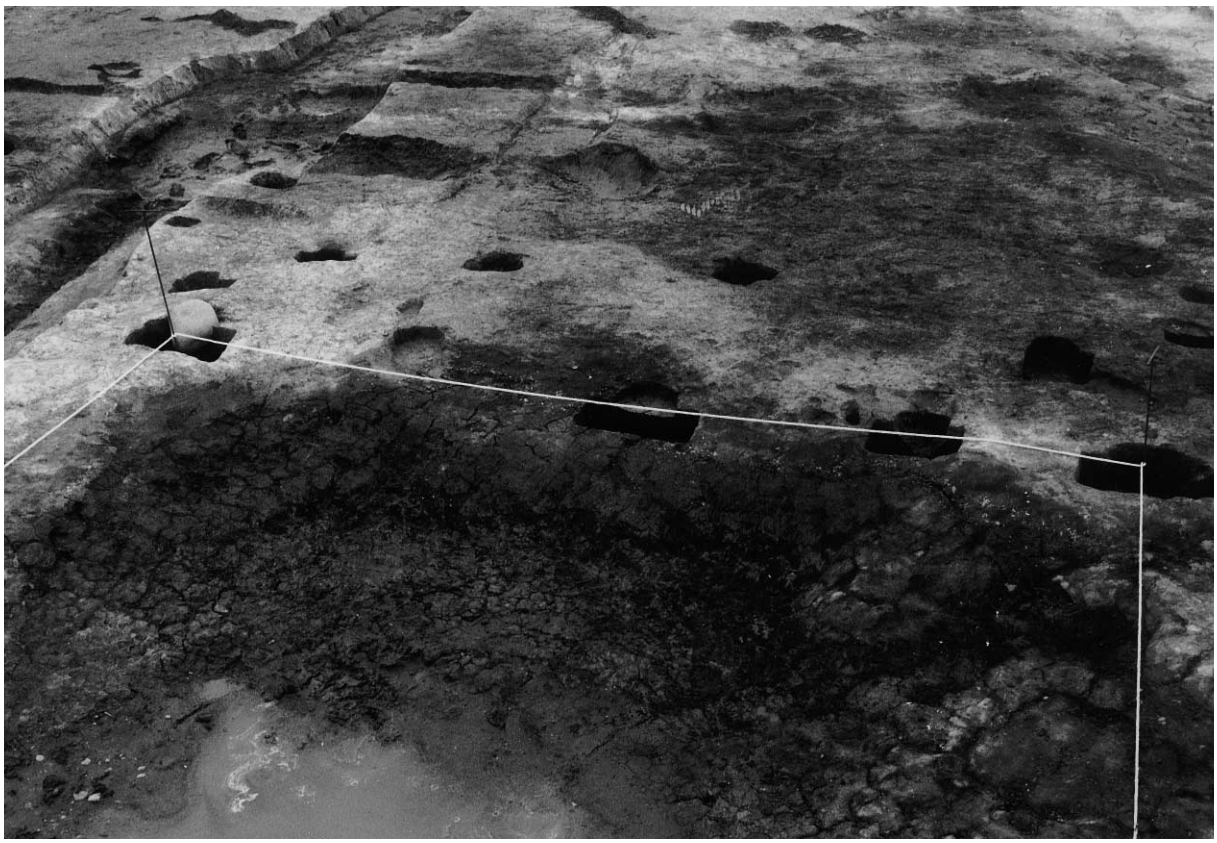
1　Ｐ１土層断面（南から）　**2**　Ｐ３土層断面（南から）
3　Ｐ６土層断面（南から）　**4**　Ｐ８土層断面（南から）

9　14号掘立柱建物跡全景（北から）



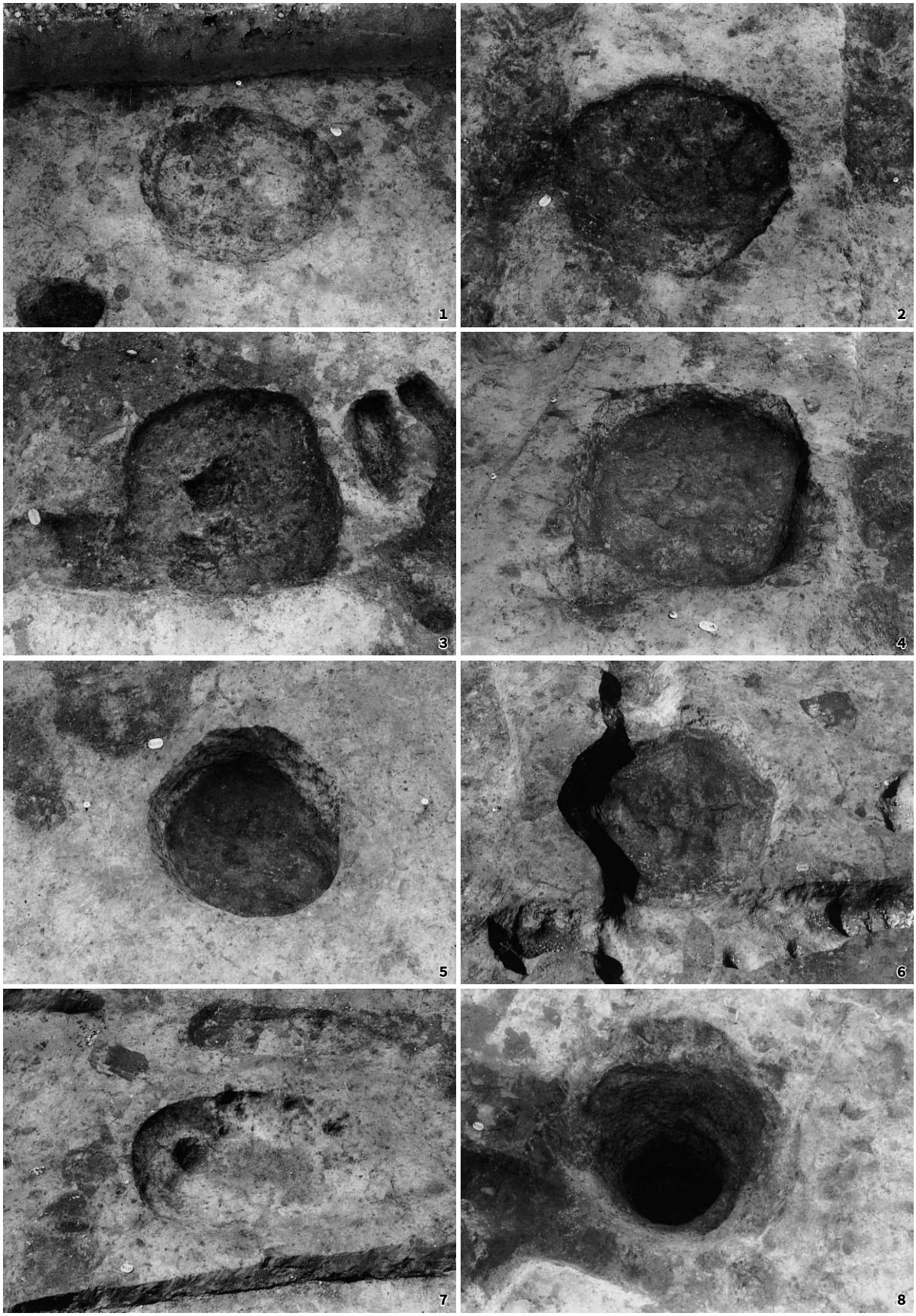
10　14号掘立柱建物跡細部

1　Ｐ１土層断面（南から）　**2**　Ｐ３土層断面（南から）
3　Ｐ９土層断面（南から）　**4**　Ｐ７土層断面（東から）



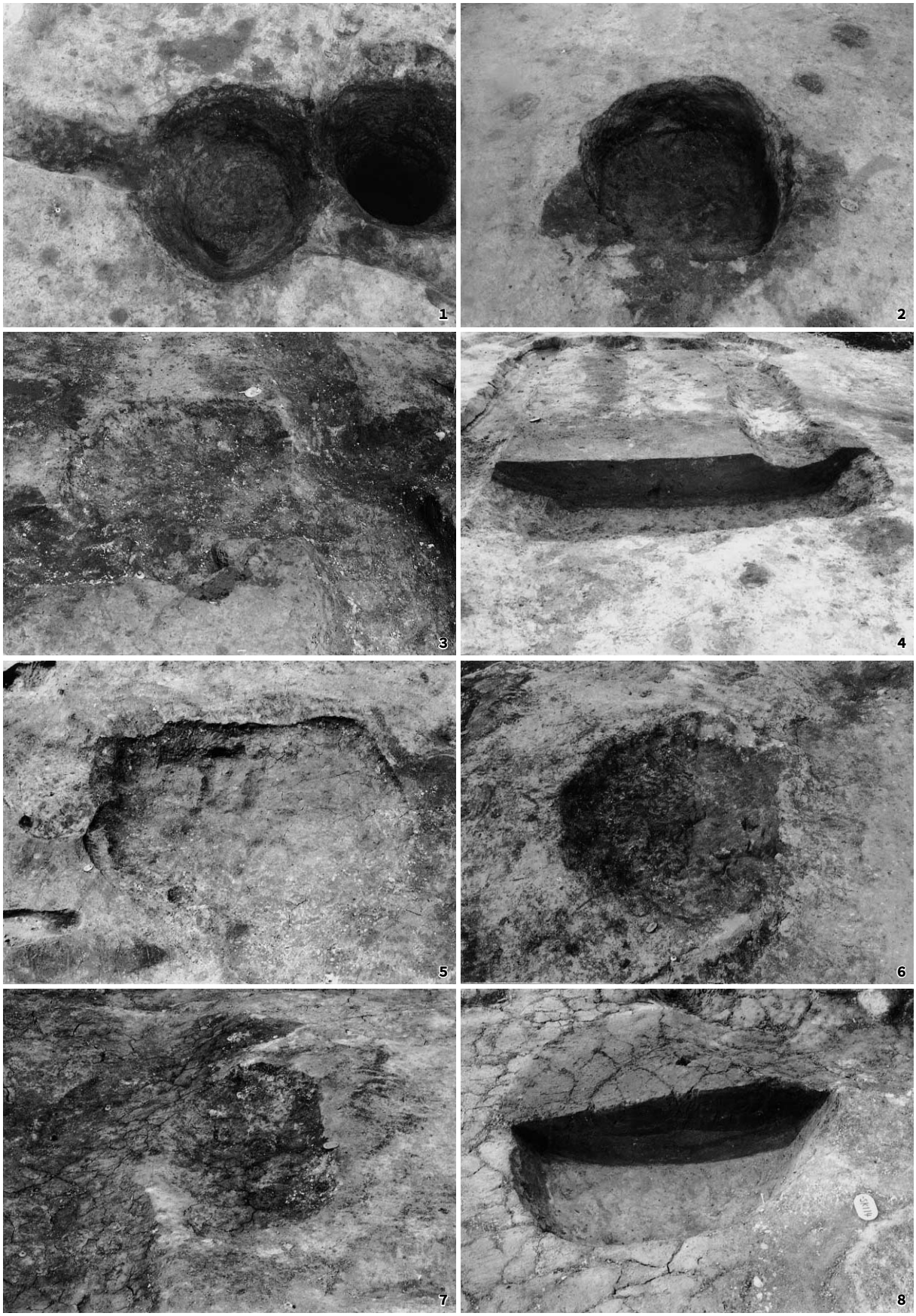
11　15号掘立柱建物跡全景（南から）

12　３号柱列跡（南東から）



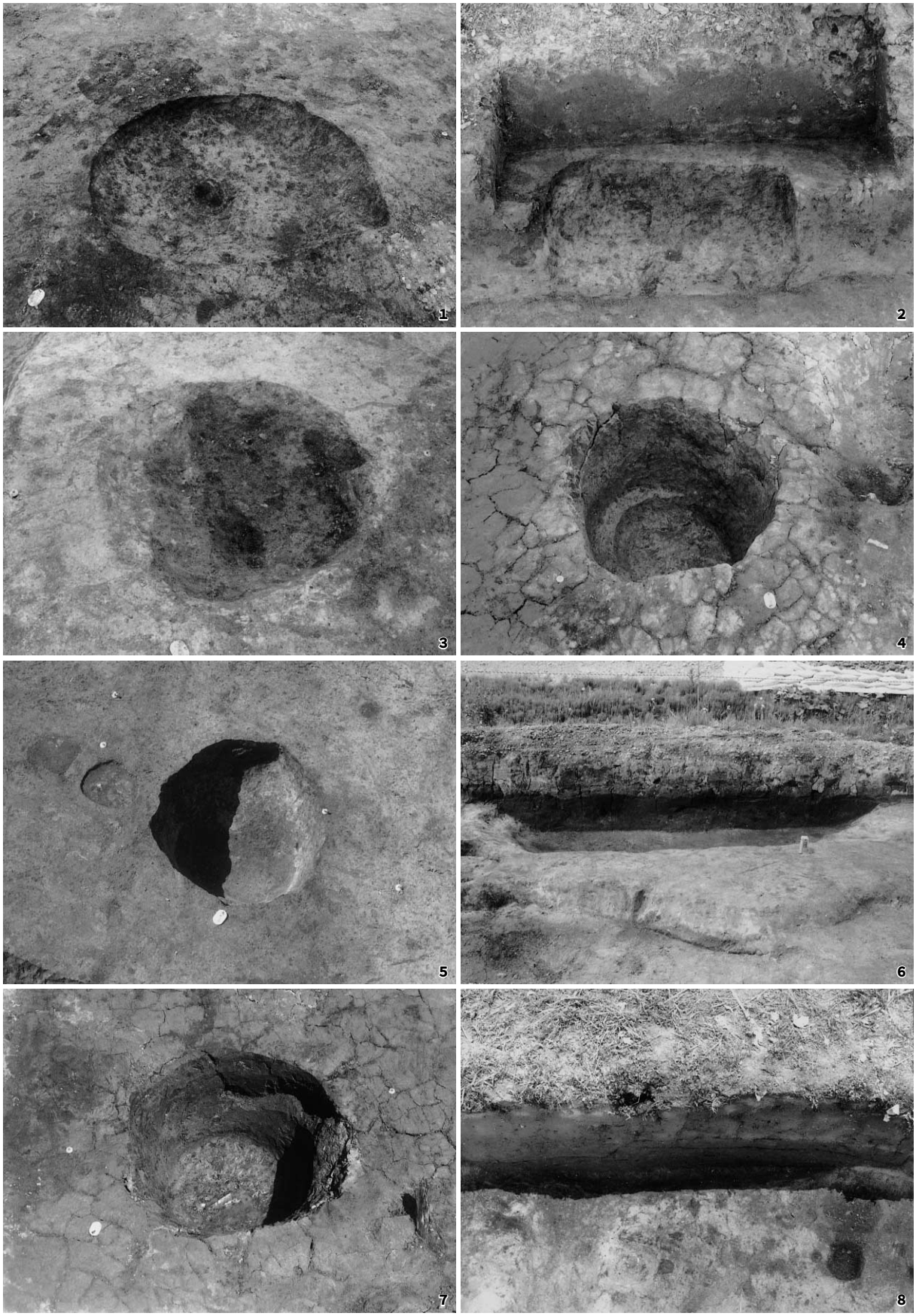
13 99～106号土坑

1 99号土坑全景（西から）
2 100号土坑全景（北から）
3 101号土坑全景（東から）
4 102号土坑全景（南から）
5 103号土坑全景（南から）
6 104号土坑全景（南から）
7 105号土坑全景（東から）
8 106号土坑全景（北東から）



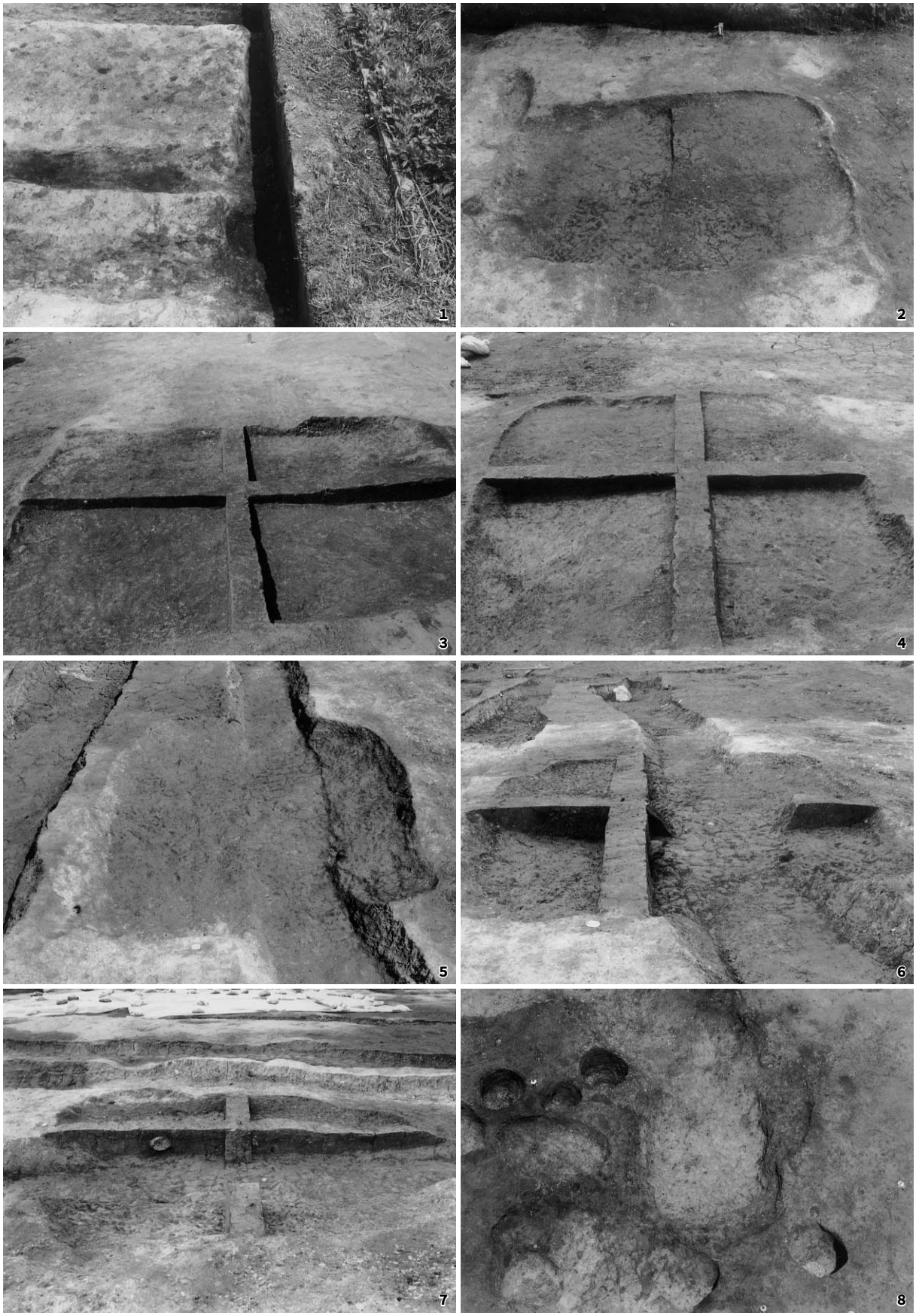
14 107～114号土坑

1 107号土坑全景（東から）
2 108号土坑全景（南から）
3 109号土坑全景（南から）
4 110号土坑土層断面（南から）
5 111号土坑全景（東から）
6 112号土坑全景（南から）
7 113号土坑全景（南から）
8 114号土坑土層断面（南から）



15 115～122号土坑

1 115号土坑全景（東から）
2 116号土坑全景（西から）
3 117号土坑全景（南から）
4 118号土坑全景（南から）
5 119号土坑全景（南から）
6 120号土坑土層断面（南から）
7 121号土坑全景（南から）
8 122号土坑全景（北から）



16 123～126号土坑

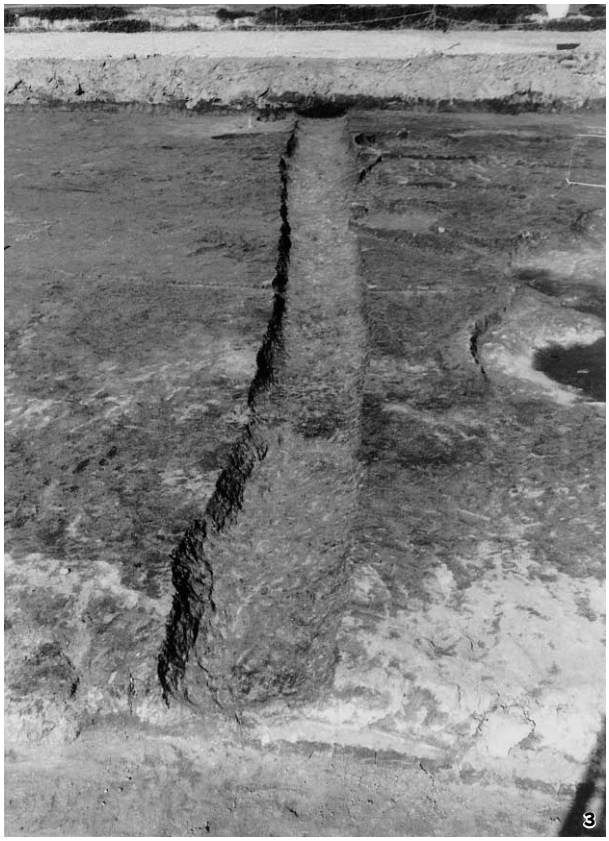
1 123号土坑全景（北から）
2 124号土坑全景（北から）
3 124号土坑土層断面（南から）
4 124号土坑土層断面（東から）
5 125号土坑全景（南から）
6 125号土坑東西土層断面（南から）
7 125号土坑南北土層断面（東から）
8 126号土坑全景（南から）

17 66～71・80・81号溝跡全景（上空から）

18 66～68号溝跡細部

1 66号溝跡全景（北から）　**2** 67号溝跡土層断面（北から）
3 68号溝跡土層断面（北から）

19 72～76号溝跡全景（上空から）

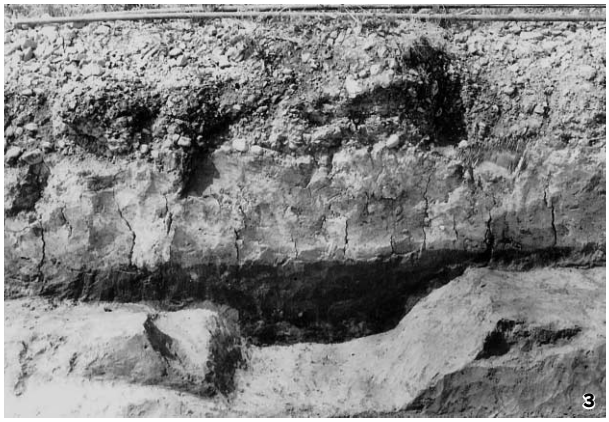


20 72・73号溝跡細部

1 72号溝跡全景（南から）
2 73号溝跡土層断面（西から）　**3** 73号溝跡全景（西から）

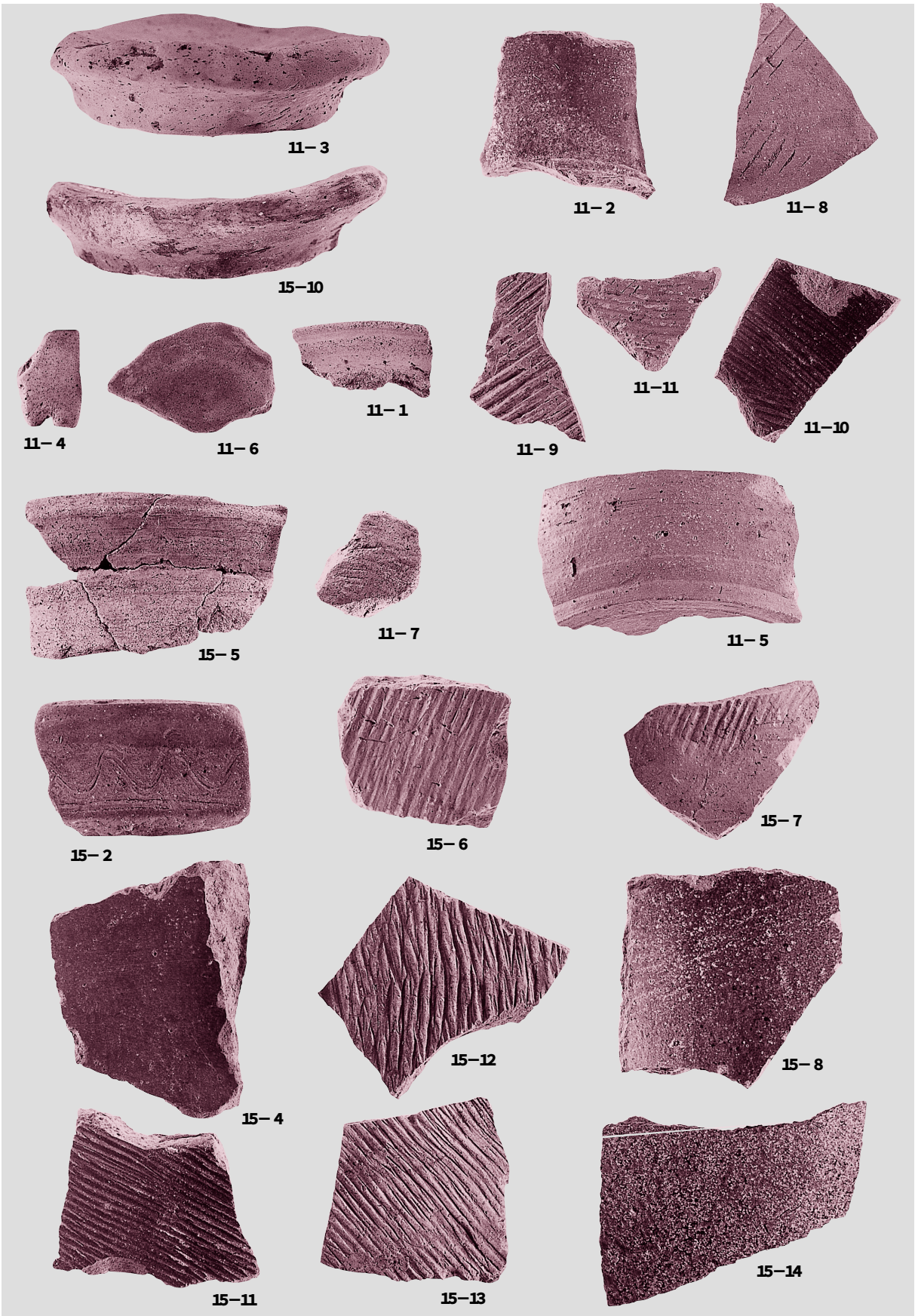
21 74・75号溝跡

1 74号溝跡全景（東から）
2 74号溝跡土層断面（西から）　**3** 75号溝跡全景（南から）



22 75～79号溝跡

1 76号溝跡全景（南から）　**2** 75号溝跡土層断面（南から）
3 76号溝跡土層断面（南から）　**4** 77～79号溝跡全景（東から）


11－3
11－2
11－8
15－10
11－4
11－6
11－1
11－9
11－11
11－10
15－5
11－7
11－5
15－2
15－6
15－7
15－4
15－12
15－8
15－11
15－13
15－14

23 出土遺物

第２編　高　堂　太　遺　跡

（下高額館跡を含む）

第１章　遺跡の位置と調査経過

第１節　遺跡の位置

高堂太遺跡は，周知の下高額館跡と水谷地古墳を取り込む範囲の遺跡である（図１）。南北約450m，東西約300mの広さを有しており，今回は，下高額館跡の北西部を一部含む3,900㎡が調査の対象となった。そのため，変則的ではあるが，本報告では遺跡名を高堂太遺跡（下高額館跡を含む）と表記している。

高堂太遺跡（下高額館跡を含む）は，喜多方市豊川町高堂太字高里他に所在する。世界測地系の位置は，北緯37度38分03秒，東経139度53分10秒である。遺跡の所在する喜多方市は，中央部の低地（会津盆地），北・東部の奥羽山脈，西部の越後山地に区分され，扇状地性の低地と山麓地・火山麓地が卓越する。このうち本遺跡が立地するのは，中央部の低地であり，大部分が濁川・田付川・大塩川などで形成された緩勾配の複合扇状地からなっている。この一帯は，第四紀完新世（沖積地）の礫・砂・泥など未固結堆積物が分布しており，扇状地の端部や段丘の崖下にみられる湧水，それに，自然堤防や段丘面などの微高地は，集落の立地に適し，埋蔵文化財も数多く分布している。

本遺跡は，喜多方市の中心市街地から，南へ約2.5㎞の位置にある。周囲の見通しは良く，東に雄国山・北に飯豊連峰を眺めることができる。現在の交通路では，国道121号線の西側にあたり，いわゆる「平成の大合併」までは，旧塩川町と喜多方市の市町村境に近接していた。遺跡が立地するのは，盆地平坦部に点在する浮島状微高地の１つで，姥堂川と田付川に挟まれた下高額集落の北半部，さらに，その北側に広がる水田部である。

本年度の調査区は，遺跡の中央西寄りに位置し，現況は水田・畑地に利用されていた。標高は海抜196～197mで，地表面は南西側に向かって緩やかに傾斜している。

第２節　調 査 経 過

平成17年度は，高堂太遺跡（下高額館跡を含む）を対象とした発掘調査の初年度にあたる。面積は，上述したように3,900㎡である。具体的内容については，第２章で記述するが，保存状態の良い中世平地城館跡の新例を追加することとなった。当該城館跡は，『新編会津風土記』などにかなり具体的な伝承記録がみられ，文献史料との相互検証が可能である。次年度以降のさらなる調査成果が期待される。

今回の調査は，平成17年８月１日～12月７日の，延べ60日間にわたって実施している。日程を追っていくと，まず７月25日に，福島県教育庁文化財グループ，国土交通省東北地方整備局郡山国道事務所，財団法人福島県文化振興事業団の３者で，廃土置き場や駐車場の確保など調査実施に関

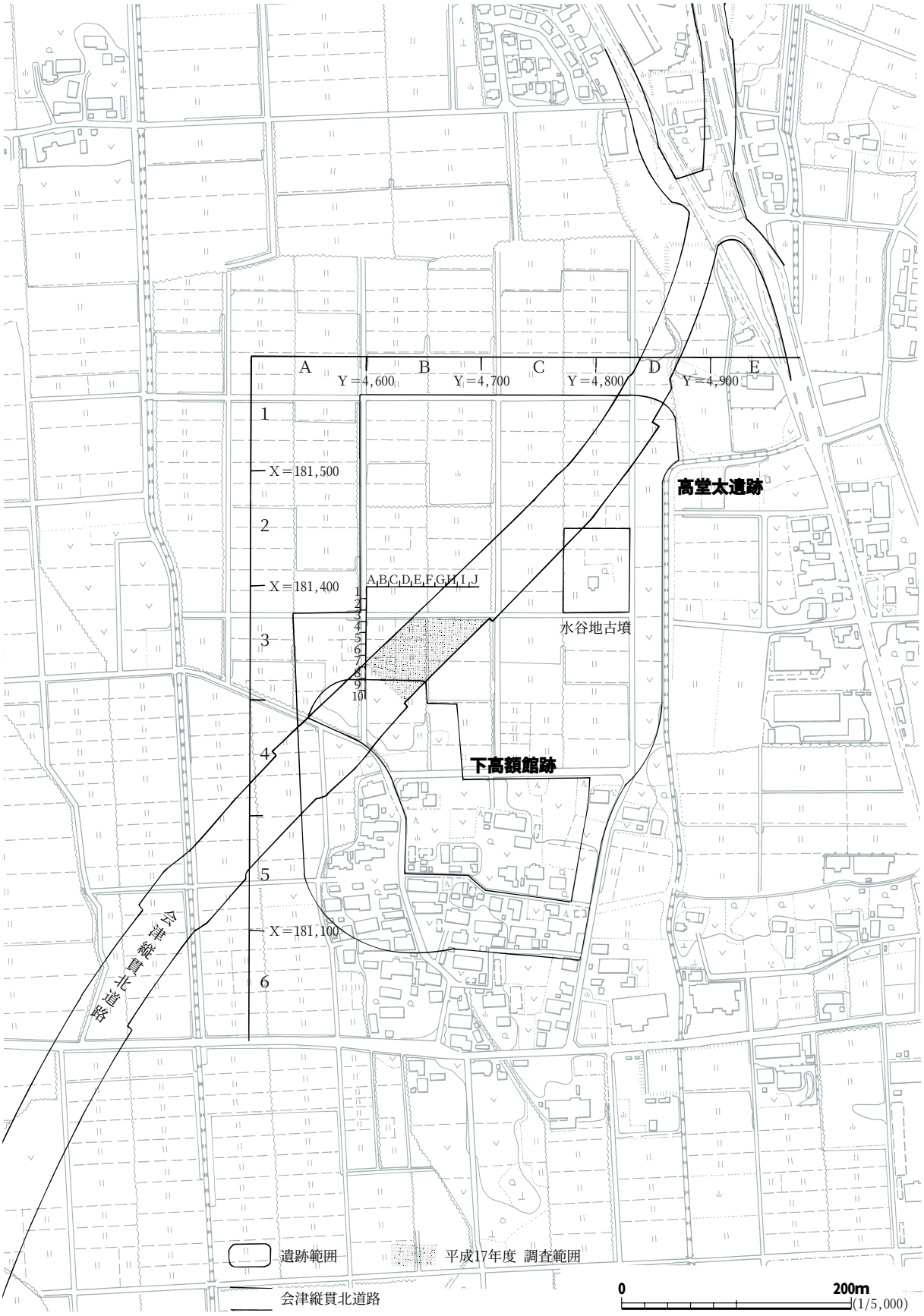


図１　調査範囲とグリッド配置図

わる詳細が取り決められた。発掘調査の指示は，福島県教育委員会教育長から財団法人福島県文化振興事業団理事長に対して，平成17年７月26日付けで交付がなされている。調査員が現地入りしたのは，８月１日であった。

８月前半は，重機による表土除去作業が中心となる。ちょうど稲の開花，出穂時期と重なっていたため，側溝の切り回しや廃土置き場の管理など，水田への影響に気を配った。また併せて，調査事務所・仮設トイレの設置，草刈り・縄張りといった環境整備を行い，準備作業を進める。連日猛暑が続き，作業員の熱中症対策に腐心したのも，この頃である。

盆明けの８月下旬からは，本格的な調査に移行した。調査区南西部を皮切りに，多数のピットが検出されはじめ，掘立柱建物跡として組み合うものも現れはじめる（１号掘立柱建物跡）。また，大溝が調査区全体を縦横に走っていることが判明し，すべての遺構を人力で掘りあげるのは，困難な見通しがついた（１～３号溝跡）。一方で，過去の地籍図（明治15年）や航空写真（昭和38年）との照合を進めた結果，検出遺構の中に，中世城館跡に伴うものと，近現代の用水路があることがおおよそ分かってきた。

こうした頃の９月３日，小学生対象の発掘体験が行われた。財団法人福島県文化財センター白河館の主催事業であり，県内外の親子連れが50名ほど参加した。１号掘立柱建物跡の検出作業が行われている。

発掘体験が終了した９月６日から，再び重機を導入した。これは，大溝を効率的に発掘調査するためである。上部の堆積土は，この機械力を用いて除去し，下部の堆積土は人力で掘り下げていった。また，これと併行して，掘立柱建物跡の検出作業を精力的に進めていった。それにより，10月上旬には，本調査区が中世城館跡の一画であることが確実となる。本調査区一帯は，かねてから中世城館跡と推定されていたが，今回の成果は，はじめてそれを具体的に証明した点で，意義あるものと評価される。

調査の終盤を迎えた10月31日からは，航空写真撮影・測量の準備を開始する。しかし，天候に恵まれず，ようやく撮影可能になったのは，２週間後の11月11日であった。また，これと併行して器材撤去を進め，11月14日からは，最終的な下層遺構の有無の確認にも着手した。１×１ｍの深掘りトレンチを７カ所設け，礫層まで掘り下げた。その結果，遺構・遺物は検出されず，安全を考慮して，一部は人力で埋め戻した。

11月17日には，すべての調査を終え，福島県教育庁文化財グループ，国土交通省東北整備局郡山国道事務所，財団法人福島県文化振興事業団の３者で，調査終了の確認が行われた。その後，11月21日から調査範囲の埋め戻しを開始し，12月７日に郡山国道事務所喜多方出張所の確認を得て，最終的な現地作業を完了した。　（菅　原）

第３節　調 査 方 法

高堂太遺跡（下高額館跡を含む）の発掘調査にあたり，遺構や出土遺物の位置を示すために，世界測地系に基づく国土座標を用いたグリッド網を設定した。高堂太遺跡は下高額館跡と水谷地古墳を含む範囲で，面積が133,300㎡と広大な範囲である。会津縦貫北道路建設予定地は，これら３遺跡を縦断する形で延伸する。さらに今回の１次調査は，高堂太遺跡と下高額館跡をまたぐ調査範囲となることから，３遺跡を同一のグリッド網に取り込み，高堂太遺跡の全域を覆うように100m四方の方眼網（大グリッド）を設定した。大グリッドは，Ｘ=181,600，Ｙ=4,500を原点とし，南北600m，東西400mの範囲に総計24個の大グリッドを設定した。大グリッドの呼称は，原点から南に向かって算用数字，東に向かってアルファベットを用い，それらを組み合わせてＢ３などとしている。さらに大グリッドを10m四方の方眼に細分し，総計100個の方眼網（小グリッド）を設定した。小グリッドの呼称は，大グリッドと同様な方法を用いて表記し，大グリッド－小グリッドの順に組み合わせてＢ３－Ｅ７などと表した。遺跡内の標高は，会津縦貫北道路の水準点から移動して計測の基準とした。

調査区内の表土は重機を用いて除去し，遺構検出面まで掘り下げた。遺構の精査は人力で行い，堆積状況や重複関係などを考慮し，その特徴にあわせて土層観察用の畦を設けて掘り下げている。また，調査区内を縦横に流れる１～３号溝跡や一部の自然流路跡は，検出面からの深さが２ｍと極めて深いこともあり，安全面を考慮して小型重機を用いて堆積土を除去している。なお堆積土の観察には，『新版標準土色帖』（1997年版）を用いた。堆積土の表記は，遺構外をアルファベット大文字「Ｌ」とローマ数字を組み合わせてＬⅠ・ＬⅡ…，遺構内はアルファベット小文字「ℓ」と算用数字を組み合わせℓ１・ℓ２…などとした。

遺構の位置などの図面記録にあたっては，小グリッドに基づく測量基準杭を調査区全域に打設し，１m四方の方眼に細分している。これらの交点を測点として図化している。地点の表記は，国土座標のＸ・Ｙ座標値をそのまま使用した。各遺構の平面図や断面図などの図化は，遺構の性格や規模などから１／20～１／40の縮尺で記録した。また１～３号溝跡の平面図や調査区全体の地形図は，航空写真測量によって図化している。

写真記録は，調査の進捗状況に合わせ，調査過程に応じて随時撮影している。カメラは35㎜判のモノクロ・カラーリバーサルフィルムを使用し，両者同一カットで撮影した。

発掘調査で得られた出土遺物および諸記録は，財団法人福島県文化振興事業団遺跡調査部において整理作業を行った。報告書刊行後は出土遺物・記録などの各種台帳を作成し，閲覧可能な状態で，財団法人福島県文化財センター白河館に収蔵・保管する予定である。　（福　田）

第２章　遺構と遺物

第１節　遺跡の概要と基本土層

１．遺構の分布と出土遺物（図２）

検出された遺構は，掘立柱建物跡７棟，土坑６基，溝跡６条，ピット群である。それらの帰属時期は，中世と近世末以降に大別され，前者は，平地城館跡の関連施設と考えられる。具体的には,1号溝跡が城館周囲を巡る堀跡であり，１・５・６号掘立柱建物跡は，内部の建物跡である。試掘調査の成果と併せると，近接位置で計画的に配置された建物群の様子が窺える。これに対して，２～４・７号掘立柱建物跡は，城館外部に展開する建物群であり，内部と比べると分布は散漫で，主軸方位も他とずれる３号掘立柱建物跡が含まれている。しかし，その中には，内部と遜色のない２号掘立柱建物跡のような格式の高い構造のものも認められる。このことから，城館内外の建物跡は，機能分担して同時存在したと推定される。

一方，近世末以降の遺構は，２～６号溝跡である。明治15年の地籍図から，用水路であったことが知られ，上限は，18世紀後半に比定される肥前陶磁器によって，知ることができる。また，下限に関しては，昭和39年の農地基盤整備で埋め立てられたことを確認しており，直前の姿は，前年撮影の航空写真に写っている（喜多方市史編纂委員会1995掲載）。こうした状況から，本調査区は，中世に在地領主の平地城館が営まれた後，江戸時代後期に農地へ姿を変え，昭和39年まで同じ土地利用が継続されたと考えられる。

調査で出土した遺物の量は，些少であった。内訳は，縄文土器片１点，土師器片68点，須恵器片44点，近世陶磁器片134点，金属製品３点，銭貨１点，鉄滓１点，石器１点，石製品７点である。残念ながら，今回は城館跡の年代を直接示す資料には，恵まれなかった。

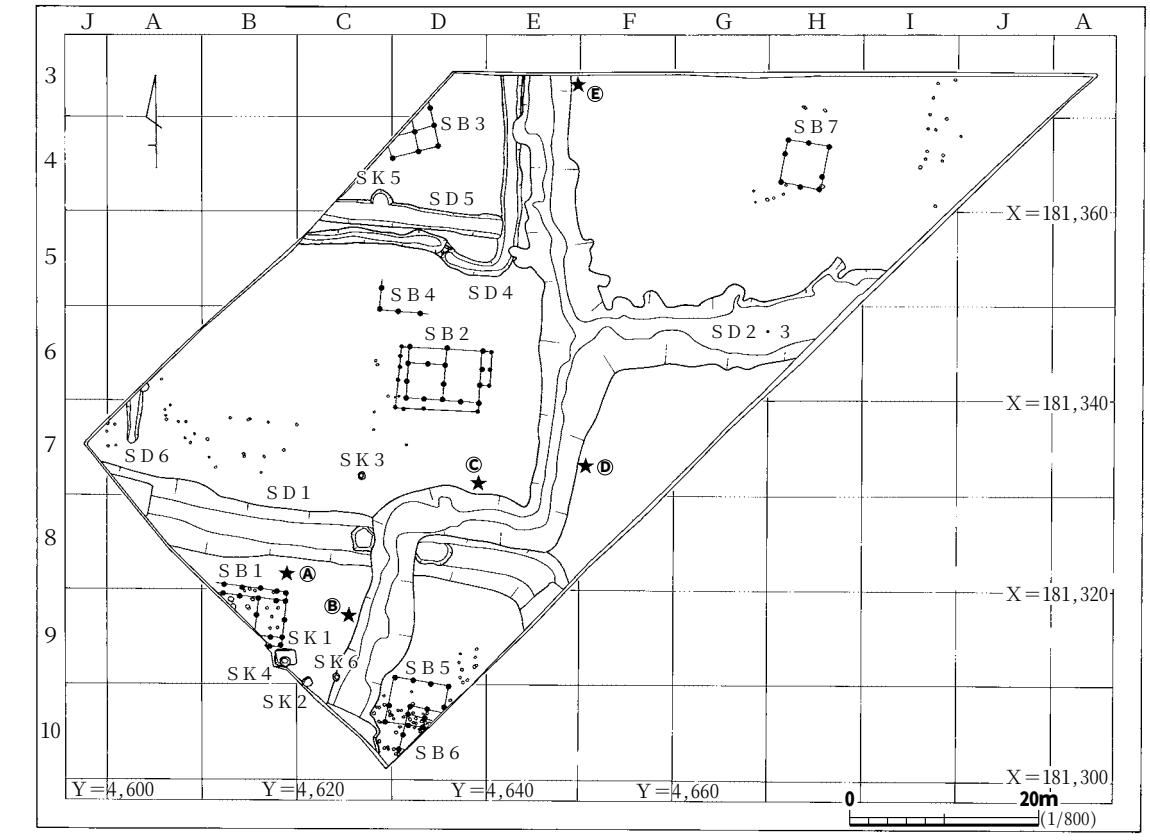
２．基本土層（図２）

基本土層は，１～３号溝跡の壁面を利用して，５地点で観察を行った。その結果，６層（ＬⅠ～ＬⅥ）に分けられた。各層の分布は一様でなく，柱状図で層理面を追っていくと，北東から南西に傾斜する旧地形が復元される。この傾斜は，縄文時代前期末以前に形成され，現地表面にも反映されている。

以下，各層の特徴についてまとめる。

ＬⅠ　：調査区全域を覆う表土，耕作土，盛土などを一括した。Ｂ～Ｅ地点は，当該層を除去した後で柱状図を作成している。

ＬⅡ　：中世以降の旧表土層である。分布は，調査区南部の１号溝跡（城館堀跡）内側に限定される。試掘調査で，調査区外に安定した分布が確認されており，城館跡大半の遺構検出



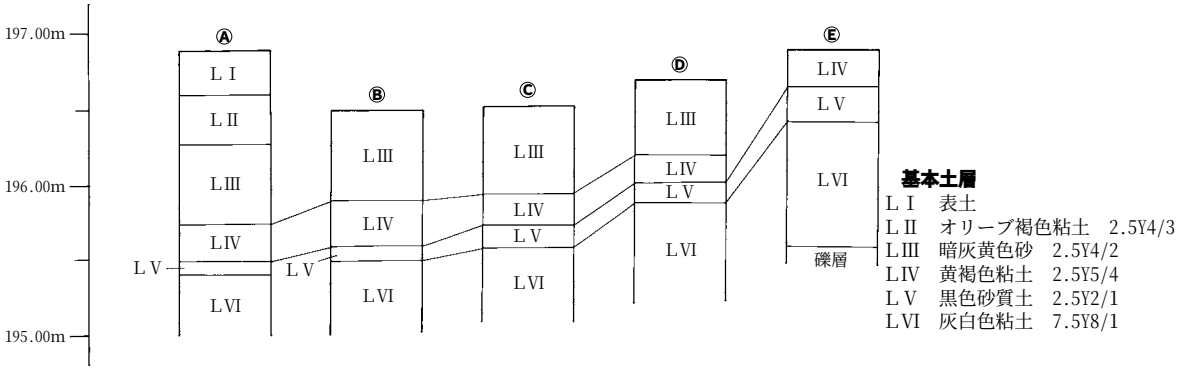


図２　遺構分布図・基本土層

面は，当該層上面であることが判明している。層中に，ロクロ土師器片・石器がみられ，次年度以降の調査では，下層遺構の検出も予想される。

ＬⅢ　：本調査区では，遺構検出面の約70％が当該層上面であった。平均70㎝の安定した層厚をもつ。やわらかく，締まりの無い性質で，検出作業は行いやすかった。しかし，掘りあげた遺構は，降雨ですぐ壁面が崩れてしまった。

ＬⅣ　：当該層上面は，調査区北端部の遺構検出面となっている。粘性が非常に強く，作業は苦労を強いられた。

ＬＶ　：真っ黒な色調を呈し，含有物として，径１～２㎝の沼沢パミスが顕著に認められる。この特徴から，縄文時代前期末頃の旧表土であったと考えられる。遺物包含層の可能性を考慮して，調査終盤に数カ所で深掘りをかけたが，遺物はまったく出土しなかった。

ＬVI　：不純物の混じらない良質な粘土層である。昭和30年代までは，煉瓦の原料に利用されていたことを，地元の聞き取りで確認している。１～３号溝跡の底面は，例外なくこの層まで達していた。

なお，調査区北東部では，３号溝跡の底面・壁面に，礫層が所々顔をのぞかせているのが観察された。柱状図では，Ｅ地点でＬVIとの関係が捉えられている。堆積状況の特徴は，上層と違って層理面が波打っており，洪水などによる急激な河川の氾濫堆積物と推測される。　（菅　原）

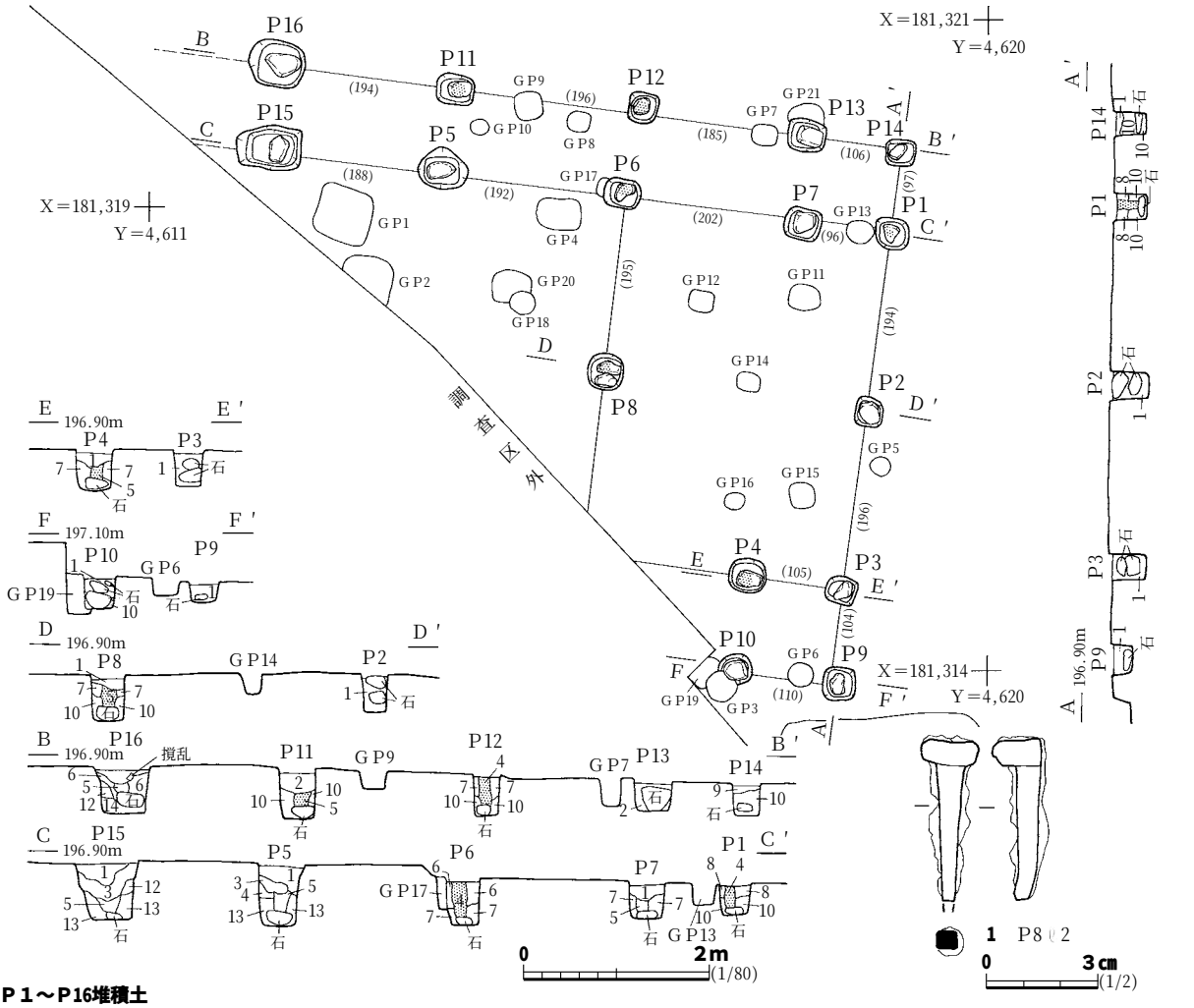
第２節　掘立柱建物跡

今回の調査では，掘立柱建物跡を７棟確認した。下高額館跡の北辺を区画する１号溝跡を境に，館跡の内外に建物跡が分布する。１・５・６号掘立柱建物跡は館跡の内部に位置し，２・３・４・７号掘立柱建物跡は１号溝跡の北側に分布する。これらの建物跡は出土遺物に乏しく，明確な年代を把握できたものはない。また，館跡内部に位置する１号掘立柱建物跡は，下高額館跡と密接に関連する可能性が高いが，建物跡の大部分が次年度以降の調査予定区域へと続くため，その規模や構造などについては，２次調査以降の検討課題として残る。

１号掘立柱建物跡　ＳＢ１（図３，写真６・７）

遺　構　本建物跡は調査区の南西端，Ｂ３－Ｂ８・９グリッドに位置する。下高額館跡の北辺を区画する１号溝跡の南に分布し，館跡の北東隅の区域に相当する。周囲は南東側に向かってわずかに低く傾斜する地形で，その標高は196.6～196.8mである。遺構検出面はＬⅡとしたオリーブ褐色粘土の上面である。本建物跡は周辺に点在する柱穴のいくつかと重複し，Ｐ10はＧＰ８より古く，ＧＰ19より新しい。柱穴群は本建物跡の新旧に造られたものを含んでいる。また，本建物跡の南には１・２・４号土坑，北側には１号溝跡が近接する。特に本建物跡の北側庇列と１号溝跡の南側上端部との距離は約３ｍと近い。

本建物跡は調査区際に分布し，南西側の約半分は次年度以降の調査区へ続いている。そのため規模や構造について不明な部分が多い。確認できた柱穴の配置から，身舎部分の柱間は南北２間で，Ｐ15・16の西側では半間間隔の柱穴が確認できないことから，身舎部分が３間以上となると判断される。身舎内部ではＰ８が検出され，いくつかのスペースに仕切られると推定される。南北および東側に庇が取り付く建物跡と判断した。建物跡の主軸方向は，東側柱列を基準として，北に対し８°東に傾く。身舎の規模は，東側柱列Ｐ７－Ｐ４間に柱穴は確認できないが，その距離は392㎝を測る。北側柱列は全体が不明であるが，柱間距離は188～202㎝を測る。庇の柱間は185～196㎝とほ



Ｐ１～Ｐ16堆積土

1　黒褐色土　2.5Y2/2（黄褐色粘土塊を多量，炭化物を極少量含む）
2　暗オリーブ褐色粘質土　10YR3/3（黄褐色粘土塊を多量含む）
3　黒色土　10YR2/1（黄褐色粘土粒を少量含む）
4　暗オリーブ褐色土　2.5Y3/3（柱痕跡，炭化物・黄褐色土粒を極少量含む）
5　黒褐色粘土　10YR2/2（柱痕跡，黄褐色土粒を極少量含む）
6　暗褐色土粘土　10YR3/3（黄褐色粘土塊・黒色粘土を含む）
7　黒褐色粘土　2.5Y3/2（黄褐色粘土を含む）
8　暗灰黄色粘土　2.5Y4/2（黄褐色粘土塊を多量含む）
9　オリーブ褐色砂質土　2.5Y4/3（着褐色粘土塊を多量含む）
10　黒褐色粘土　2.5Y3/2（黄褐色粘土粒を少量含む）
11　黄褐色粘土　2.5Y5/4（黒色土を少量含む）
12　褐色粘土　10YR4/4（黄褐色粘土粒を極少量，黒色粘土を含む）
13　暗褐色粘土　10YR3/3（黄褐色粘土塊を多量含む）
14　黒褐色粘土　2.5Y3/2（黄褐色粘土塊を少量，酸化鉄を含む）

図３　１号掘立柱建物跡・出土遺物

ぼ一定する。庇１間の幅は，北側庇列で97㎝，東側と南側96～110㎝で，身舎１間の約半間の幅となる。

柱穴の平面形は円形または隅丸方形を呈する。規模は直径が30～65㎝を測り，Ｐ15・16が最も大きい。検出面から底面までの深さは，25～70㎝を測る。Ｐ５・15など削平の少ない西側の区域に分布する柱穴が深くなるが，底面の標高は196.2～196.3mに集中している。柱穴の形状は，基本的に円筒形に掘り込まれ，周壁は垂直になる。Ｐ15・16は周壁上端部の立ち上がりが緩やかになる。また，本建物跡のすべての柱穴で根石が確認できた。根石の数は１～２個で，その形や大きさに共通性は見られない。さらに特段加工されていない自然石をそのまま用いている。根石の出土状況は，Ｐ６～８は柱穴の底面に据えられ，その上面から柱痕跡が観察できる。これらは構築当初の位置を保っている可能性が高い。Ｐ２・16は根石が堆積土中に浮いた状態で確認でき，柱材の抜き取り時

に動いていると判断した。掘形内の堆積土は，掘形埋土と柱痕跡に大別できる。掘形埋土は黒褐色粘土と黄褐色を基調とする粘土の混土で，それらが交互に堆積して固くしまる。柱痕跡は黒褐色粘土で，Ｐ１・４～８・11・12・15・16で確認した。その断面観察から本建物跡の柱材には，直径10～15㎝の丸太材が用いられていたと推定している。

遺　物　本建物跡のＰ８・15から鉄釘が各１点出土した。Ｐ８は柱痕跡，Ｐ15は掘形埋土から出土した。そのうち遺存状態が良いものを図示した。鉄釘は全体的に錆化による変形が著しいが，いわゆる和釘である。釘の頭部がＬ字に折り曲げられ，断面は四角形をなす。規模は全長4.5㎝で，1.5寸釘と推定される。また，釘表面に木質の痕跡は認められない。

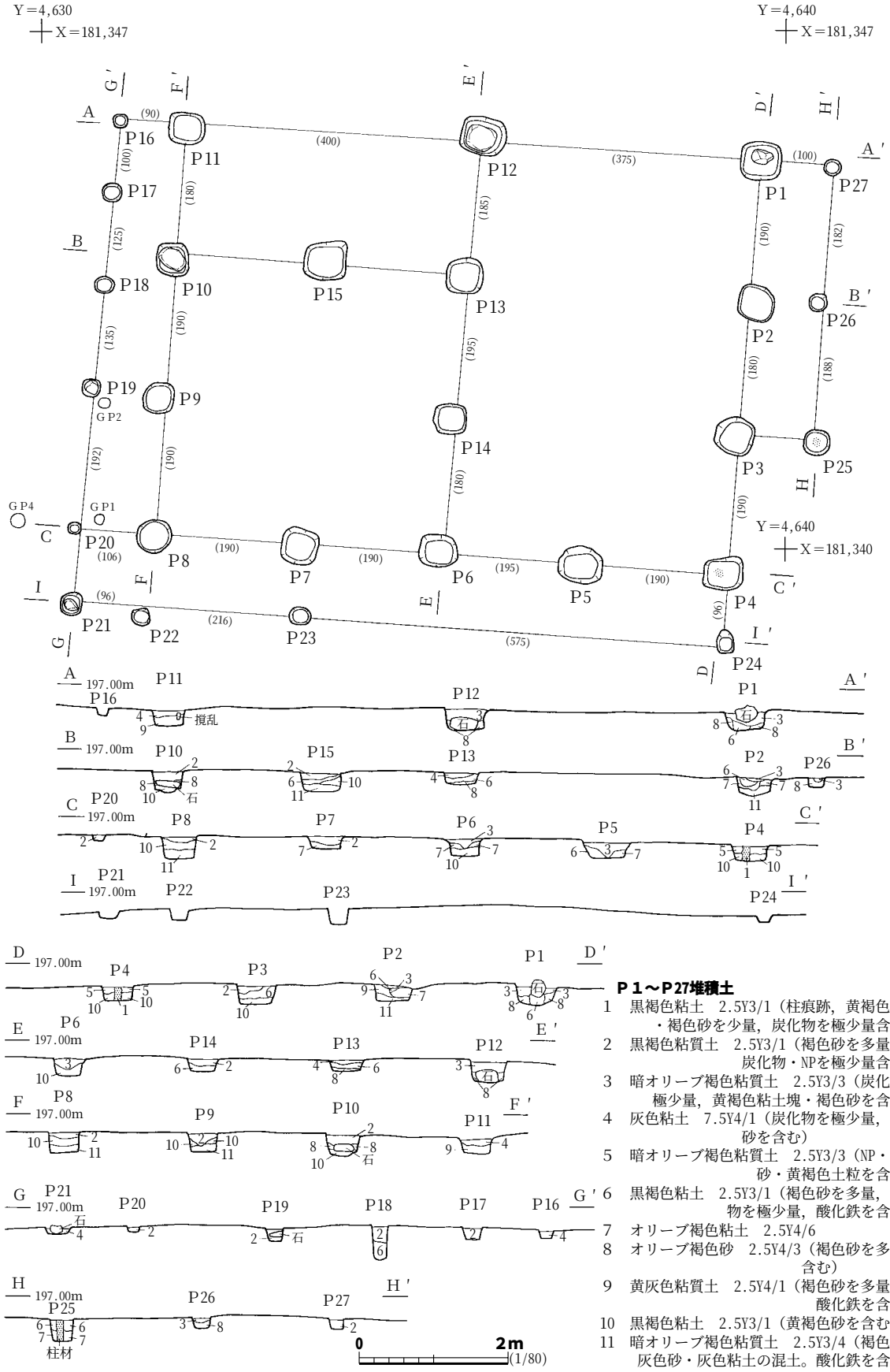
まとめ　本建物跡は四方に庇が取り付く南北２間×東西３間以上の建物跡と推定される。下高額館跡の内部に位置し，その長軸方向が１号溝跡と平行するなど，館跡の主要な建物跡を構成する可能性が高い。しかし，建物跡の大半が調査区外へと続くため，構造・規模や館跡内部での建物配置などは，次年度以降の調査で改めて検討する必要がある。本建物跡の所属時期は，年代を特定できる遺物がなく不明であるが，１号溝跡の年代観を援用すれば，中世まで遡る可能性がある。

２号掘立柱建物跡　ＳＢ２（図４，写真５・８・９）

遺　構　本遺構は調査区の中央部，Ｂ３－Ｄ６・７，Ｅ６グリッドに位置する掘立柱建物跡である。１号溝跡の北側に分布し，下高額館跡の外部に相当する。周囲は近年の圃場整備により削平された区域で，標高196.8m前後の平坦な地形となる。遺構検出面はＬⅢとした暗灰黄色砂の上面である。本建物跡と重複する遺構はない。周辺には柱穴群もわずか数基が点在するだけで，１号溝跡から北に約11m，２号溝跡から西に約５ｍの距離に分布する。

本建物跡は身舎部分が南北３間×東西４間で，南側と西側に庇を伴う。東側は北２間分に庇が取り付く。主軸方向は，東側柱列を基準として，北に対し５°東に傾く。身舎部分の平面形は長方形をなすが，南側柱列のＰ５・７に対応する北側柱列の柱穴が欠落する。身舎内部はＰ６－Ｐ12で東西に二分され，さらに西側はＰ10－Ｐ13で仕切られる。間取りは東側が「土間」，西側が「納戸」と「座敷」になるのであろう。身舎部分の規模は，東側柱列Ｐ１－Ｐ４間と西側柱列Ｐ８－Ｐ11間が56㎝，北側柱列Ｐ１－Ｐ11間が775㎝，南側柱列Ｐ４－Ｐ８間が770㎝を測る。各柱間距離は180～195㎝で，ほぼ一定している。庇の柱列は，基本的に身舎を構成する柱穴と対応する位置に配置される傾向が見られる。しかし西側のＰ16－Ｐ19間は，２間分を３分割する位置に配置され，その柱間距離は北から100㎝，125㎝，135㎝と一定しない。南側の庇列は，柱穴が浅いこともあり，Ｐ23－Ｐ24間が欠落している。庇１間の幅は，西側が90～106㎝，南側が96㎝，東側が106㎝を測り，身舎部分の柱間１間の約半間となる。

柱穴は総数27基で構成され，Ｐ１～15が身舎，Ｐ16～27が庇に相当する柱穴である。平面形は身舎部分の柱穴では円形または隅丸方形となり，庇の柱穴は円形となる。規模は，身舎部の柱穴の直径が40～60㎝と大きく，庇の柱穴の直径が16～34㎝と小さい。検出面から底面までの深さは，身舎



Ｐ１～Ｐ27堆積土

1　黒褐色粘土　2.5Y3/1（柱痕跡，黄褐色土粒・褐色砂を少量，炭化物を極少量含む）
2　黒褐色粘質土　2.5Y3/1（褐色砂を多量に，炭化物・NPを極少量含む）
3　暗オリーブ褐色粘質土　2.5Y3/3（炭化物を極少量，黄褐色粘土塊・褐色砂を含む）
4　灰色粘土　7.5Y4/1（炭化物を極少量，褐色砂を含む）
5　暗オリーブ褐色粘質土　2.5Y3/3（NP・褐色砂・黄褐色土粒を含む）
6　黒褐色粘土　2.5Y3/1（褐色砂を多量，炭化物を極少量，酸化鉄を含む）
7　オリーブ褐色粘土　2.5Y4/6
8　オリーブ褐色砂　2.5Y4/3（褐色砂を多量に含む）
9　黄灰色粘質土　2.5Y4/1（褐色砂を多量に，酸化鉄を含む）
10　黒褐色粘土　2.5Y3/1（黄褐色砂を含む）
11　暗オリーブ褐色粘質土　2.5Y3/4（褐色砂・灰色砂・灰色粘土の混土。酸化鉄を含む）

図４　２号掘立柱建物跡

部分が18～32㎝を測り，底面の標高は196.5～196.6mの間で一定する。庇部分の柱穴の深さは10～25㎝のものが大半を占め，Ｐ18が最も深く46㎝を測る。

根石はＰ１・10・12・19・21で遺存していた。Ｐ１・10・12は身舎部分の柱穴で，根石は直径25～40㎝，厚さ10～20㎝と大きい。Ｐ12の根石は底面上に据えられた状態であるが，Ｐ１・10の根石は底面から浮いた状態で確認した。Ｐ19・21は庇部分の柱穴で，根石は柱穴の直径にあわせて直径20㎝，厚さ10㎝前後の扁平な小石を使用している。また，いずれの根石も特段加工を施さない自然石をそのまま使用している。掘形内の堆積土は，掘形埋土と柱痕跡に分けた。掘形埋土は黒褐色または黄褐色を基調とする粘質土とＬⅢを起源とする暗灰黄色砂が交互に堆積する状況が見られる。柱痕跡が明瞭に観察できた柱穴は，Ｐ４・25と少ない。柱痕跡の観察から，本建物跡の柱材には直径12㎝前後の丸太材が用いられていたと考えている。また，Ｐ25では柱材の一部が遺存していた。樹種は不明である。

まとめ　本建物跡は下高額館跡の外部に位置するが，柱穴の規模や柱間距離などの特徴は，１号掘立柱建物跡に類似する。この特徴を積極的に評価すれば，館跡の外部に建物跡群が展開すると推定されるが，その性格を推定できる所見は得られていない。本建物跡を構成する柱穴からは，遺物が出土していないため，詳細な年代は不明である。

３号掘立柱建物跡　ＳＢ３（図５，写真10）

遺　構　本建物跡は調査区の北西端，Ｂ３－Ｄ３・４グリッドに位置する。周囲は標高197.0m程の平坦面である。重複する遺構はないが，南側と東側には４・５号溝跡が分布している。遺構検出面はＬⅣとした黄褐色粘土の上面である。

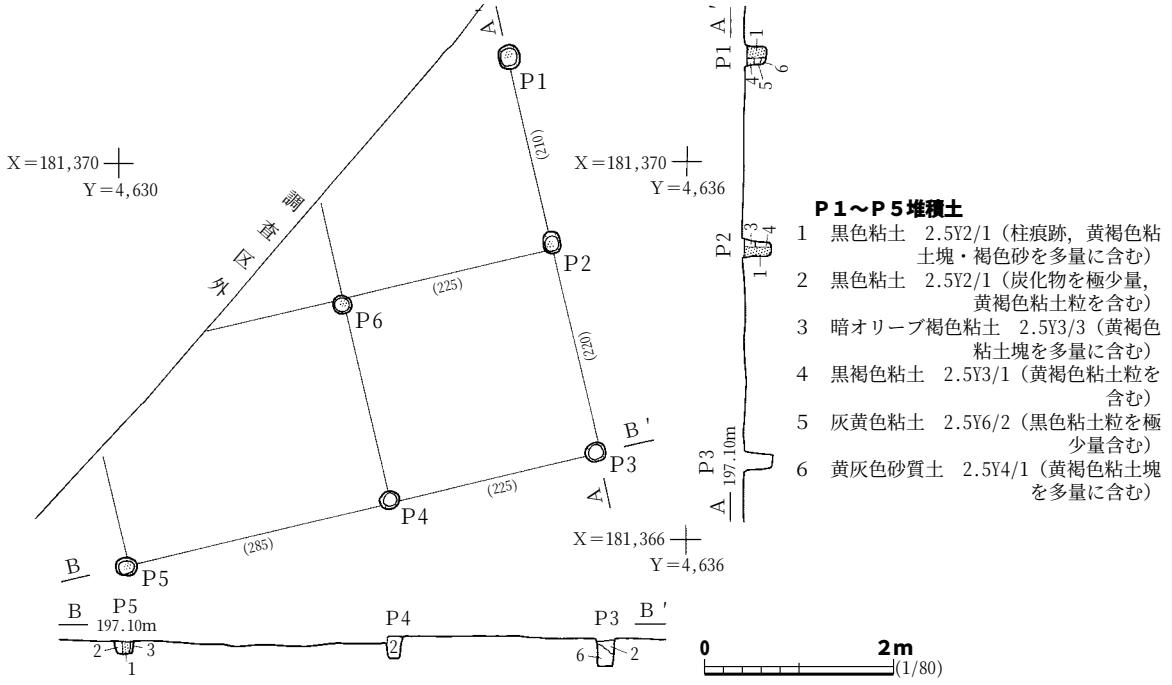


図５　３号掘立柱建物跡

本建物跡は調査区際に位置し，その南東隅を確認した程度で，規模や構造は不明である。本建物跡の構造は，南北が２間，東西が２間の総柱建物跡と推定している。主軸方向は北に対して13°西に傾く。規模は東側柱列Ｐ１－Ｐ３間が430㎝，南側柱列Ｐ３－Ｐ５間が510㎝を測る。柱間距離は東側柱列のＰ１－Ｐ２間が210㎝，Ｐ２－Ｐ３間が220㎝，南側柱列ではＰ３－Ｐ４間が225㎝，Ｐ４－Ｐ５間が285㎝と東側１間が狭い。

柱穴の平面形は，いずれも円形を基調とする。規模は直径が20～25㎝と小さく，検出面からの深さは15～30㎝と浅い。検出面の高さの違いから各柱穴の深さは異なるが，浅いＰ５を除いて底面の標高は196.7m前後に揃う。柱穴内の堆積土は，掘形埋土と柱痕跡に分けられる。掘形埋土は黒褐色粘土と褐色を基調とする粘質土が交互に堆積するもので，硬くしまる。柱痕跡はＰ３・４以外の柱穴で確認された。断面観察から直径10㎝前後の細い丸太材を用いていることが分かる。

まとめ　本建物跡は，遺物が出土していないため年代や性格は不明である。館跡に関連すると推定される１号掘立柱建物跡とは，その主軸方向が大きく異なる。

４号掘立柱建物跡　ＳＢ４（図６，写真11）

遺　構　本建物跡は調査区のほぼ中央部，Ｂ３－Ｃ５・６，Ｄ６グリッドに位置する。周囲は標高196.8mの平坦な地形となるが，近年の圃場整備で大規模に削平された区域であるため，柱穴の遺存状態も極めて悪い。重複する遺構はないが，本建物跡の約４m南側には，主軸方向を同じくする２号掘立柱建物跡が近接している。遺構検出面はＬⅢとした暗灰黄色砂の上面である。

本建物跡は削平が著しく，建物跡の南西隅，南側柱列の２間と西側柱列の１間を確認したのみである。そのため本建物跡の全体的な規模や構造は不明である。西側柱列を基準とした方向は，北に対して６°東に傾く。遺存する部分の柱間距離は，西側柱列のＰ１－Ｐ２間が235㎝を測る。南側柱列のＰ２－Ｐ３間が205㎝，Ｐ３－Ｐ４間が235㎝と西側１間が狭くなる。

柱穴の平面形は，全体的にやや丸みを帯びた隅丸方形を基調とするものが多い。Ｐ２・３は比較的整った方形となる。規模は直径26～36㎝，検出面からの深さは最大でも12㎝と極めて浅い。底面は平坦でなく，柱痕跡と同じ位置で，直径10㎝程の浅いくぼみが認められる。柱穴の堆積土は２層

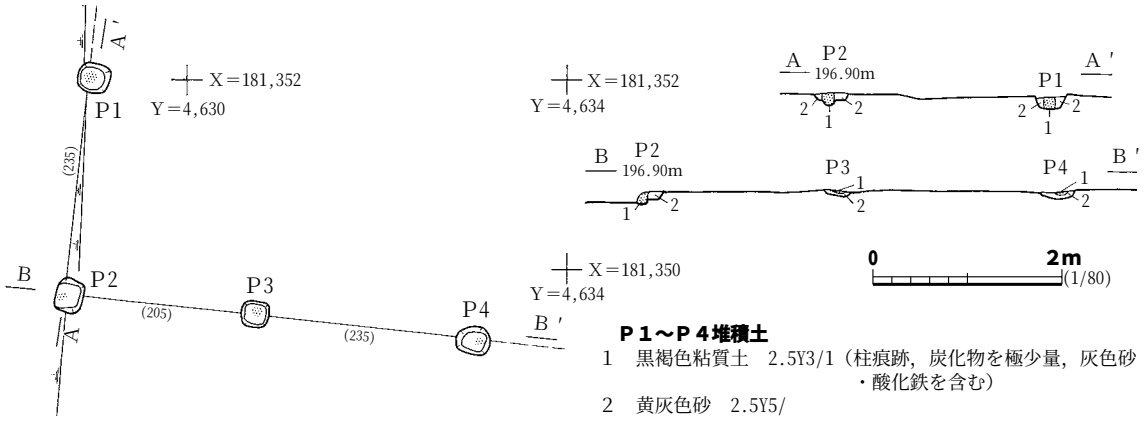


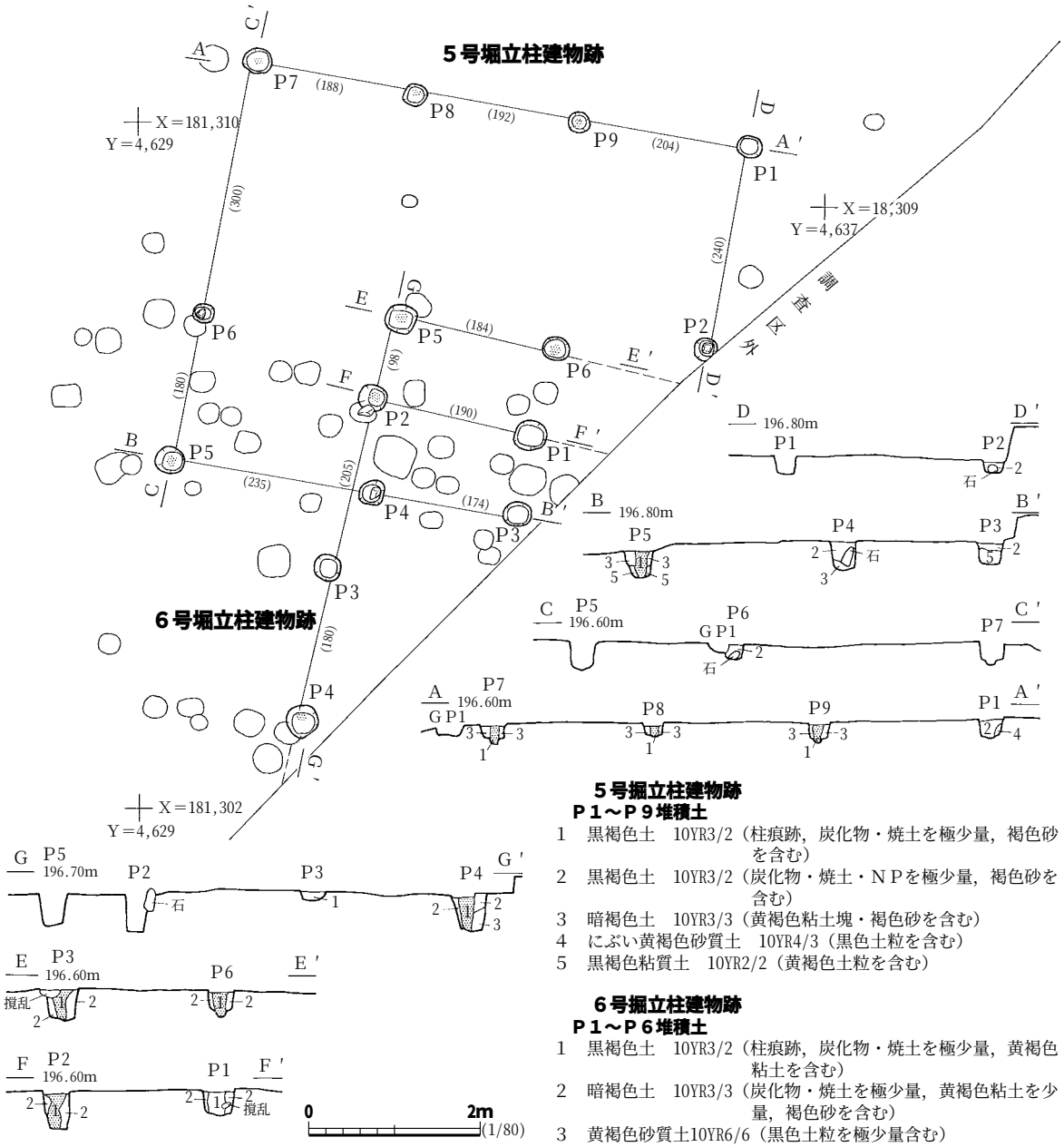
図６　４号掘立柱建物跡

に分けた。１層は柱痕跡で，２層は掘形埋土となる黄灰色砂である。柱痕跡の観察から，本建物跡の部材として直径10㎝程の丸太材が用いられていたと推定される。

まとめ　本建物跡は遺存状態が悪く，その構造や規模が不明である。また出土遺物もなく，詳細な年代は不明である。２号掘立柱建物跡の北側に近接し，その主軸方向が一致する。本建物跡の配置や柱穴の規模などの特徴から，２号掘立柱建物跡に付属する建物跡と推定される。

５号掘立柱建物跡　ＳＢ５（図７，写真12）

遺　構　本建物跡は調査区の南端部，Ｂ３－Ｃ10，Ｄ９・10グリッドに位置する。１号溝跡から南側約10mの位置に分布し，下高額館跡の北西隅の区域に相当する。周囲は標高196.4m程の平坦



５号掘立柱建物跡
Ｐ１～Ｐ９堆積土
1　黒褐色土　10YR3/2（柱痕跡，炭化物・焼土を極少量，褐色砂を含む）
2　黒褐色土　10YR3/2（炭化物・焼土・ＮＰを極少量，褐色砂を含む）
3　暗褐色土　10YR3/3（黄褐色粘土塊・褐色砂を含む）
4　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3（黒色土粒を含む）
5　黒褐色粘質土　10YR2/2（黄褐色土粒を含む）

６号掘立柱建物跡
Ｐ１～Ｐ６堆積土
1　黒褐色土　10YR3/2（柱痕跡，炭化物・焼土を極少量，黄褐色粘土を含む）
2　暗褐色土　10YR3/3（炭化物・焼土を極少量，黄褐色粘土を少量，褐色砂を含む）
3　黄褐色砂質土10YR6/6（黒色土粒を極少量含む）

図７　５・６号掘立柱建物跡

な地形である。本建物跡は６号掘立柱建物跡と同一場所に分布するが，柱穴間の重複関係は確認できず，新旧関係は不明である。また周辺は柱穴群が集中する区域で，そのうちのＣ10ＧＰ１と重複し，本建物跡のほうが古い。遺構検出面は表土直下で，ＬⅢとした暗灰黄色砂の上面である。

本建物跡は南東隅が調査区外へと続くが，南北柱列３間，東西柱列２間の側柱建物跡と推定される。平面形は長方形を呈し，その主軸方向は北に対して10°東に傾く。規模は，北側柱列のＰ１－Ｐ７間が584㎝，西側柱列のＰ５－Ｐ７間が480㎝を測る。柱間距離は北側柱列では188～204㎝を測る。南側柱列では174～235㎝と北側柱列とは異なる。東西柱列２間の柱間距離は180～300㎝と一定せず，Ｐ２・６は対称の位置にない。

柱穴の平面形は円形を基調とする。規模は直径が24～32㎝を測り，Ｐ５が最も大きい。検出面からの深さは15～30㎝で，その底面の標高は196.1～196.2ｍとなる。またＰ２・４・６は掘形内部に直径10㎝程の根石が確認された。柱穴内の堆積土は，掘形埋土と柱痕跡に大別できる。掘形埋土は２～５層に分け，黄褐色粘土と褐色砂を含み硬くしまる。柱痕跡はＰ５・７～９で確認できた。土層断面の観察から，本建物跡の柱材には直径10㎝前後の細い丸太材が用いられたと考えている。

まとめ　本建物跡は出土遺物がなく，詳細な年代は不明である。周辺に位置する１・６号掘立柱建物跡と比較すると，その建物跡の構造や柱間距離などに違いが認められ，これらとは時期・性格が異なる可能性が高い。

６号掘立柱建物跡　ＳＢ６（図７，写真12）

遺　構　本遺構は調査区南端，Ｂ３－Ｄ10グリッドに位置する掘立柱建物跡である。下高額館跡の北辺を区画する１号溝跡の南側で，館跡の北東端に相当する。周囲は近年の圃場整備により削平されて，標高196.4ｍ程の平坦な地形となる。本建物跡は５号掘立柱建物跡と同一場所に建てられているが，直接的な重複関係はなく，新旧関係は不明である。また本遺構の周辺には柱穴が多数検出され，それらとの重複関係では，本建物跡で構成する柱穴の方が新しい。遺構検出面は表土直下で，ＬⅢとした暗灰黄色砂の上面である。

本建物跡の大半は調査区外へと続き，建物跡の北西隅を確認した程度に止まる。そのため建物跡の全体的な構造や規模は不明である。検出できた柱穴の位置から，北側に庇が取り付く構造と推定される。身舎はＰ１～４で構成され，Ｐ５・６は庇に相当する。建物跡の主軸方向は，西側柱列を基準として，北に対し14°東に傾く。柱間距離は，身舎の北側柱列Ｐ１－Ｐ２間が190㎝，西側柱列Ｐ２－Ｐ３間が205㎝，Ｐ３－Ｐ４間が180㎝を測る。庇に該当するＰ５－Ｐ６間は184㎝である。庇１間の幅は，Ｐ２－Ｐ５間が98㎝を測り，身舎１間の約半間の幅となる。

柱穴の平面形は円形を基調とするが，Ｐ１・５は隅丸方形になる。規模は直径30～40㎝を測り，Ｐ１・４が最も大きい。検出面から底面までの深さは，Ｐ３が最も浅く10㎝，その他は30～44㎝と比較的深い。柱穴の底面は，浅いＰ３を除いて，西側柱列のＰ２・４は標高196.0ｍ，庇柱列のＰ５・６は196.1ｍとなる。掘形内の堆積土は柱痕跡と掘形埋土に分けた。掘形埋土は２層とした黄褐

色粘土と褐色砂を含む暗褐色土で，硬くしまっている。柱痕跡は黒褐色土を基調とし，Ｐ３を除いてすべての柱穴で確認できた。土層観察から，本建物跡の部材には直径12～18㎝の丸太材が用いられたと推定している。

まとめ　本建物跡からは遺物が出土していないため，所属時期は不明である。また建物跡の一部を確認した程度であるが，北側に半間幅の庇が取り付く構造と推察している。本建物跡の西側に位置する１号掘立柱建物跡と密接に関連して建てられていた可能性が高い。

７号掘立柱建物跡　ＳＢ７（図８，写真13）

遺　構　本建物跡は調査区の北東部，Ｂ３－Ｈ４グリッドに位置する。周囲は圃場整備により削平され，標高197.4mの平坦な地形となる。周辺には明確な建物跡などは確認できず，柱穴群がわずかに点在する程度である。そのうちＰ３はＨ４ＧＰ２と重複し，本建物跡のほうが古い。遺構検出面は表土直下のＬⅣ上面である。

本建物跡は東西２間，南北２間の側柱建物跡である。東側柱列を基準とする方向は，北に対して13°東に傾く。平面形は長方形を呈する。規模は北側柱列Ｐ１－Ｐ７間が434㎝，南側柱列Ｐ３－Ｐ５間が442㎝，東側柱列Ｐ１－Ｐ３間が476㎝，西側柱列Ｐ５－Ｐ７間が454㎝を測る。柱間距離は，南北柱列が216～222㎝と比較的一定となるが，東西柱列ではＰ２・６がそれぞれ対称の位置になく，柱間距離も一定していない。

柱穴の平面形は円形を基調とするが，Ｐ４・５・７は長方形となる。柱穴の直径が24～40㎝を測

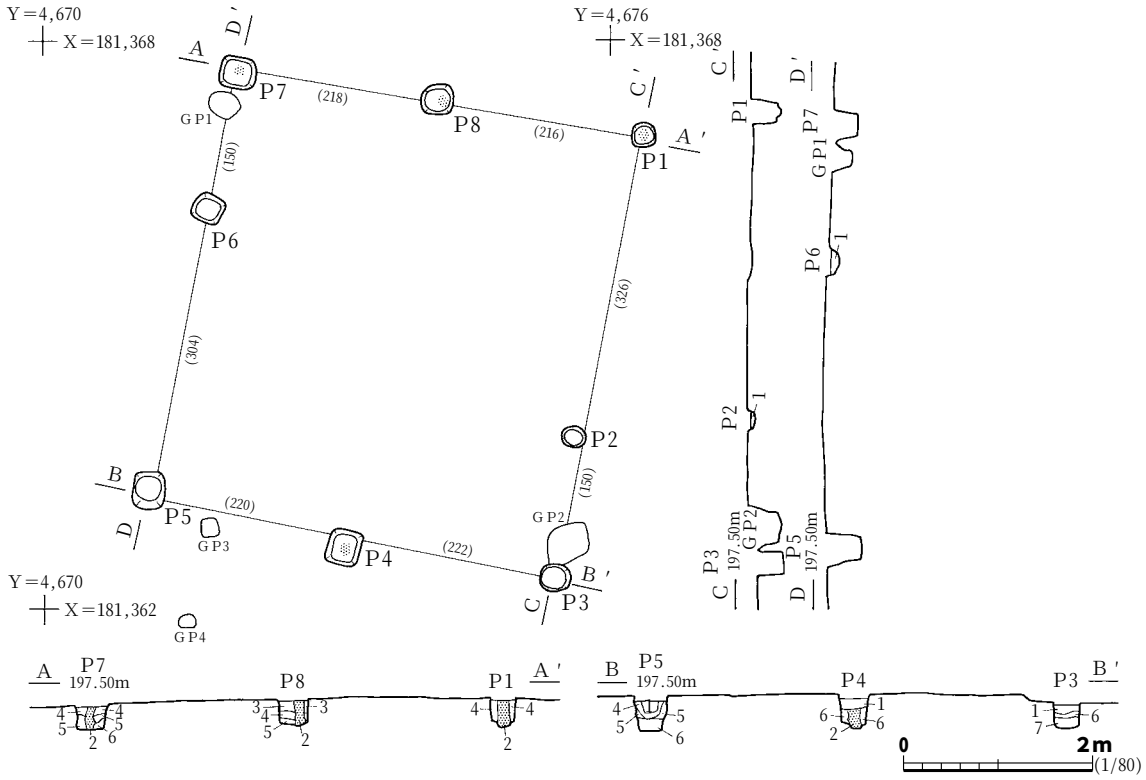


図８　７号掘立柱建物跡

り，Ｐ２が最も小さい。Ｐ５は長辺が40㎝，短辺が32㎝である。検出面から底面までの深さは，Ｐ２・６が10㎝と浅い。それら以外の柱穴は30～38㎝と深く，底面の標高は197.0m前後となる。柱穴内の堆積土は，掘形埋土と柱痕跡に大別される。掘形埋土は，灰褐色砂を含む黒色粘土と灰白色粘土の混土で，硬くしまる。柱痕跡はＰ１・４・７・８で確認できた。柱痕跡は炭化物を含む黒褐色粘土である。土層断面の観察から，本建物跡の柱材には直径10㎝前後の細い丸太材が用いられたと判断している。

まとめ　本建物跡は館跡の外部で確認された側柱建物跡である。遺物が出土していないため，明確な年代や性格は不明である。本建物跡の周辺に関連する遺構は確認できないが，主軸方向が館跡内部に分布する６号掘立柱建物跡と共通する特徴が認められ，館跡の外部に展開する建物跡の一つになる可能性も考えられる。また試掘調査の結果，本建物跡の北側でも柱穴が確認されていることから，周辺に建物跡が存在する可能性が高い。次年度以降の調査で建物群の分布を検討する必要がある。（福　田）

第３節　土　　坑

今回の１次調査で確認した土坑は６基である。これらの土坑は出土遺物に乏しく，性格や年代などを特定できたものはない。しかし，試掘調査の成果をあわせて土坑の分布を概観すれば，下高額館跡の北端を区画する１号溝跡の南側，館跡の内部に集中する傾向が見られる。２・４号土坑は円筒形土坑で，１号掘立柱建物跡の南側に近接する。これら土坑の性格を伺う資料として，本書第１編に所収した荒屋敷遺跡において，形態や規模が極めて類似する円筒形土坑が多数確認されている。荒屋敷遺跡の成果を評価すれば，年代は中世に属し，生活用水の貯水施設や生活ゴミを投棄する穴などの性格が考えられる。

１号土坑　ＳＫ１（図９，写真14）

本土坑は調査区の南西端，Ｂ３－Ｂ９グリッドに位置し，下高額館跡の北東端に相当する。周囲の標高は196.5mの平坦面で，南に向かってわずかに低く傾斜する地形である。４号土坑と重複し，本土坑の方が古い。北側には１号掘立柱建物跡，南側には２号土坑が近接する。遺構検出面は，表土直下のＬⅡとした褐色を基調とする粘土層の上面である。

平面形は長方形をなし，規模は長辺が2.2m，短辺が1.7m，検出面からの深さが0.15mと極めて浅い。周壁は垂直気味に立ち上がり，西壁から南壁にかけて緩やかな傾斜となる。底面は平坦であるが，中央部に向かってわずかに低くなる。遺構内堆積土は２層に分けた。１層は黄褐色粘土塊を多量に含む黒褐色粘質土で，人為的に埋め戻されている。２層は黄灰色粘土で，基盤土の崩落土を含み周壁際に薄く堆積することから自然堆積と判断した。

本土坑からは土師器片が１点出土したが，摩滅した小破片のため図示していない。また出土状況

も堆積土中からの出土であるため，本土坑の性格や年代を特定できない。

２号土坑　ＳＫ２（図９，写真14）

本土坑は調査区南西端，Ｂ３－Ｃ９・10グリッドに位置し，下高額館跡の北東端に相当する。周囲は標高196.5mの平坦面であるが，南側に向かってわずかに低くなる。重複する遺構はないが，北側に１号掘立柱建物跡，１・４号土坑が近接する。遺構はＬⅡ上面で検出した。

本遺構は円筒形の土坑で，規模は上端部が直径1.00m，底面が直径0.85mを測る。検出面からの深さは0.65mと深い。周壁は垂直気味に立ち上がる。底面は微細な凹凸があるが，ほぼ平坦になる。遺構内堆積土は３層に分けた。黒褐色土と黄灰色粘質土が互層をなして堆積し，いずれの堆積土も黄褐色粘土塊と灰色砂の混土となる。堆積土の性状から，土坑の廃絶に伴ない人為的に埋め戻されたと判断した。

本遺構は円筒形に掘り込まれた土坑で，形態や規模などは近接する４号土坑と類似している。１号掘立柱建物跡とも近接し，これらに関連した遺構と考えている。所属時期は出土遺物がなく詳細は不明であるが，１号掘立柱建物跡と同じく，中世に属する可能性がある。

３号土坑　ＳＫ３（図９，写真14）

本土坑は調査区中央付近，Ｂ３－Ｃ７グリッドに位置する。１号溝跡の北側で，下高額館跡の外部に分布する。周囲は標高196.8m前後の平坦な地形となるが，近年の圃場整備などで本土坑の上半部が大きく削平されている。重複する遺構はない。遺構検出面はＬⅢとした暗灰黄色砂の上面で確認した。

平面形は隅丸方形を呈する。規模は一辺の長さが0.6m，検出面から底面までの深さは0.2mと浅い。遺構内堆積土は５層に分けた。褐色を基調とする粘質土と黒褐色粘質土が互層をなしてレンズ状に堆積する。２・３層は灰色砂が薄く縞状に混入している。４層は黄灰色砂質土で，ＬⅢを起源とする自然流入土である。それぞれの堆積土層の観察から，自然流入土により埋没したものと判断した。本土坑はＬⅢとした砂層を掘り込んでいるためか，周壁の崩落が顕著で緩やかな傾斜で立ち上がる。底面は細かな凹凸が認められるものの平坦で，わずかに南に向かって低くなる。

本土坑は遺物が出土していないため，性格や年代は不明である。

４号土坑　ＳＫ４（図９，写真14）

本土坑は調査区の南西端，Ｂ３－Ｂ９グリッドに位置し，下高額館跡の北東端に相当する。周囲は標高196.5mほどの平坦面で，わずかに南に向かって低くなる。１号土坑と重複し，本土坑の方が新しい。北側には１号掘立柱建物跡，南には２号土坑が近接している。遺構検出面はＬⅡ上面である。

本土坑は円筒型に掘り込まれた土坑である。規模は上端部の直径が1.0～1.1mを測り，検出面か

ら底面までの深さは0.8mである。周壁の上端部は，崩落などの影響を受けて大きく開くが，中位から下半部にかけては急峻に立ち上がる。底面の直径は0.4mで，上端部に比べかなり小さくなる。

遺構内堆積土は４層に分けた。１・２層は調査時に降雨のため崩壊して図化していないが，レンズ状堆積を示し，土坑が半ば埋め戻された段階で，開口部分に堆積した自然流入土と判断した。２層はやや砂質の黒色土で，炭化物をわずかに含んでいる。３層は黄褐色土塊と黒色土の混土で，人為堆積と判断した。４層は底部上を薄く覆う黒色粘土で，３層に比べ均質な土質であることから，機能時に流入した自然堆積土と考えている。

本土坑からは遺物が出土していないため，その性格や年代は不明である。円筒形に掘り込まれた土坑で，廃絶に伴い人為的に埋め戻されているなど，近接する２号土坑と類似する特徴が見られる。

５号土坑　ＳＫ５（図９，写真14）

本土坑は調査区の北西部，Ｂ３－Ｃ４グリッドに位置する。調査時には，５号溝跡に壊された古い時期の土坑と考えていたが，堆積土などの観察から，５号溝跡の周壁が外側に張り出した部分と判断した。

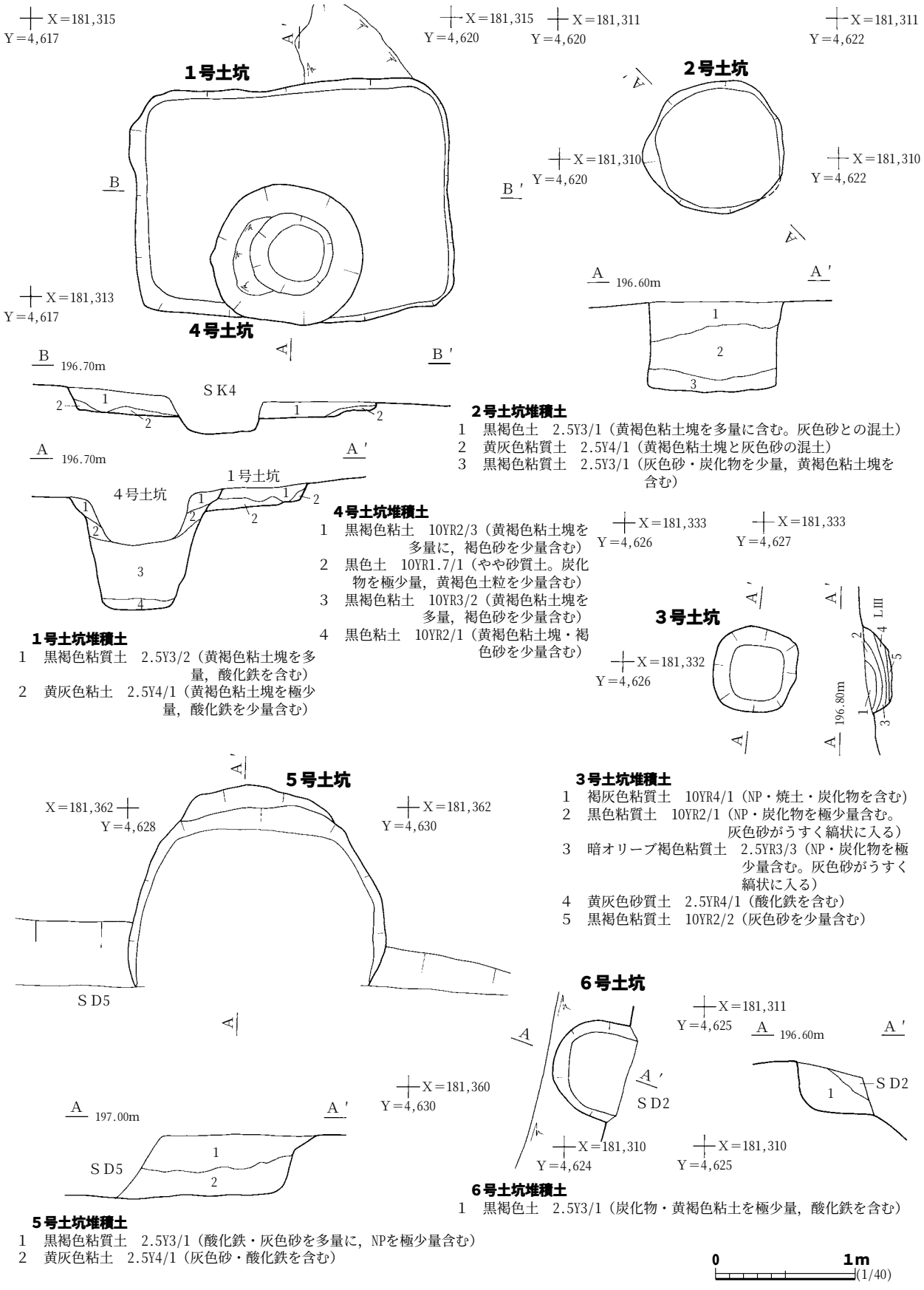
張り出し部の規模は，幅が1.8mで，奥行が1.0mを測る。周壁は上端部が崩落のため緩やかな傾斜になるが，下半部は垂直に立ち上がる。検出面からの深さは0.4mを測り，底面は５号溝跡の底面とは段差なく続いている。遺構内堆積土は２層に分けた。いずれも５号溝跡と同じ堆積土の様相を示し，１層はややグライ化した黒褐色粘質土で，含有物などの特徴から人為的に埋め戻された堆積土である。２層は灰色砂が縞状に入り，機能時に流水の影響によって堆積したと判断した。

本土坑と同様な張り出しは，東側に位置する２・３号溝跡の壁面でも数箇所確認できる。この張り出し部分の機能を類推できる明瞭な所見は得られていないが，これらの溝跡が水田地帯を流れる水路であった点から，その用排水に関わる水口などの施設と考えている。所属時期については，５号溝跡が明治期に作成された丈量図に示された水路と一致することから，近世まで遡る可能性が高い。

６号土坑　ＳＫ６（図９，写真14）

本土坑は調査区の南端，Ｂ３－Ｃ９グリッドに位置する。下高額館跡の北東部に相当する。周囲は標高196.5mほどの平坦な地形となる。２号溝跡と重複し，本土坑のほうが古い。遺構検出面はＬⅢとした暗灰黄色砂の上面である。

本土坑は２号溝跡によって東半部を壊されて不明な部分が多い。平面形は遺存する西半部から円形を呈すると思われる。規模は直径が0.7mを測り，検出面から底面までの深さが0.38mである。周壁は，上半部が垂直気味に立ち上がるが，下半部はやや丸みを帯びてすぼまり，底面と接する。底面は平坦で，わずかに東側に向かって低くなる。遺構内堆積土は，炭化物と黄褐色粘土粒をわずかに含む黒褐色土の単層である。含有物や堆積状況から自然堆積と判断した。



２号土坑堆積土
1　黒褐色土　2.5Y3/1（黄褐色粘土塊を多量に含む。灰色砂との混土）
2　黄灰色粘質土　2.5Y4/1（黄褐色粘土塊と灰色砂の混土）
3　黒褐色粘質土　2.5Y3/1（灰色砂・炭化物を少量，黄褐色粘土塊を含む）

４号土坑堆積土
1　黒褐色粘土　10YR2/3（黄褐色粘土塊を多量に，褐色砂を少量含む）
2　黒色土　10YR1.7/1（やや砂質土。炭化物を極少量，黄褐色土粒を少量含む）
3　黒褐色粘土　10YR3/2（黄褐色粘土塊を多量，褐色砂を少量含む）
4　黒色粘土　10YR2/1（黄褐色粘土塊・褐色砂を少量含む）

１号土坑堆積土
1　黒褐色粘質土　2.5Y3/2（黄褐色粘土塊を多量，酸化鉄を含む）
2　黄灰色粘土　2.5Y4/1（黄褐色粘土塊を極少量，酸化鉄を少量含む）

３号土坑堆積土
1　褐灰色粘質土　10YR4/1（NP・焼土・炭化物を含む）
2　黒色粘質土　10YR2/1（NP・炭化物を極少量含む。灰色砂がうすく縞状に入る）
3　暗オリーブ褐色粘質土　2.5YR3/3（NP・炭化物を極少量含む。灰色砂がうすく縞状に入る）
4　黄灰色砂質土　2.5YR4/1（酸化鉄を含む）
5　黒褐色粘質土　10YR2/2（灰色砂を少量含む）

６号土坑堆積土
1　黒褐色土　2.5Y3/1（炭化物・黄褐色粘土を極少量，酸化鉄を含む）

５号土坑堆積土
1　黒褐色粘質土　2.5Y3/1（酸化鉄・灰色砂を多量に，NPを極少量含む）
2　黄灰色粘土　2.5Y4/1（灰色砂・酸化鉄を含む）

0　1m
(1/40)

図９　１～６号土坑

本土坑は大半を２号溝跡によって壊されているため，その全容を把握できない。出土遺物もなく詳細な年代は不明である。また周辺に分布する２・４号土坑とは規模や堆積土の特徴が異なるため，それらとの関連性は低いと考えている。　（福　田）

第４節　溝　　跡

本年度の調査では，６条の溝跡が検出された。このうち１号溝跡は，平地城館跡の周囲を巡る大規模な堀跡で，中世の所産と考えられる。残る２～６号溝跡は，江戸時代後期以降に掘削された用水路跡である。最終的には，昭和39年の農地基盤整備で埋め戻されたことが判明している。

１号溝跡　ＳＤ１（図10・11，写真15・16・21）

本遺構は，中世の平地城館跡に伴う堀跡である。現況では，周囲より一段低い水田として，帯状の痕跡が残っている。過去の地籍図（明治15年）や航空写真（昭和38年）を参照すると，今回調査されたのは，北辺東半部から北東隅にあたる範囲と推定される。この北辺の位置は，下高額集落が立地する微高地の北縁と一致し，自然地形を利用した占地状況が窺える。調査区内では，南部のＡ３－Ｊ７，Ｂ３－Ａ７，Ａ～Ｅ８・９グリッドにまたがっており，検出面は，ＬⅡないしＬⅢ上面であった。重複関係は，江戸時代後期以降に掘削された２・３号溝跡に切られている。重複箇所にみられる２つの窪みは，新しい溝跡に伴っている。

検出された溝跡の総延長は，47.5mを測る。真上からみた状態は，Ｌ字状をなし，調査区南側に広がる不整方形の城館跡を区画した堀跡の一部であることが分かる。北辺の主軸方位は，Ｅ８°Ｓを指しており，城館跡内部に配置された１・５・６号掘立柱建物跡と概ね一致する。また断面は，どの地点で観察しても，近似した逆台形を呈し，計測値は，上幅5.5～6.0m，下幅2.5～3.0m，深さ140～150㎝の狭い範囲に収まっている。このことから，本溝跡は「箱堀」に該当すると見なされる。

堆積土は，砂質の１層と，粘土質の２層以下に，はっきり区別された。１層は現況の水田覆土であり，近世陶磁器片やビニールを含む。これに対して，２層以下は，溝（堀）掘削土の再堆積層とみられ，ＬⅣ～Ⅵ塊を多量に含有していた。とくに含有物の量は，堀の内側から流入した堆積土に顕著であり，土塁の存在が想定される。なお，本溝跡は，底面付近で湧水がみられたことから，水堀であったと推測される。

遺物は，土師器片18点，須恵器片７点，近世陶器片１点が出土した。この中に，城館跡の年代推定材料となるものは認められない。以下，下層出土の図示遺物３点を解説する（図11）。１は，須恵器坏である。器形は椀形を呈し，器壁が薄く仕上げられている。底部外面には，ヘラ切り痕が観察され，底径は推定7.2㎝を測る。２は須恵器壷の肩部片である。やはり器壁が薄く，広口の短頸壷と推測される。３は，須恵器甕の口縁部片である。端部は断面三角形を呈している。　（菅　原）

２号溝跡　ＳＤ２（図10・11，写真16～18・21）

本遺構は，江戸時代後期に掘削された用水路跡である。その際に，中世城館跡の１号溝跡が壊されており，周囲の地形は農地へ改変されたと考えられる。同位置で重複する３号溝跡は，本遺構が再掘削されたもので，昭和39年まで維持されている。

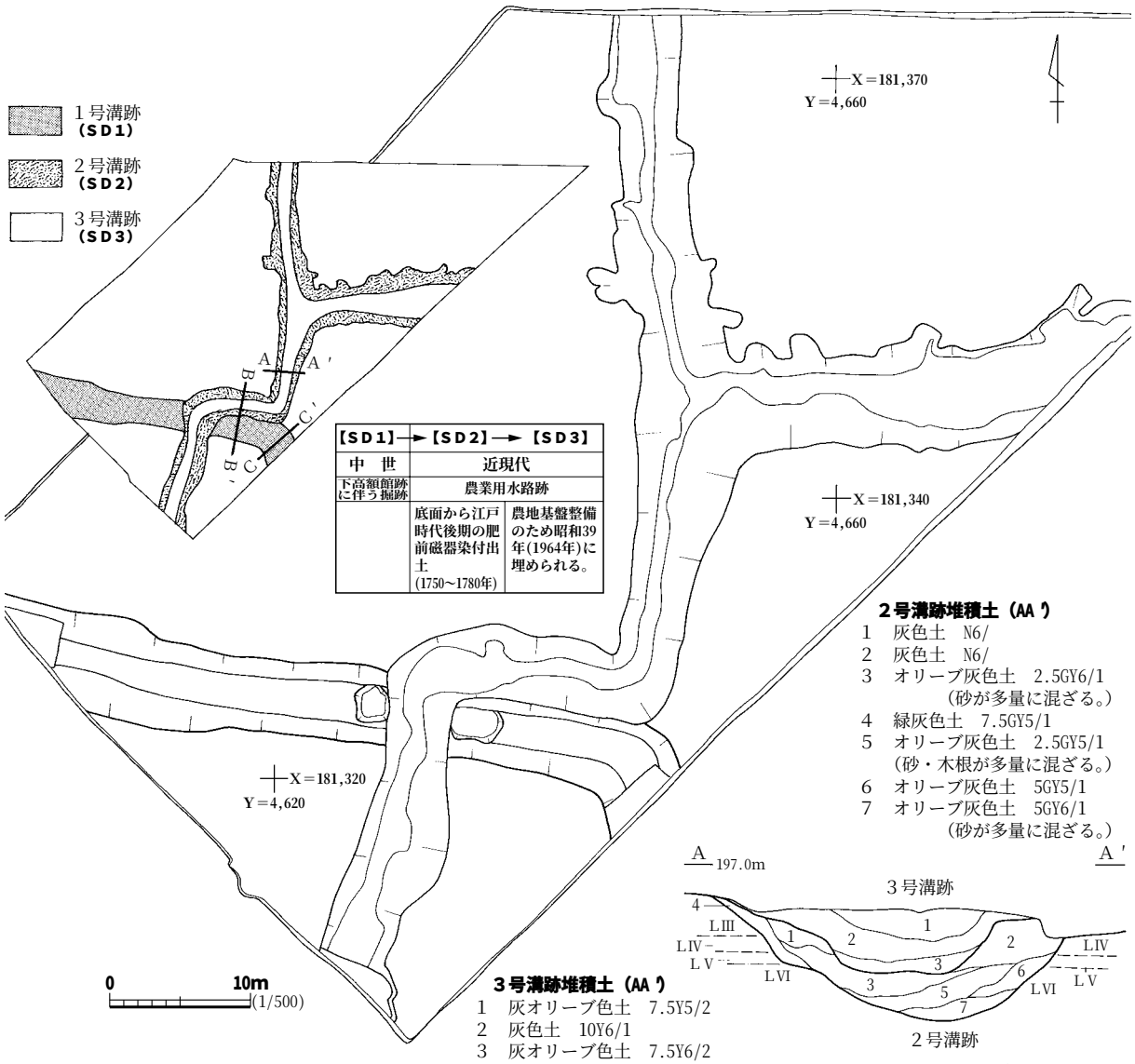
本遺構は，明治15年の地籍図によると，東に農道が付随していたらしく，南延長方向は，下高額集落北縁の現存する用水路にぶつかる。一方，北延長方向は，上高額集落側へ伸びていたようである。また，Ｂ３－Ｅ・Ｆ６グリッドの境界付近で東にも分岐しているが，地籍図の読み取りから，ここに橋脚が架けられていたと推定される。調査区内の位置は，Ｂ３－Ｃ８～10，Ｄ８，Ｅ３～８，Ｆ６，Ｇ５・６，Ｈ５・６，Ｉ５グリッドにまたがっている。検出面は，ＬⅡ～Ⅴ上面であった。

検出された溝跡の長さは，南北84m，東に分岐した部分で，東西30mを測る。底面レベルを追っていくと，流路方向は北→南，東→西となり，下高額集落側へ導水されたと考えられる。断面は，１号溝跡と対照的で，形態が一様でない。壁の所々は，井戸状に掘り込まれており，１号溝跡との重複箇所にあるのも，それと思われる。計測値は，上幅5.0～6.7m，検出面からの深さが95～160㎝である。

堆積土は，自然堆積したものとみられ，断面には，刷毛で掃いたような多量の砂の含有が観察された。このことは，用水路である遺構の性格を端的に表しており，他に，生々しい自然木や貝殻も多数認められた。

遺物の主体は，近世陶磁器であった（75%）。具体的な内訳は，土師器片８点，須恵器片10点，近世陶磁器片60点，石器２点となる。近世陶磁器の平面分布は，１号溝跡とぶつかる地点に集中し，そのうち３点は生産地が判明している。以下，図示遺物を解説する（図11）。

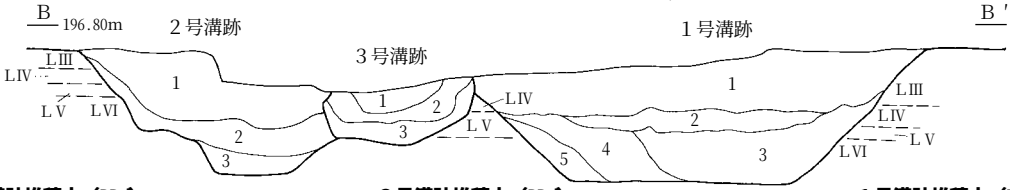
４は，遺構の上限年代を示す資料である。溝跡底面から，伏せられた状態で出土した。「くわらんか手」と称される厚手の肥前磁器碗で，80%が遺存し，体部に雪輪梅花文が描かれている。法量は，口径9.6㎝，器高5.2㎝，底径3.8㎝を測る。大橋編年のⅣ期に比定される。５は，草花文の磁器碗である。60%遺存するが，文様の描かれた主体部分が欠損している。６は，竹葉文の磁器碗である。80%が遺存する。法量は，口径8.7㎝，器高5.6㎝，底径3.5㎝である。７は，器種不明の青磁口縁部片である。胴部に２本の沈線が確認できる。８は，灯明具の磁器小皿である。口縁部に緑灰色の厚い釉薬がみられ，底部外面に回転糸切り痕が残る。50%が遺存し，法量は口径7.4㎝，器高3.0㎝，底径3.7㎝を測る。９は，端反辣韮形の磁器小瓶である。50%遺存し，釉薬は青灰色を呈する。法量は，口径2.1㎝，遺存高8.6㎝を測る。10は，明るい緑色の端反磁器小鉢である。25%しか遺存しないため，復元実測した。法量は，口径13.9㎝，器高6.7㎝，底径7.0㎝を測る。11は，会津若松市蚕養窯跡産の磁器碗である。濃い青色のコバルトで，外面に花文・小さな馬蹄形文，内面に唐草文・花鳥文・小さな馬蹄形文が配されている。同窯跡編年のⅡＢ期（明治13年～大正年間）に比定され，70%が遺存する。法量は，口径11.8㎝，器高4.8㎝，底径3.7㎝を測る。14は，会津本郷焼の



【SD1】→	【SD2】→	【SD3】
中　世	近現代	
下高額館跡に伴う掘跡	農業用水路跡	
	底面から江戸時代後期の肥前磁器染付出土（1750～1780年）	農地基盤整備のため昭和39年(1964年)に埋められる。

２号溝跡堆積土（AA ′）
1　灰色土　N6/
2　灰色土　N6/
3　オリーブ灰色土　2.5GY6/1
　（砂が多量に混ざる。）
4　緑灰色土　7.5GY5/1
5　オリーブ灰色土　2.5GY5/1
　（砂・木根が多量に混ざる。）
6　オリーブ灰色土　5GY5/1
7　オリーブ灰色土　5GY6/1
　（砂が多量に混ざる。）

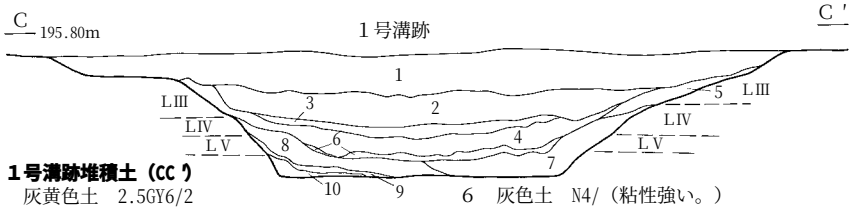
３号溝跡堆積土（AA ′）
1　灰オリーブ色土　7.5Y5/2
2　灰色土　10Y6/1
3　灰オリーブ色土　7.5Y6/2



２号溝跡堆積土（BB ′）
1　暗緑灰色土　7.5GY3/1
2　暗緑灰色土　10GY4/1（砂が多量に混ざる。）
3　緑灰色土　7.5GY5/1（砂が多量に混ざる。）

３号溝跡堆積土（BB ′）
1　灰色土　10Y4/1
2　暗オリーブ灰色土　10GY4/1（砂が多量に混ざる。）
3　オリーブ灰色土　5GY5/1（砂が多量に混ざる。）

１号溝跡堆積土（BB ′）
1　灰色土　10Y4/1
2　暗オリーブ灰色土　10GY4/1
3　暗緑灰色土　7.5GY4/1（灰白色粘土が多量に混ざる。）
4　灰色土　N4/1
5　暗オリーブ灰色土　10GY4/1
　（砂が多量に混ざる。）



１号溝跡堆積土（CC ′）
1　灰黄色土　2.5GY6/2
2　オリーブ灰色土　5GY5/1
3　灰色土　N4/（灰白色粘土塊を多量に含む）
4　緑灰色土　7.5GY5/1（灰白色粘土塊を多量に含む）
5　灰黄色土　2.5Y6/2
6　灰色土　N4/（粘性強い。）
7　灰色土　N5/（粘性強い。）
8　灰色土　7.5Y6/1（灰白色粘土塊を多量に，砂粒を少量含む）
9　黒色土　10YR2/1
10　灰色土　10Y5/1（灰白色粘土塊を多量に，砂粒を少量含む）

0　2m
(1/80)

図10　１～３号溝跡

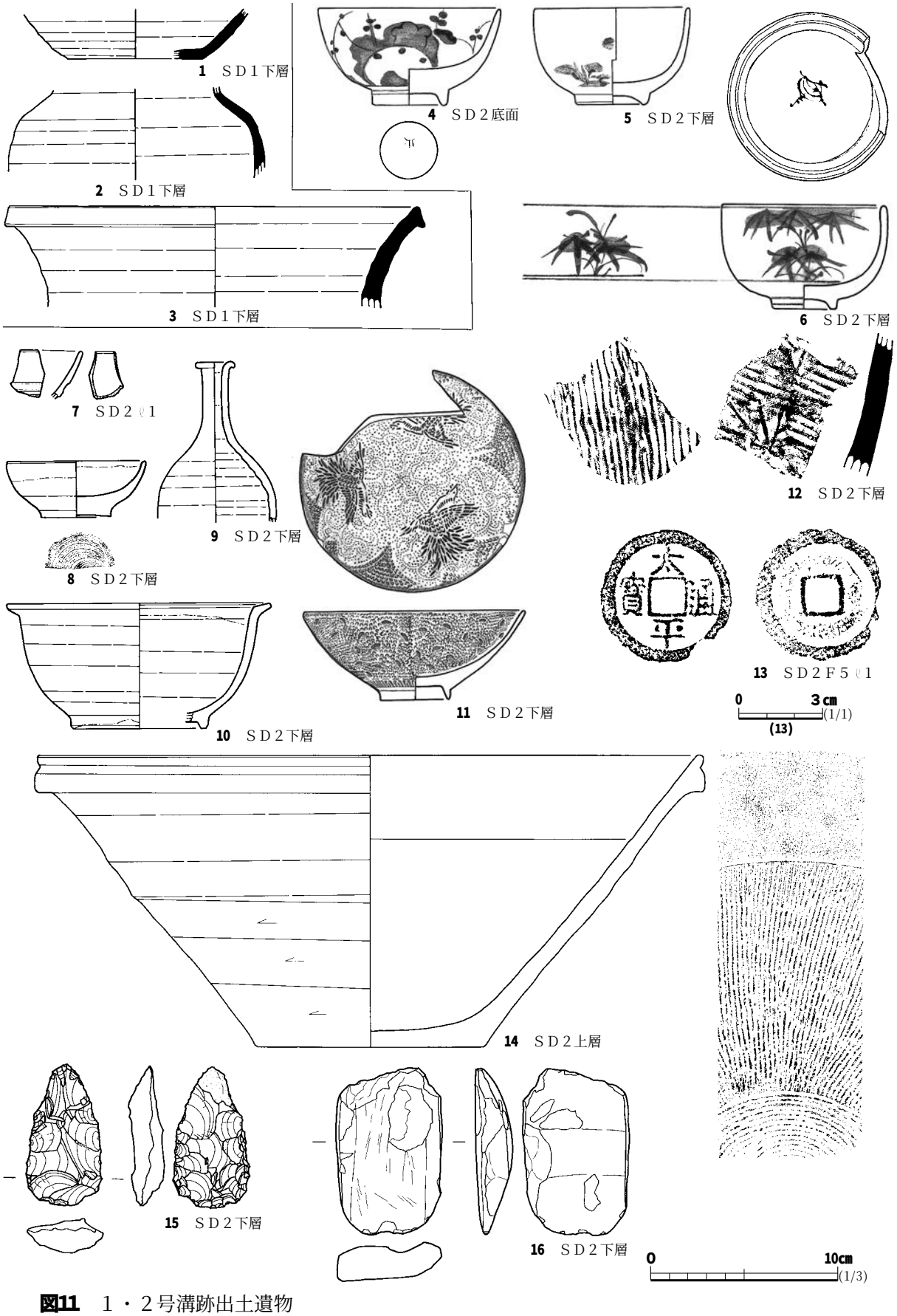


図11　１・２号溝跡出土遺物

陶器擂鉢である。70%が遺存する。内外面は鉄釉が掛けられ，赤褐色を呈する。器形は，口縁部外帯が三稜で，底径が小さく，無台である。器面調整は，外面の底部全体～体部下半に回転ヘラ削り，内面の口縁部にナデ調整痕が観察される。内面の卸目は，12本１単位で，胴部に隙間無く施され，底部は同心円となる。使用痕跡が著しい。12は，須恵器甕の胴部片である。

13は，北宋銭の「太平通寶」（976～983年鋳造）である。今回の調査では，中世城館跡との関連が窺える唯一の資料となる。

15は，頁岩製のヘラ状石器である。縄文時代の所産と推定される。16は，時期不明の砥石である。石材は，質の悪い砂岩が使用されている。　（菅　原）

３号溝跡　ＳＤ３（図10・12，写真16・17・18・21）

本遺構は，２号溝跡が再掘削された用水路跡である。昭和39年に農地基盤整備で埋め戻されたことを，聞き取り調査で確認している。一方，上限は，２号溝跡出土の蚕養窯跡製品から，明治13年～大正年間に求められる。規模は，２号溝跡よりひとまわり小さく，上幅2.0～4.2m，深さ0.8～1.2mを測る。堆積土はやはり砂の混入が著しく，自然木や貝殻・ビー玉も認められた。

遺物は，近世陶磁器片５点，須恵器片３点が出土した。以下，図示遺物を解説する（図12）。

２は，磁器碗である。丸文内部に格子文が配され，80%が遺存する。法量は，口径10.8㎝，器高5.5㎝，底径3.9㎝を測る。３は，磁器小皿である。25%が遺存し，描かれたのは山水文とみられる。法量は，口径10.8㎝，器高2.6㎝，底径6.4㎝を測る。

１は，須恵器長頸瓶である。胴部の30%が遺存する。胎土・焼成の特徴は，大戸窯跡の製品に類似する。４・５は，須恵器甕の胴部片である。内外面に当て目が残る。

（菅　原）

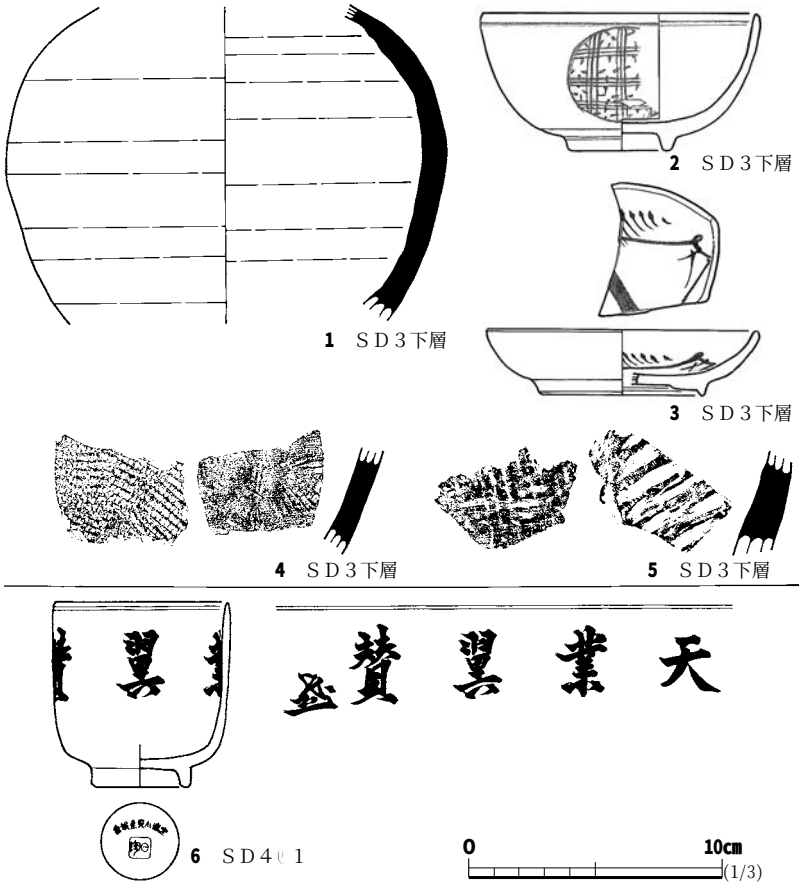


図12　３・４号溝跡出土遺物

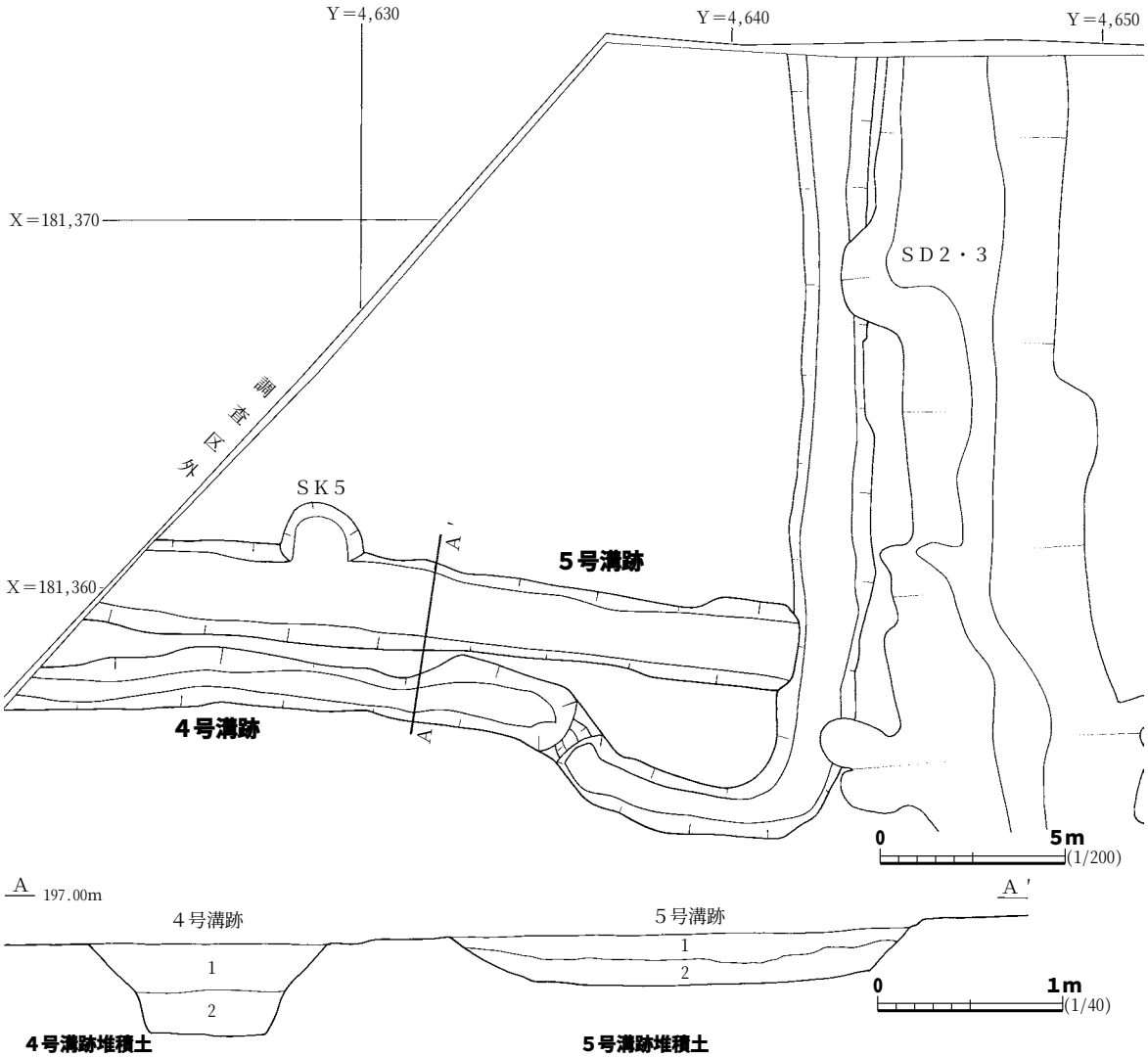
４号溝跡　ＳＤ４

（図12・13，写真19・20）

本遺構は調査区の北西端をＬ字に流れる溝跡である。Ｅ

３～５・Ｃ５・Ｄ５グリッドに位置する。周囲の地形は，近年の圃場整備により削平されて平坦になる。本溝跡は２・３・５号溝跡と重複関係を持ち，そのいずれよりも本溝跡のほうが新しい。遺構検出面はＬⅣとした黄褐色粘土の上面であるが，２号溝跡に接する部分は削平が厚く，ＬⅤで確認している。

本溝跡はＣ５グリッドからほぼ東に向かって流れ，Ｅ５グリッドでやや南に湾曲しながら屈曲して北に向かって流れる。調査区内で確認できた規模は，全長が42.0m，溝幅は屈曲部が最も狭く1.4m，北端部幅が最大で2.5mを測る。検出面から底面までの深さは0.5～0.6mである。周壁はいずれも急峻な立ち上がりであるが，上端部付近は崩落のため，比較的緩やかな傾斜となる。底面は屈曲部付近で土橋状に掘り残された仕切りが認められ，この部分を境に東側の底面が深くなる。土橋上面の中央部が浅くくぼむ構造となり，貯水や水量調節を目的とした堰の機能が考えられる。堰跡の西側に貯水され，溢れた水が東側に流れ落ちる仕組みとなっている。また堰付近には土止めのため



４号溝跡堆積土
1　黄灰色土　2.5Y4/1（褐色砂・灰色粘土・酸化鉄を多量に含む。グライ化）
2　オリーブ黒色粘土　5Y3/1（褐色砂を含む。グライ化）

５号溝跡堆積土
1　暗オリーブ黒色土　2.5Y3/3（酸化鉄を多量，褐色砂を含む）
2　オリーブ黒色粘土　5Y3/2（白色粘土・褐色砂が薄く縞状に含む。グライ化）

図13　４・５号溝跡

であろうか，木杭が数本遺存していた。底面の幅は，堰跡を境に西側が0.4～0.7mと狭く，東から北側にかけての幅が0.9～1.4mと広くなる。

遺構内堆積土は２層に分けた。１層は褐色砂と灰色粘土を多量に含む黄灰色土で，人為的に埋め戻された堆積土である。２層はややグライ化した黒色粘土で，溝跡が機能していた時期の堆積土と判断した。

本溝跡からは陶磁器１点が出土し，図12に示した。６は完形の湯飲み茶碗である。コバルト顔料を用いて，外面には「天業翼賛」，底部には「中島小泉産報會」と記される。戦中期の産業報告会などで，戦意高揚を目的として製作・販売されたものであろう。

本溝跡は堆積土や堰跡から水路と考えられる。明治期の丈量図にも記されていないことから近現代に開削され，昭和39年の圃場整備によって埋め立てられた水路と判断した。　（福　田）

５号溝跡　ＳＤ５（図13，写真19・20）

本遺構は調査区北西部をほぼ東西方向に流れる溝跡で，Ｂ３－Ｃ４・５，Ｄ５，Ｅ５グリッドに位置する。周囲は標高196.9mほどの平坦な地形に分布している。本遺構は西端が調査区外へ続き，東端が２～４号溝跡に壊されている。さらに２・３号溝跡より東側では，その延伸部は確認できない。遺構検出面はＬⅣとした黄褐色粘土の上面で確認した。

調査区内で確認できた規模は，全長19.4m，幅が2.0～2.6mを測り，検出面から底面までの深さは最大で0.4mである。周壁は下半部が砂層を掘り込んでいるため崩落が著しく，比較的緩やかな傾斜で立ち上がる。さらに北壁には５号土坑とした半円形に張り出した施設を伴う。底面は微細な凹凸があるがほぼ平坦で，全体的に東に向かってわずかに低くなる。遺構内堆積土は２層に分け，いずれもグライ化した黒色粘土である。２層は堆積土中に白色粘土と褐色砂が薄く交互に堆積する状況がみられ，水性堆積と判断した。

本溝跡から遺物は出土していないため，詳細な年代は不明であるが，明治期に作成された丈量図に記された水路と一致することから，近世まで遡る可能性が高い。　（福　田）

６号溝跡　ＳＤ６（図14，写真20）

本遺構は調査区東端，Ｂ３－Ａ６・７グリッドに位置する溝跡である。調査区際に分布することから，ほぼ南北方向に流れる溝跡の南端部を確認したのみである。周囲は標高196.7mほどの平坦な地形となる。周辺には柱穴群が点在し，そのうちのＡ７ＧＰ６と重複するが，本溝跡のほうが新しい。

調査区内で確認した規模は，全長が5.5m，幅が1.0～1.65m，検出面からの深さが最大でも0.3mと浅い。周壁は比較的緩やかな傾斜で立ち上がる。底面はほぼ平坦で，南に向かってわずかに低くなる。遺構内堆積土は黄褐色土粒を含む黒褐色土の単層で，自然堆積と判断した。

本溝跡からは遺物が出土していないため，性格や年代は不明である。　（福　田）

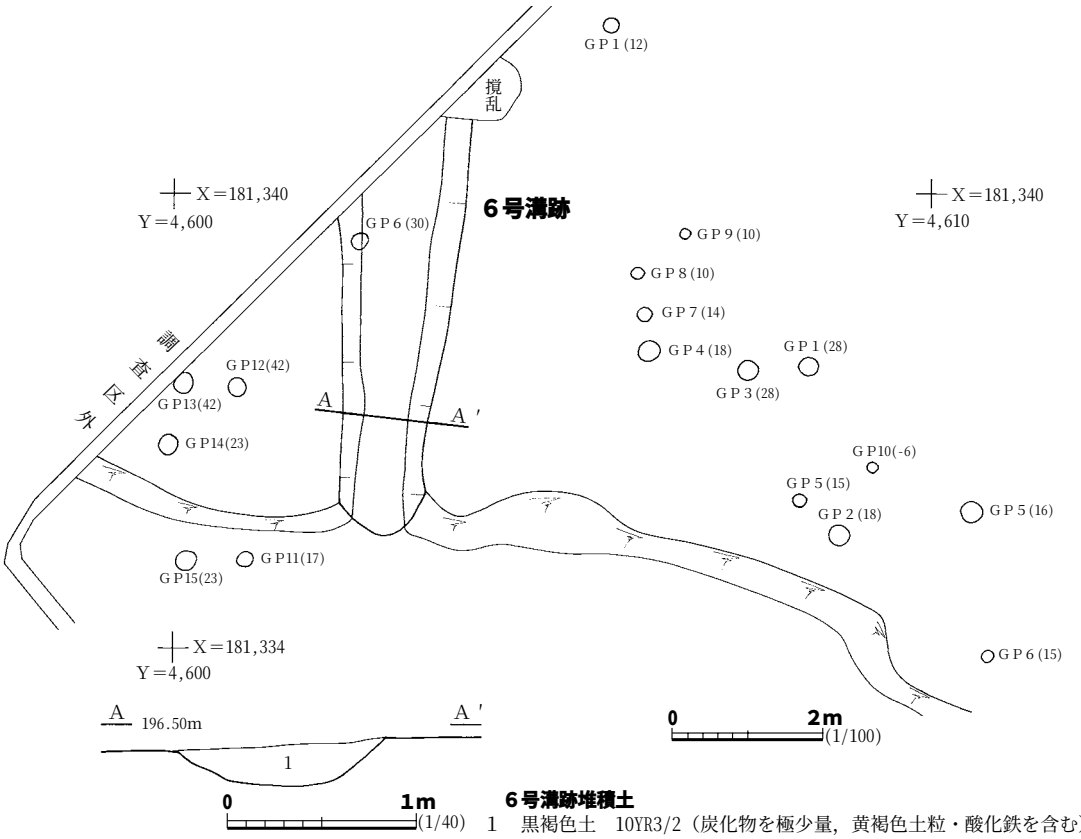


図14　６号溝跡

第５節　その他の遺構と遺物

本節では，調査区内に点在する柱穴群と遺構外から出土した遺物について報告する。柱穴群は明確な建物跡や柱列跡を構成しないが，比較的集中する区域が数箇所見られる。遺構外出土遺物は土師器や須恵器など平安時代の遺物，近世以降の陶磁器類が中心となる。

１．柱穴群（図15・16）

柱穴群は建物跡や柱列跡などを構成せず，企画性を見出すことのできない柱穴を総称した。柱穴群は総計138基を確認した。柱穴群は下高額館跡の北端を区画する１号溝跡を境に，館跡の内外に分布する柱穴に分け，それぞれ柱穴群１・２とした。個々の柱穴の呼称には，グリッド毎に通し番号（ＧＰ１）を付し，小グリッド名を組み合わせて（Ｃ９ＧＰ１など）表記した。柱穴の深さは図中に（数字）で表した。これは検出面から底面までの深さで，単位はcmである。

柱穴群１　柱穴群１は下高額館跡の内部に位置し，１・５・６号掘立柱建物跡周辺に分布している。また１号掘立柱建物跡と５号掘立柱建物跡の間は，新しい時期に属する２・３号溝跡で大きく壊されているため，この部分にも建物跡や柱穴が存在していた可能性は高い。他の遺構と重複関係を持つものは少ないが，１号掘立柱建物跡より古い柱穴はＢ９ＧＰ８，新しい柱穴はＢ９ＧＰ17・

19・21である。５号掘立柱建物跡より古い柱穴はＣ10ＧＰ１，６号掘立柱建物跡より古い柱穴はＤ10ＧＰ１・２・17・20の４基である。検出面は１号掘立柱建物跡周辺がＬⅡ上面で，５・６号建物周辺がＬⅢ上面である。

柱穴の規模は，直径20～30㎝の円形を基調とする小穴がほとんどであるが，一辺の長さが50㎝を超える方形を基調とする大型の柱穴も数基点在する。大型柱穴は１号掘立柱建物跡周辺に多く分布し，Ｂ９ＧＰ１・２は最大規模で一辺が50～60㎝を測る。柱穴の深さは20㎝前後のものが多いが，１号掘立柱建物跡周辺は削平が少なく，Ｂ９ＧＰ２など深さが50㎝を超えるものも存在する。堆積土は掘形埋土と柱痕跡に大別でき，掘形埋土は黒色土と黄褐色粘土の混土で硬くしまる。柱痕跡を確認できた柱穴は少なく，断面観察から柱材は直径10㎝前後の丸太材と推定している。また，掘形内部に根石が遺存する柱穴は，Ｂ９ＧＰ19・20，Ｄ10ＧＰ２・11・17・22の６基で，いずれも根石は１個で，直径10～25㎝ほどの扁平な石が用いられている。根石は加工が施されない自然石が多いが，中には砥石が転用されている柱穴も確認できた。

柱穴群から遺物が出土したものは極めて少ない。Ｂ９ＧＰ１・Ｃ10ＧＰ２からは須恵器片各１点，Ｄ10ＧＰ11・22から根石とされた砥石が各１点，Ｄ10ＧＰ26から土師器片１点が出土している。い

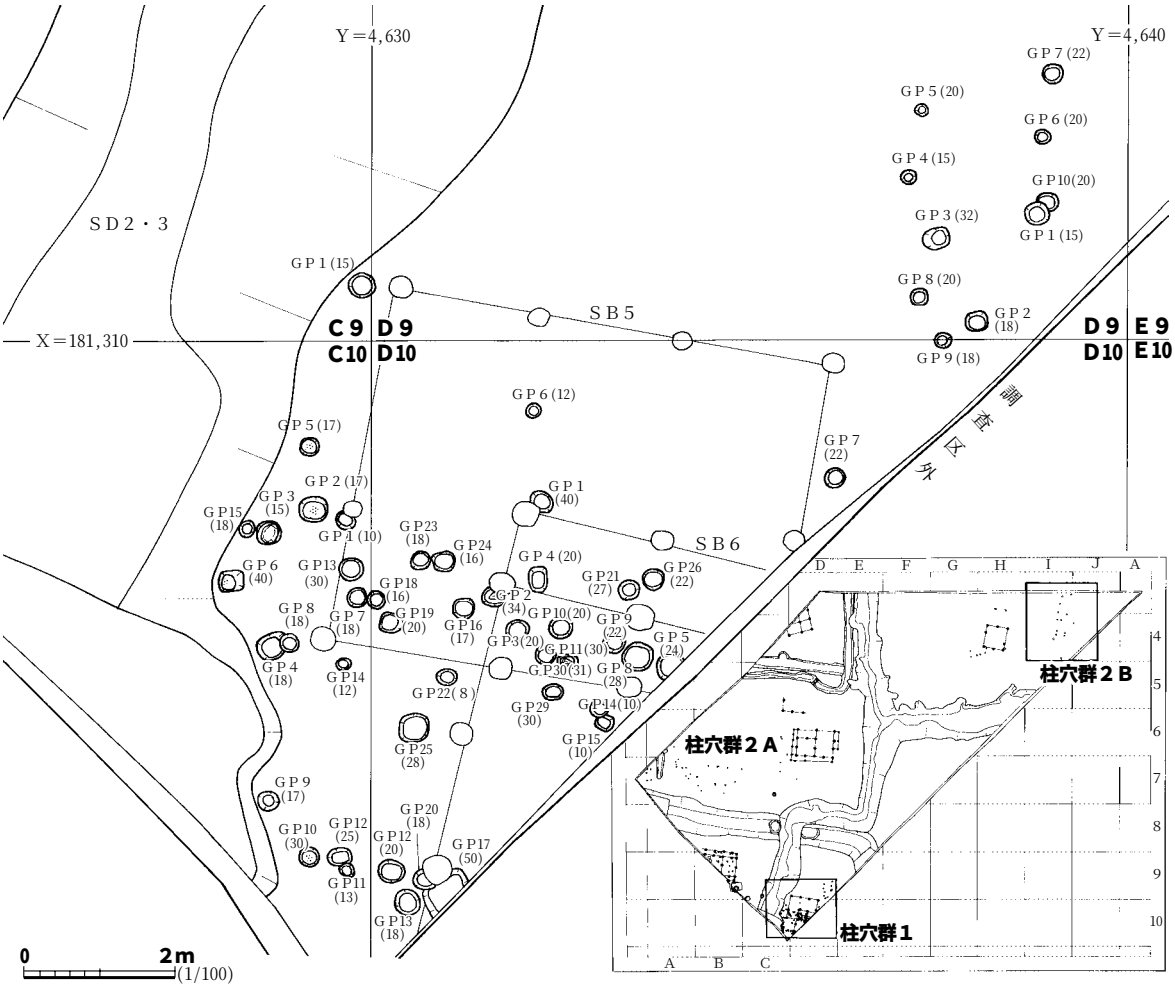


図15　柱穴群　D10グリッド周辺

ずれも検出面や掘形埋土に混入していたものである。図16－１はD10G P11から出土した根石に転用された砥石である。いずれの面も使用により平滑になる。柱穴群１では，特に１号掘立柱建物跡周辺の柱穴群は，試掘調査の結果をあわせても，次年度以降の調査区に展開することが確認されている。これらの多くが建物跡を構成する可能性も高く，次年度以降の調査で，柱穴群の分布状況を改めて確認したい。

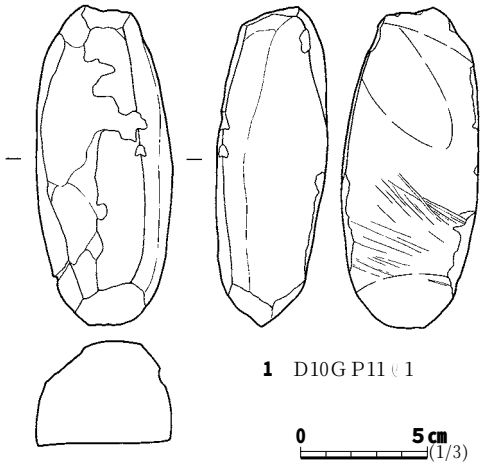


図16　柱穴群出土遺物

柱穴群２　柱穴群２では柱穴集中地点が２地点確認できたが，柱穴群１に比べ，はるかに希薄である。１つは１号溝跡の北側に近接し，Ａ７・Ｂ７グリッドに分布する一群を柱穴群２Ａと称する。２つは７号掘立柱建物跡の東側，Ｉ４・３グリッド周辺の一群を柱穴群２Ｂとした。

柱穴の分布は，柱穴群２Ａ・２Ｂともに約２m間隔で３～４基並ぶが，周辺の遺構群とはその方向が一致しないなどの相違点も見られる。柱穴の平面形は円形または隅丸方形を基調とする。規模は，検出面での直径が20～35㎝と小さい。検出面からの深さは，柱穴群２Ａでは10～50㎝と一定せず，深さ25㎝程度の柱穴が大半を占める。中でもＡ７ＧＰ13，Ｂ７ＧＰ11は最も深い。柱穴群２Ｂでは10～32㎝と浅く，深さ20㎝前後の柱穴が多い。堆積土の観察から，柱痕跡と掘形埋土に大別できる。掘形埋土は黒色土と灰白色粘土や黄褐色粘土の混土で硬くしまる。明瞭な柱痕跡を確認できたものは少なく，掘形が比較的大きい柱穴で確認できた。土層観察から柱材は直径10㎝前後の細い丸太材と推定している。また掘形内部に根石を確認できたものは，Ｉ４ＧＰ２のみである。

柱穴群２では遺物が出土した柱穴がないため，詳細な年代は不明である。しかし本年度の調査では，館跡の外部となる区域にも２号掘立柱建物跡などが確認されている。柱穴群２Ａには，館跡の外部施設を構成する柱穴も含まれる可能性が考えられる。

２．遺構外出土遺物（図17，写真21）

今回の１次調査では，遺構外出土遺物が総数111点と極めて少ない。その内訳は土師器38点，須恵器21点，陶磁器47点，砥石５点である。そのうち形状が分かる10点を図17に示した。

遺構外出土遺物は，ＬＩとした表土層や盛土層から出土したものがほとんどで，平安時代の土師器や須恵器，近世以降の遺物が混在している。遺物の出土位置を概観すると，土師器・須恵器は調査区内に散在するが，１号溝跡の南側，下高額館跡の内部に集中する。近世以降の陶磁器類は調査区の北東端側で２・３号溝跡とそれに注ぎ込む自然流路の周辺などに集中する傾向が認められた。

１は須恵器長頸瓶の破片で，頸部から口縁部にかけて開き気味に立ち上がる。口唇部は垂直につまみ上げられ，その断面は三角形をなす。２は須恵器の底部破片で，器種は瓶類であろう。断面が台形をなす高台が貼り付けられる。３～６は須恵器破片である。３は大甕の口縁部である。４は甕

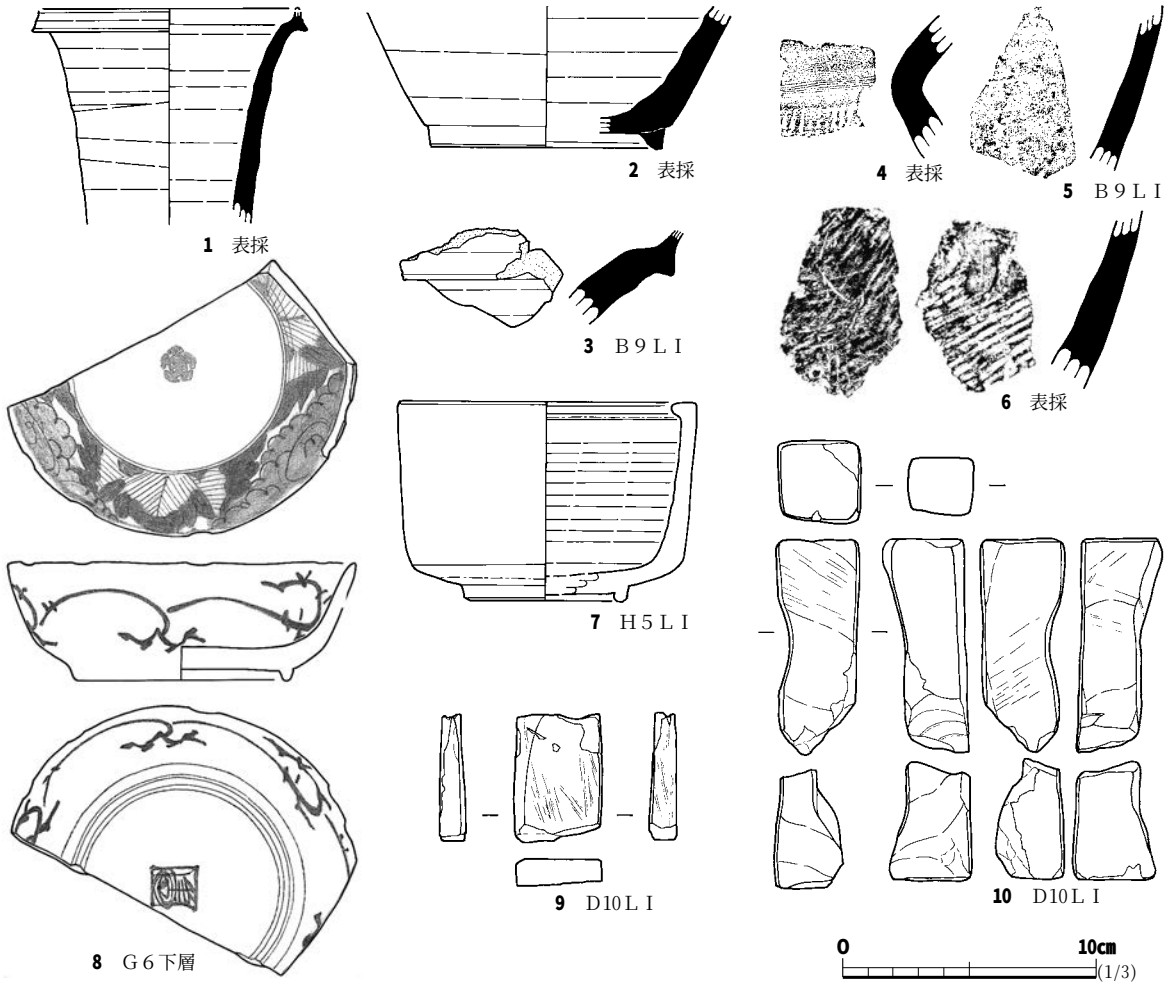


図17　遺構外出土遺物

の頸部破片で，くの字に屈曲する。体部外面には縦方向の平行タタキメが確認できる。５は瓶類の体部下半付近の破片であろう。外面はヘラケズリが施される。６は甕の胴部破片である。外面はやや浅い平行タタキメ，内面は平行するアテ具痕が施され，ナデで消されている。

７は陶器の鉢で，口縁部内面が厚く肥大する。高台はロクロの回転を利用して削りだされている。外面はやや白濁した透明釉が施されている。内面はロクロメが顕著に残り，釉薬は施されていない。８は染付けの皿で，内外面とも濃い藍色の顔料を用いて，草木文などが描かれている。

９は軟質の石材を用いた砥石で，各面とも使用により薄く磨り減っている。10は砥石片で，表面には研磨痕が明瞭に残る。　（福　田）

第３章　ま　と　め

高堂太遺跡は，平成９年度の表面分布調査で発見され，比較的最近周知となった遺跡である。範囲は，水谷地古墳・下高額館跡を取り込み，「古墳時代，奈良・平安時代，中世の集落跡が推定されるほか，水谷地古墳の存在から古墳群の可能性も予測される」と報告された（福島県教育委員会1998）。初年度にあたる今回の発掘調査は，下高額館跡の一部を含む3,900㎡が対象となり，平地城館跡の一画と，その外部に広がる建物群が検出されている（図18）。

以下では，関連する文献史料を交え，この成果に焦点を絞ってまとめを行いたい。

第１節　会津地方の平地城館跡

中世の会津地方には，数多くの城館が築かれた。『福島県の中世城館跡』（福島県教育委員会1988）によると，約450箇所の所在が確認される。そのうち本遺跡のような平地城館跡は，全体の約45%（約200箇所）を占め，県内の他地域と比べ高比率を示している。それらの分布は，広大な盆地平坦面に点在する浮島状の微高地上に集中し，遺跡間の距離が１～２㎞と近いことが特徴である。また，この立地は現在の集落位置とほぼ重なり，本遺跡と周囲の城館跡にも，同じような分布状況が認められる（図19）。おそらく，この位置関係は中世も同様で，城館は「集落と一体的に存在した」（坂井秀弥1997）と考えられる。

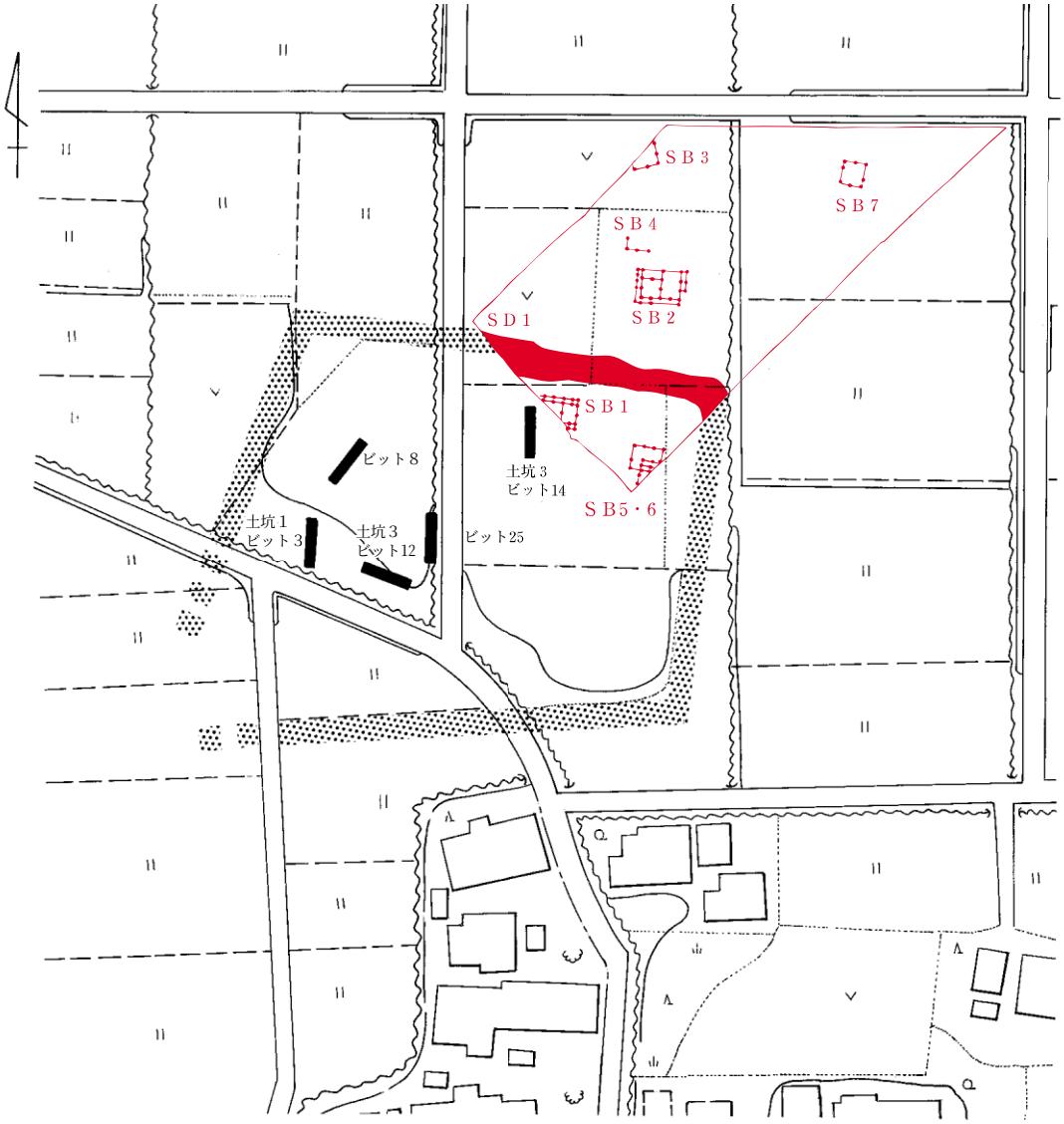
さらに，これまでの研究成果（石田明夫2004他）に従うと，それら平地城館跡は，新宮城跡（喜多方市史編纂委員会2005）のような一部の別格を除き，一辺100m以下の規模が大半で，存続期間は南北朝期から戦国時代末期，つまり蘆名氏の時代（佐藤健郎1986）に求められている。城主については，濃密な分布状況からみて，広域を支配したとは考えられず，現在のほぼ「大字」範囲を統括した在地小領主がイメージされる。後述のように，今回検出された城館跡は，一辺100m以下の単郭式方形館跡と推定され，大枠としては，このような位置付けを与えて大過ないと思われる。しかし，実際に発掘された事例は少なく，本事業では喜多方市麻生館遺跡（福島県文化振興事業団2002）に続く発見となった。

第２節　下高額館跡の関連文献史料

次に，今回の調査成果の意義を，まず文献史料から探ってみたい。

１．『新編会津風土記』

文化６（1809）年完成の『新編会津風土記』に，かなり具体的な伝承記録が残されている。南北


SB3
SB7
SB4
SB2
SD1
SB1
ピット8
土坑3
ピット14
SB5・6
土坑1
ピット3
土坑3
ピット12
ピット25
0
50m
(1/1,500)

東辺現状（北東隅から）

北西隅現状（北東から）

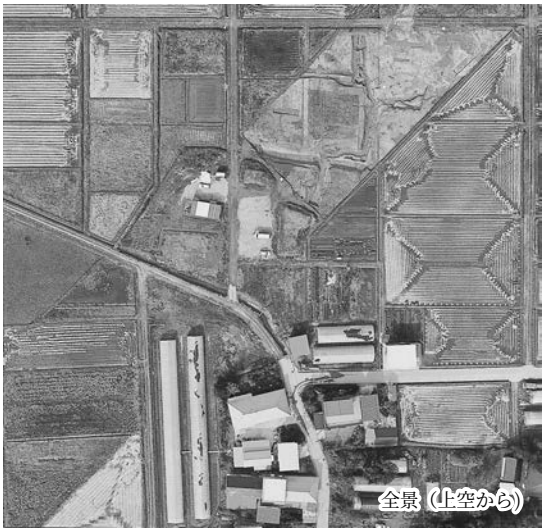

全景（上空から）

図18　北推定地

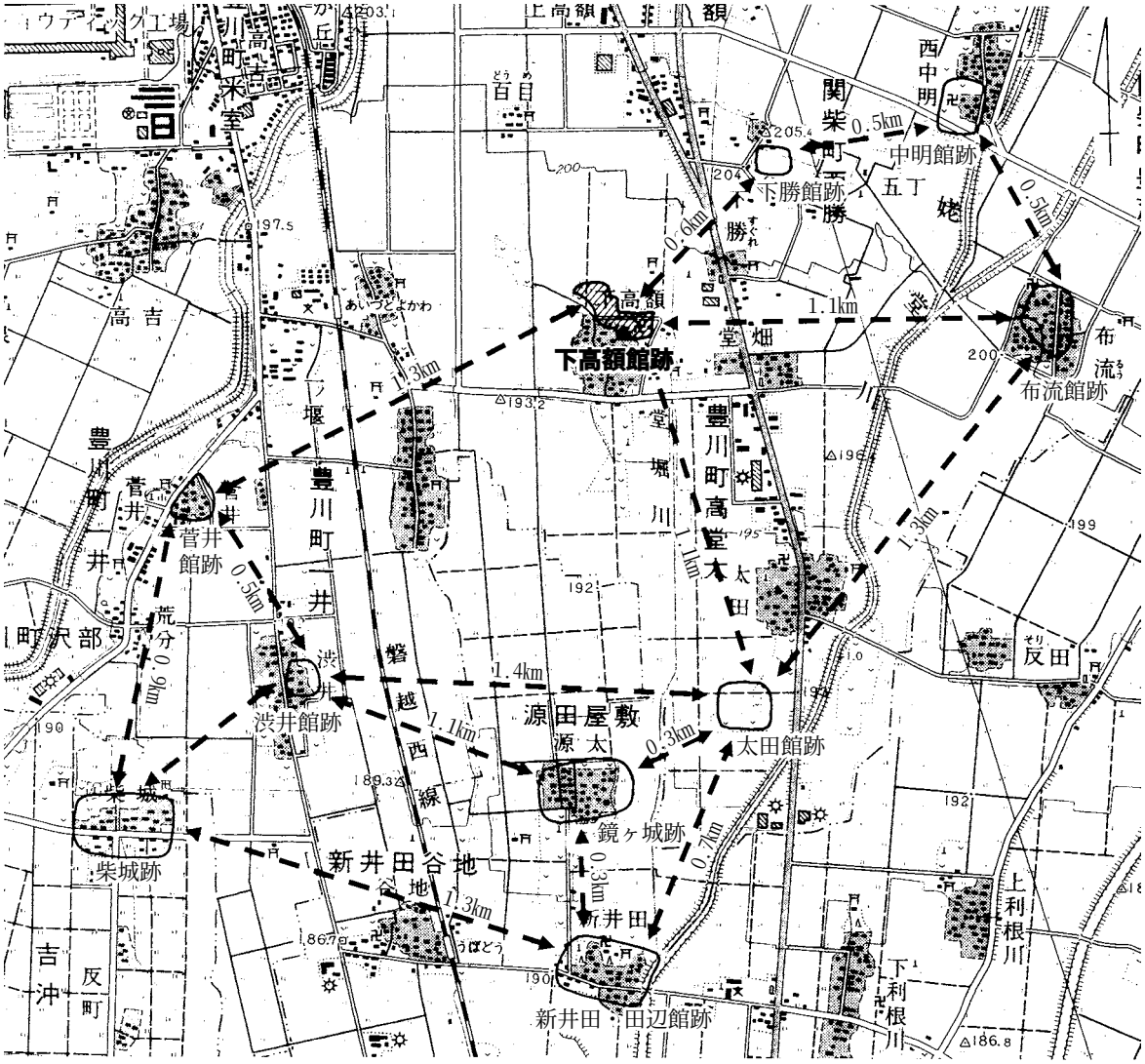


図19　城館跡分布図

朝末期の至徳年間（1384～1387），耶麻郡下高額村に葦（蘆）名氏家臣である渡邊左京進長勝が館を構え，至徳元（1384）年には，自分の名を寺号として長勝寺を建立したという内容である。また，その後の長勝寺の命運や，村の北東に祀られた白髭神社（水谷地古墳）のことなどが記述されている。類似した内容は，『会津鑑』・『会津古墨記』にも認められ，単純に，すべてを事実と解釈するわけにはいかないが，基本的な事実関係を反映している可能性は十分あると思われる。上述のように，城館跡が現集落と立地場所を共有することは，中世の景観が大きく変化していないことを示唆しており，当時の出来事は，かなり正確に伝えられていると推測される。また，城館跡比定の際に『新編会津風土記』を活用することの有効性は，既に，文献史学の立場からも指摘されている（阿部俊夫1981・村川友彦1986）。

そこで，以下に現代仮名遣いに改めた文章を示す。

※『新編会津風土記』巻之五十九

【下高額村】

館　　跡　至徳の頃（1384～1387），渡邊左京進長勝本郡（耶麻郡）十二箇村を領し，館をここに築き居住せしと云，濠土居の形残れり

長 勝 寺　至徳元（1384）年，葦名氏の臣渡邊左京進長勝と云者，相州鎌倉より一躯の彌陀を奉じて此寺を建て，僧了讃をして護せしめ，乙が名を以て寺号とし，此村の地若干を割て寺領に充てしと云，天正中（1573～1591）に兵火に罹り阿弥陀・薬師・十二神将・聖徳太子の古像災いを免れしに，元禄中（1688～1716）又火災のために焼亡し，今は太子の像のみ遺れり，不動を本尊とし客殿に安す

白髭神社　村より丑寅（北東）の方三町にあり，鎮座の年月詳ならず，鳥居・拝殿あり
熊倉村山口美濃是を司る

補足しておくと，「渡邊氏」に関する伝承記録は，耶麻郡ばかりでなく会津郡・河沼郡・大沼郡にもみられ，一族が広範囲に分布していたことが確認されている（『新編会津風土記』・『会津鑑』・『会津古塁記』）。また，弘安年中（1278～1287）から天正頃（1573～1591）まで，渡邊主膳とその子孫が耶麻郡高柳村に領主権を持っており（『会津鑑』），一族の存続期間が，鎌倉時代後期から戦国時代末期まで長期間に及んだことが指摘されている（喜多方市史編纂委員会2004）。

このように「渡邊氏」は，中世会津社会の中で，安定した勢力を継続的に保持する系譜であった。渡邊左京進長勝は，その前半期に耶麻郡下高額村を領地とし，鎌倉と行き来した人物であったと思われる。

２．『貞山公治家記録』

もう１つ，時代の下った戦国時代末期の記録に注目したい。元禄16（1703）年完成の『貞山公治家記録』には，天正17（1589）年，葦名氏旧臣の十二村助左衛門が伊達政宗から会津北方十二村を安堵されたとある。この「十二村」は，かつて渡邊左京進長勝が領有した「十二箇村」のことであり，彼も城館を下高額村に構えたと推定されている（喜多方市史編纂委員会1995）。伝承と文献には，114年の開きしかなく，また，『貞山公治家記録』が仙台藩正史であることからすれば（仙台市史編さん委員会1994），信頼性はきわめて高いと思われる。この点は，「十二村家」が現在の下高額館跡地内に未だ存続することによって，さらに傍証される。同姓の分布は，他に喜多方市内でわずか10世帯程度しかなく，しかも，すべて分家である。

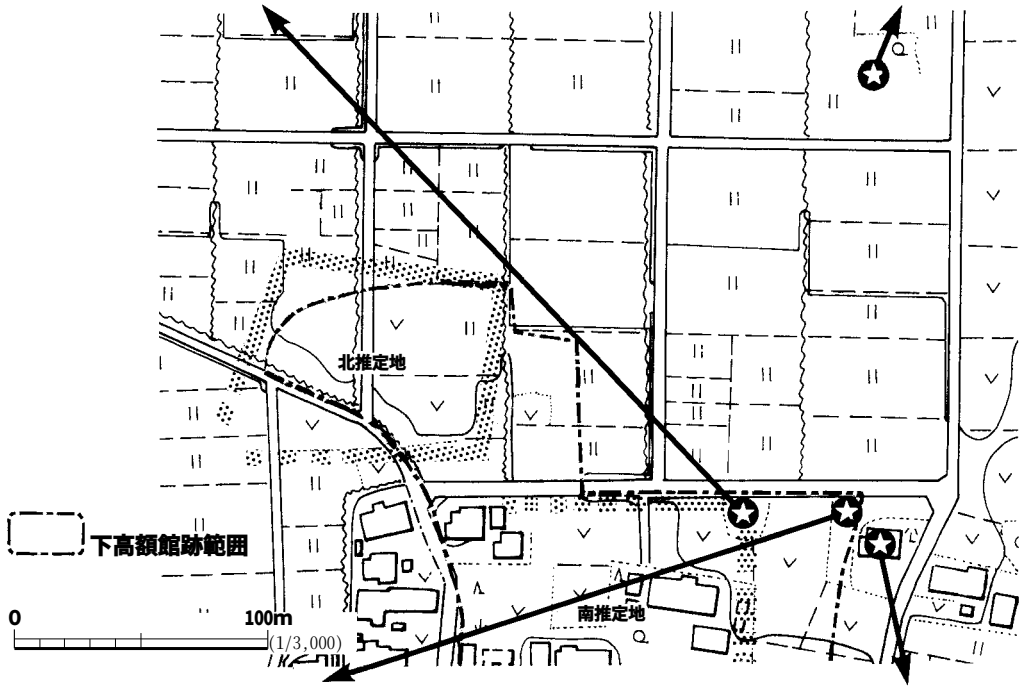
以下，現代仮名遣いに改めた文章を示す。

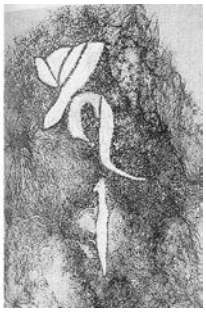
※『貞山公治家記録』天正十七年七月二四日条抄

十二村助左衛門に本領安堵の御朱印を賜ふ，其趣会津御手に入るに就て，其身進退の事六月十一日まて知行の通り残り無し下し置き賜ふの旨載らる，十二村は元葦名家の旧臣にして，会津北方十二村と云ふ所を領す，最前より降参奉公に就て本領を充行はる

第３節　２つの城館跡推定地

では，視点を遺跡の方に移したい。実は，下高額館跡には２つの城館跡推定地が含まれている（福島県教育委員会1996）。遺跡範囲の線引きが，不自然なＬ次形を呈しているのはそのためであり，南東－北西の位置関係で，隣接する。ここでは，両者を便宜上，「南推定地」・「北推定地」と呼び分け（図20），現況と従来の見解をみていきたい。





高　48.0cm
幅　33.0cm
厚　16.0cm
石質　石英安山岩

図20　下高額館跡全体図

１．南推定地

地元では，本推定地が渡邊左京進長勝の城館跡と伝えられている。また，その東脇には，『新編会津風土記』記載の長勝寺と同名の寺院が現存し，境内に板碑（無年号）が認められる。さらに，十二村助左衛門の直系子孫を名乗る「十二村家」が，今も本推定地内に居住し，長勝寺の管理を行っている。渡邊氏と十二村氏の系譜関係は未詳とされるが（喜多方市史編纂委員会1995），聞き取りでは，同一系譜につながると代々伝えられているらしい。このように，本推定地は地元に今も残る伝承と共に，文献史料と合致する周囲の歴史的環境が備わっている。

城館跡の痕跡とされるのは，高さ1.6m，幅4.5mの高まりと，幅３mの落ち込みである。東西約７mの長さが残り，稲荷社の祀られた地点が北西隅と推定されている。さらに，明治15（1879）年の地籍図には，西側延長にも周囲よりやや落ち込んだ地割りがあって，堀跡の伝承が残っている（喜多方市史編纂委員会1995)。しかし，本推定地のこれらの痕跡は，ごく一部分にしか過ぎない。地表面の観察では，全容を捉えるのは難しく，城館跡としての実態は判然としない。これは，本推定地が，継続的に屋敷地として使用されてきたことが原因と考えられる。

２．北推定地

本推定地は，喜多方市史編纂に伴う分布調査で発見されたものである（喜多方市史編纂委員会1995)。地元には，現在，この場所が城館であったという言い伝えは残されていない。しかし，明治15（1879）年の地籍図によると，明瞭な不整方形の地割りが存在し（図21)，現況も，ほぼそれと変わり無い痕跡が観察できる。また，文化12（1815）年の村絵図によると，かつて本推定地は「北屋敷」の小字名で呼ばれ，北隣接地は「館越」と呼ばれていたことが知られる（喜多方市史編纂委員会1995，Ｐ792掲載)。したがって，江戸時代後期には城館跡の認識がまだ地元には残っており，城主の問題は別として，遺構も良く保存されていると言える。

市史では，堀跡が方形地割りの外周を巡る水田にあたり，その内側に平行する北～西辺の畑地は，土塁跡の反映ではないかと推定された。また，南西部の地割りが他と違っていることについては，「館の地割りが消滅したのか，本来そのような区画であったのかはわからない」としている。

３．両者の関係

これまでの状況証拠からすると，文献に記録された城館跡は，南推定地が明らかに有力な候補である。しかし，今のところ確証は得られない。

ところで，北推定地の旧小字名（北屋敷）を文字通り解釈すれば，対になる南屋敷があったとみるのが，自然である。その位置は，南推定地が最もふさわしいのではないだろうか。文化12（1815）年の村絵図は，『新編会津風土記』の完成（1809）と製作年代が近く，江戸時代後期には，渡邊左京進長勝の城館跡に対して，北側の城主不詳の城館跡が，対峙する位置関係で認識されていたと考えられる。

では，両者はどのような関係であったのか。以下，類例をあげて検討してみたい（図22)。

まず７は，南会津郡伊南村付近の「東館」・「西館」である。隣接する２つの城館跡が，方角の違

図21　明治15年地籍図

いで呼び分けされ，本遺跡の事例になぞらえられる。また，城主はどちらも戦国時代にこの地域を領有した河原田氏の系譜であったと伝えられている（福島県立博物館1998）。次の１は，喜多方市下遠田館跡・荒屋敷遺跡（３次調査区周辺）である。東西に並ぶ２つの城館跡の存在が想定され，城主は，三橋備前定重と次男の刑部重治に比定されている（福島県文化振興事業団2004）。この推測が正しいとすれば，７と同じく，城主は血縁関係となる。最後の３は，新潟県十日町市伊達八幡館跡である。隣接する２つの城館跡と，外部の建物群が面的に捉えられ，図18・20からイメージされる本遺跡の全体像が，具体的に示されている。また，２つの城館跡は，相互に関連し合い同時存在したことが，豊富な共伴遺物によって証明されている（鶴巻康志1997）。この点から，城主はやはり近親者とみるのが妥当と思われる。

このようにみると，両推定地は同族・近親者の城館跡であり，ある時期併存したと推定される。

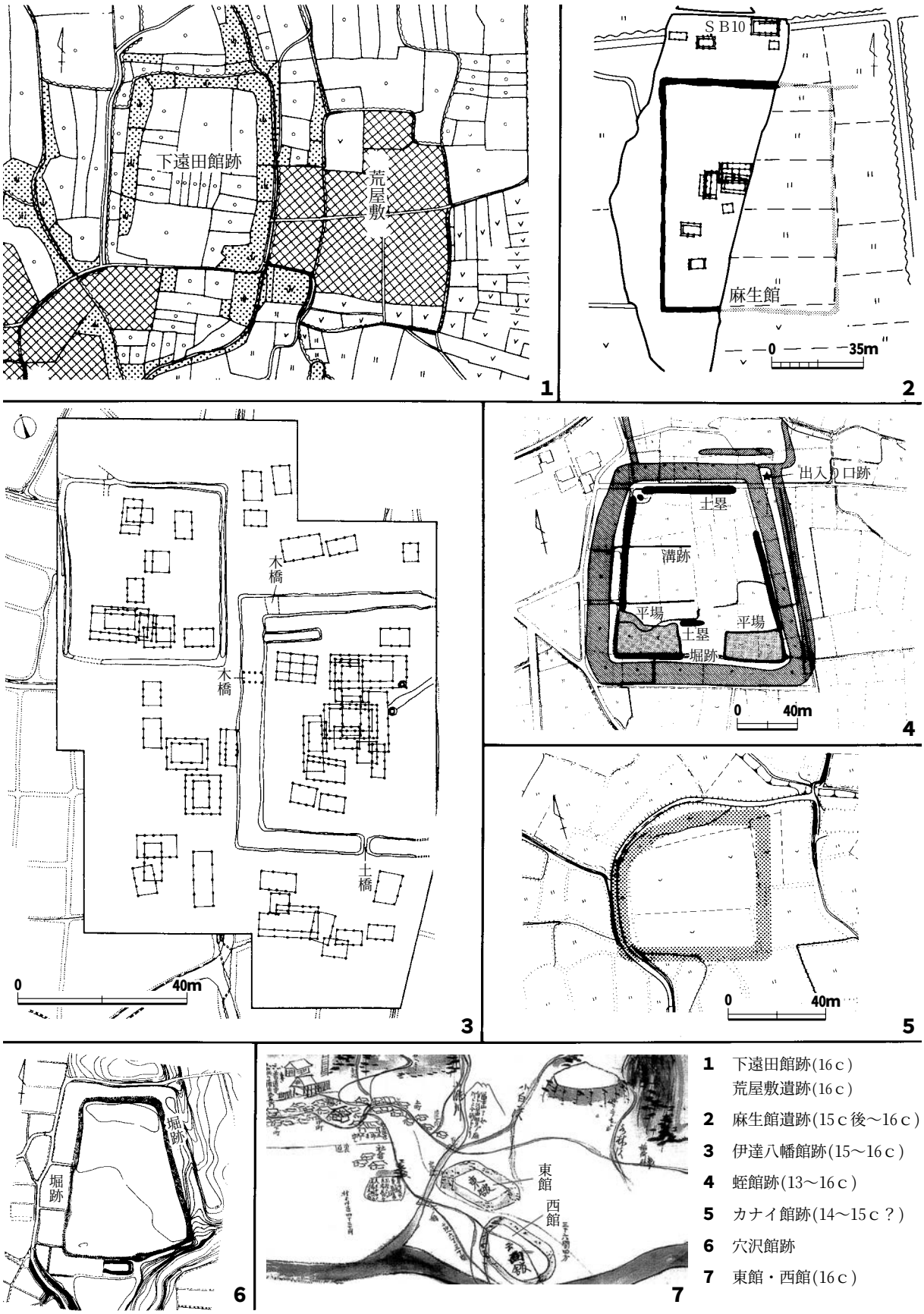


図22　平地城館跡の類例

第４節　今回の調査成果

以上の背景を念頭に置いた上で，今回の調査成果をみていきたい。本年度の発掘調査は，北推定地の北東一画（約８％）が対象となった。その結果，Ｌ字状に屈曲する大規模な北辺堀跡と，内部に計画的に配置された建物群が検出され，城館跡の実態がはじめて明らかとなった（図19）。また，城館外部でも，建物群の広がりが捉えられている。次年度以降は，南辺西半部を含む，全体の約60%の発掘調査が予定されている。

ここでは，現時点の所見をまとめておく。

１．占地・現況

姥堂川と田付川に挟まれた，浮島状の微高地北端に占地する。現在の集落範囲からみると，村の北はずれの場所にあたり，中世の位置関係も，ほぼ同様であったと推測される。その先には，平坦な水田地が広がっており，下勝館跡・中明館跡が至近距離で見渡せる（図19）。一方の南推定地とは，南東部で隣接し，『新編会津風土記』に登場する長勝寺と同名の寺院は，南推定地の脇に付随する。また，白髭神社が，今も記述どおり，村の丑寅の方角（北東）に祀られている（図20）。

本城館跡の現況は，ほとんどが平坦な畑地である（図18）。しかし，南西部は地表面が一段低く，旧地形が削平されたか，自然地形の埋没谷となっている可能性が考えられる。この状況は，明治15年の地籍図でも確認され，前者だとすれば，掘り込みの浅い遺構は既に消失してしまった危険性がある。また，後者だとすれば，南辺位置は斜めに横切る農道にほぼ一致すると思われる。

なお，調査開始前の現地には，大きな自然石がいくつも転がっていた。これは，耕作で移動した柱の根固石であることが，後で判明している。

２．堀・土塁

城館の周囲には，上幅5.5m，深さ1.5mの「箱堀」（１号溝跡）が巡る。底面は平坦であり，付近の太田館跡（図19）で検出されたような，戦国時代特有の「障子堀」ではなかった（喜多方市教育委員会2002）。今回の調査区内では，北辺中央付近から北東隅までの，総長47.5mが検出されている。その内側には，土塁が併走していたとみられ，１号掘立柱建物跡の東側には，幅８～10mの帯状の空間が認められる。しかし，同建物跡の背後は，間隔が狭く，ここで土塁は途切れていたと考えられる。郡山市蛭館跡をみると，土塁の途切れる北東隅で出入り口跡が検出されており（図22－４），本城館跡も調査区外のこの位置付近に，何らかの施設が設けられていた可能性がある。

また，明治15年の地籍図をみると，城館内部がさらに堀で仕切られていた痕跡は認められず，試掘調査結果も同様であった（福島県教育委員会2006）。したがって，現時点では，本城館跡は単純な単郭構造と推定される。

３．建物配置

（１）内部建物　城館内部の建物跡は，３棟検出された。主軸方位は，いずれも北で西に８°前後

振れ，北辺堀跡と概ね一致する。本城館跡は不整方形を呈しているが，北部の建物群は，このように北辺に主軸が規制されていたことが窺える。また，５・６号掘立柱建物跡には重複関係がみられ，組み合わせを確定できなかった柱穴（ピット）が，周囲に多数認められた。この状況は，調査区外の試掘トレンチも同様であり，本城館跡の建物変遷が，単一時期に収まらないことを示している。

（２）外部建物　城館外部の建物跡は，４棟検出された。内部と比べると，分布は散漫で，主軸方位が他とずれるものも含まれている。しかし，他の城館跡の事例をみると（図22－２・３），外部建物は内部建物と機能分担して，同時存在したと推定される。とくに２号掘立柱建物跡は，格式の高い構造を有しており，麻生館遺跡の10号掘立柱建物跡に対比されると思われる。具体的性格は不明であるが，城館本体との位置関係・桁行長が類似し，同一機能を備えていた可能性も指摘される。

４．城館規模・範囲

これまで堀跡の位置は，方形地割りの外周を巡る水田に想定されていた（喜多方市史編纂委員会1995）。今回の調査では，北辺堀跡（１号溝跡）がほぼ予想通りの位置で検出され，妥当性が裏付けられたと言える。さらに，東辺に関しては，現地で堀跡北東隅から東延長方向を目視すると，直線的に雑木が並ぶ段差とラインが一致した。また南辺は，これと連続する段差がビニールハウス裏手に観察され，農道にぶつかるまでの位置がほぼ把握される（図18右下写真）。

以上の所見から，城館範囲を推定したのが図18上段である。南辺に関しては，一応，西端まで直線的に伸びると仮定してみた。ただし，図22－５北辺・同図６南辺のように，地形の制約で途中から折れ曲がる形態になることもあり得る。この点は，次年度以降の課題としたい。現時点の見方では，おおよその規模が，堀の内側で，東辺60m，西辺80m，南辺95m，北辺80m，面積6,250㎡と計算される。

５．存続期間と廃絶後の状況

存続期間は，先に示したとおり，大枠として南北朝期から戦国時代末期の幅の中で捉えられる。しかし，今回は城館遺構に遺物が共伴せず，さらに絞り込むことはできなかった。唯一中世にかかる遺物は，江戸時代後期の用水路跡（２号溝跡１層）から出土した北宋銭「太平通寶」（976～983鋳造）である（図11－13）。類例は，大戸産中世陶器壷に入れられた喜多方市根小屋出土古銭が著名であり（喜多方市史編纂委員会1995），城館跡では，会津坂下町古館遺跡にピット出土例がある（会津坂下町教育委員会1992）。どちらも，埋設年代は14世紀に比定され，周辺における渡邊左京進長勝が活躍した頃の人の営みを裏付ける考古学的証拠となる。

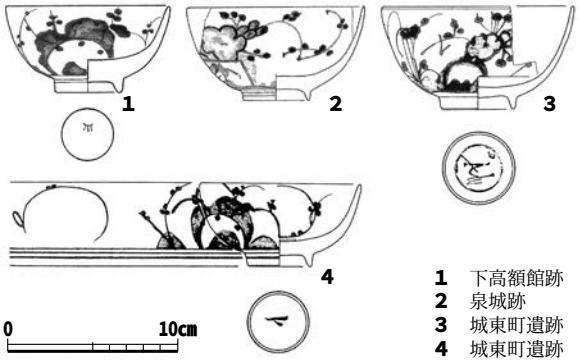


図23　肥前碗とその類例

廃絶後の状況は，２号溝跡底面出土の肥前碗（図23－１）により，1750～1780年代に農地へ改変されたことが判明した。これは，村絵図（1815）との関係でみると，まだここが

城館跡であったことが認識されていた時期にあたる。それが，急速に忘れられてしまった理由は，居住域から切り離され，耕作人しか立ち入らない場所になってしまったためと考えられる。

なお，肥前碗の類例は，会津若松市城東町遺跡・いわき市泉城跡で報告されている（図23)。とくに，同図２・４は，文様構成が酷似しており，４では口径値も一致する。また，同図３・４は，出土遺跡が同じ会津若松藩内であり，１と同一の流通経路で運ばれてきたと考えられる。

第５節　次年度以降の課題

最後に，今回の成果を踏まえて，次年度以降の課題をあげておきたい。

①まず，城館構造の課題としては，Ａ：南辺位置の確定，Ｂ：建物配置・変遷の解明，Ｃ：個別建物の性格比定，Ｄ：外部建物群の広がりの把握などがあげられる。会津地方では，平地城館跡のほぼ全体像が解明された事例がほとんどなく，貴重な発掘資料になると考えられる。

②次に，存続時期の確定があげられる。下高額館跡には，詳細な関連文献史料があり，地元に今も残る伝承や寺社・板碑の存在から，信頼性が裏付けられている。それらとの相互検証が，今後の最大の課題である。次年度以降の調査で，具体的な検討材料が得られることを期待したい。

③さらに，もう１つ，地元史・資料の探索をあげておく。下高額集落の旧家には，未公表の家系図や絵図面が残されており，未知のものが，まだ埋もれていないとも限らない。発掘調査と併行して，それらを積極的に進めるべきである。　（菅　原）

引用・参考文献

雄山閣　1970『新編会津風土記　第三巻』大日本地誌大系㉗

阿部俊夫　1981「中世城館研究と近世地誌の活用」『日本城郭大系　第３巻山形・宮城・福島』新人物往来社

北垣聡一郎　1981「堀」『日本城郭大系　別巻Ⅱ城郭研究便覧』新人物往来社

会津史料大系刊行会　1982『会津鑑四（会津史料大系)』吉川弘文館

(財)福島県文化センター　1982「唐松城跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告11』

郡山市教育委員会　1983「穴沢館跡」『郡山東部Ⅲ』

佐藤健郎　1986「蘆名氏の会津支配」『福島県の研究　第２巻　古代中世編』清文堂

村川友彦　1986「地籍図に中世城館址を読むー福島県の地籍図・丈量図・地籍帳からー」『福島県の研究　第２巻　古代中世編』清文堂

(財)福島県文化センター　1987「蛭館跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告23』

福島県教育委員会　1988『福島県の中世城館跡』

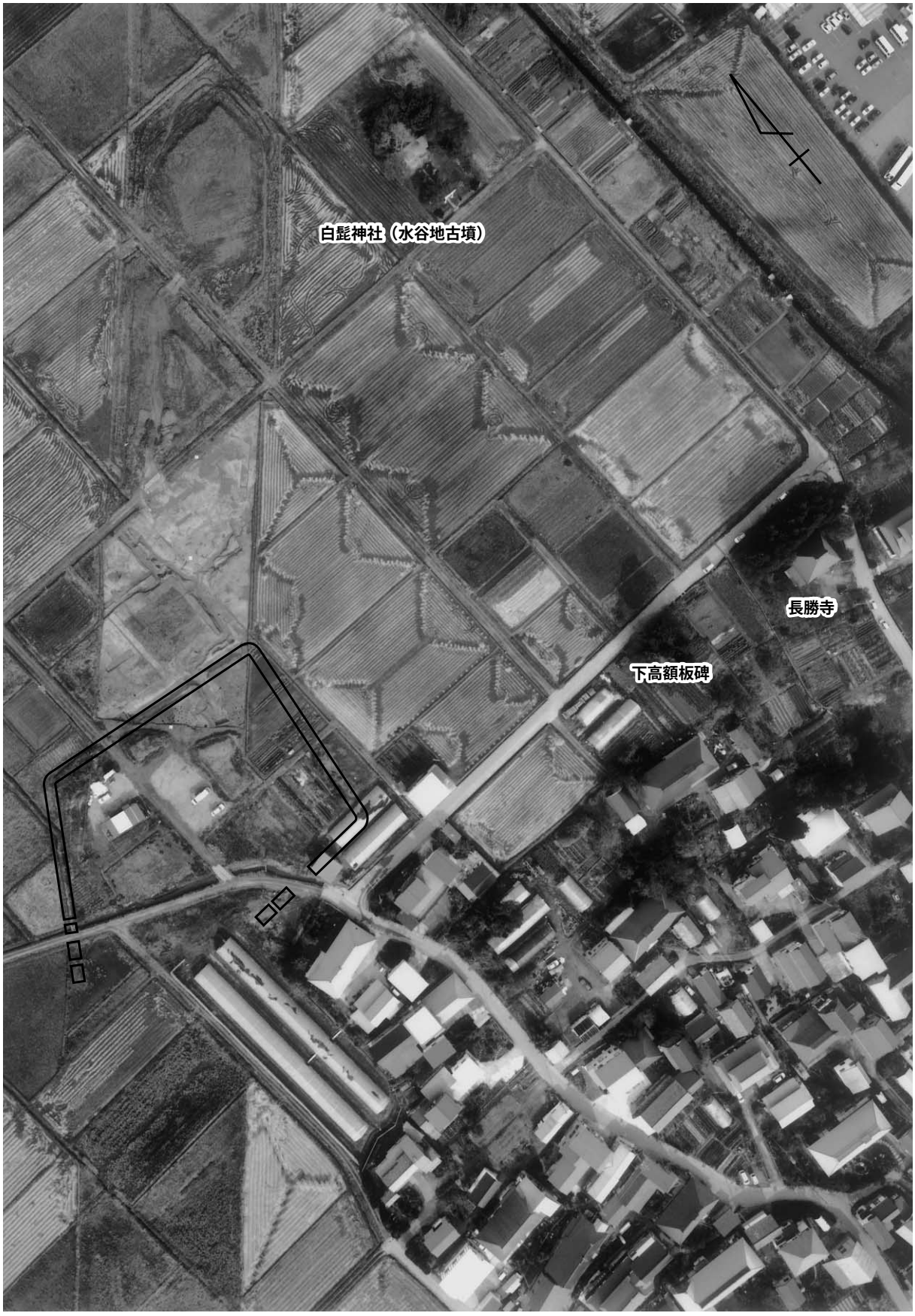
会津若松市教育委員会　1990『蚕養窯跡発掘調査報告書』

中井　均	1991	「中世の居館・寺そして村落－西国を中心として－」『中世の城と考古学』新人物往来社
会津坂下町教育委員会	1992	「古館遺跡」『阿賀川Ⅱ期地区遺跡発掘調査報告書』
新宿区内藤町遺跡調査会	1992	『内藤町遺跡　第Ⅱ分冊遺物編』
(財)いわき市教育文化事業団	1992	『泉城跡－近世陣屋跡の調査－』
平凡社	1993	「下高額村」『福島県の地名』日本歴史地名大系第七巻
仙台市史編さん委員会	1994	『仙台市史　資料編10伊達政宗文書１』
会津若松市教育委員会	1994	『若松城下　城東町遺跡発掘調査報告書』
喜多方市史編纂委員会	1995	「板碑・城館跡」『喜多方市史　第四巻』考古・古代・中世　資料編Ⅰ
福島県教育委員会	1996	『福島県遺跡地図　会津地方』
坂井秀弥	1997	「中世集落の展開と城館の動向」『中・近世の北陸』北陸中世土器研究会
鶴巻康志	1997	「伊達八幡館跡」『中・近世の北陸』北陸中世土器研究会
福島県教育委員会	1998	『福島県内遺跡分布調査報告４』
福島県立博物館	1998	『企画展　戦国の城－天守閣への道－』
石田明夫	1999	「葦名氏・伊達氏の中世城館跡」『福島考古40号』福島県考古学会
戸根与八郎	1999	「中世集落と城館」『新潟県の考古学』
大橋康二	2001	「北海道・東北地方出土の肥前陶磁」『国内出土の肥前陶磁』九州近世陶磁学会
喜多方市教育委員会	2002	「太田館跡２」『高堂太地区遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
(財)福島県文化振興事業団	2002	「麻生館遺跡」『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告１』
石田明夫	2004	「中世の城と館」『会津若松市史３　会津葦名氏の時代』歴史編③中世２
いにしえ会津ロマン紀行実行委員会	2004	『第３回いにしえ会津ロマン紀行～豪族と仏教文化～』
喜多方市史編纂委員会	2004	『図説　喜多方の歴史』喜多方市史　別巻Ⅰ
喜多方市史編纂委員会	2004	「北方地方の領主たち」『喜多方市史』通史編
(財)福島県文化振興事業団	2004	「荒屋敷遺跡（３次)」『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告４』
会津坂下町教育委員会	2005	『文化財シンポジウム　十二世紀の奥羽越』
福島県教育委員会	2006	『福島県内遺跡分布調査報告12』

写　真　図　版

第２編　高　堂　太　遺　跡

（下高額館跡を含む）

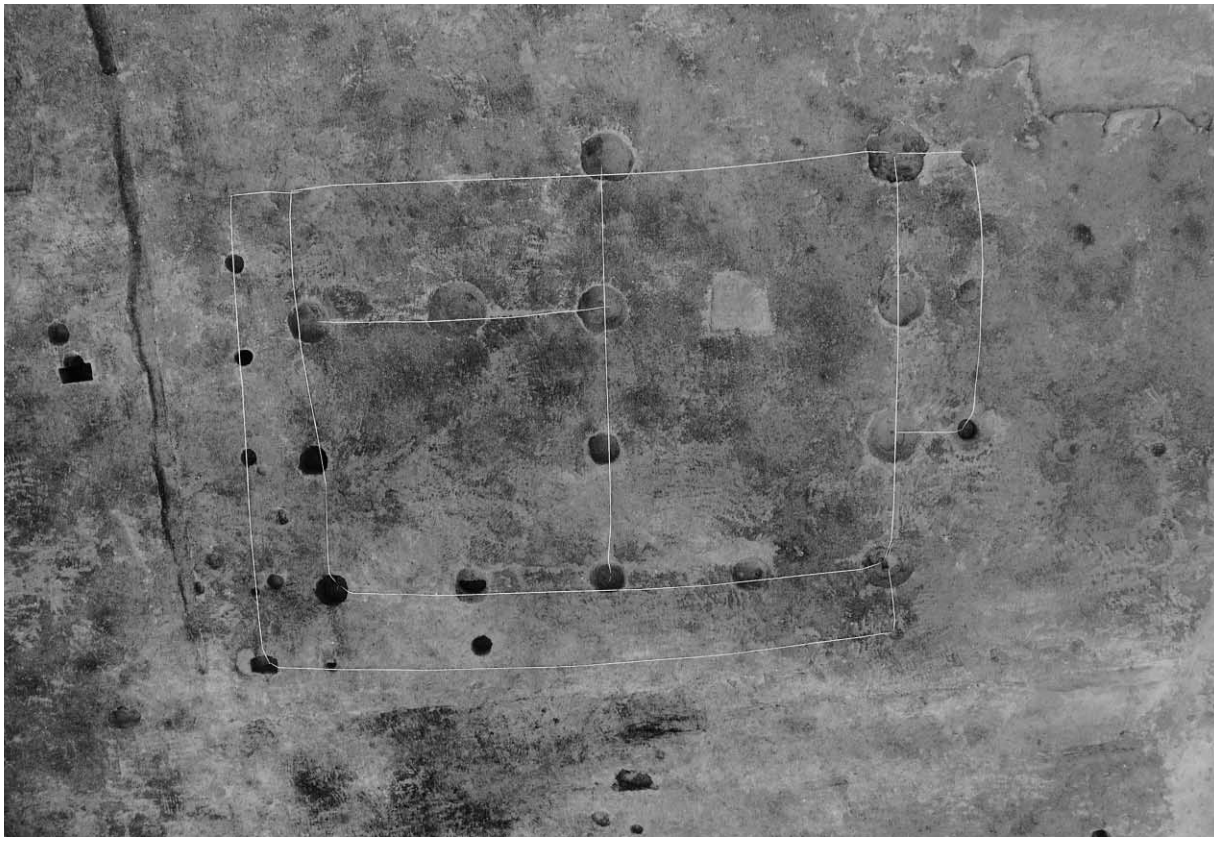


1　高堂太遺跡（下高額館跡を含む）航空写真

2　調査区遠景１（南西上空から）

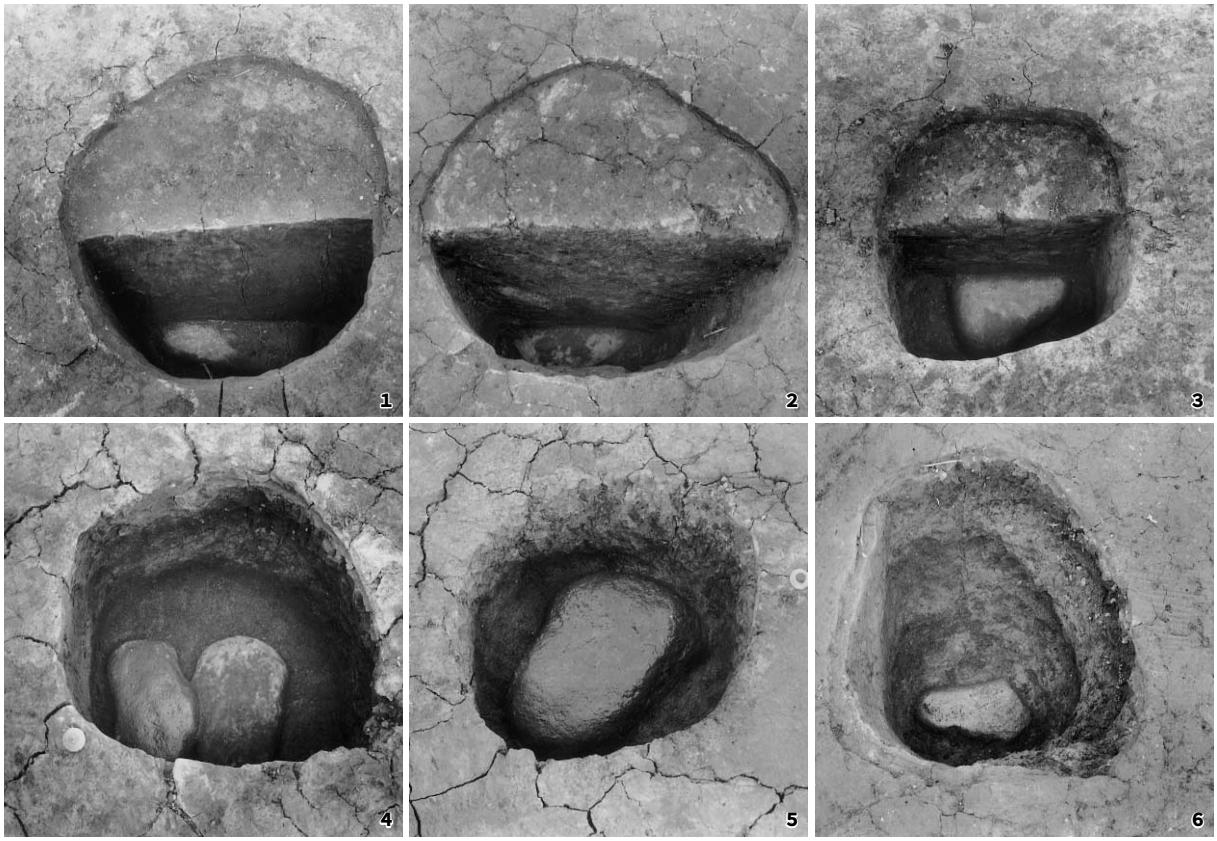
3　調査区遠景２（北上空から）

4　調査区南部全景（上空から）



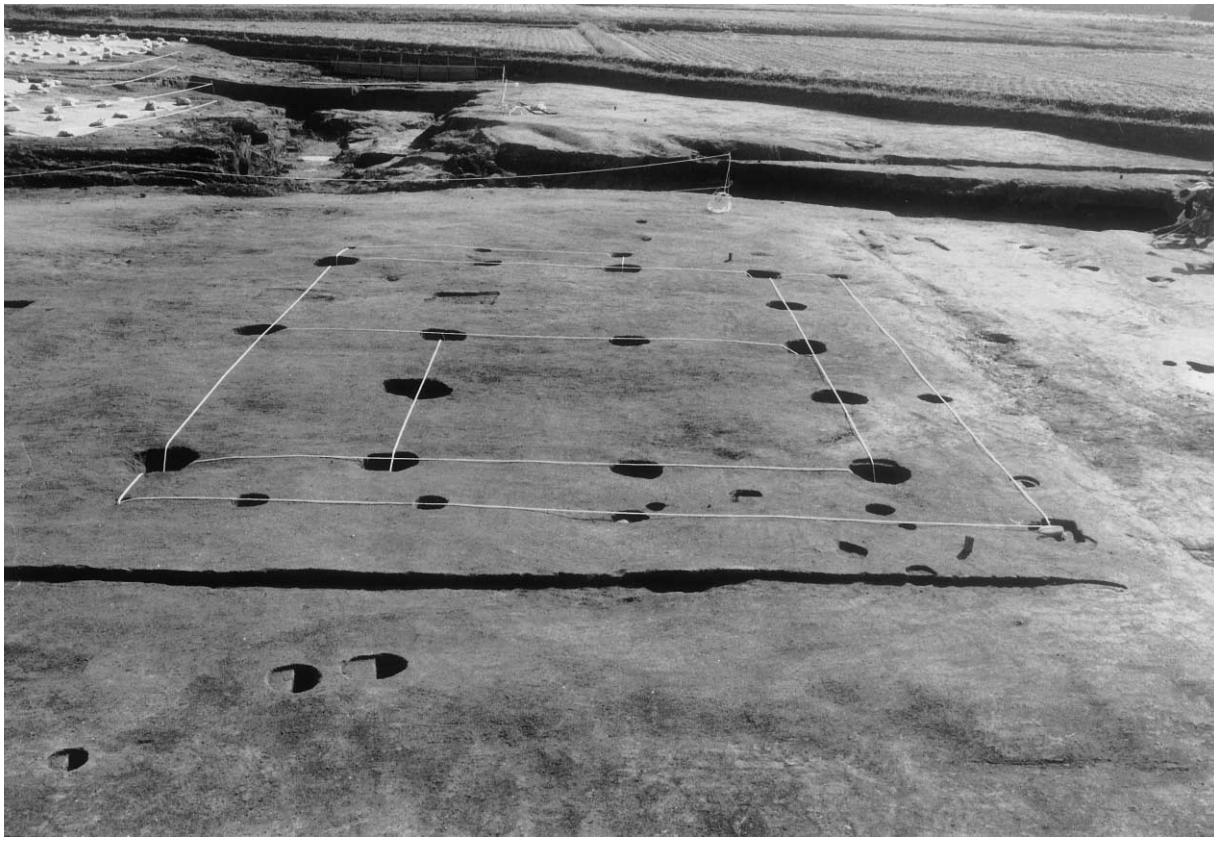
5　２号掘立柱建物跡（上空から）

6　１号掘立柱建物跡全景（東から）

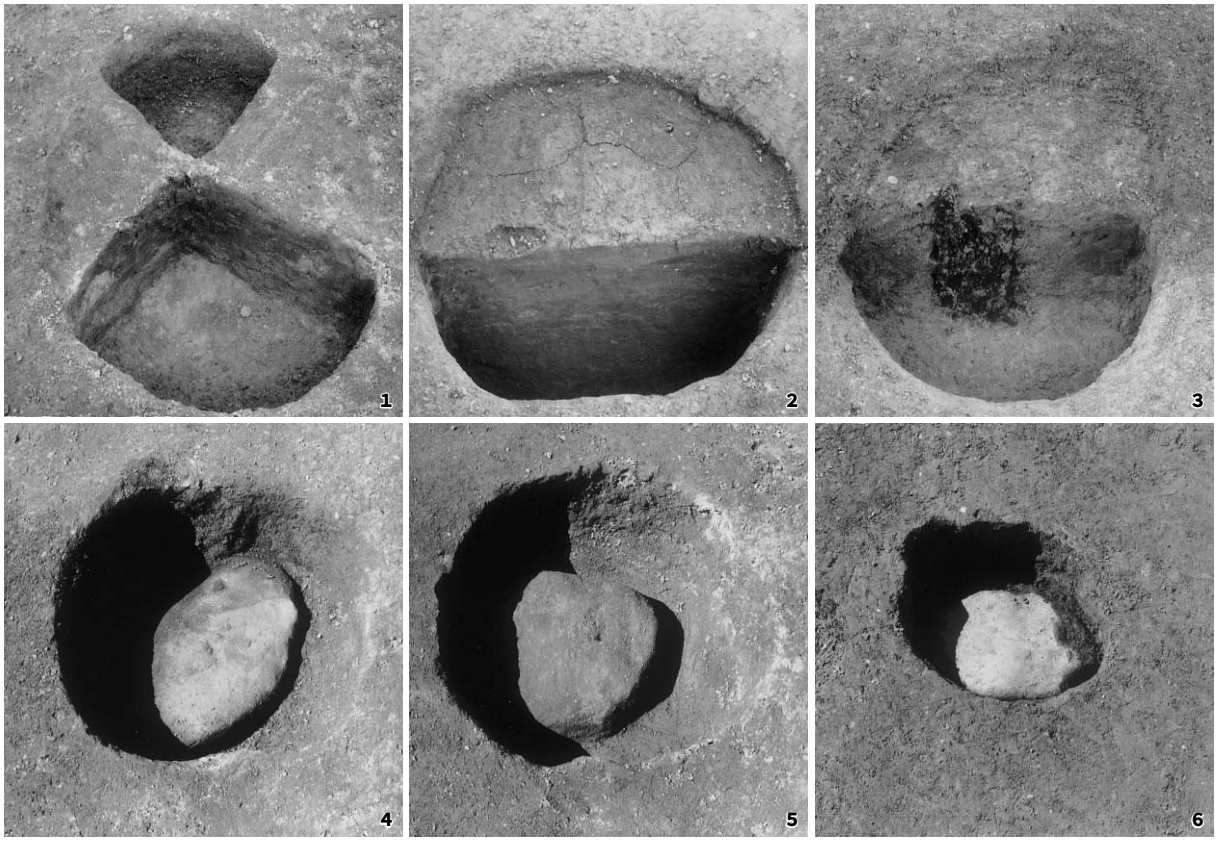


7　１号掘立柱建物跡細部

1　Ｐ４土層断面（南から）　**2**　Ｐ５土層断面（南から）　**3**　Ｐ７土層断面（南から）
4　Ｐ８根石確認（東から）　**5**　P13根石確認（東から）　**6**　P15根石確認（東から）



8　２号掘立柱建物跡全景（西から）



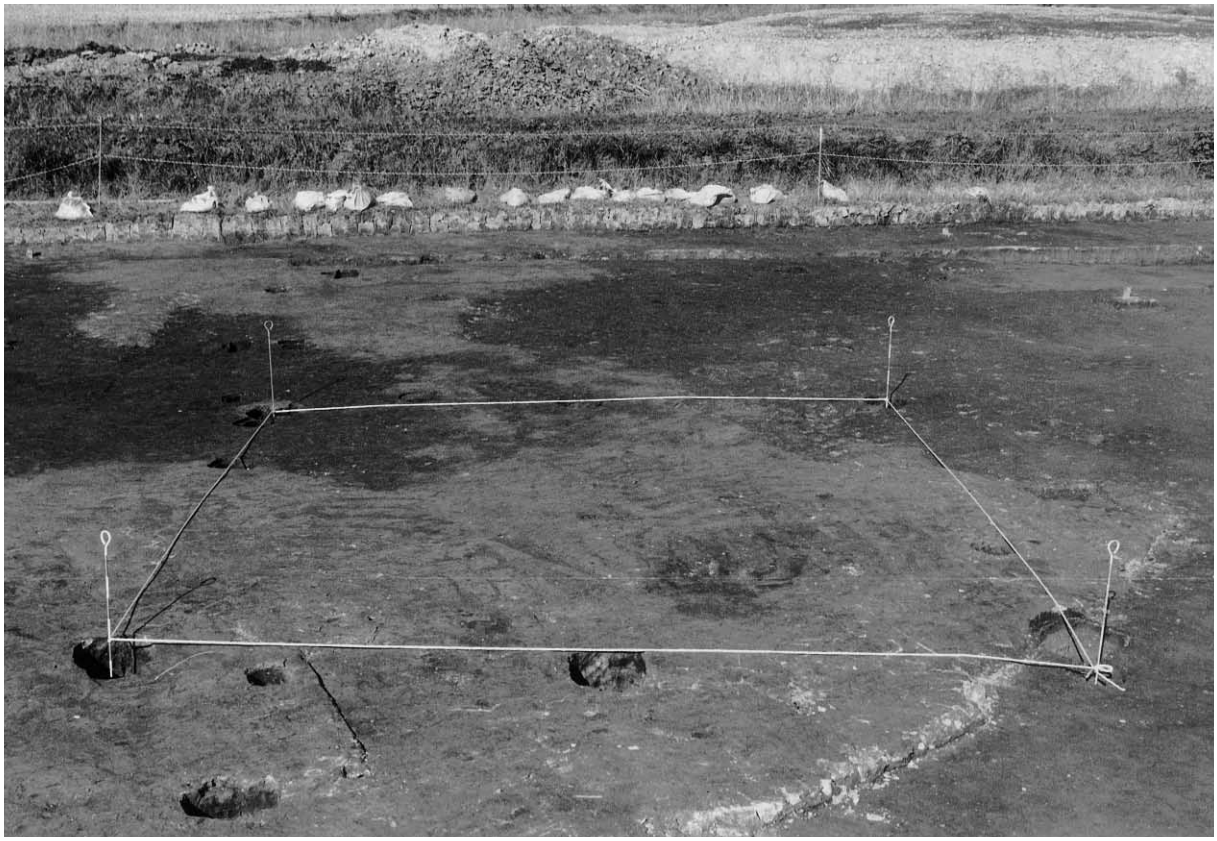
9　２号掘立柱建物跡細部

1　Ｐ２土層断面（南東から）　**2**　Ｐ９土層断面（東から）　**3**　P25土層断面（東から）
4　P10根石確認（東から）　**5**　P12根石確認（東から）　**6**　P19根石確認（東から）

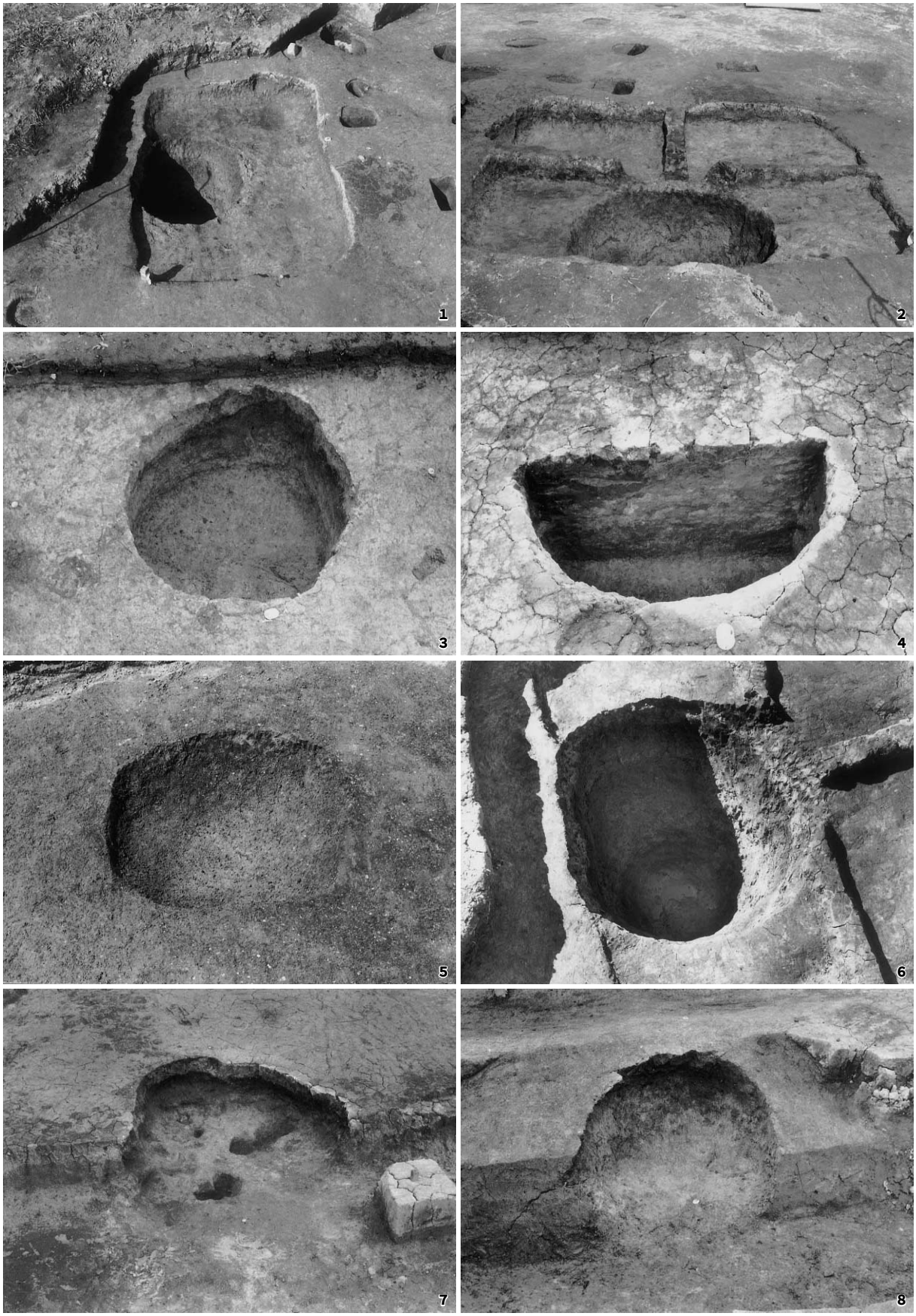
10　３号掘立柱建物跡全景（南東から）

11　４号掘立柱建物跡全景（南から）

12　５・６号掘立柱建物跡全景（西から）



13　７号掘立柱建物跡全景（南から）



14　1～6号土坑

1　1号土坑全景（東から）
2　1号土坑土層断面（南から）
3　2号土坑全景（東から）
4　2号土坑土層断面（東から）
5　3号土坑全景（東から）
6　4号土坑全景（南から）
7　5号土坑全景（南から）
8　6号土坑全景（東から）

15　１号溝跡完掘（西から）

16　１～３号溝跡細部

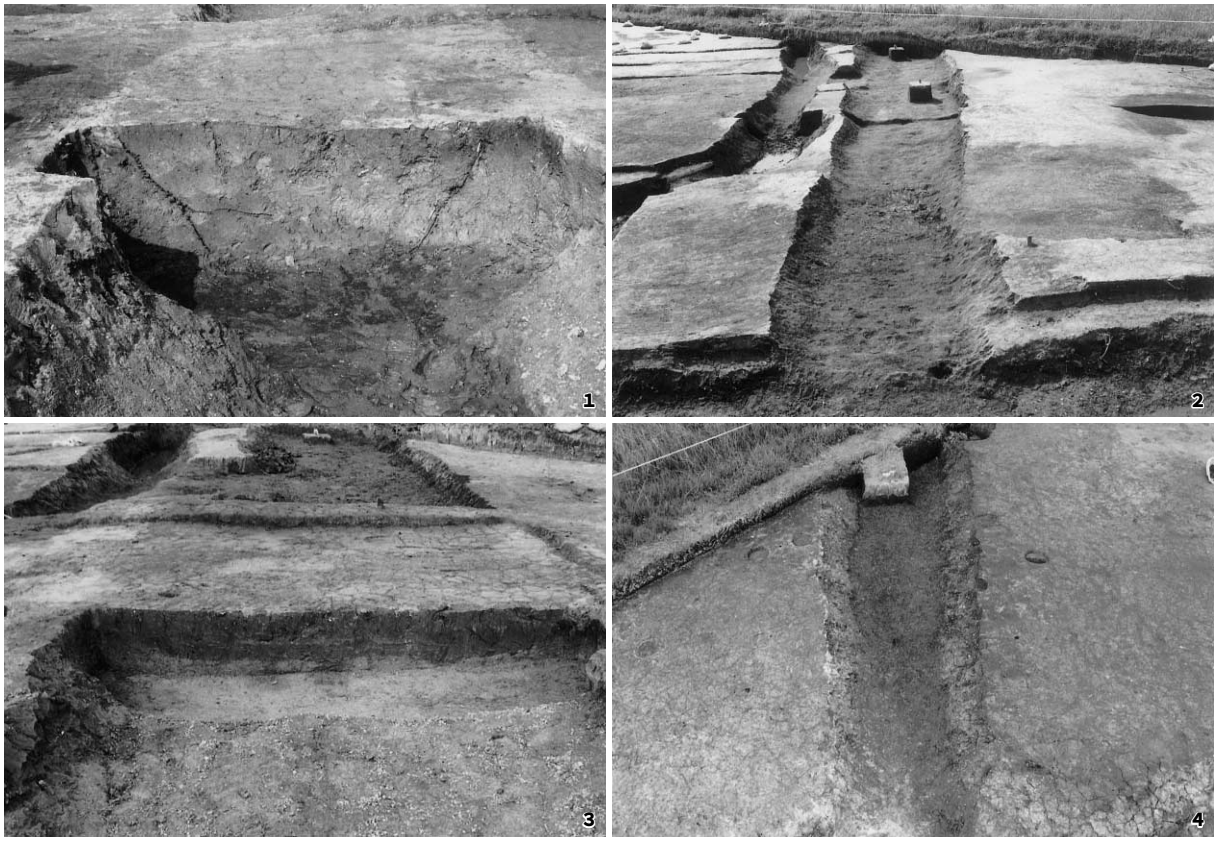
1　１号溝跡土層断面（東から）　**2**　１・２号溝跡交叉部分土層断面（北から）
3　１～３号溝跡土層断面（西から）　**4**　北東コーナー土層断面（西から）

17　2・3号溝跡（上空から）

18　2・3号溝跡土層断面

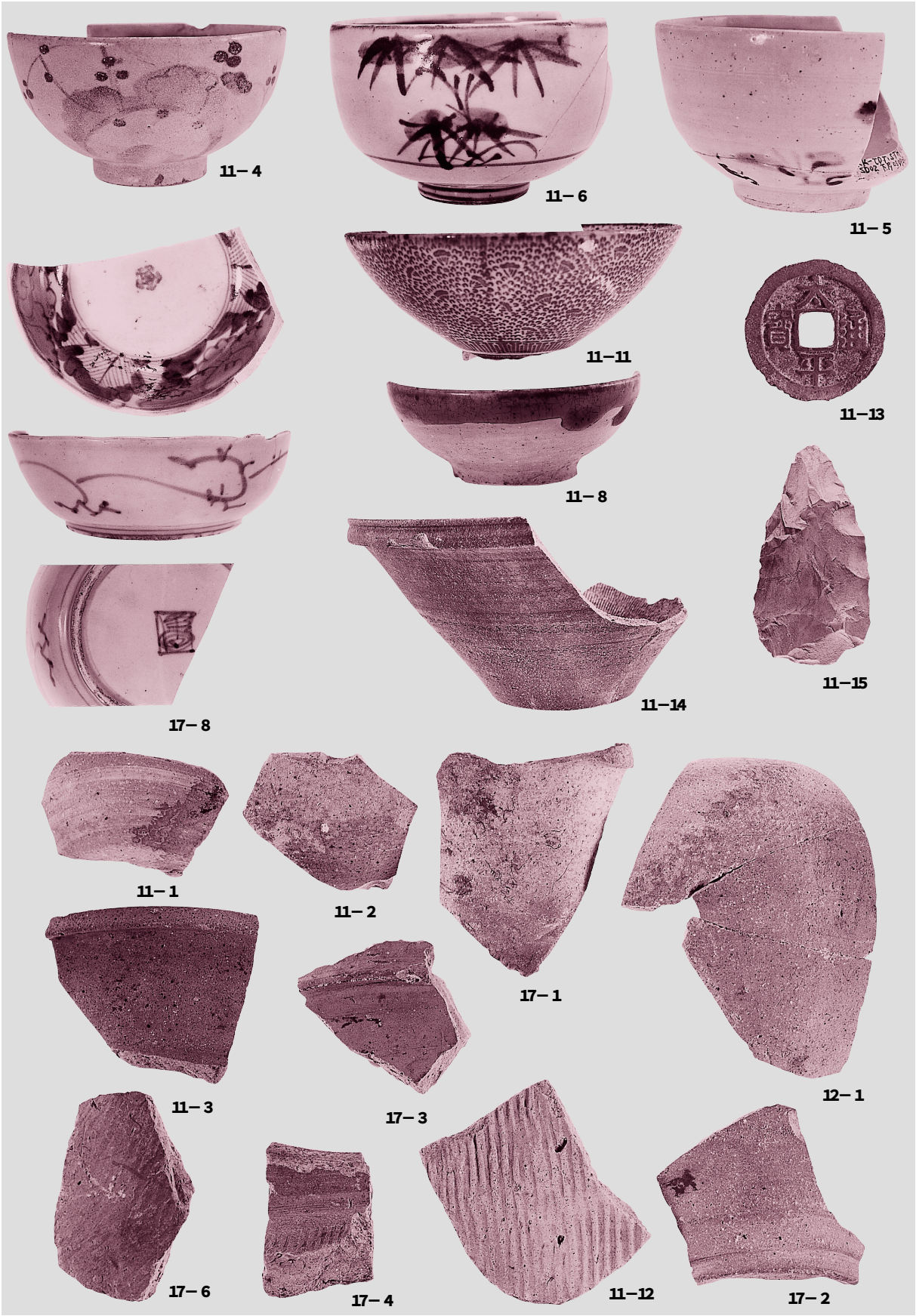
1　1・2号溝跡重複関係検出（北から）　**2**　2号溝跡土層断面（北から）
3　2・3号溝跡南端土層断面（北から）　**4**　2・3号溝跡北端土層断面（南から）

19　４・５号溝跡（上空から）



20　４～６号溝跡

1　４号溝跡土層断面（東から）　**2**　５号溝跡全景（東から）
3　５号溝跡土層断面（東から）　**4**　６号溝跡全景（南から）


11－4
11－6
11－5
11－11
11－13
11－8
11－14
11－15
17－8
11－1
11－2
17－1
12－1
11－3
17－3
17－6
17－4
11－12
17－2

21 出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	あいづじゅうかんきたどうろいせきはっくつちょうさほうこく
書名	会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告６
シリーズ名	福島県文化財調査報告書
シリーズ番号	第438集
編著者名	菅原　祥夫・福田　秀生
編集機関	財団法人福島県文化振興事業団 〒960－8116　福島県福島市春日町５－54　TEL 024－534－2733
発行機関	福島県教育委員会 〒960－8688　福島県福島市杉妻町２－16　TEL 024－521－1111
発行年月日	2006年10月27日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
荒屋敷（５次）	福島県喜多方市塩川町遠田字荒屋敷　他	403	00073	37 35 22	139 52 50	2005年４月13日～2005年７月６日	2,100㎡	道路（会津縦貫北道路）建設に伴う事前調査
高堂太（下高額館跡を含む）	福島県喜多方市豊川町高堂太字高里　他	208	00140（00099）	37 38 03	139 53 10	2005年８月１日～2005年12月７日	3,900㎡	同　上

所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
荒屋敷（５次）	集落跡	中世～近世	掘立柱建物跡（３） 柱列跡（１） 土　坑(28) 溝　跡(16) ピット群	土師器・須恵器 珠洲系中世陶器 かわらけ 近世陶磁器 など	今回の調査区では、３次調査区で検出された中世屋敷地に連続する遺構群が捉えられた。
高堂太（下高額館跡を含む）	集落跡 城館跡	平安時代 中世 近世	掘立柱建物跡（７） 土　坑（６） 溝　跡（６） ピット群	土師器・須恵器 近世陶磁器 宋銭 など	中世平地城館跡の一画が検出された。城館跡には、関連する文献史料や地元の伝承が残っている。

※経緯度数値は世界測地系（平成14年４月１日から適用）による。

福島県文化財調査報告書第438集

会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告６

荒屋敷遺跡（５次）

高堂太遺跡（下高額館跡を含む）

平成18年10月27日発行

編　集　財団法人福島県文化振興事業団

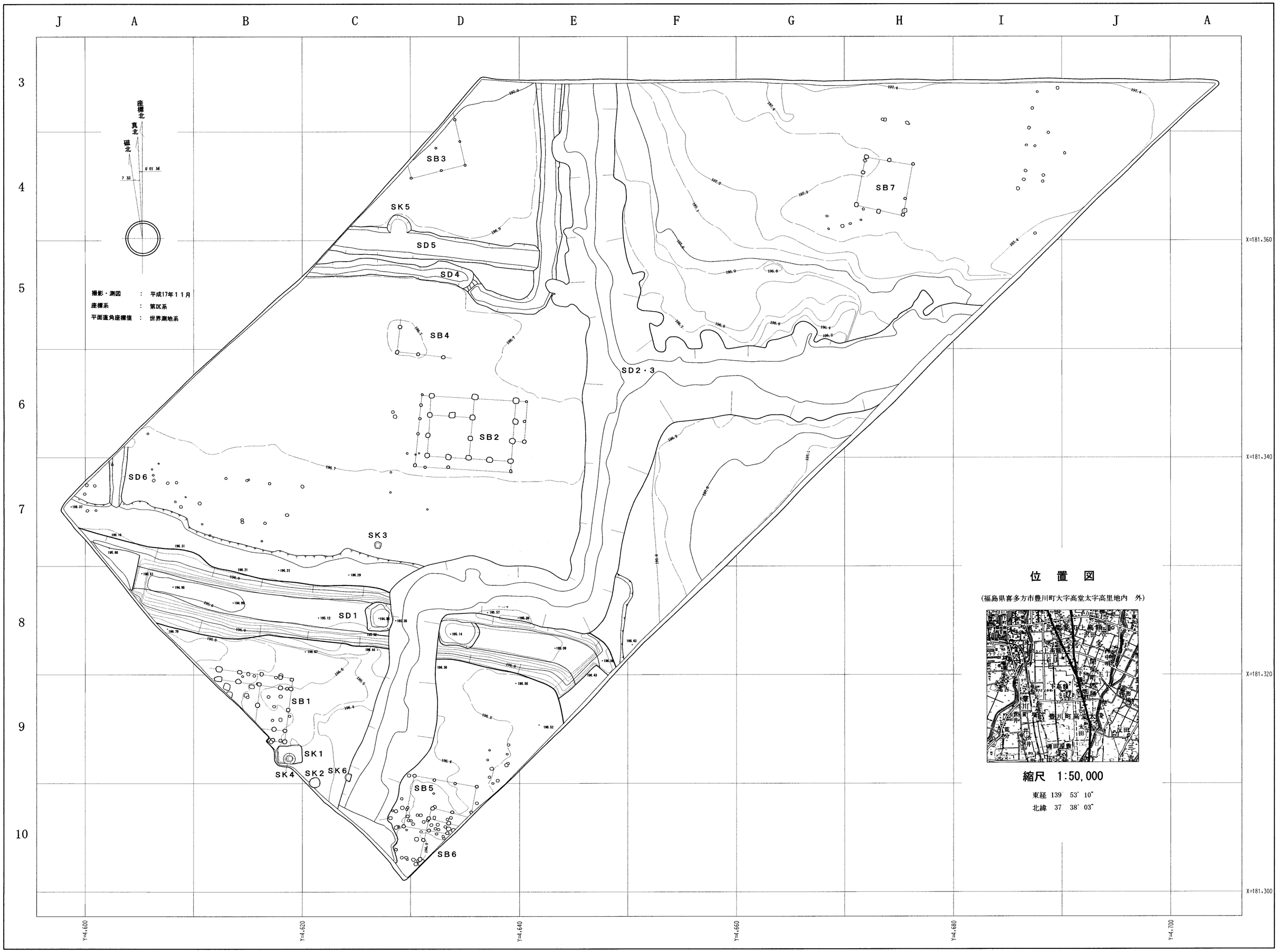
発　行　福島県教育委員会　（〒960-8688）　福島市杉妻町２-16

財団法人福島県文化振興事業団　（〒960-8116）　福島市春日町５-54

国土交通省東北地方整備局郡山国道事務所　（〒963-0111）　郡山市安積町荒井字丈部内28-１

印　刷　六陽印刷株式会社　（〒960-8056）　福島市八島田字中干損田８-１

付図　荒屋敷遺跡遺構配置図



付図　高堂太遺跡（下高額館跡を含む）遺構配置図

1：200